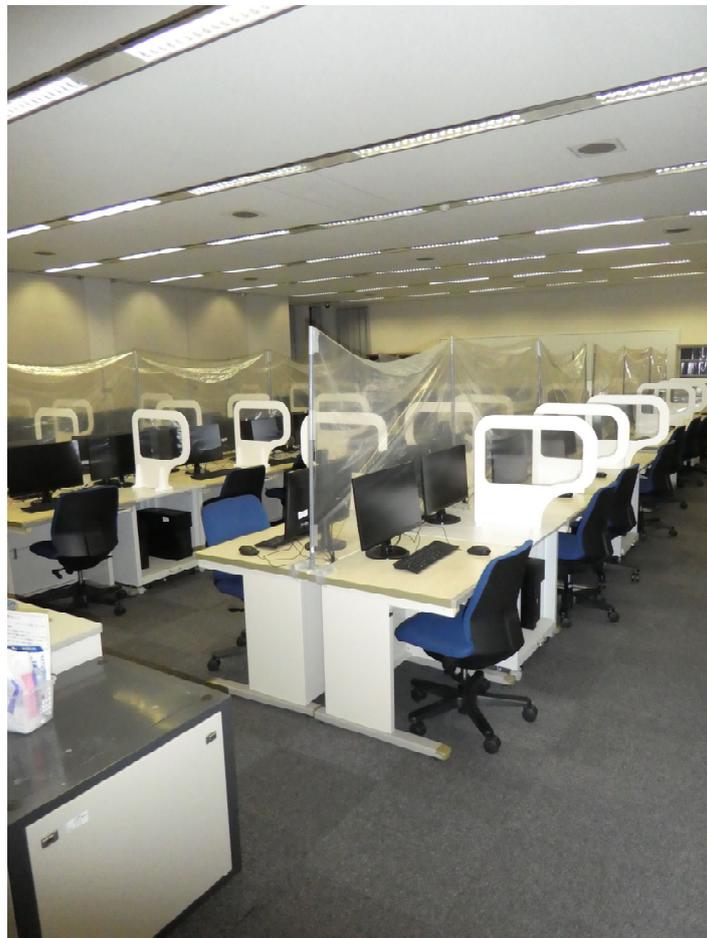


2020 年度社会調査実習報告書

—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—



2021 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

本報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した令和2年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果を取りまとめたものです。この調査は、関西大学総合情報学部で開講している「社会調査実習」(2020年度)の授業の一環として行われているものです。当授業では、受講生が本調査の実施全体に大きく関わっています。具体的には、まず受講生自身が関心のある調査テーマを設定した上で調査票の設計を行い、調査票のデータ入力とその分析、そして最終報告書の執筆を行うことで、社会調査の実施に必要な過程を一通り経験します。

そのため、この調査では例年、大学生らしい現代的な切り口の調査テーマが選ばれる特長があります。今年度は、特にコロナ禍の影響が大きく反映されうるテーマが多く見られました。情報源と買い溜め行動など特に社会的に問題とされていたものから、不健康の解消への関心を根底とした、運動頻度と生活満足度の関係、喫煙行動と精神的健康を扱うもの、また、インターネットの利用時間や家事分担と、家族との会話時間の関連性を検討する、家庭内でのコミュニケーションを主とするものが揃いました。これらの調査結果は、単純な特定地域の市民調査としての意義のみに留まらず、コロナ禍の最中のデータである点も含め、興味深い学術的意義を持ちうるものです。

本調査は今回でちょうど10回目となります。過去の9回の調査では、回収率が60%前後を推移しており、今回も61.4%という高い水準の回収率を達成できました。これは関係各位の皆さまのご協力があったからこそ、成しえたことです。関西大学総合情報学部の松本渉先生には、調査の事前準備から報告書提出の段階まで、進捗の度に的確なご助言をいただきました。大過なく本調査を終えることができたのは、松本先生にご尽力いただいたお陰です。また、ティーチング・アシスタントの尾藤央延さん、スチューデント・アシスタントの久保紗也花さん、中尾幸平さんには、学生に寄り添う姿勢と、これまでの豊かな経験を活かし、様々な形で授業の円滑な進行のためにご尽力いただきました。そして最後に、受講生の皆さんには、先述の通り、調査票の作成からデータ入力、分析、執筆まで、社会調査に必要な一連の作業にすべて取り組んでいただきました。これらの作業量は、例年、膨大であり、非常に負荷が大きいものです。特に今年度は、不測のコロナ禍の影響で、非常にイレギュラーな学習環境と制約の中で、例年通りの期間内に、この実際の大規模調査に係る作業をすべて行う必要があったため、さらに負荷は大きかったと考えられます。しかしそれでも、受講生の皆さんは諦めず、真剣に作業に取り組み続けました。この報告書は、そのような受講生の皆さんの、弛まぬ真摯な努力の結晶として上梓されるものです。

最後に、本調査の実施にあたり、高槻市市民生活環境部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さまに多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。そして何より、本調査にご協力いただきました高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2021年3月

関西大学総合情報学部「社会調査実習」担当講師 上原 依子

目次

はじめに		i
第 1 章	調査の概要	上原 依子・松本 渉 1
第 2 章	調査結果の概要	尾藤 央延 8
第 3 章	緊急事態下でのメディアと購買行動	谷 蓮音 137
第 4 章	夫婦の会話時間と家事分担への満足度の関係性	高谷 莉奈 145
第 5 章	インターネットの利用時間が家庭内の会話時間と健康状態に与える影響	木原 実佑 152
第 6 章	運動頻度と生活満足度の関連性	西田 尚紀 160
第 7 章	喫煙と幸福度、精神的健康の関係について	西山 賢人 167
資料		173
予告はがき		175
調査票		177

第1章 調査の概要

上原 依子・松本 渉

1. 調査の概要とスケジュール

高槻市と関西大学による市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」は、2020(令和2)年8月から9月にかけて、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、春学期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、秋学期にはデータ入力、データ作成、分析等が行われた(表1)。

表1 高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
春学期	4/22	「社会調査実習」前期授業開講	高槻市と関西大学の
	4/28～7/22	調査票の作成	打ち合わせ(随時)
夏休み	7/31		サンプリング
	7/31～8/6		調査票印刷
	8/7	調査票発送準備作業	
	8/24		予告はがき発送
	8/27		調査票発送
	9/11		返送締切日
秋学期	9/23	「社会調査実習」秋学期授業開講	
	9/23～12/16	データの入力・読み合わせ	
	12/17～12/22		データクリーニング
	12/23	分析方法の習得	
	1/13	中間レポートの提出	速報版報告書執筆
	1/20	最終授業(最終レポートの提出)	報告書執筆
	1/21～2/28		報告書編集

(注1) 例年とは異なり、今年度は新型コロナウイルス(COVID-19)の流行により、4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言が出され、4月16日にはその対象が全国に拡大された。当初5月6日までとされていた緊急事態宣言も、大阪では5月21日に解除されるまで延長されることとなった。この間、関西大学においても4月6日から4月18日の2週間の授業が休講となり、4月20日(月)より春学期の授業を開始することとなったが、原則として遠隔授業により授業を行った。「社会調査実習」においても、春学期開始後の最初の水曜日である、4月22日から授業が開始された。

(注2) 調査票発送準備作業については、遠隔では不可能なため実施が危ぶまれた。5月21日の緊急事態宣言の解除を受け、総合情報学部では、6月20日以降、一部の授業において対面授業が可能となったため、例年同様夏休み中に準備作業を行った。

2. サンプリング

調査対象者： 18歳以上 85歳未満の高槻市民(1935年8月1日～2002年7月31日出生)

抽出名簿： 住民基本台帳 (2020(令和2)年7月31日現在)

標本抽出法：層化抽出法

(具体的な手順)

1. 2020(令和2)年6月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された12の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本2,000を各層に割り当てる(表2)。

表2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	令和2年6月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
18・19歳	3,462	3,335	6,797	24	24	48
20代	16,537	16,663	33,200	117	118	235
30代	18,541	18,803	37,344	131	133	264
40代	26,592	27,284	53,876	188	193	381
50代	22,770	23,356	46,126	161	165	326
60代	18,061	20,790	38,851	128	147	275
70代以上	29,515	37,130	66,645	209	262	471
合計	135,478	147,361	282,839	958	1,042	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の3日前に予告はがきを送付した。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限(「近日中に大きな茶封筒(ボールペン入り)が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の2点)にとどめた。今回は8月24日(月)に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、大学の窓口の盆休み終了後、最初の木曜日である 2020(令和 2)年 8 月 27 日(木)に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、藤色(なお前年はラベンダー色)の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ(両面)の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状(なし)

催促状の送付は行っていない。

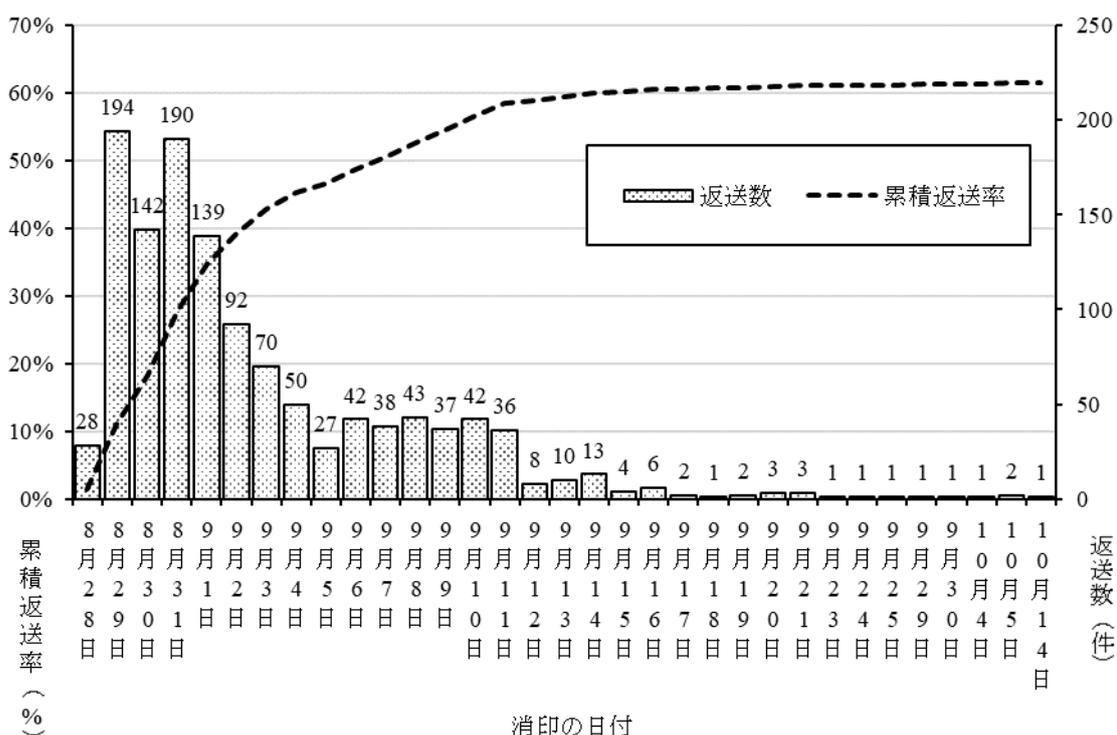
4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。

最も早い消印は翌 8 月 28 日(金)である。例年の調査と同様に、返送日の山が二つみられる。第 1 の山は、最大の返送数 193 となった 8 月 29 日(土)であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第 2 の山は、返送数 190 であった 8 月 31 日(月)である。調査票受領後にすぐにおとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえる。これに続く山は、返送数 42 であった 9 月 6 日(日)から返送数 36 であった 9 月 11(金)までの期間であり、調査票受け取り直後の時期に生じる 2 つのピークの後に、平坦な山が続く返送のパターンはおおむね例年の調査と同様といえる。

累積返送率については、例年と同じく、調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 50% 台後半に達している。累積返送率のグラフ(図 1) が示しているように、回収期間後半に入ってもなおだらかに上昇を続け、受け取り締切日頃には返送率が 60% 強を推移する結果になった。



(注1) 返送数とは、回答票の返送日ごとの件数（日付は消印による）。
 (注2) 累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値。

図 1 時系列に見た調査票の返送状況

4.2. 回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の9月11日(金)以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、10月19日(月)で打ち切った。返送されてきた調査票総数は1,231件であったが、4件については記入状況から無効と判断し、最終的に有効な回答票数を1,227件、回収率を61.4%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表3の通りである。

表3 回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	3	(0.2%)
	未返送	769	(38.3%)
	無効調査票	4	(0.2%)
	計	773	(38.7%)
2. 有効回答票		1,227	(61.4%)
3. 計画標本サイズ(合計)		2,000	100.0%

4.3. 回収率の詳細

男女別の回収率については、男性54.6%、女性65.9%となり、女性の方が11%ほど高い(表4)。年齢層別の回収率では、70代以上で68.8%、60代で62.5%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20代で38.7%、18・19歳で31.3%まで低下する(表5)。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表4 男女別の回収率

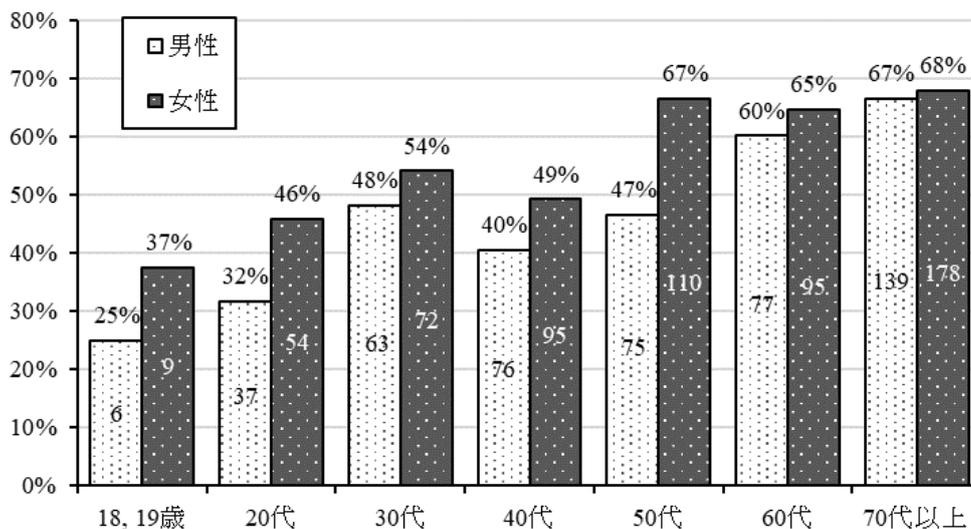
	男性	女性	不明	合計
回収標本	523	687	17	1,227
計画標本	958	1,042	—	2,000
回収率 (%)	54.6%	65.9%	—	61.4%

(注) 男女別の回収率の計算には、不明分17件が含まれていない。

表5 年齢層別の回収率

	18, 19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	15	91	137	174	186	172	324	128	1,227
計画標本	48	235	264	381	326	275	471	—	2,000
回収率 (%)	31.3%	38.7%	51.9%	45.7%	57.1%	62.5%	68.8%	—	61.4%

(注) 年齢層別の回収率の計算には、不明分128件が含まれていない。



(注1) 棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
(注2) 棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。

図2 男女・年齢層別の回収率

5. 回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表6は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20代から40代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、60代以上の男性、50代以上の女性といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った(表7)。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い20代、30代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布にあてはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表6と表7では、2020(令和2)年6月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表6と表7の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が0の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。 df は、自由度と呼ばれる値(表6と表7では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から1を引いた数に相当)である。 p は、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度 df から計算されている。

表6 男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本		R2年 6月末人口	
			%		%
男性	18, 19歳	6	0.6%	3,462	1.2%
男性	20代	37	3.4%	16,537	5.8%
男性	30代	63	5.8%	18,541	6.6%
男性	40代	76	7.0%	26,592	9.4%
男性	50代	75	6.9%	22,770	8.1%
男性	60代	77	7.1%	18,061	6.4%
男性	70～84歳	139	12.8%	29,515	10.4%
女性	18, 19歳	9	0.8%	3,335	1.2%
女性	20代	54	5.0%	16,663	5.9%
女性	30代	72	6.6%	18,803	6.6%
女性	40代	95	8.7%	27,284	9.6%
女性	50代	110	10.1%	23,356	8.3%
女性	60代	95	8.7%	20,790	7.4%
女性	70～84歳	178	16.4%	37,130	13.1%
	合計	1,086	100.0%	282,839	100.0%

(注1) 表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分141件が含まれていない。

(注2) 表右側のR2年6月末人口は、高槻市全体の人口である

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_r2/1594354959395.html)
参照。

(適合度検定) $\chi^2 = 50.9944, df = 13, p = 0.0000$

表7 世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本		R2年6月末 世帯人員数別人口	
		%		%
1人	133	10.8%	61,062	17.4%
2人	432	35.2%	94,484	26.9%
3人	287	23.4%	78,816	22.4%
4人	218	17.8%	83,784	23.8%
5人	83	6.8%	27,280	7.8%
6人	16	1.3%	4,404	1.3%
7人	2	0.2%	1,099	0.3%
8人	1	0.1%	312	0.1%
9人	0	0.0%	27	0.0%
10人	0	0.0%	40	0.0%
11人以上	1	0.1%	44	0.0%
無回答	54	4.4%	—	—
	1,227	100.0%	351,352	100.0%

(注1) 表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口

(http://www.city.takatsuki.osaka.jp/shisei/profilekeikaku/tokeijoho/jinko/jinkou_r1/1562571862415.html)
から算出した。ただし、回収標本が18～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯
人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。

(適合度検定) $\chi^2 = 88.6576, df = 10, p = 0.0000$

第2章 調査結果の概要

尾藤 央延

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。回答者の性別は男性が523人で女性が687人であり女性の方が多（図1）。年齢は70代が2割以上と多く、18歳、19歳と20代は1割未満と少ない（図2）。男女別に年齢を確認しても同様の傾向が見られる（図3）。

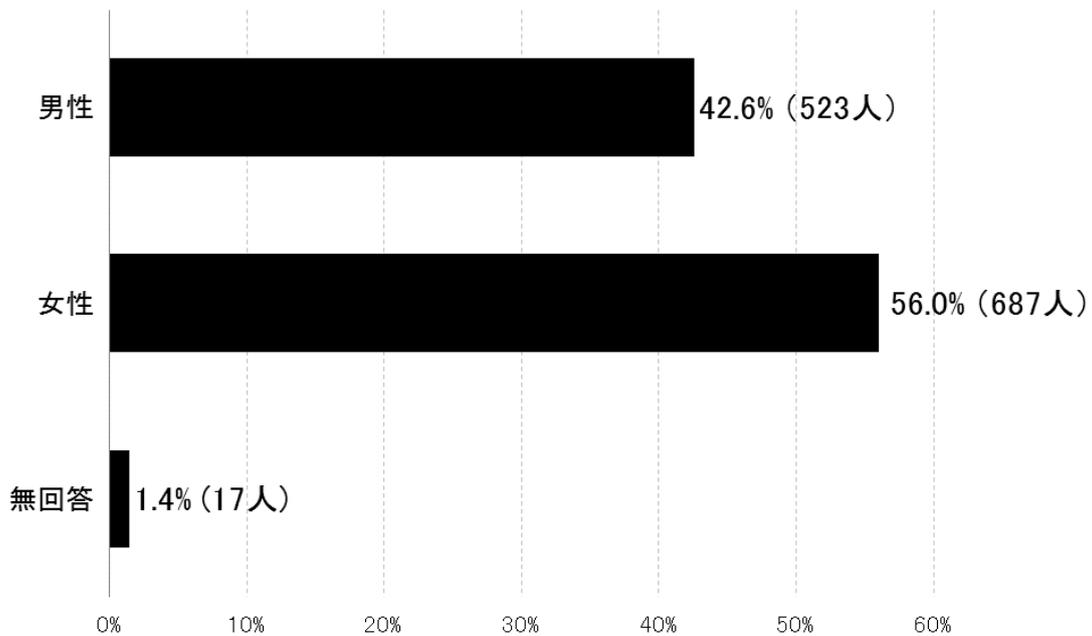


図1 Q54 性別

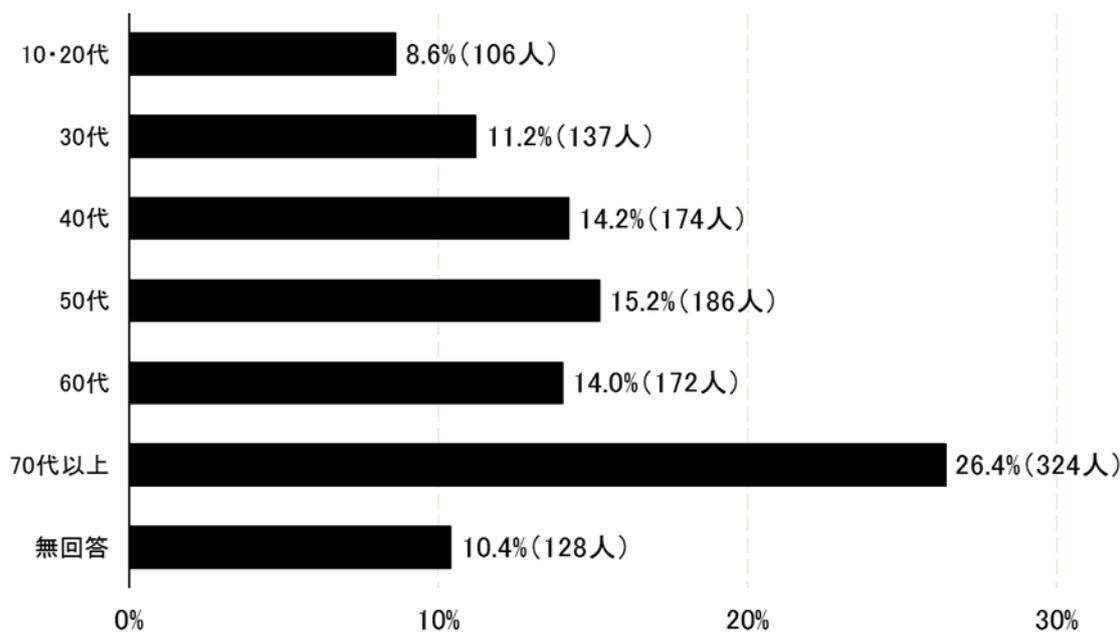


図 2 Q47 年齢

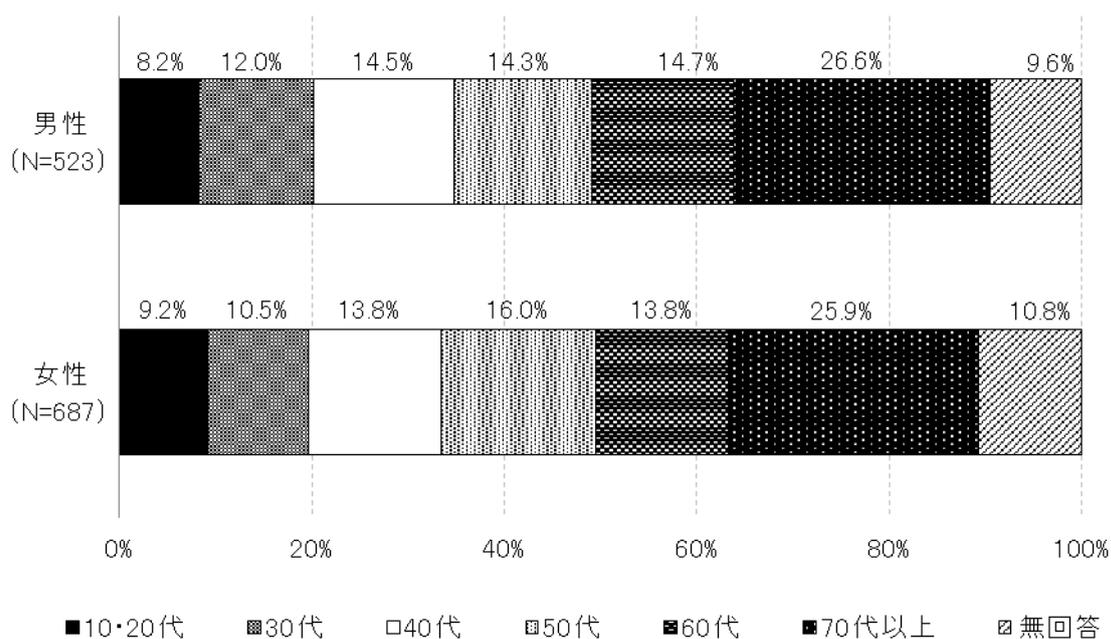


図 3 性別×年齢

以降、基本的には全ての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は 1,227 人である。性別・年齢の内訳については図 1 と図 2 を参照のこと。また、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧については本章の最後を参照のこと。

職業は、合計を見ると常時雇用者が 31.5%と最も多く、次いで無職が多い。男女別で見ると、男性は常時雇用者が 43.8%と最も多く、女性は家事専業が 24.3%と最も多い。年代別で見ると、60代・70代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職が大きく増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、40代と50代で2割以上となっている（表1）。

表 1 Q55 職業

		(%)									
		常時雇用 の勤め人	臨時雇用、 パート、 アルバイト	自営業主	自営業の 家族 従業者	経営者、 役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
男女別	合計 (N=1227)	31.5	15.1	4.2	0.8	2.0	13.7	3.3	25.3	2.4	1.8
	男性 (N=523)	43.8	6.5	7.6	0.4	3.6	0.2	4.0	30.8	1.9	1.1
	女性 (N=687)	22.6	21.1	1.5	1.2	0.9	24.3	2.9	21.7	2.8	1.2
年代別	10・20代 (N=106)	45.3	2.8	2.8	0.9	0.0	0.9	35.8	4.7	5.7	0.9
	30代 (N=137)	66.4	14.6	1.5	0.0	0.7	10.2	0.0	1.5	2.9	2.2
	40代 (N=174)	51.7	25.3	3.4	1.7	2.9	6.9	0.0	4.0	1.7	2.3
	50代 (N=186)	46.2	28.0	6.5	0.5	2.7	12.4	0.0	1.6	0.5	1.6
	60代 (N=172)	19.2	15.1	4.1	0.6	2.3	23.8	0.0	32.6	2.3	0.0
	70代以上 (N=324)	1.2	6.2	4.0	1.2	1.9	18.5	0.0	62.0	2.5	2.5

最終学歴は、男女別で見ると、男性が「大学（旧高専）・大学院」が 51.1%と最も多いのに対し、女性が 28.4%と男性よりも少ない。女性で最も多いのは「高校（または旧制中学など）」であり、35.1%である。また、「短大・高専（5年制）」は男性が 1.7%と最も少ないのに対して、女性が 17.5%と「高校（または旧制中学など）」や「大学（旧高専）・大学院」に次いで 3 番目の多さである。年代別で見ると、10・20 代が「大学（旧高専）・大学院」が 75.5%であるが、年代が上がるごとに減少し、70 代以上が 17.9%である。反対に、10・20 代が「中学（旧小学校など）」と「高校（または旧制中学など）」の合計が 12.3%であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上が 66.4%となっている（図 4）。

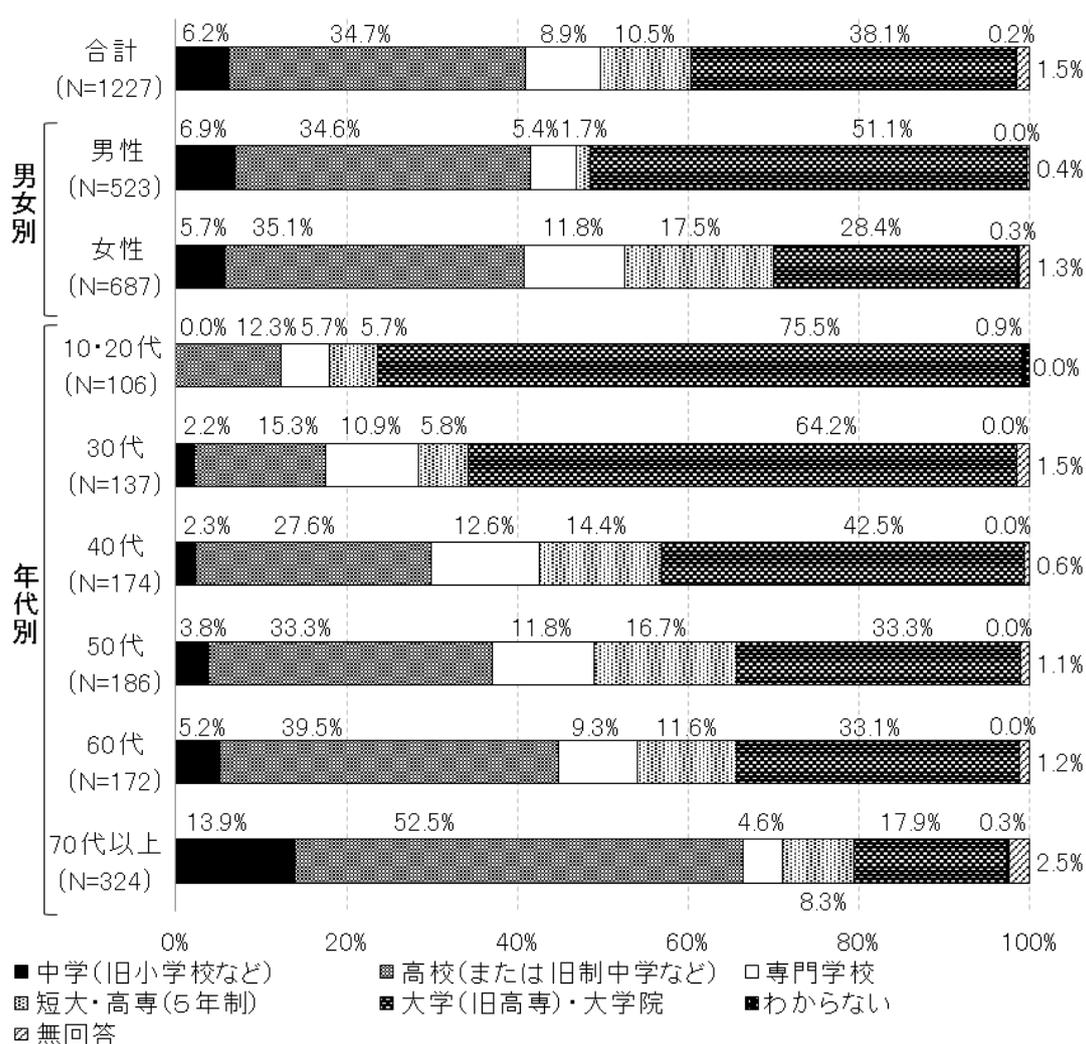


図 4 Q56 最終学歴

居住地域については昨年のおり、単純集計のみを提示する。ここでの地区とは小学校の校区を参考に行している。各地区と該当小学校区は、榎田地区（榎田小学校）、高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校）、高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）、五領地区（五領・上牧小学校）、高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）、如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）、三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）である（図 5）。

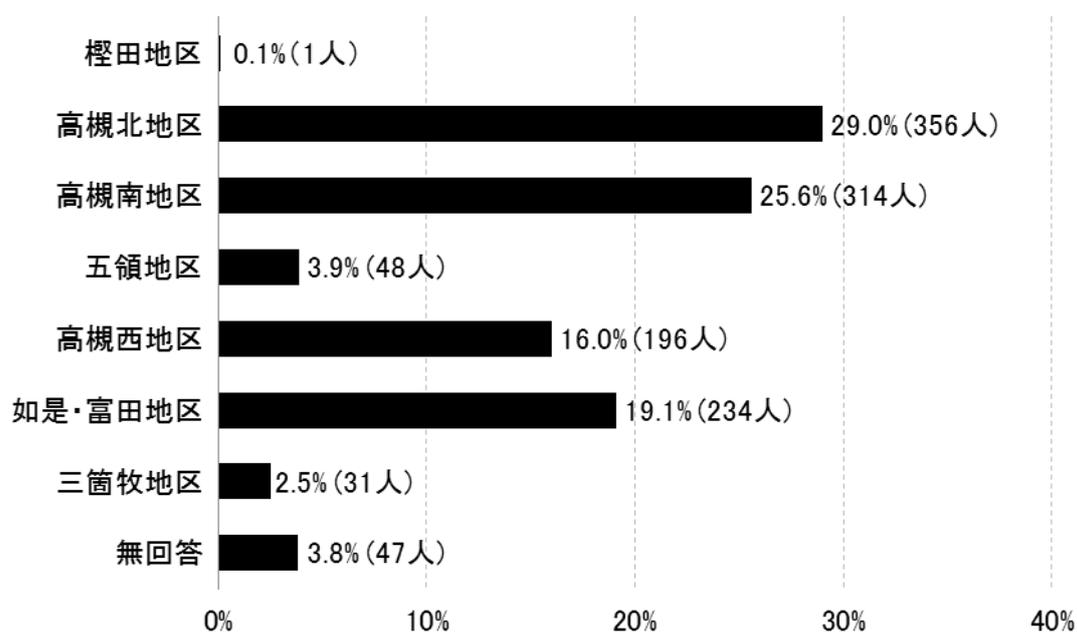


図 5 Q57 居住地域

高槻市内での居住年数に関して、全体の8割以上が10年以上市内に居住していることが分かる。年代別で見ると、10・20代が「20年以上30年未満」が44.3%と最も多く、子どもころから市内に居住していることが分かる。70代以上が「50年以上」が32.4%と最も多い。なお、大きな男女差は見られない(表2)。

表2 Q58 市内居住年数

		(%)									
		1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上 40年未満	40年以上 50年未満	50年以上	無回答
男女別	合計 (N=1227)	1.8	3.9	3.6	5.5	15.3	15.4	17.4	20.9	15.6	0.7
	男性 (N=523)	1.9	3.1	3.8	6.5	14.5	15.9	15.3	21.4	17.6	0.0
	女性 (N=687)	1.7	4.7	3.5	4.8	16.0	15.3	18.9	20.2	14.1	0.7
年代別	10・20代 (N=106)	6.6	10.4	5.7	4.7	28.3	44.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	30代 (N=137)	4.4	13.9	16.1	18.2	11.7	8.0	27.0	0.0	0.0	0.0
	40代 (N=174)	1.7	2.3	2.9	8.0	32.8	13.2	8.6	28.7	0.0	0.0
	50代 (N=186)	0.5	3.2	1.6	4.3	18.8	19.9	11.3	20.4	19.9	0.0
	60代 (N=172)	1.2	1.7	1.7	1.2	7.6	18.0	31.4	23.3	14.0	0.0
	70代以上 (N=324)	0.6	0.3	0.9	2.5	5.6	5.9	20.4	30.2	32.4	1.2

市民の住居は、男女別・年代別のすべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅」よりも高い割合である。年代別で見ると、「一戸建て」の割合は、10・20代から40代が6割未満であるが、50代以上が6割以上である（図6）。

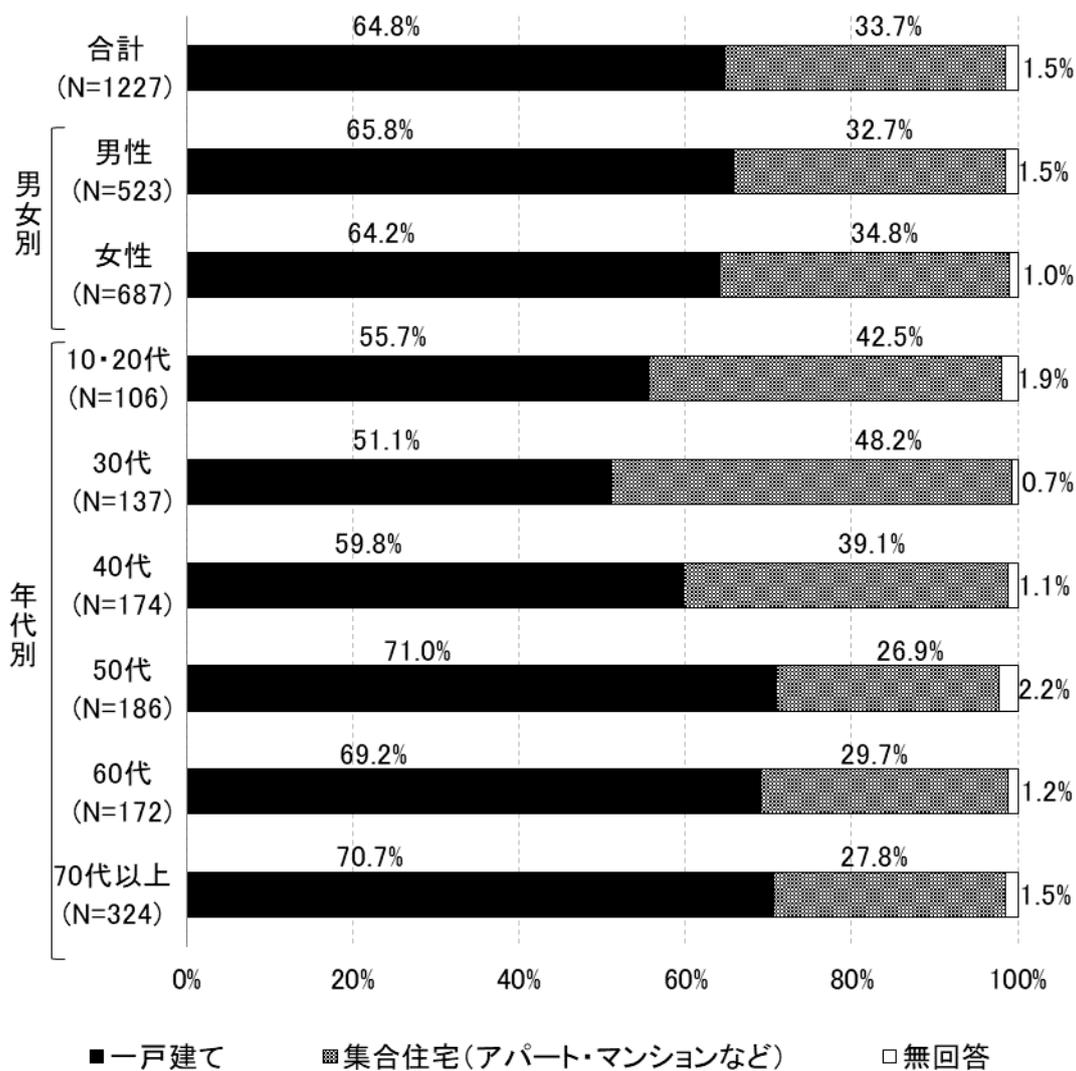


図6 Q60 住居

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」がおおよそ6割以上と最も高い割合である。50代以上は8割以上が「持ち家」である。「民間の賃貸住宅」では、10・20代と30代ではおおよそ3割程度いるが、50代以上は1割未満である。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」の割合は、70代以上が9.3%と最も高く、次いで60代の5.8%である（図7）。

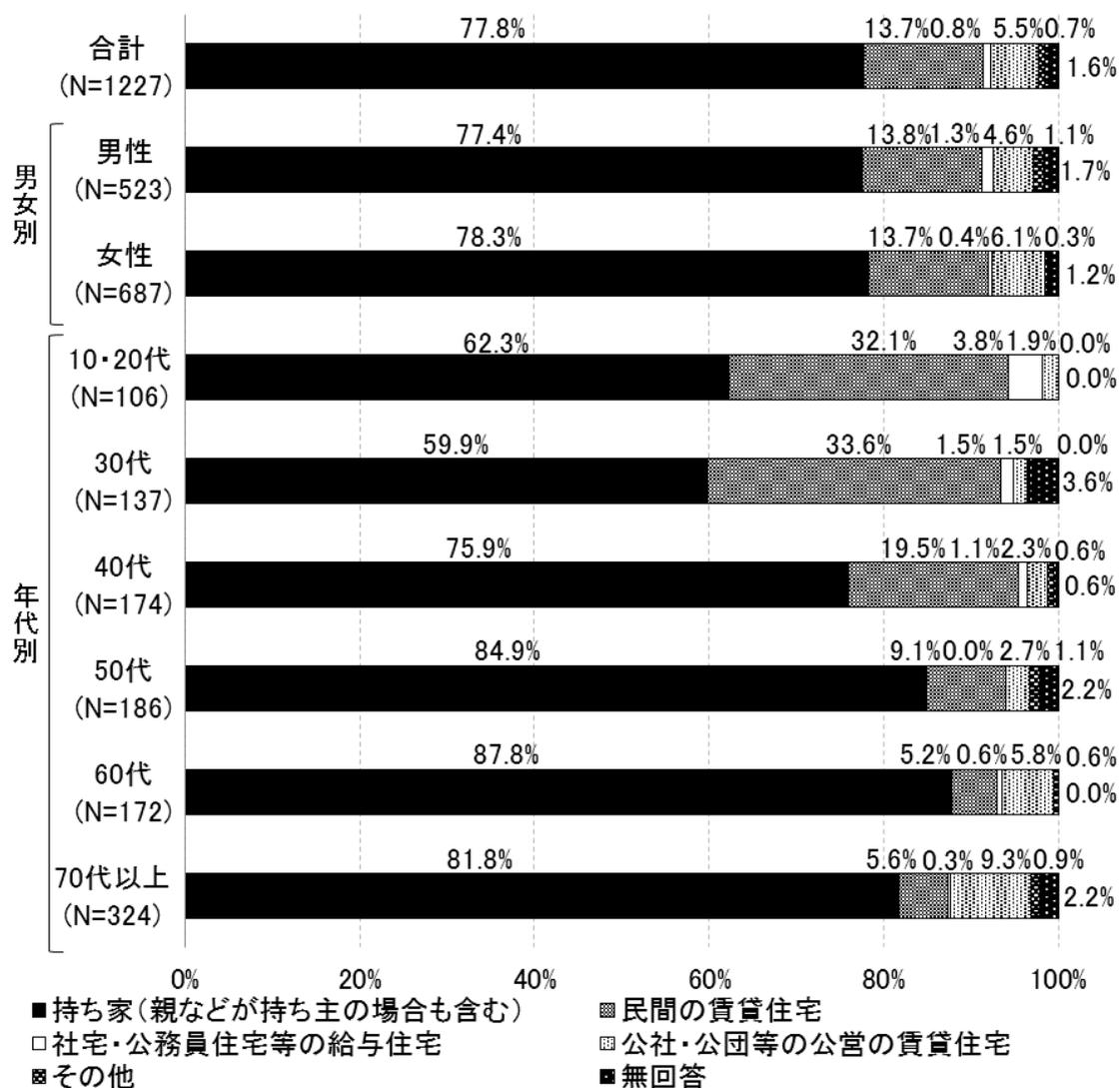


図7 Q59 居住形態

婚姻状況に関して、男女別の各層・年代別の30代以上の層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合を占める。10・20代は「未婚」の割合が8割以上である。男女別で見ると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で6.7%、女性で15.4%と、女性の方が8.7ポイント高い（図8）。

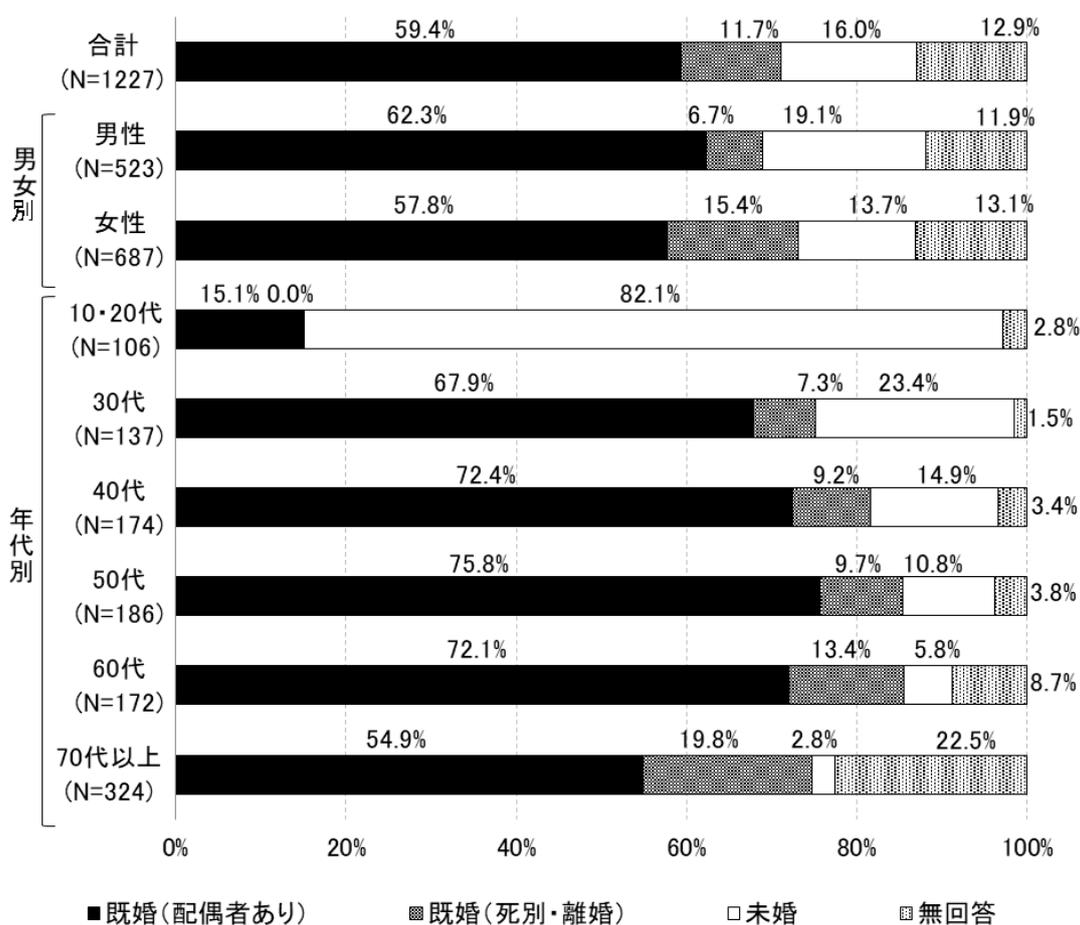


図8 Q49 婚姻状況

子どもの有無に関して、男女別の各層・年代別の30代以上の層で、同居の有無にかかわらず「いる」と回答した人の割合が「いない」と回答した人の割合より高い。10・20代は「いる」と「いない」の割合が同じ5割である（図9）。

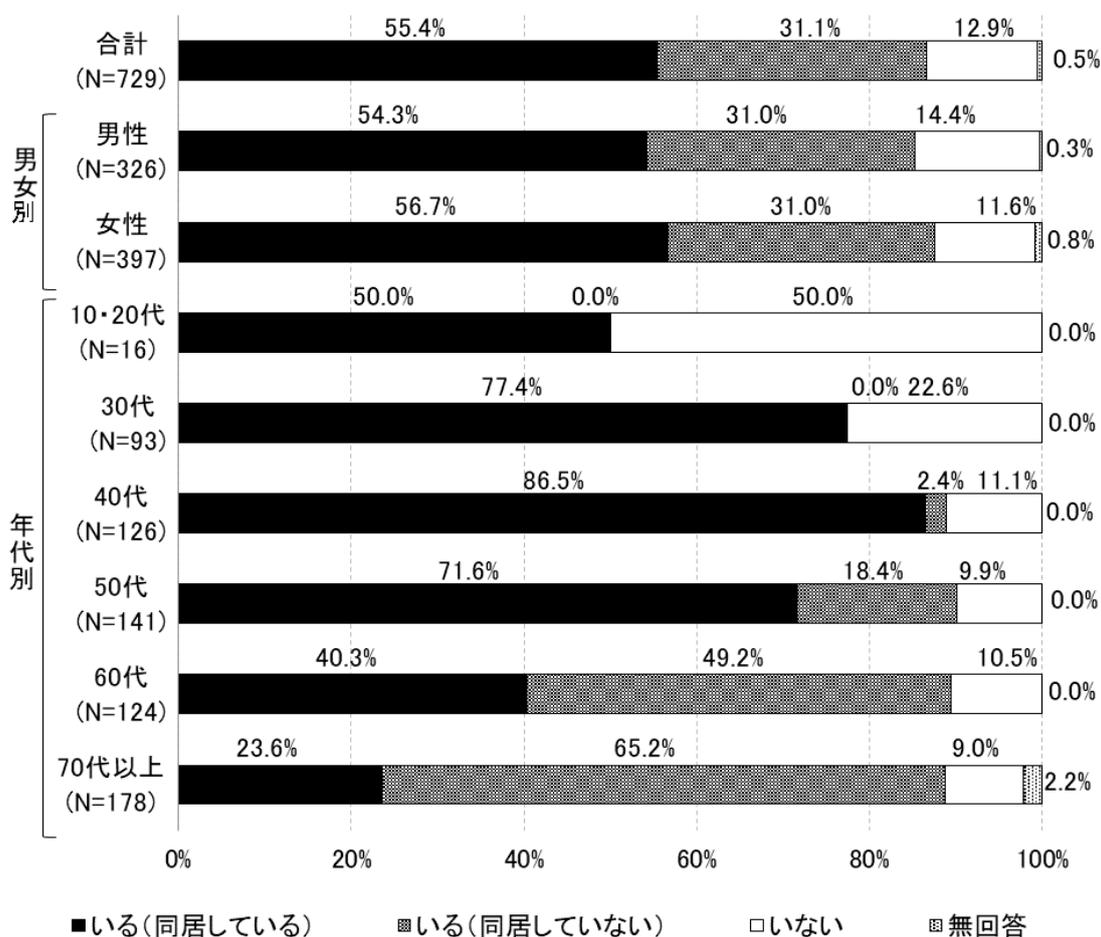


図9 Q53 子どもの有無

世帯人数に関して、その多くは2～4人世帯である。年代別で見ると、10・20代と40代は4人世帯が最も多い。一方で30代と50代は3人世帯が最も多い。また、60代以上は2人世帯が4割以上を占めている（表3）。

表3 Q61 世帯人数

													(%)
		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人	無回答
男女別	合計 (N=1227)	10.8	35.2	23.4	17.8	6.8	1.3	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	4.4
	男性 (N=523)	9.0	37.3	25.2	17.0	6.1	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0
	女性 (N=687)	12.5	33.8	22.1	18.6	7.3	1.3	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	3.8
年代別	10・20代 (N=106)	7.5	14.2	26.4	34.9	12.3	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8
	30代 (N=137)	7.3	21.9	29.9	25.5	10.9	1.5	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	2.2
	40代 (N=174)	5.7	15.5	23.0	37.4	11.5	1.1	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	5.2
	50代 (N=186)	7.5	24.7	31.7	25.3	9.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	1.1
	60代 (N=172)	13.4	47.7	22.7	7.0	2.3	1.2	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7
	70代以上 (N=324)	15.1	56.8	16.4	1.9	1.9	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.8

世帯年収に関して、合計および男性・女性では、(無回答を除けば)「200～400万円未満」が最も多い。年代別で見ると、「わからない」を除いて割合が最も高いのは、10・20代で「200万円～400万円未満」、30代と40代で「400万円～600万円未満」と、年代が上がるごとに年収が高額になっている。ただし50代では「400万円～600万円未満」の割合が最も高く、60代と70代以上では「200万円～400万円未満」の割合が最も高い（表4）。

表4 Q63 世帯年収

											(%)	
		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上	わからない	無回答	
男女別	合計 (N=1227)	4.2	8.2	19.4	14.9	8.2	7.4	7.3	1.5	7.2	21.7	
	男性 (N=523)	3.1	6.9	21.4	17.8	8.8	9.0	7.8	1.3	5.2	18.7	
	女性 (N=687)	5.1	9.5	17.9	13.0	7.9	6.3	7.1	1.6	8.7	23.0	
年代別	10・20代 (N=106)	7.5	3.8	17.9	8.5	7.5	5.7	11.3	2.8	20.8	14.2	
	30代 (N=137)	4.4	2.2	10.9	27.0	9.5	10.9	11.7	1.5	9.5	12.4	
	40代 (N=174)	1.1	6.3	14.9	16.7	13.2	14.9	10.9	1.7	5.2	14.9	
	50代 (N=186)	2.7	1.6	11.3	15.6	14.0	12.9	14.0	1.1	7.5	19.4	
	60代 (N=172)	4.1	9.3	22.1	14.5	6.4	4.7	5.2	1.7	5.2	26.7	
	70代以上 (N=324)	4.6	15.7	29.0	13.0	2.8	1.2	0.3	0.3	4.9	28.1	

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけでなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については、図1と図2を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示している。よって合計%は100.0%になるとは限らない。

Q1の生活満足度に関して、男女別・年代別のすべての層で5割以上が「満足」もしくは「やや満足」と回答している。年代別で見ると、「満足」もしくは「やや満足」と回答した人の割合は10・20代が72.7%と最も高く、反対に50代が57.5%と最も低い(図10)。

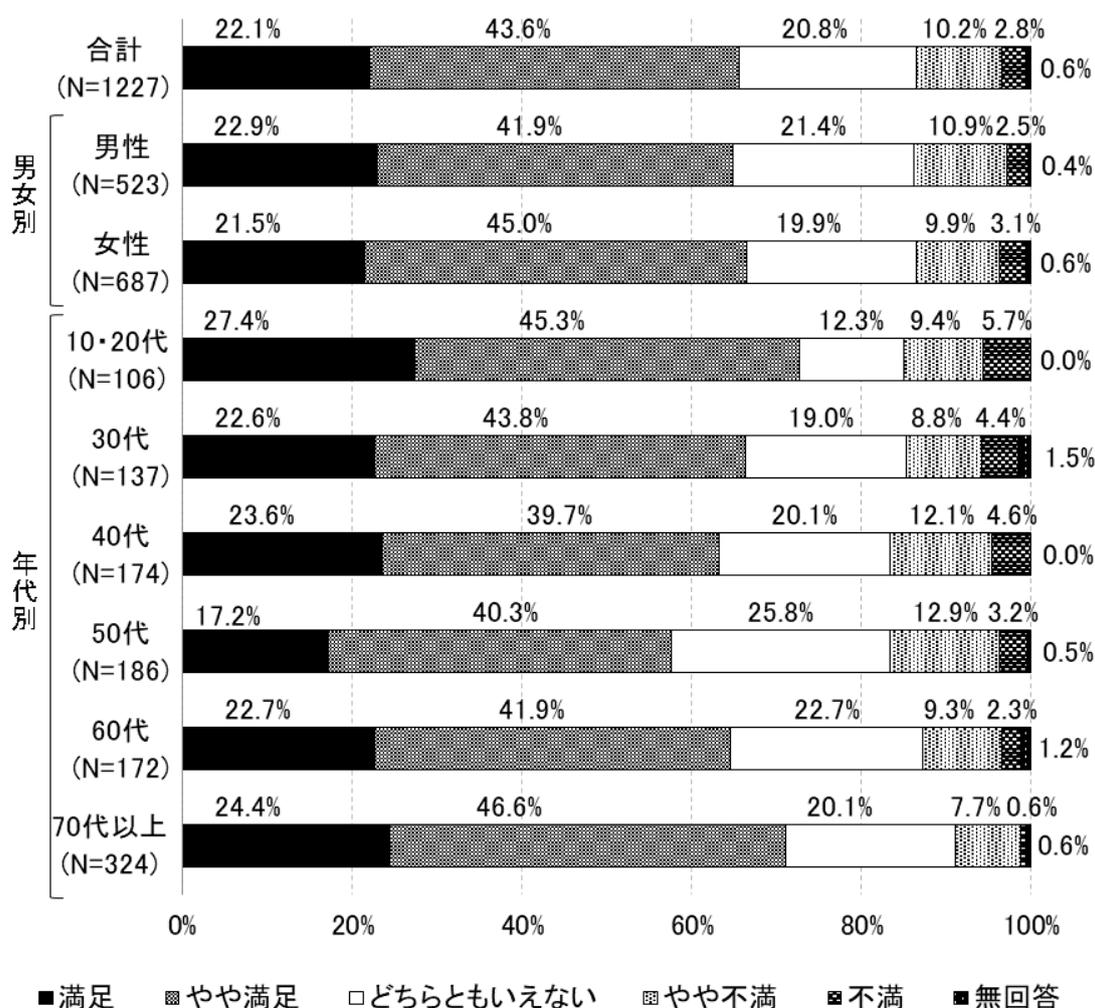


図10 Q1 生活満足度

Q2の幸福度に関して、男女別で見ると、男女ともに「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合は7割程度である。年代別で見ると、「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合は30代が78.9%と最も高く、反対に60代が70.9%と最も低い（図11）。

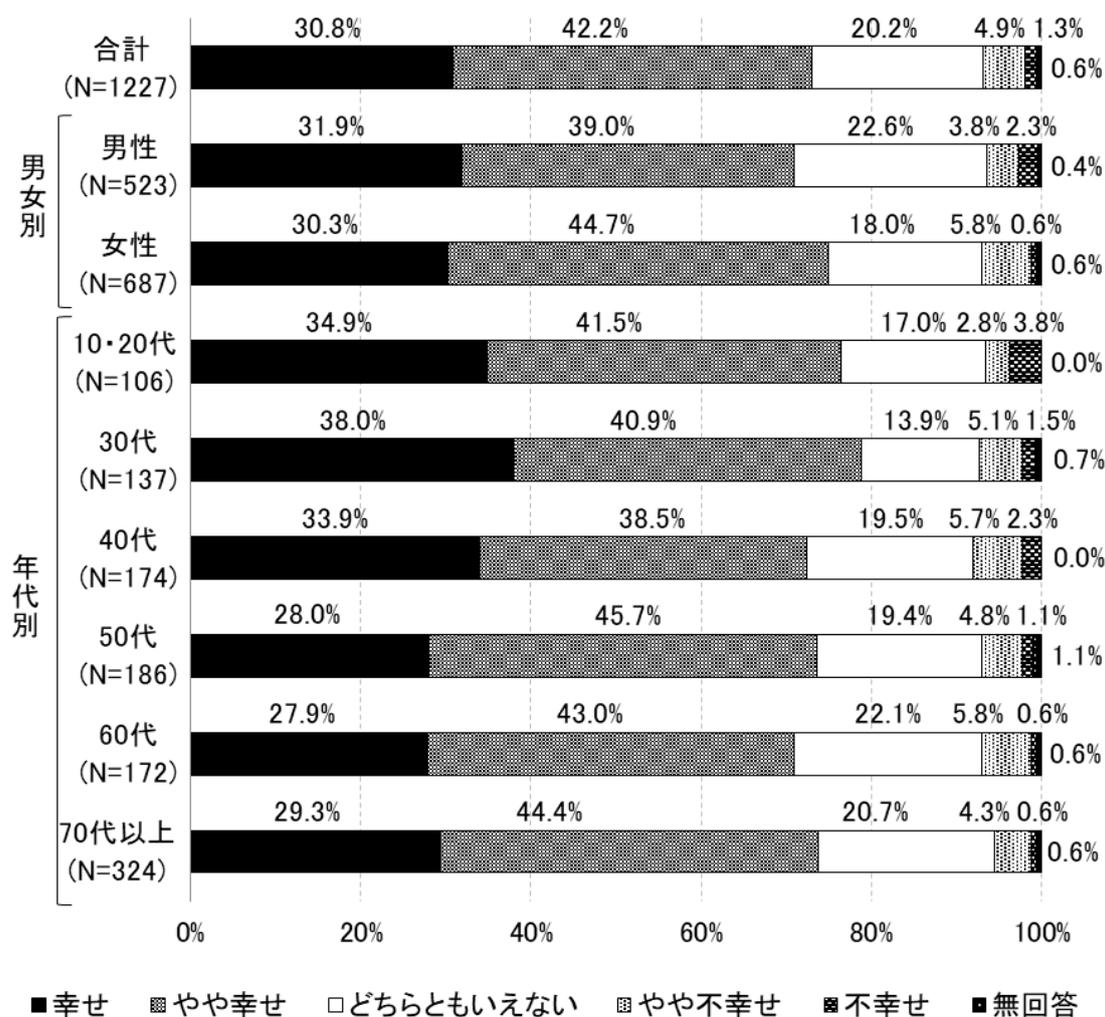


図 11 Q2 幸福度

Q3 の居住地域は暮らしやすいかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が7割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は10・20代が84.0%と最も高い。反対に、30代は77.4%と最も低い（図12）。

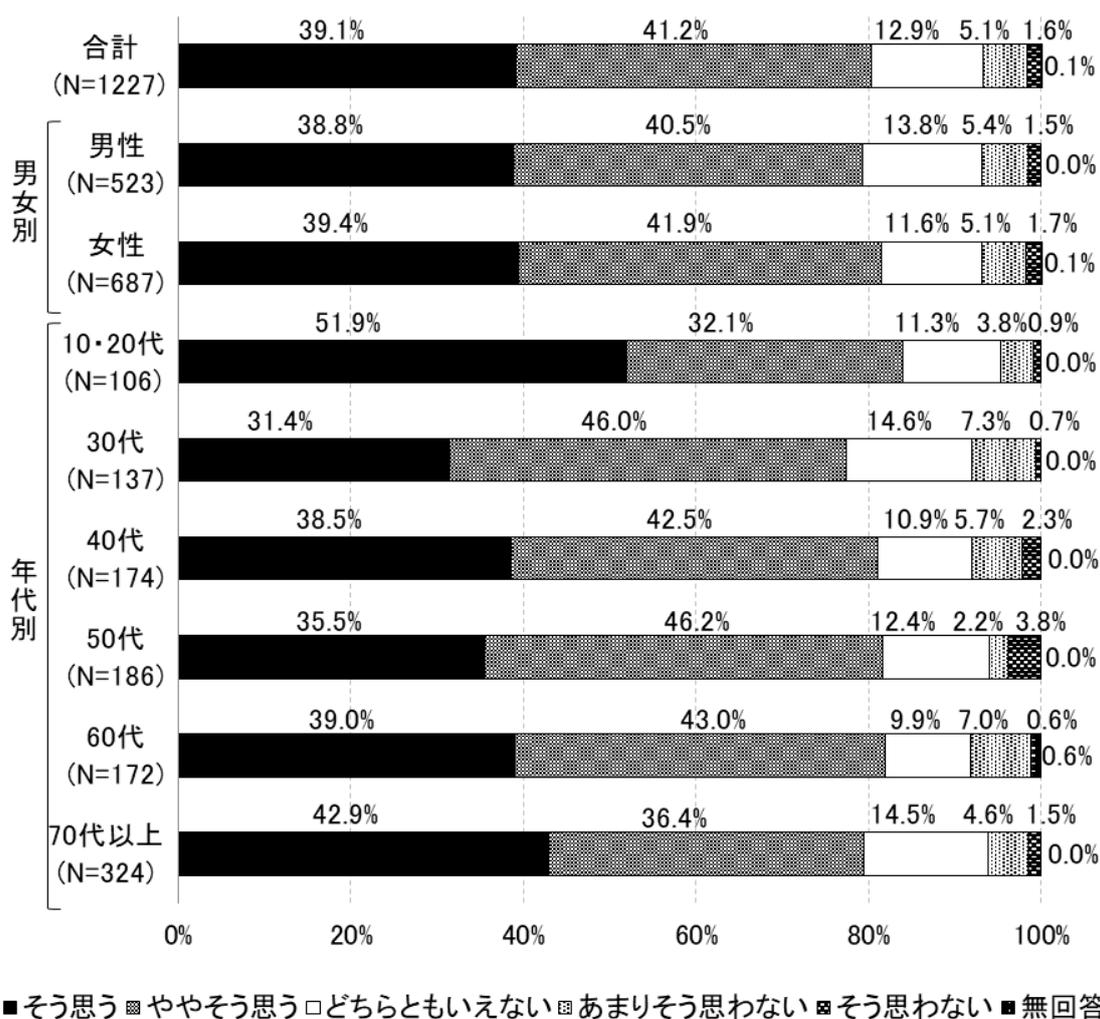


図12 Q3 居住地域は暮らしやすいか

Q4 の地域に住み続けたいかに関して、30代を除く男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合が5割以上である。年代別で見ると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は70代以上が69.8%と最も高い。反対に、30代は49.6%と最も低い（図13）。

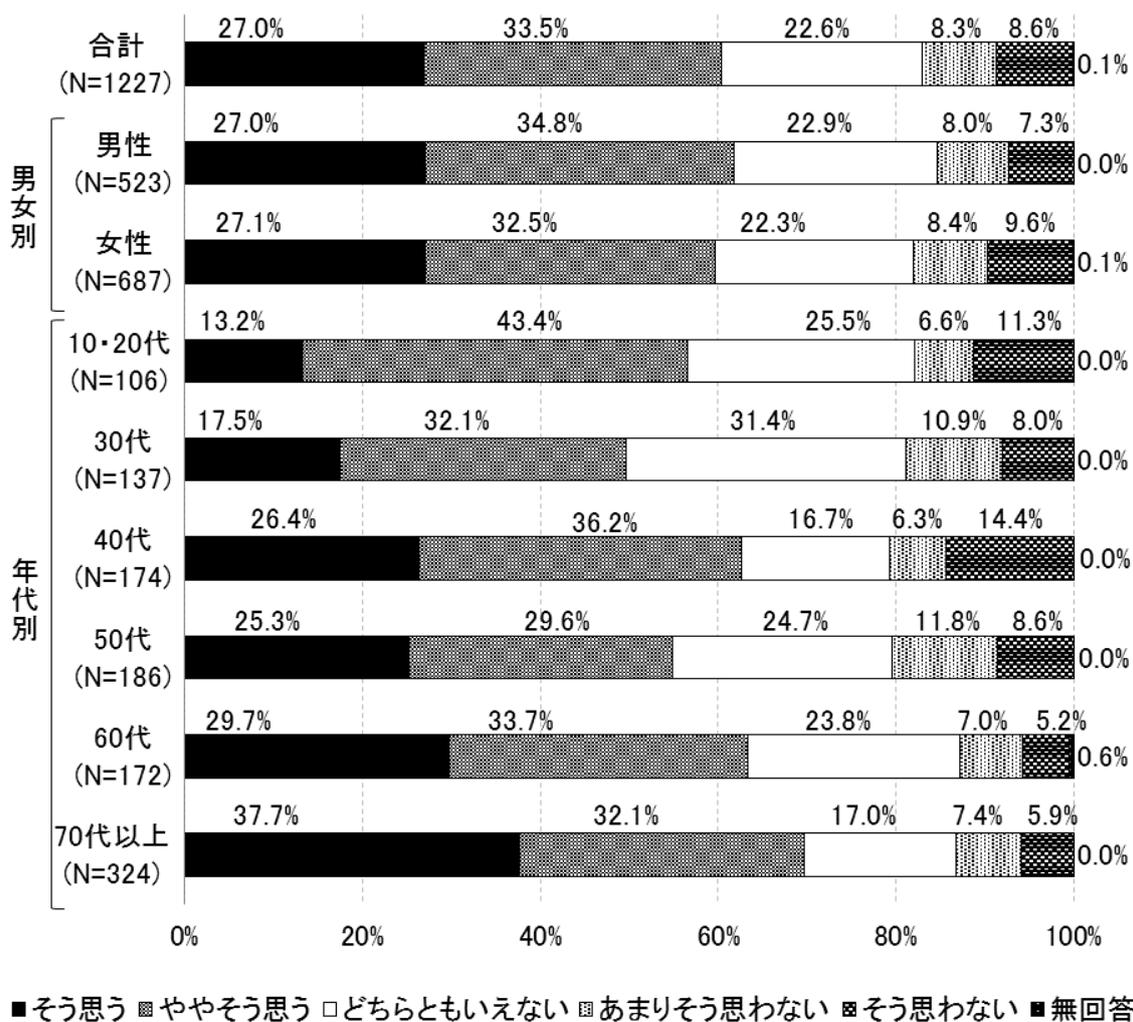
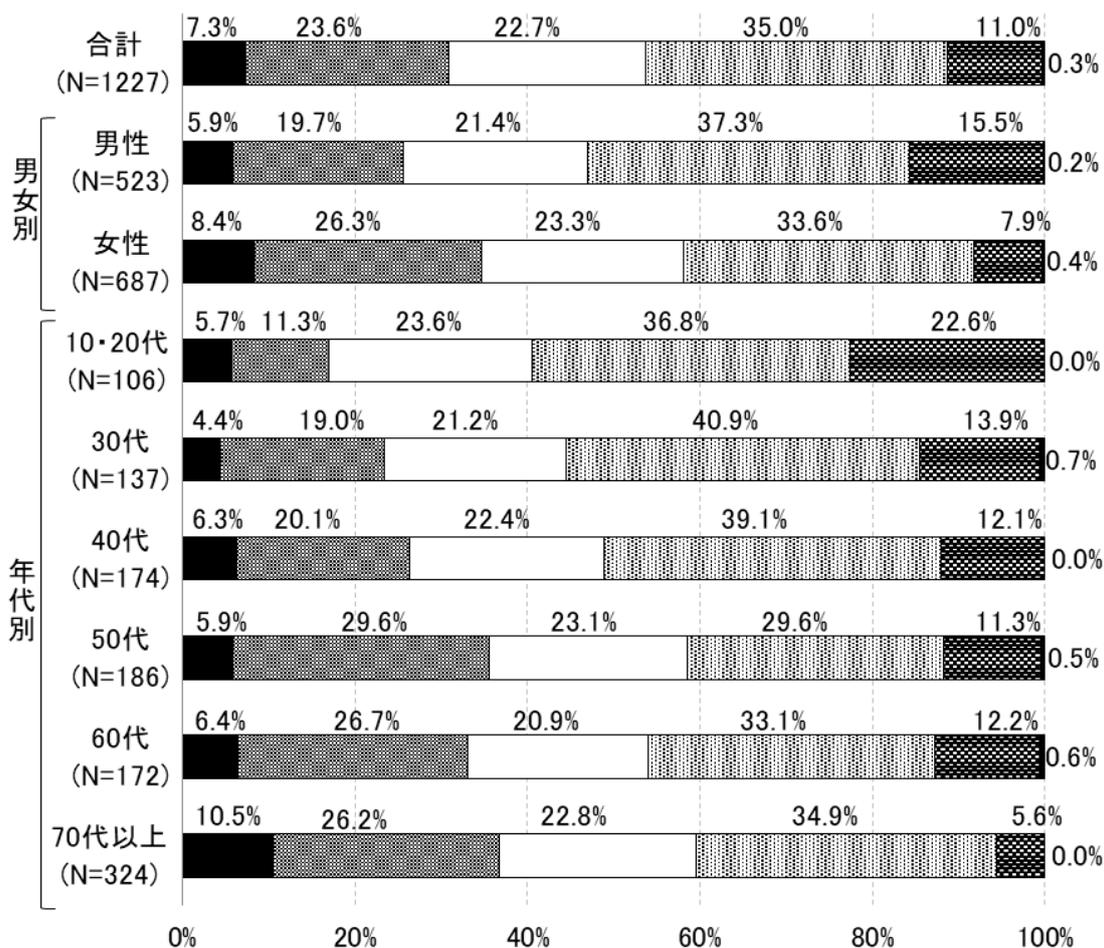


図13 Q4 居住地に住み続けたいか

Q5の高槻市に地域ブランドがあると思うかに関して、男女別で見ると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合が男性で52.8%、女性が41.5%であり、男性の方が10ポイントほど高い。年代別で見ると、すべての年代で、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合の方が「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合よりも高い（図14）。



■そう思う ■ややそう思う □どちらともいえない ■あまりそう思わない ■そう思わない ■無回答

図14 Q5 高槻市に地域ブランドがあると思うか

Q6 の中心市街地に行く頻度が 3 年前と比べて増加したかに関して、年代別で見ると、10・20 代を除くすべての年代で、「減少した」または「少し減少した」と回答した人の割合の方が「増加した」または「少し増加した」と回答した人の割合よりも高い。10・20 代は「増加した」「少し増加した」と回答した人の割合が 29.2%と最も高い。反対に、60 代が 12.2%と最も低い（図 15）。

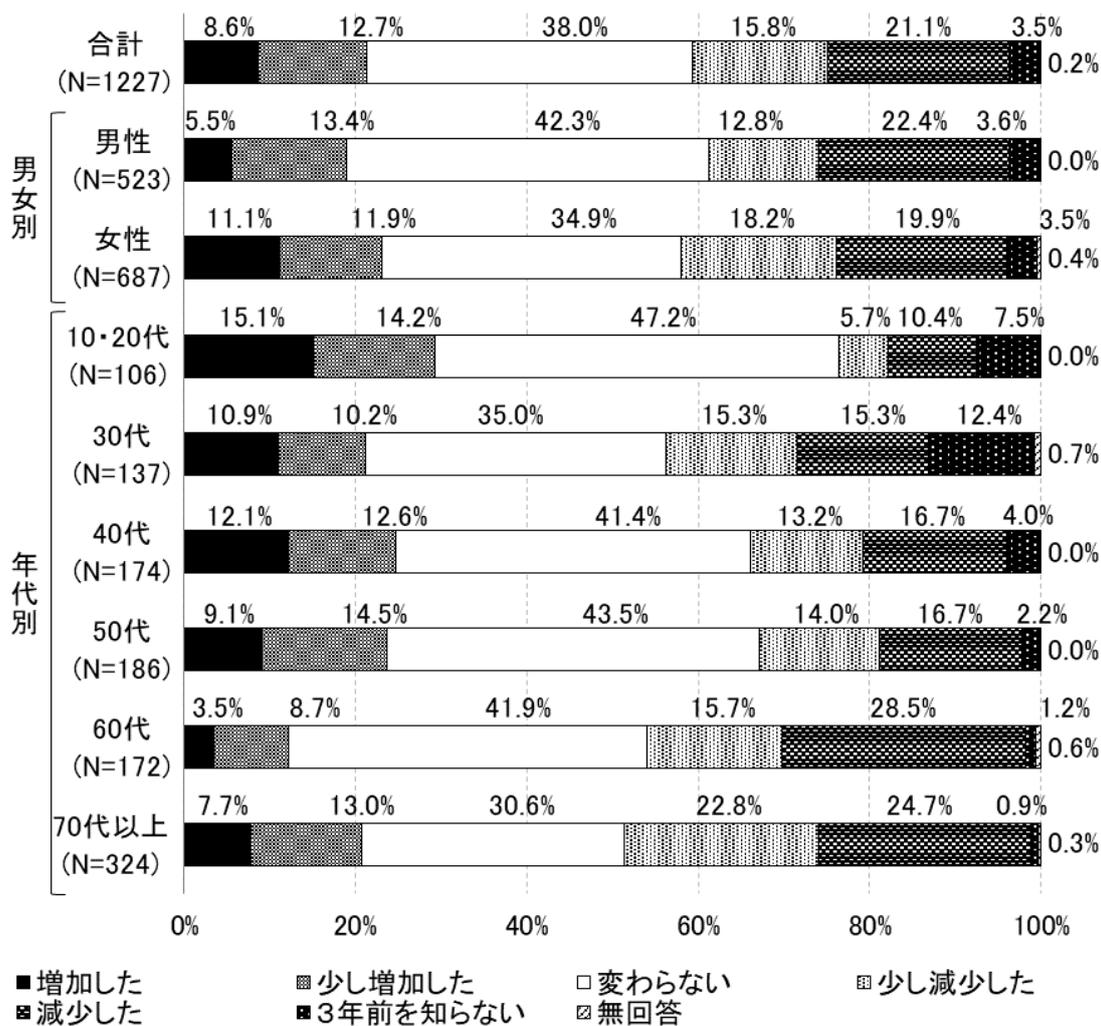


図 15 Q6 中心市街地に行く頻度が 3 年前と比べて増加したか

Q7A～Q7F が、中心市街地において、それぞれが 3 年前と比べて向上したか、低下したかを質問している。

Q7A の 3 年前と比べた場合の中心市街地の防災面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が 1 割以下である。さらに「向上した」の割合を年代別で見ると、10・20 代と 30 代が 2 割未満であるが、それ以外の年代が 2 割以上である（図 16）。

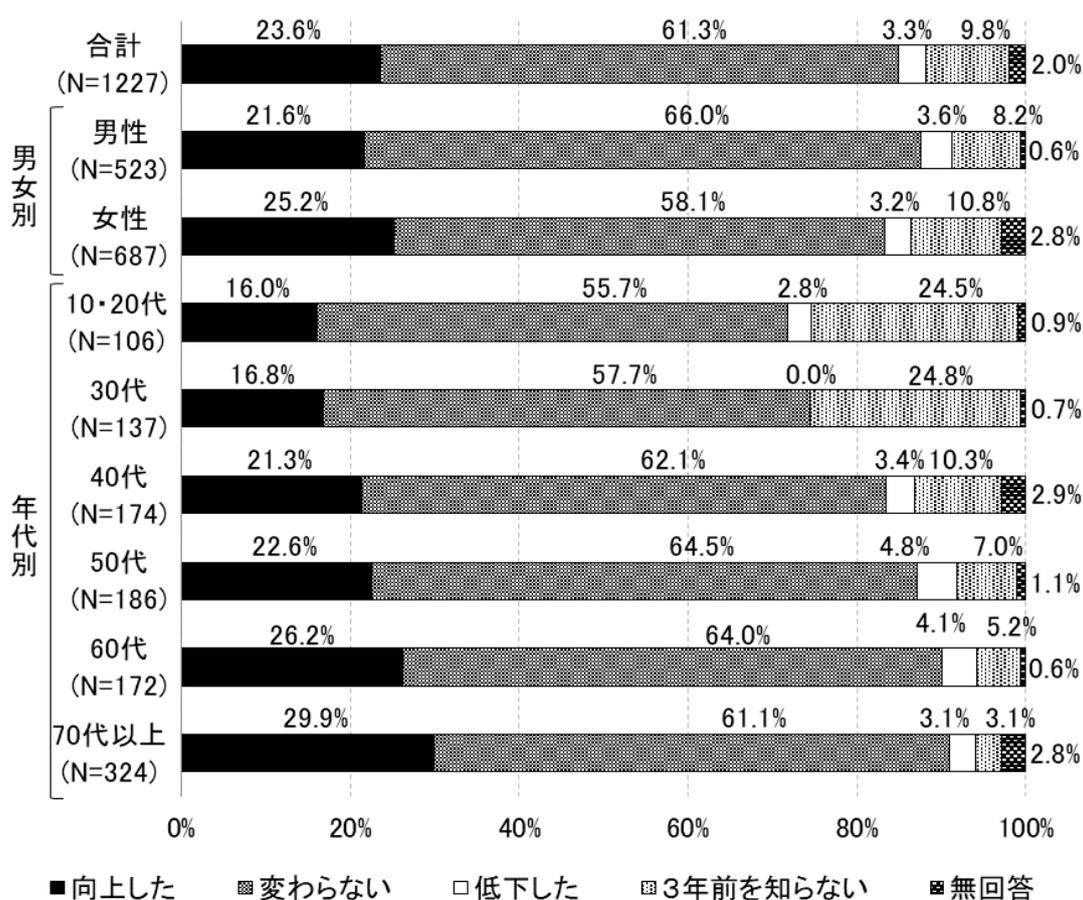


図 16 Q7A 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 防災面での安全性や快適性

Q7B の3年前と比べた場合の中心市街地の防犯面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合を年代別で見ると、50代と70代以上が19.4%と最も高く、10・20代が13.2%と最も低い（図17）。

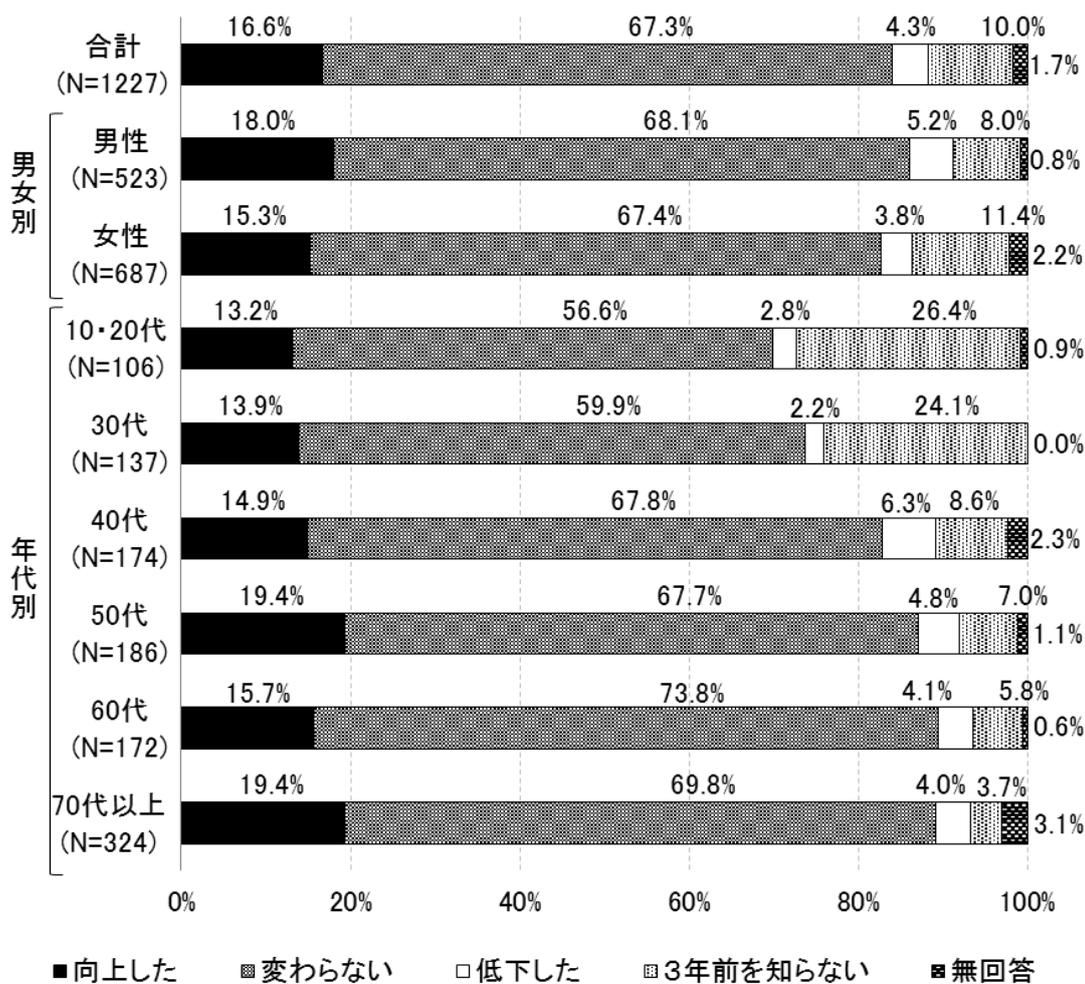


図 17 Q7B 中心市街地で3年前と比べて向上したか 防犯面での安全性や快適性

Q7C の 3 年前と比べた場合の中心市街地の居住環境に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が 1 割以下である。「向上した」の割合を年代別で見ると 10・20 代を除くすべての層で約 2 割である。10・20 代は 27.4%である (図 18)。

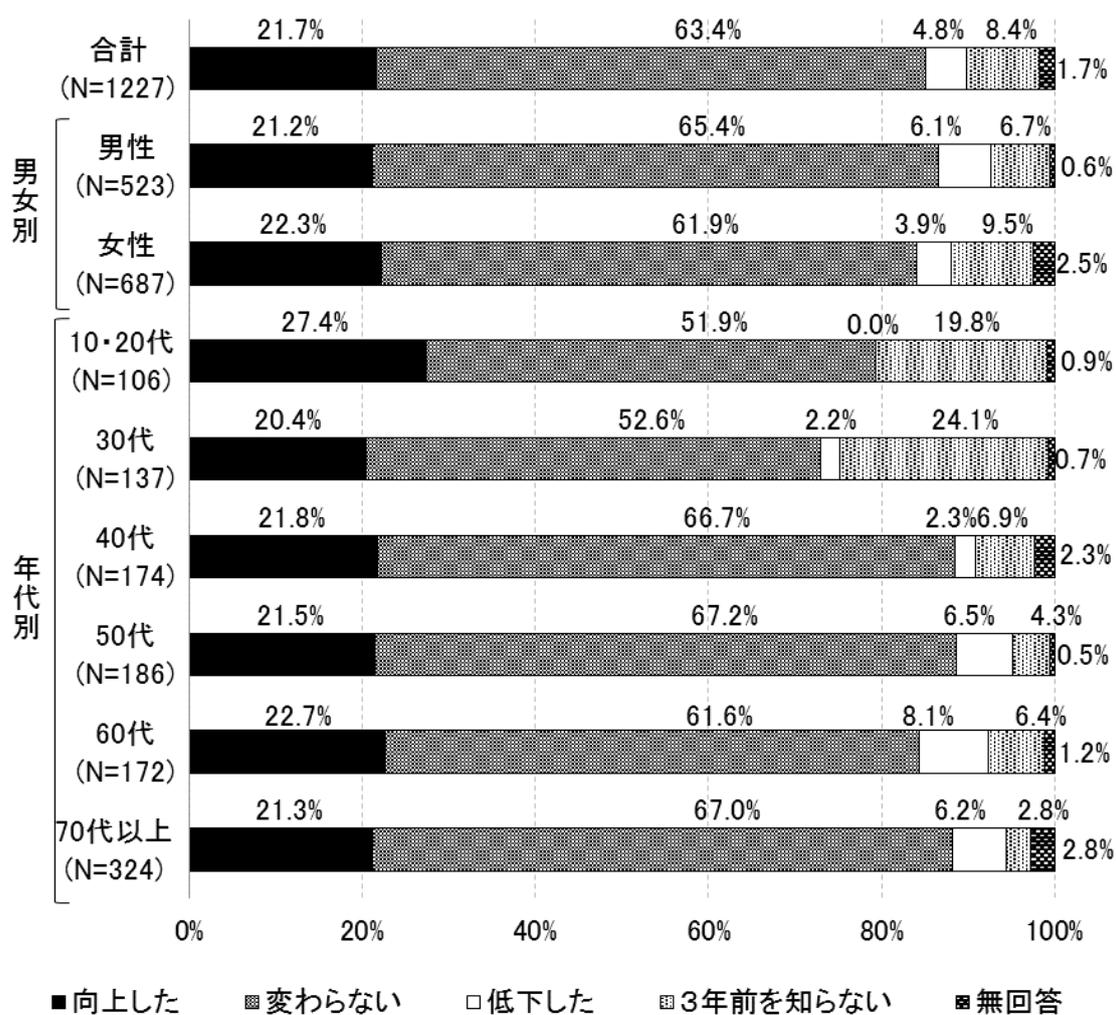


図 18 Q7C 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 居住環境

Q7D の3年前と比べた場合の中心市街地の公共交通機関の利便性に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合は、男女ともに2割以上である。年代別で見ると、「向上した」の割合は、30代と40代を除くすべての年代が2割以上であり、70代以上が29.9%と最も高く、反対に30代が16.1%と最も低い(図19)。

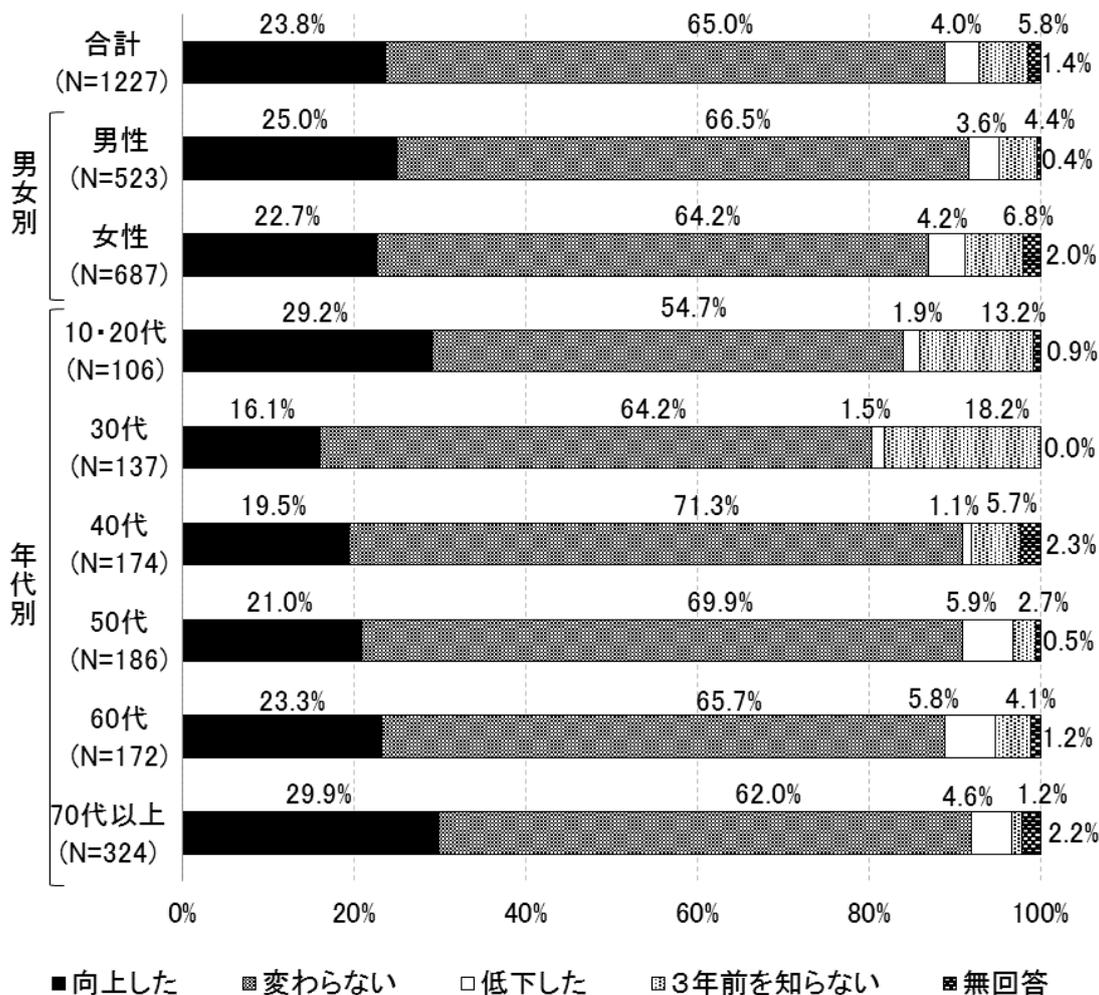


図19 Q7D 中心市街地で3年前と比べて向上したか 公共交通機関の利便性

Q7E の 3 年前と比べた場合の中心市街地の歩行者にとっての歩きやすさに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1 割以上である。年代別で見ると、「向上した」の割合は、40代が 23.6%と最も高い。反対に 60代が、17.4%と最も低い（図 20）。

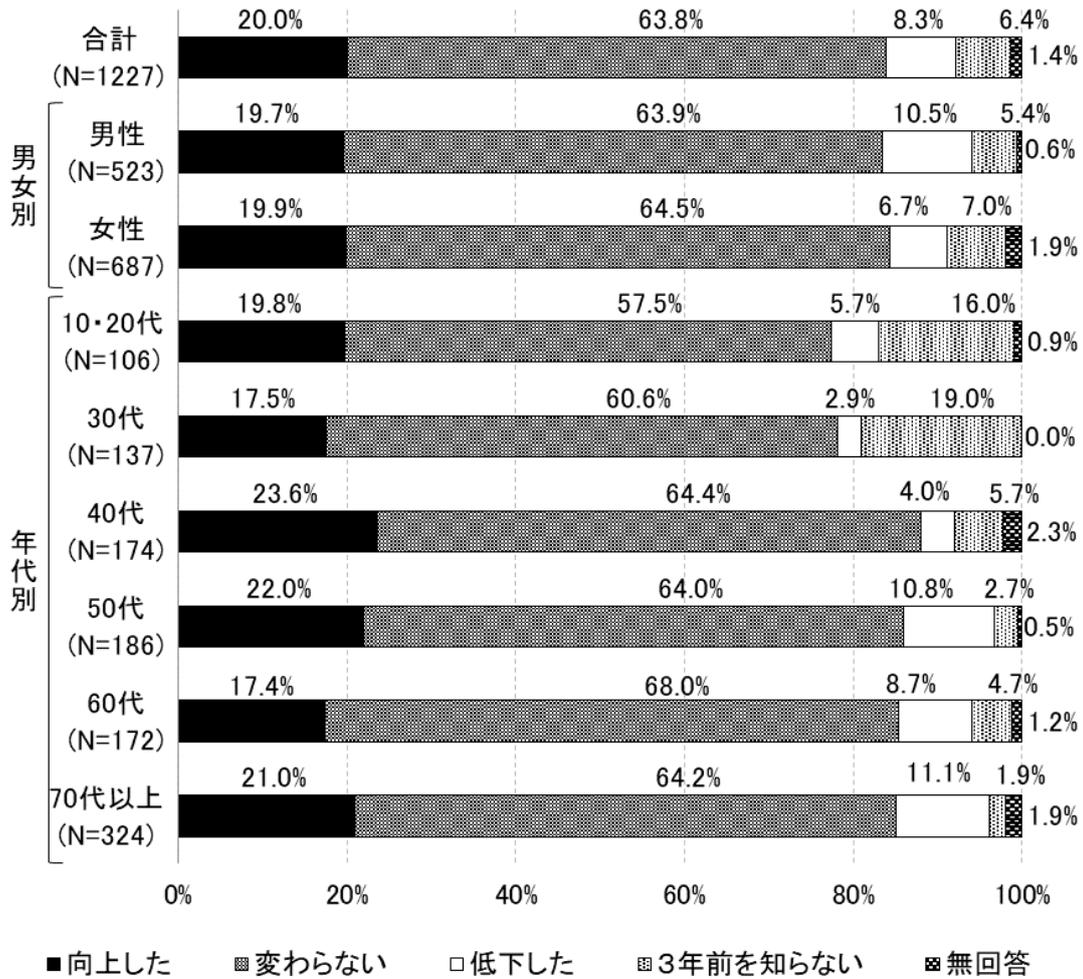


図 20 Q7E 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 歩行者にとっての歩きやすさ

Q7F の 3 年前と比べた場合の中心市街地の風紀や治安に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また年代別で見ると、「向上した」の割合は、70 代以上を除くすべての層で 1 割未満となっている。「向上した」の割合は、70 代以上が 12.7%と最も高く、40 代が 6.3%と最も低い。(図 21)。

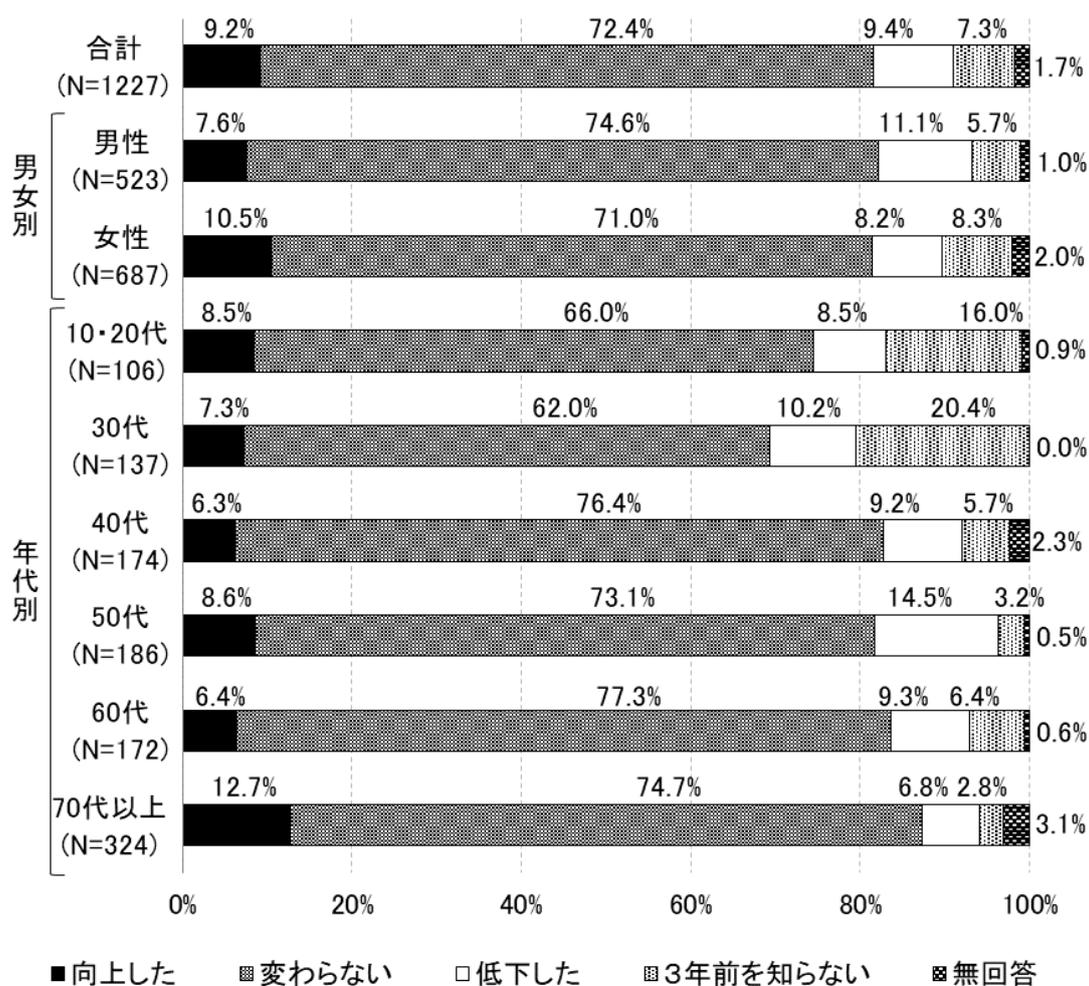


図 21 Q7F 中心市街地で 3 年前と比べて向上したか 風紀や治安

Q8A～Q8Kが、中心市街地において、それぞれが3年前と比べて増加したか減少したかを質問している。なお、Q8A～Q8Kのいずれにおいても、10・20代と30代で「3年前を知らない」の割合が高くなっていることに注意が必要である。

Q8Aの文化活動に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、70代以上を除くすべての年代が2割未満である。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割に満たない(図22)。

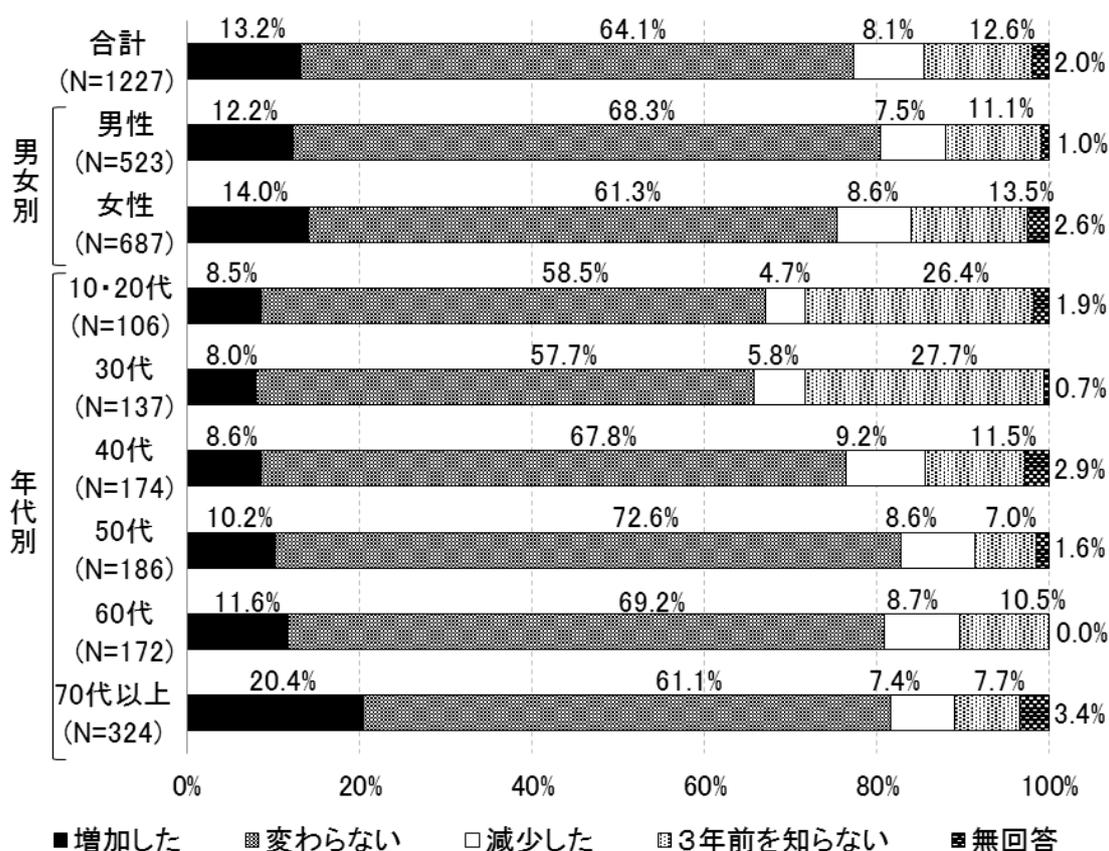


図 22 Q8A 中心市街地で3年前と比べて増加したか 文化活動

Q8B のコミュニティ活動に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、70代以上を除くすべての年代で1割未満である。「減少した」の割合は、60代を除くすべての層で1割未満である（図 23）。

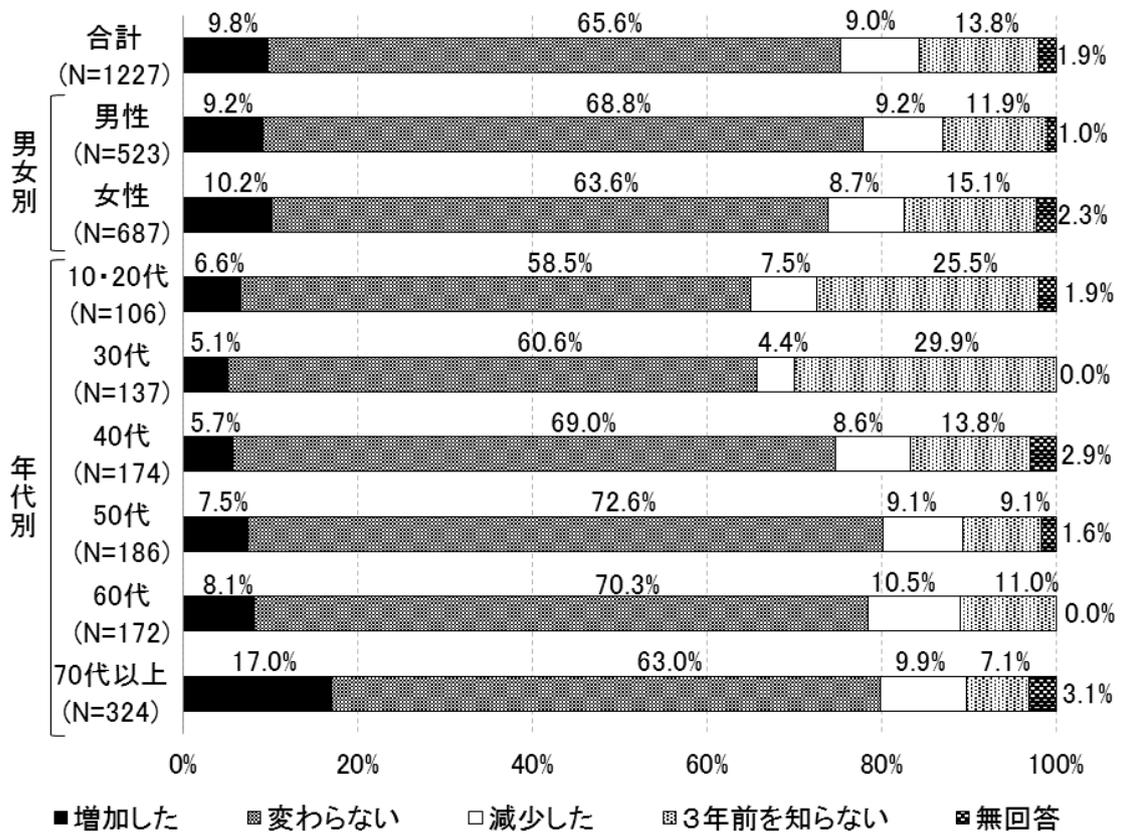


図 23 Q8B 中心市街地で3年前と比べて増加したか コミュニティ活動

Q8C の商店街の魅力に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で2割未満である。「減少した」の割合は、10・20代を除くすべての年代で2割程度である（図 24）。

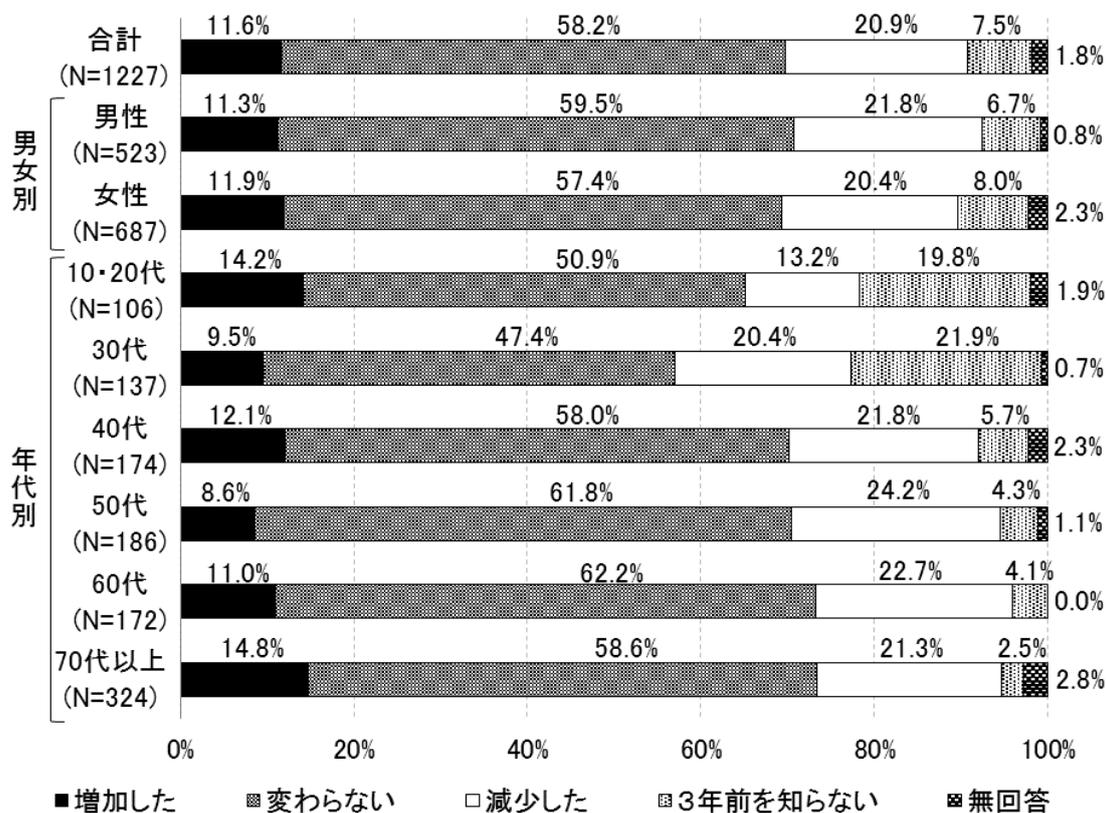


図 24 Q8C 中心市街地で3年前と比べて増加したか 商店街の魅力

Q8D の百貨店などの大型店の魅力に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、すべての年代で2割以上であり、10・20代が34.9%と最も高い。「減少した」の割合は、10・20代と30代を除くすべての年代が2割以上であり、50代が24.2%と最も高く、反対に10・20代が7.5%と最も低い（図25）。

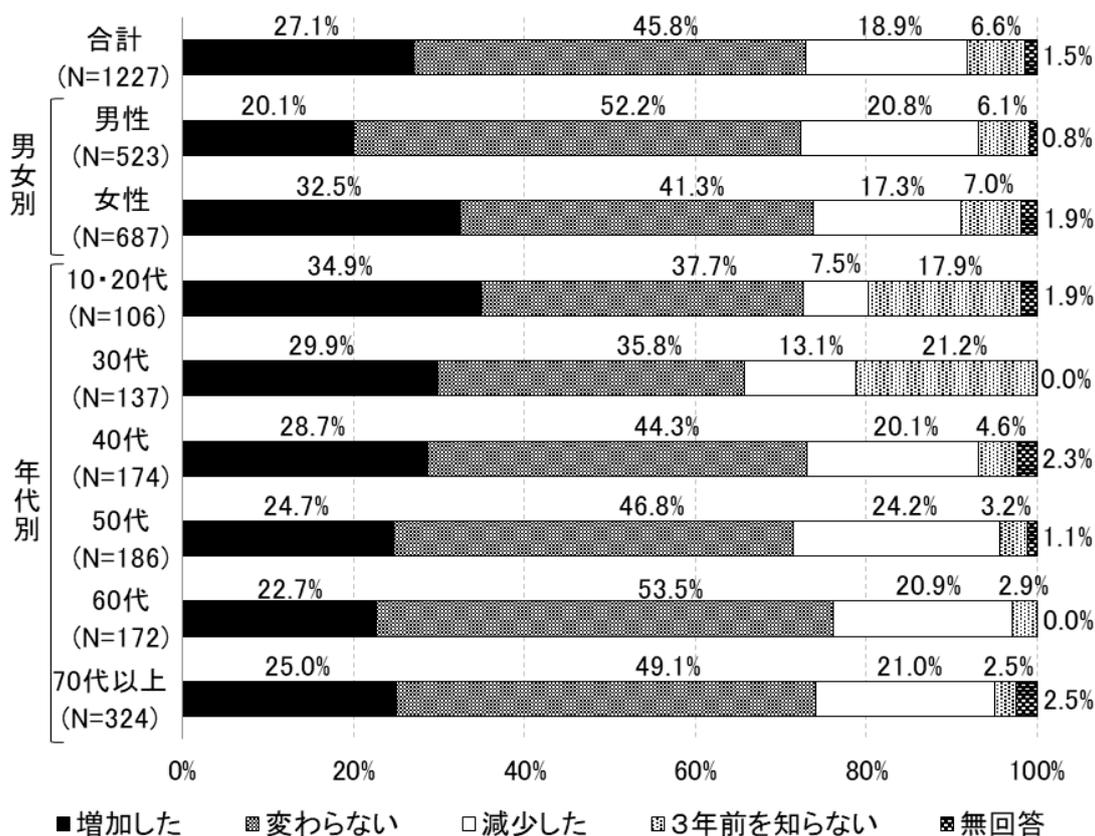


図 25 Q8D 中心市街地で3年前と比べて増加したか 百貨店などの大型店の魅力

Q8E の買い物やイベントでのにぎわいに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、10・20代を除くすべての年代で2割未満である。「減少した」の割合は、30代以下は1割程度であり、40代以上は2割程度である（図 26）。

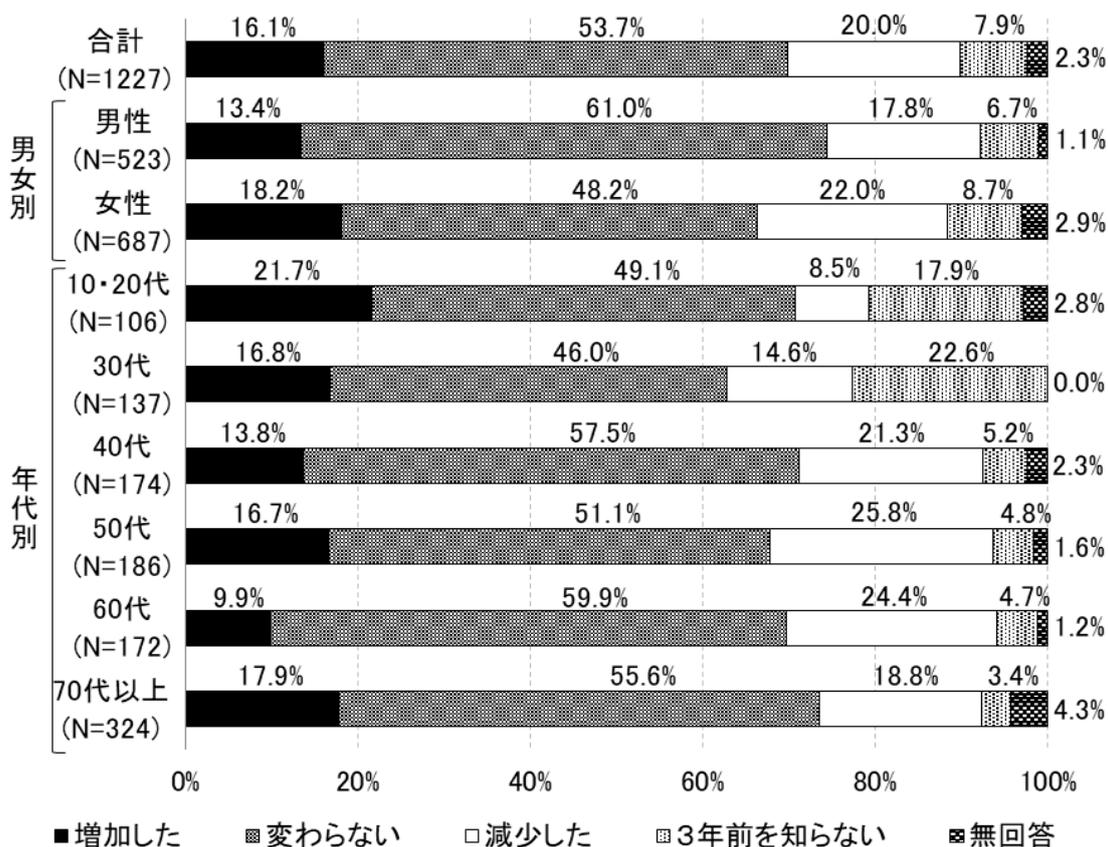


図 26 Q8E 中心市街地で3年前と比べて増加したか 買い物やイベントでのにぎわい

Q8F の魅力的な飲食店に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、10・20代が35.8%と最も高く、反対に70代以上で17.3%と最も低い（図 27）。

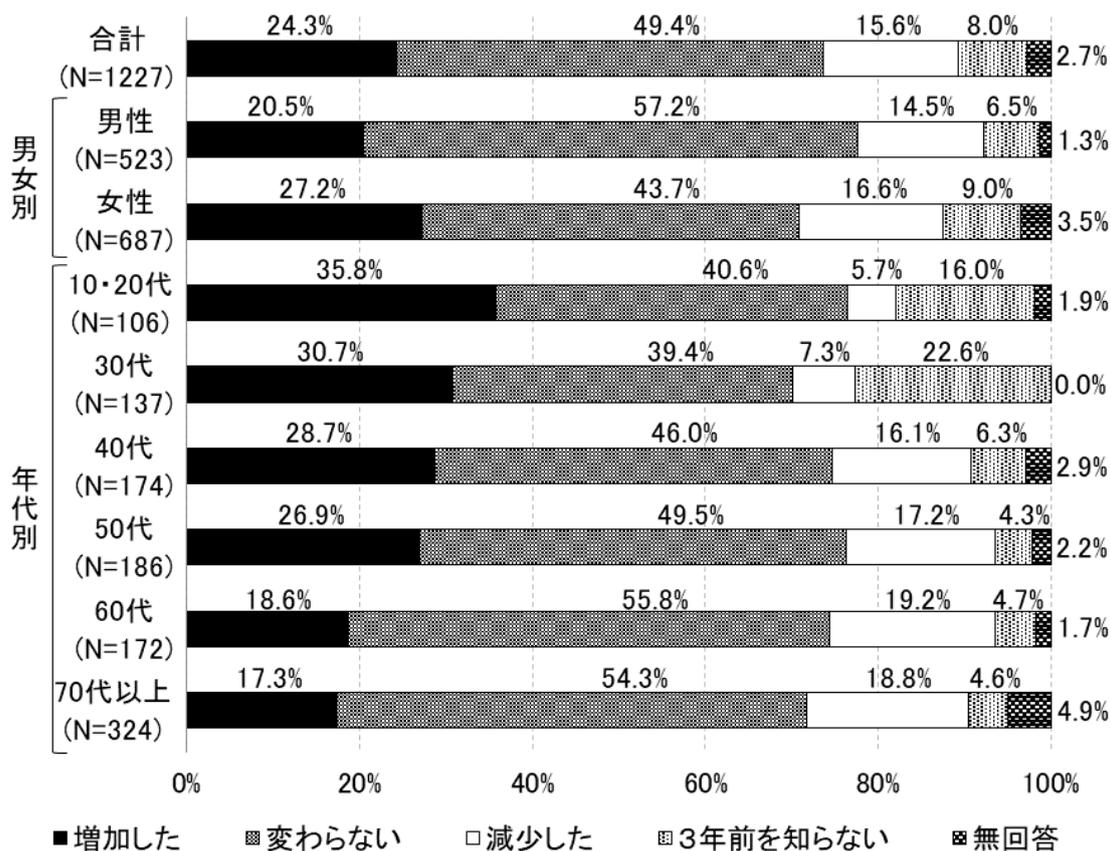


図 27 Q8F 中心市街地で3年前と比べて増加したか 魅力的な飲食店

Q8G のオフィスなどの業務施設に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層でいずれも 1 割未満である（図 28）。

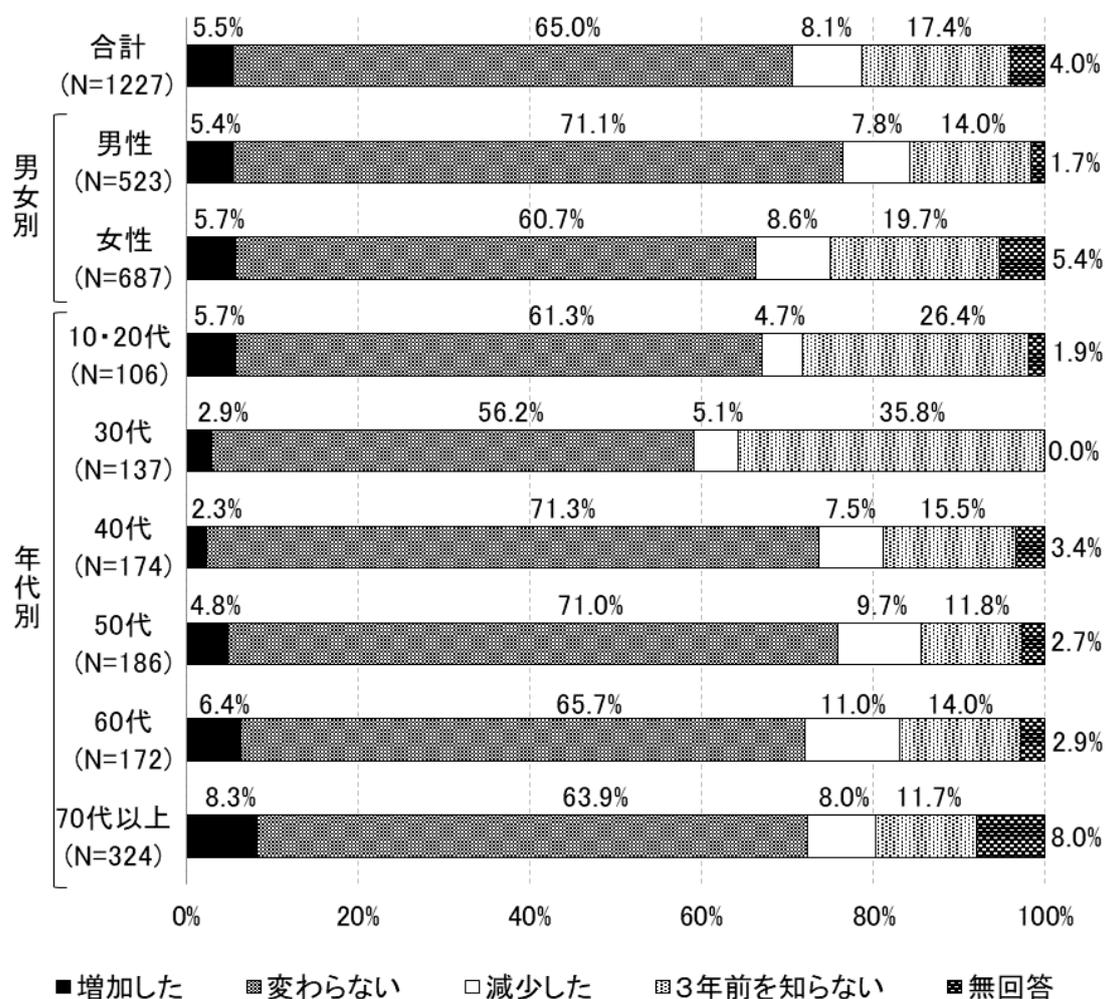


図 28 Q8G 中心市街地で 3 年前と比べて増加したか オフィスなど業務施設

Q8H の病院などの医療機関に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、年代別で見ると、「増加した」の割合は40代、50代、60代、70代以上は2割を超えているが、30代は17.5%と最も低い。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である（図 29）。

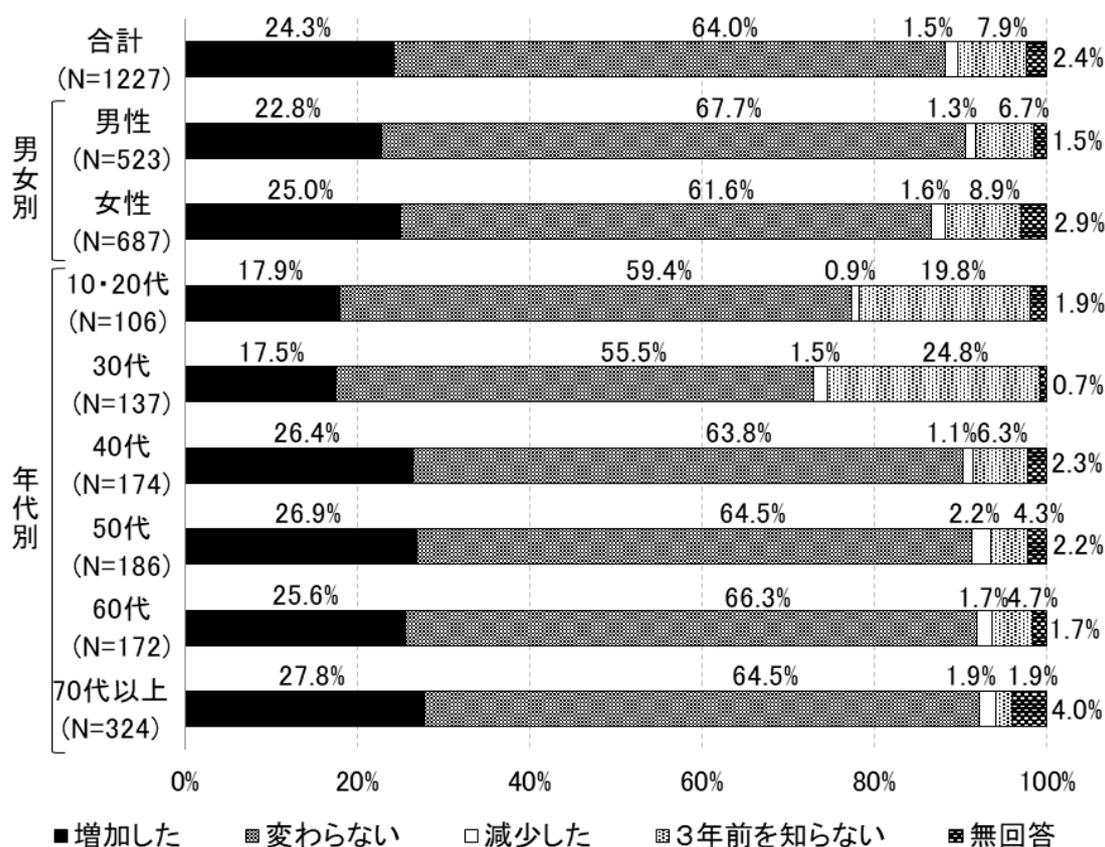


図 29 Q8H 中心市街地で3年前と比べて増加したか 病院などの医療機関

Q8I の道路の渋滞に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、10・20代と30代を除くすべての年代で2割以上である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1~2割程度である（図30）。

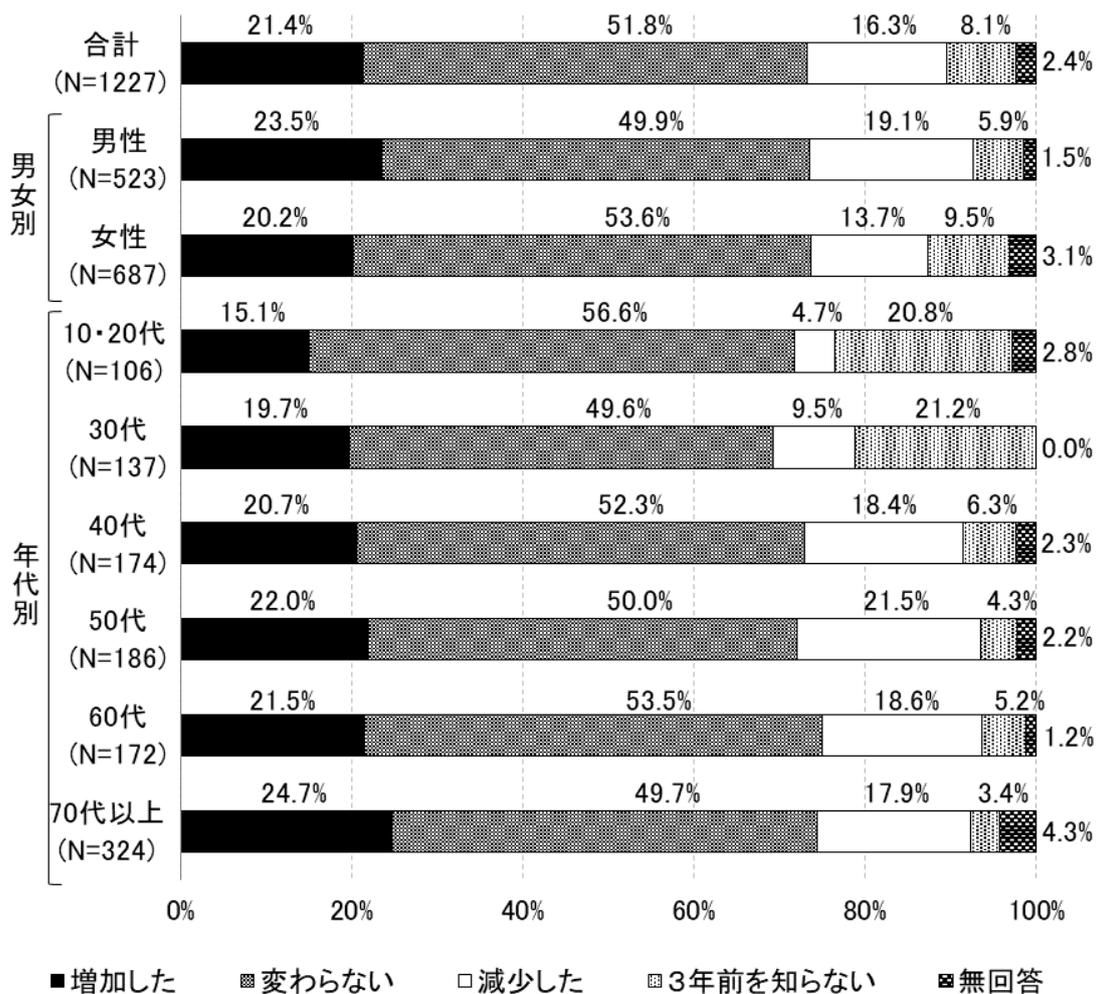


図30 Q8I 中心市街地で3年前と比べて増加したか 道路の渋滞

Q8Jの駐輪場に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、30代が22.6%と最も高く、反対に60代が17.4%と最も低い。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で1割未満である（図31）。

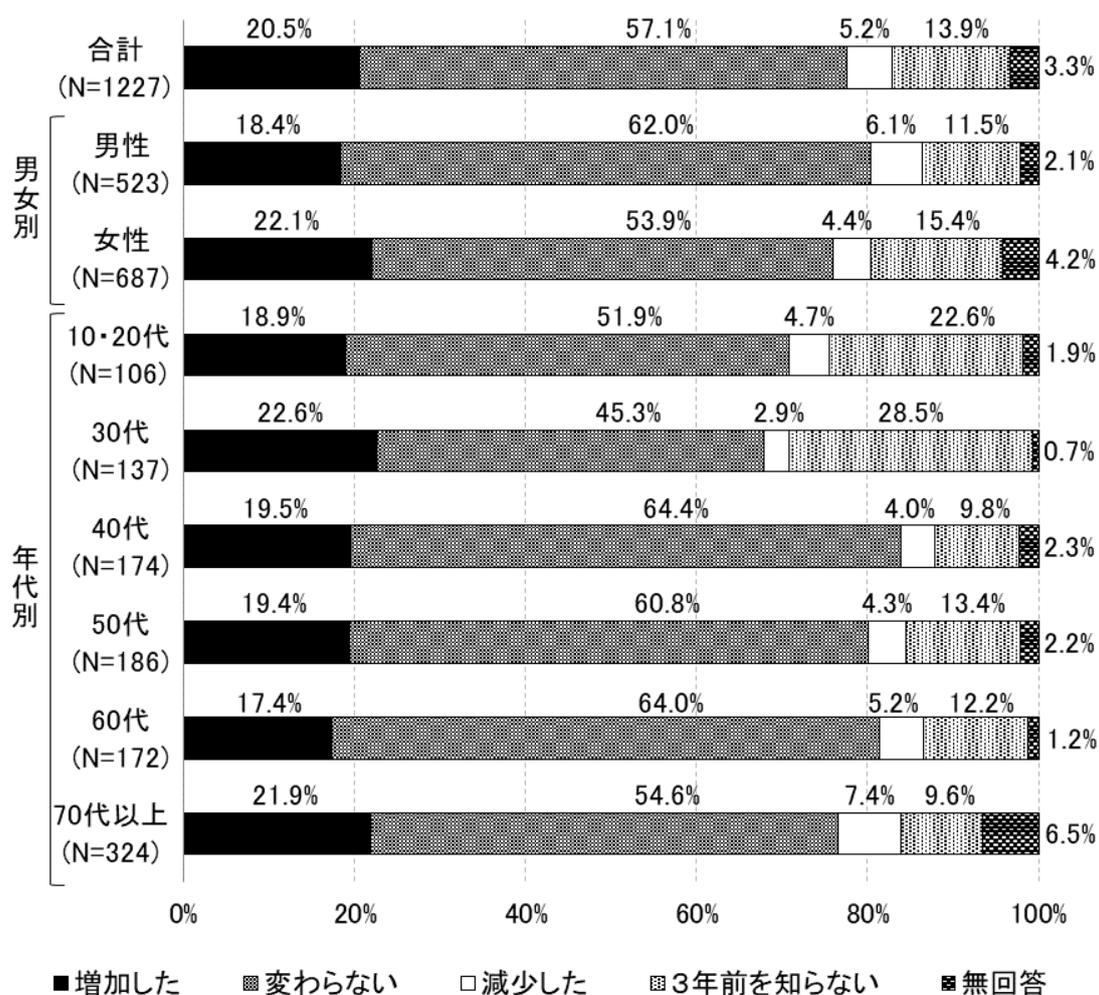


図 31 Q8J 中心市街地で3年前と比べて増加したか 駐輪場

Q8K の街なかの緑や潤いに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別で見ると、「増加した」の割合は、70代以上が14.2%と最も高く、60代が9.3%と最も低い。「減少した」の割合は、すべての年代が2割未満であり、70代以上が17.3%と最も高く、30代が6.6%と最も低い(図32)。

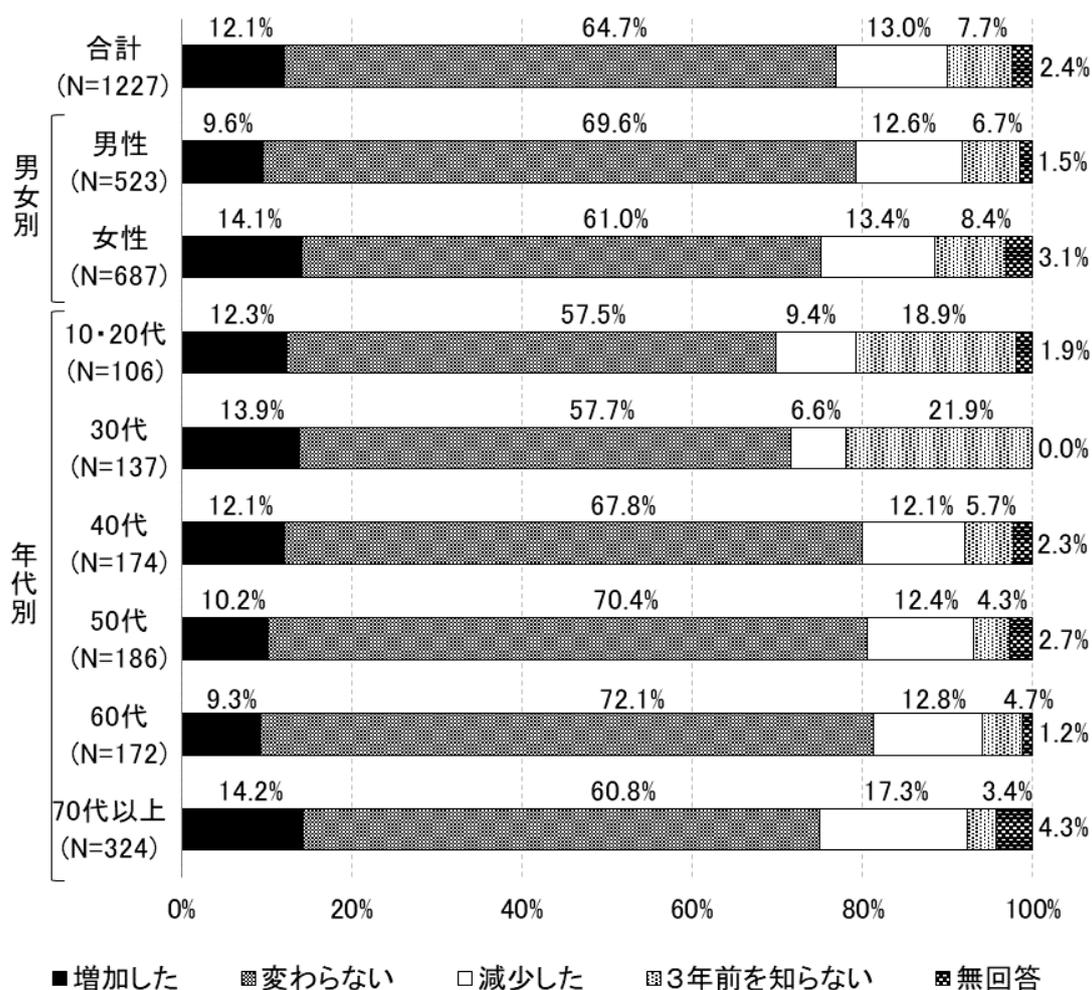


図 32 Q8K 中心市街地で3年前と比べて増加したか 街なかの緑や潤い

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、「治安・防犯の向上」が 51.0%と最も高く、「緑豊かな住居環境の向上」が 45.6%と続く（図 33）。

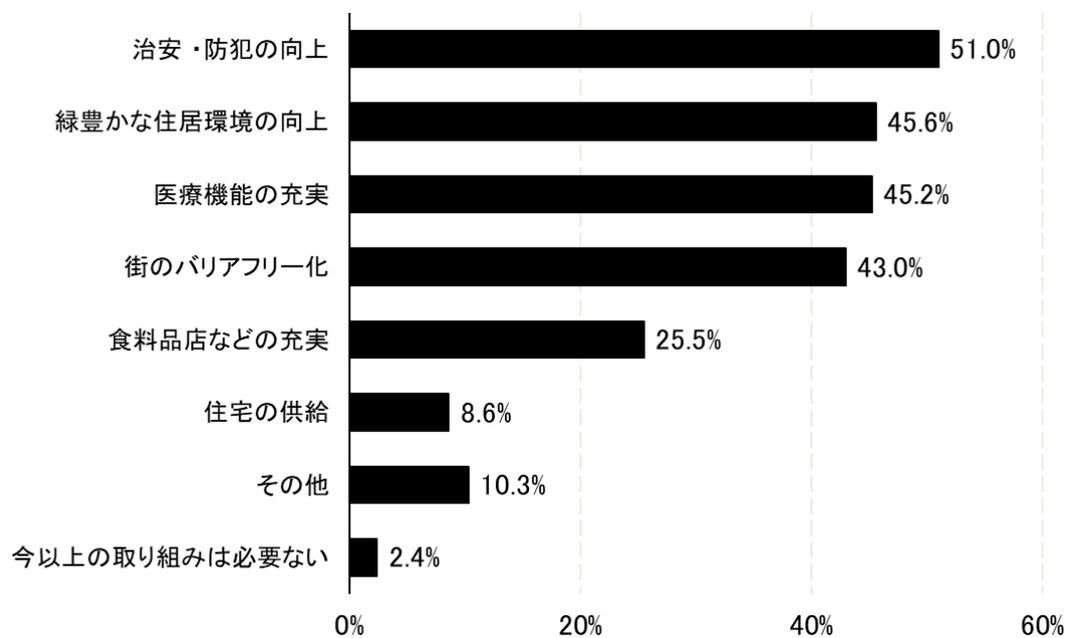


図 33 Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・全体 N=1227）

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、男女別で見ると、「緑豊かな住居環境の向上」は男女で差があり、女性よりも男性の方が 6.5 ポイント高い (図 34)。

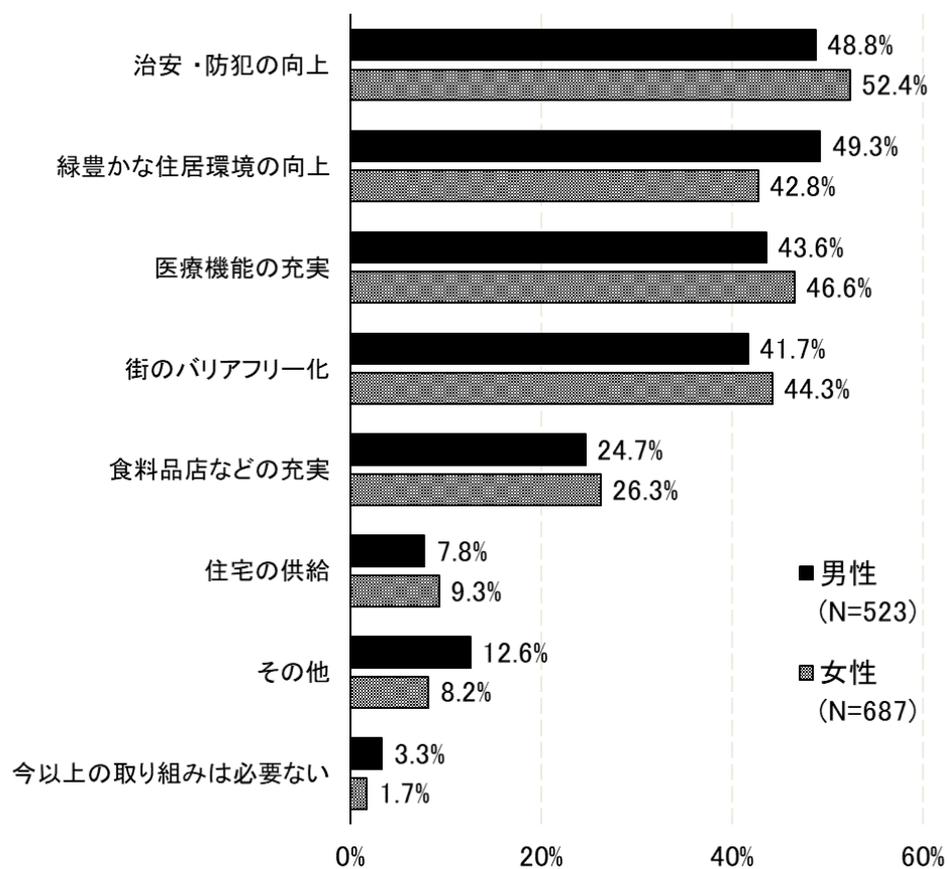


図 34 Q9 中心市街地で必要な取り組み (複数回答・男女別)

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、年代別で見ると、「街のバリアフリー化」は 40 代以下と 50 代以上で差があり、70 代以上が 56.2%と高く、反対に 30 代は 29.2%と低い（図 35）。

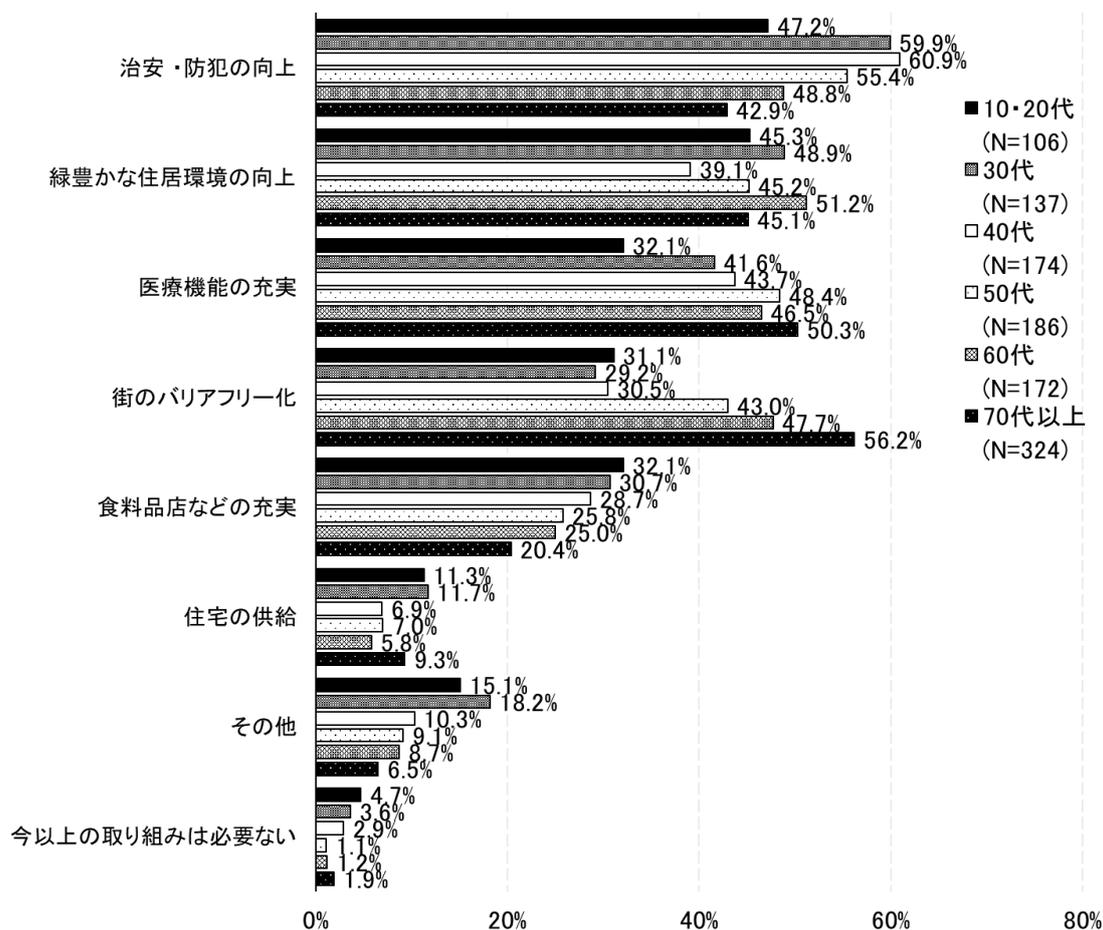


図 35 Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・年代別）

Q10 の知っている高槻市の歴史遺産や施設に関して、「高槻城跡（城跡公園）」が 82.1%と最も高く、「野見神社・永井神社」が 68.0%と続く（図 36）。

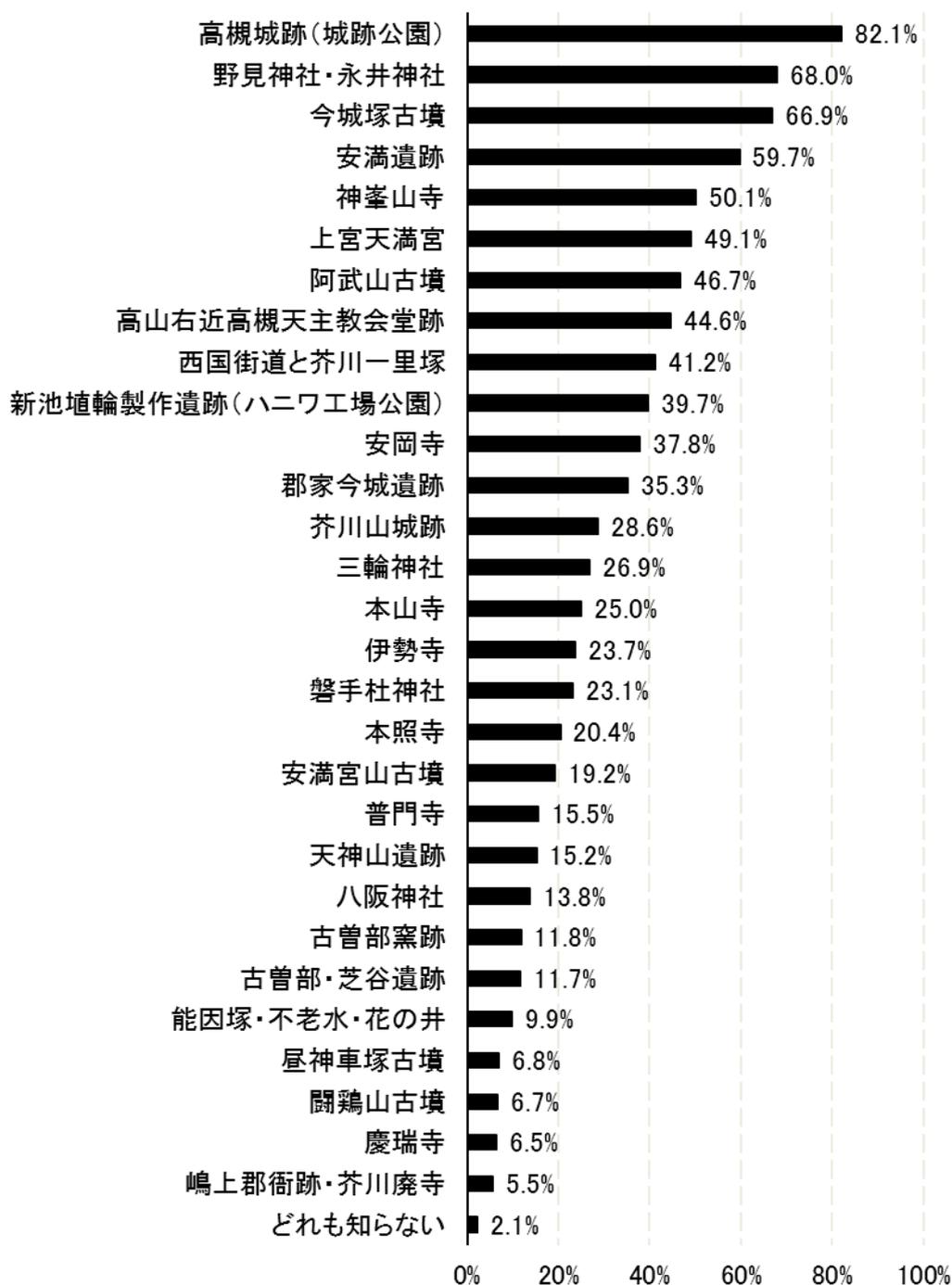


図 36 Q10 知っている高槻市の歴史遺産や施設（複数回答・全体 N=1227）

Q10 の知っている高槻市の歴史遺産や施設に関して、男女別で見ると、「芥川山城跡」は男女で差があり、女性よりも男性の方が 11.3 ポイント高い (図 37)。

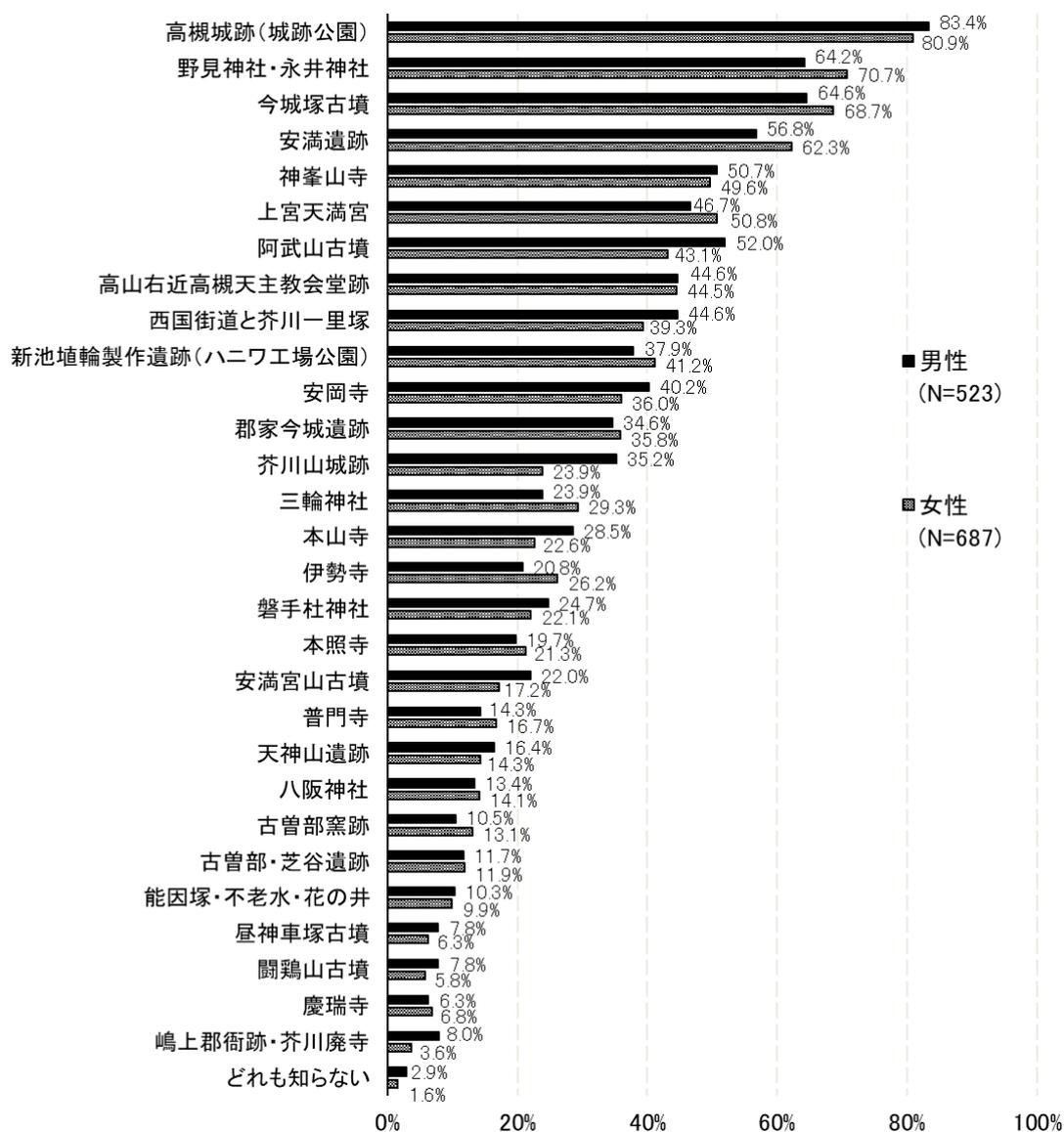


図 37 Q10 知っている高槻市の歴史遺産や施設 (複数回答・男女別)

Q10の知っている高槻市の歴史遺産や施設に関して、年代別で見ると、「神峯山寺」は年代で差があり、70代以上が68.5%と最も高く10・20代は15.1%と最も低い(図38)。

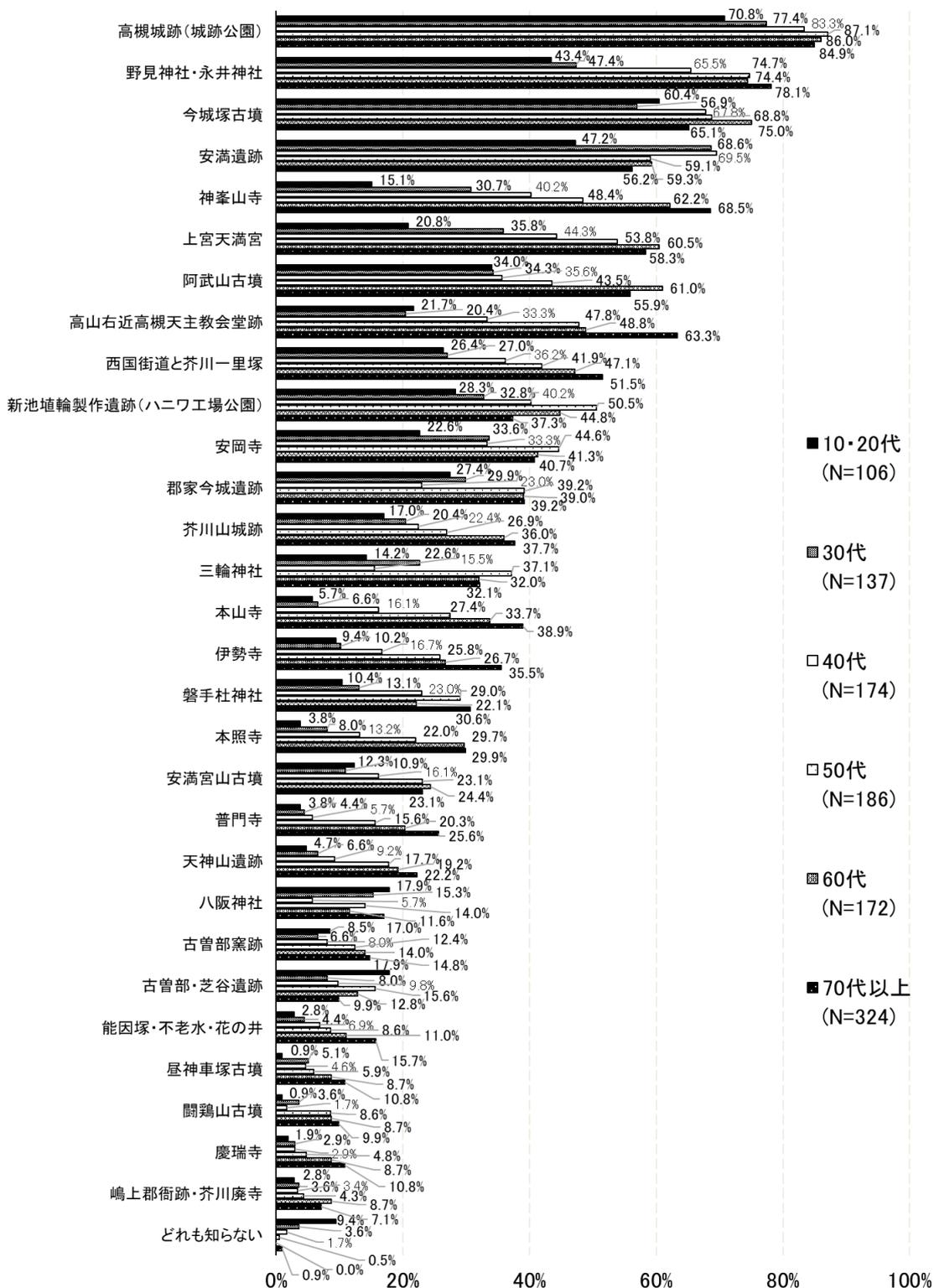


図38 Q10 知っている高槻市の歴史遺産や施設(複数回答・年代別)

Q11 の城跡公園へ行ったことがあるかに関して、「はい」と回答した人の割合は、全体では 78.5%である。年代別に見ると、10・20代と 30代では 7割程度であるのに対し、40代以上は 8割程度である（図 39）。

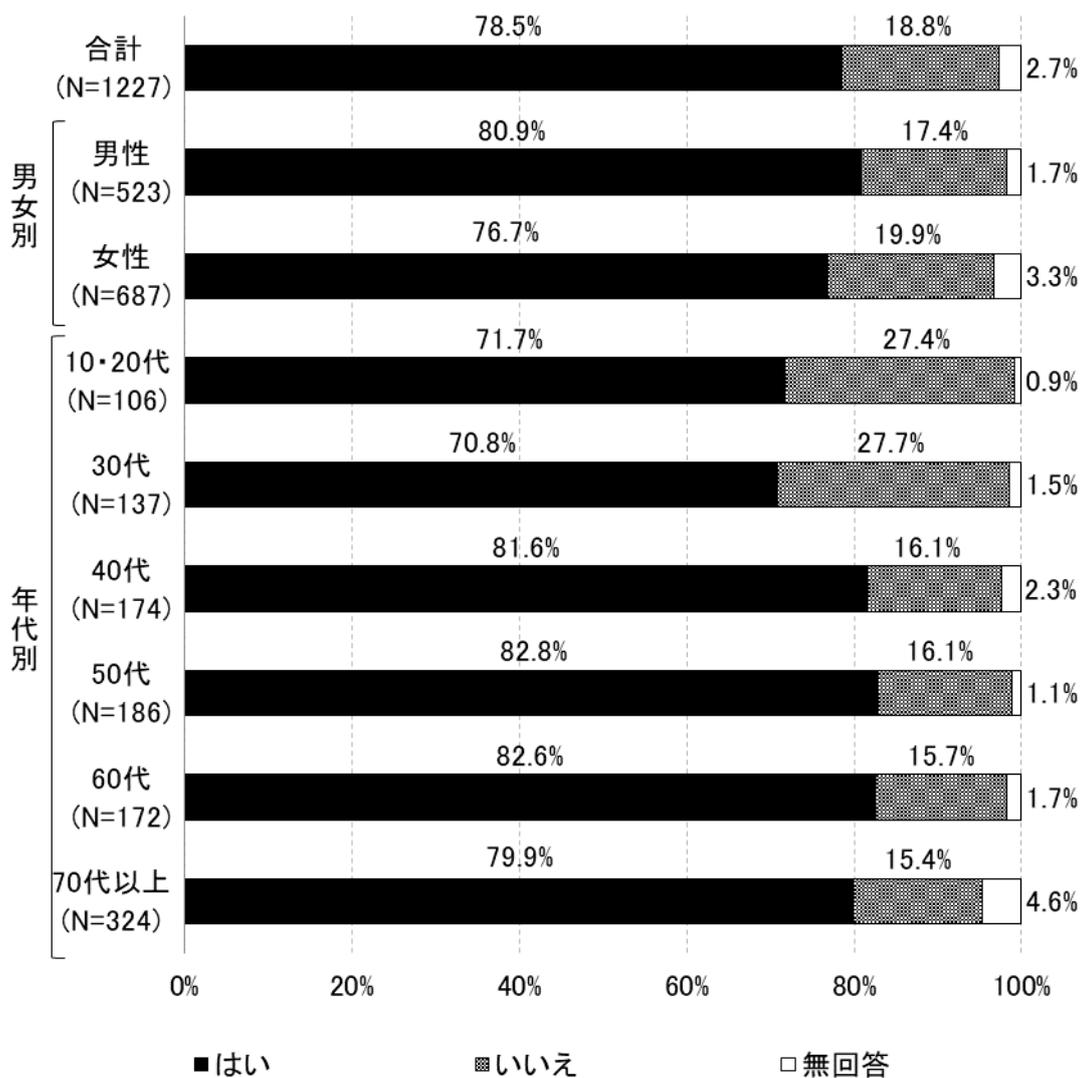


図 39 Q11 城跡公園へ行ったことがあるか

Q12の城跡公園で再整備した方がよいものに関して、「休憩できるベンチや東屋」が40.2%と最も高く、「高槻城の歴史を感じさせる景観」が34.6%と続く（図40）。

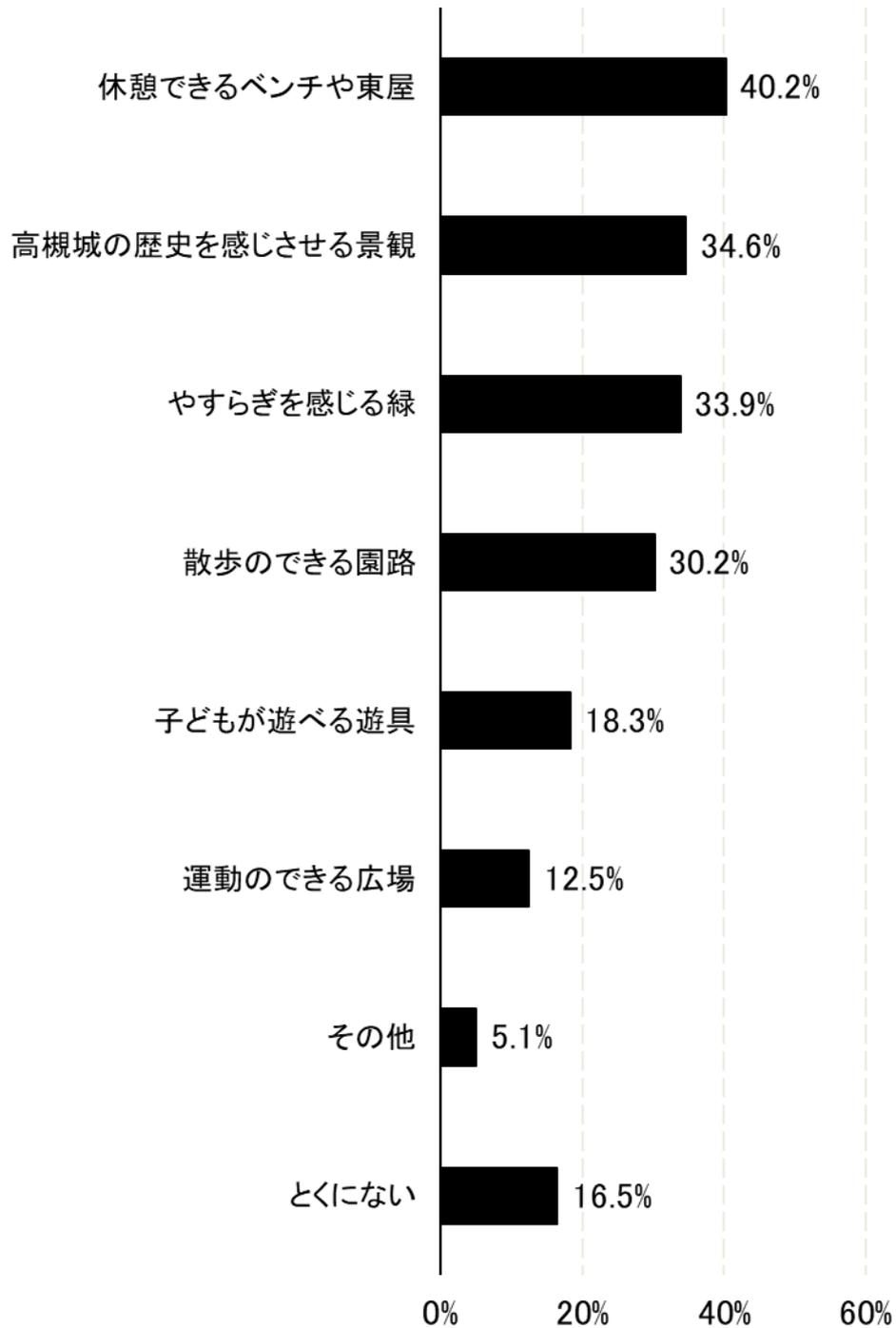


図40 Q12 城跡公園で再整備した方がよいもの（複数回答・全体 N=1227）

Q12 の城跡公園で再整備した方がよいものに関して、男女別で見ると「休憩できるベンチや東屋」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 5.5 ポイント高い（図 41）。

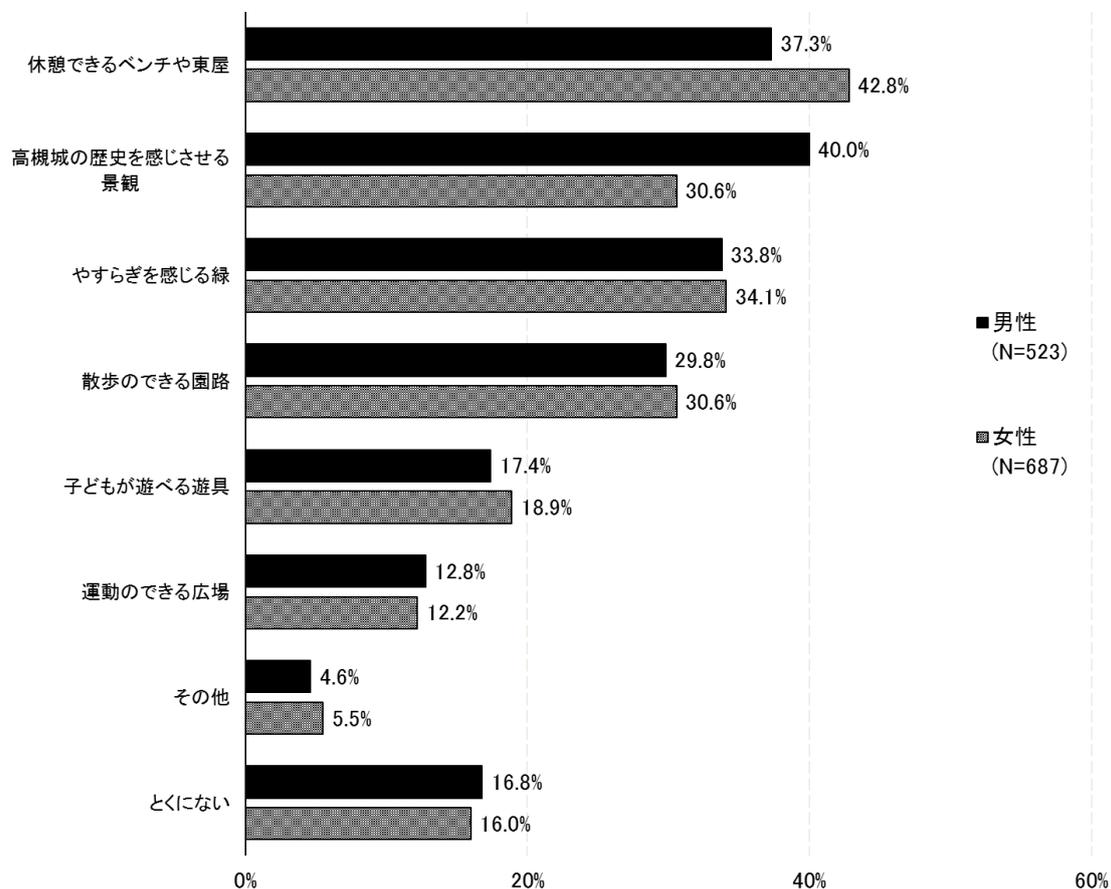


図 41 Q12 城跡公園で再整備した方がよいもの（複数回答・男女別）

Q12 の城跡公園で再整備した方がよいものに関して、年代別で見ると、「子どもが遊べる遊具」は30代が37.2%と最も高い。反対に70代以上は10.2%と最も低い（図 42）。

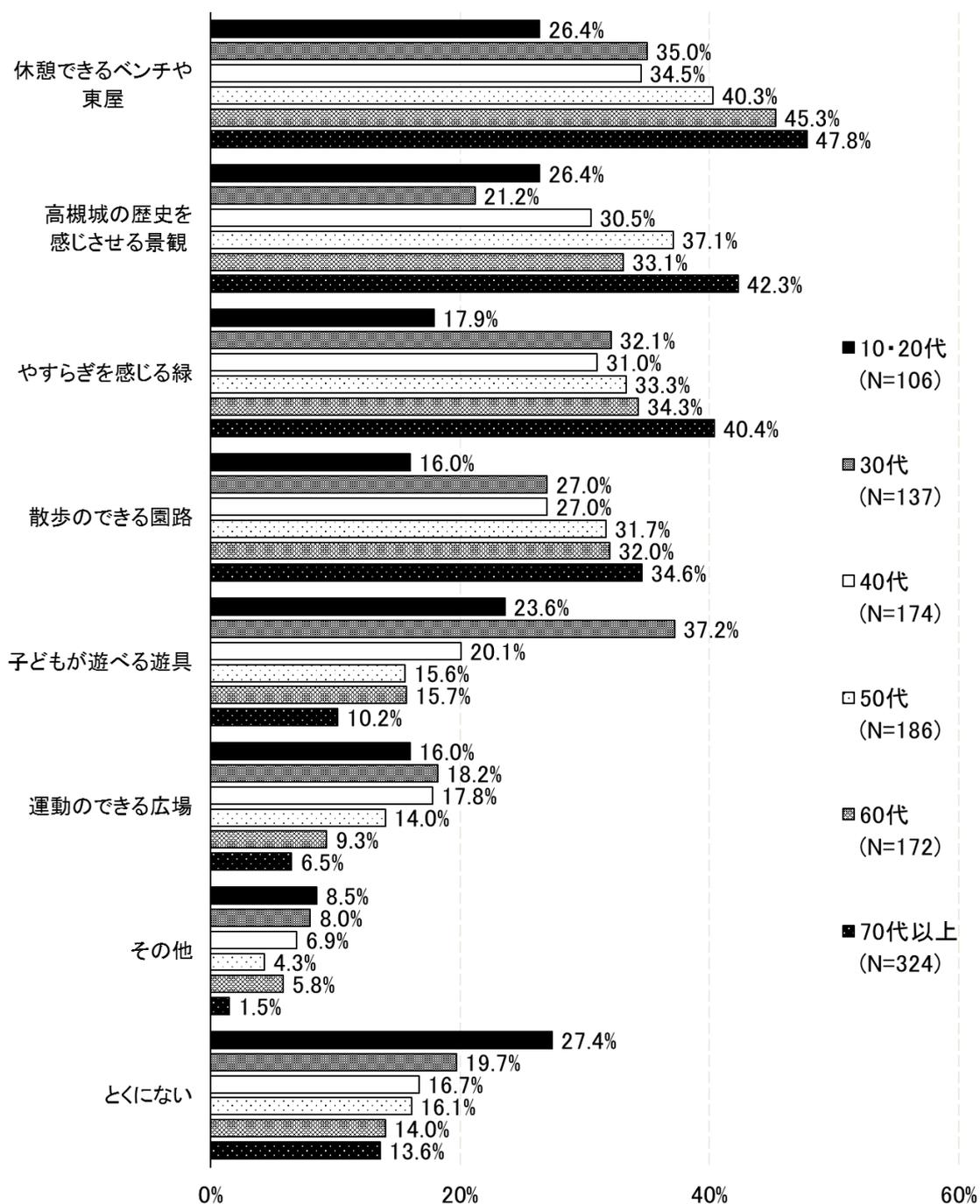


図 42 Q12 城跡公園で再整備した方がよいもの（複数回答・年代別）

Q13 の高槻城の城下町だったエリアに関する認知に関して、「知っていることはない・興味がない」が 37.4%と最も高く、「寺や城下町に関する地名が残っている」が 36.0%と続く（図 43）。

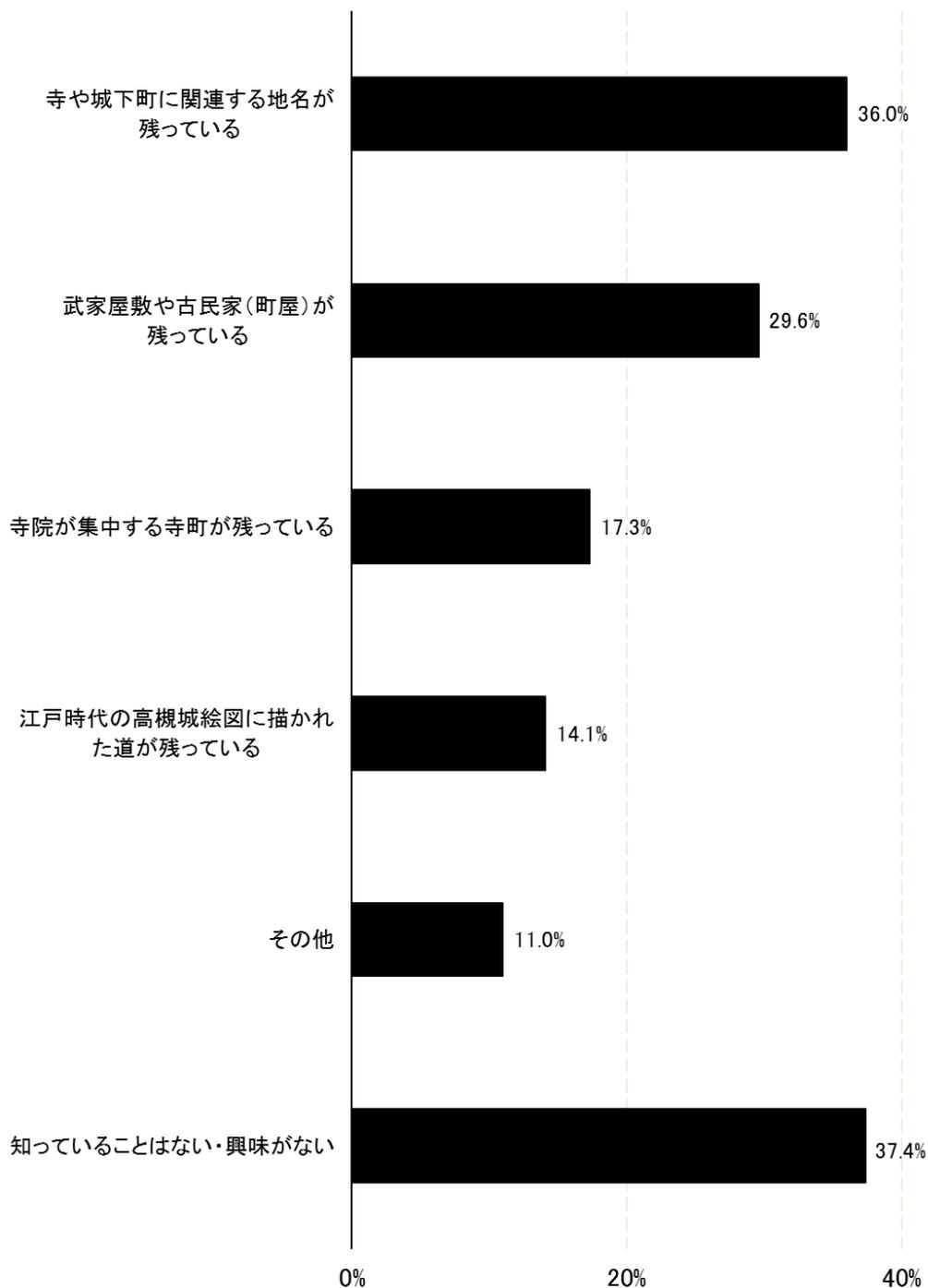


図 43 Q13 高槻城の城下町だったエリアに関する認知（複数回答・全体 N=1227）

Q13 の高槻城の城下町だったエリアに関する認知に関して、男女別で見ると、「寺や城下町に関する地名が残っている」は男女で差があり、女性よりも男性の方が 8.1 ポイント高い (図 44)。

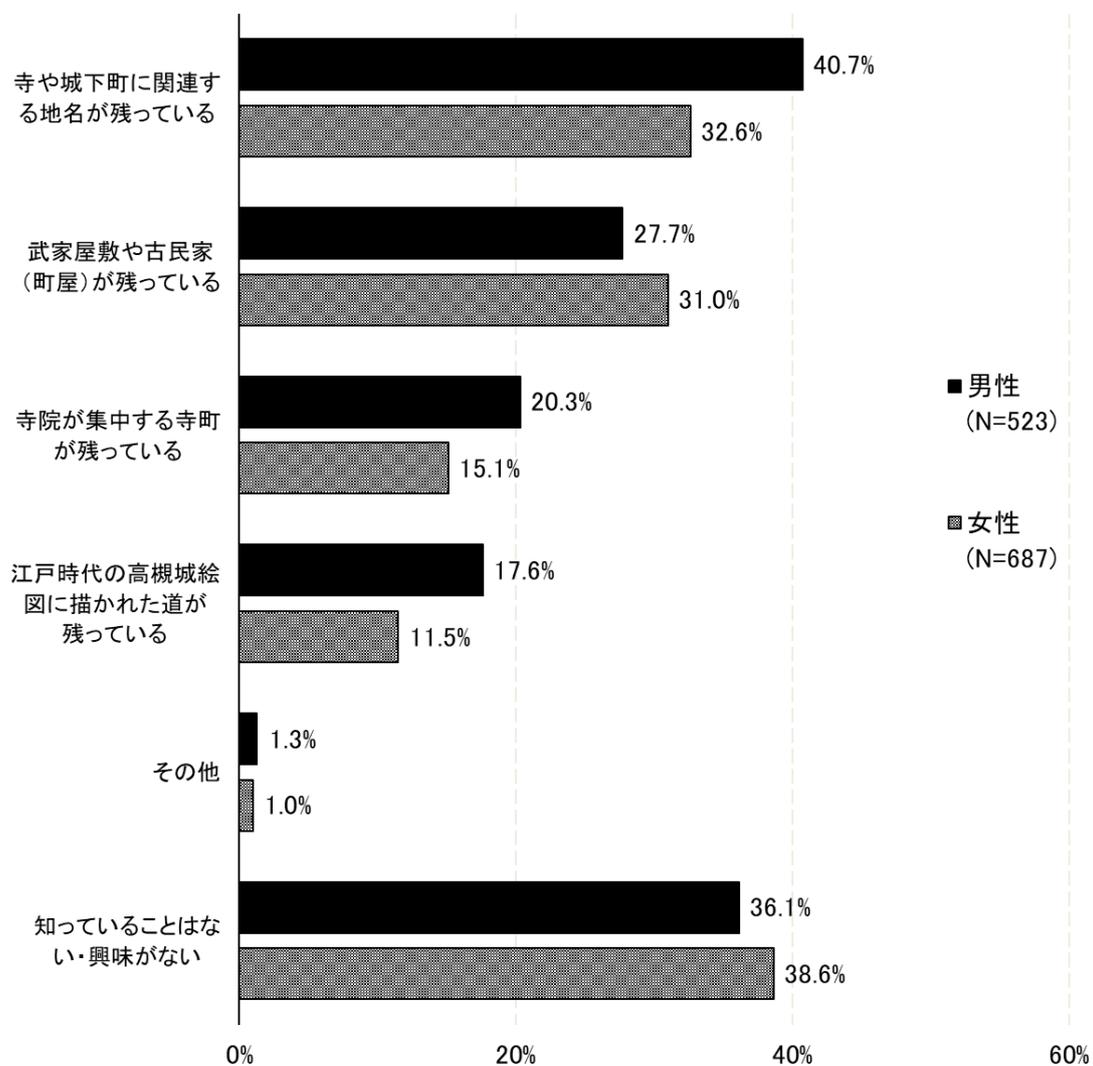


図 44 Q13 高槻城の城下町だったエリアに関する認知 (複数回答・男女別)

Q13 の高槻城の城下町だったエリアに関する認知に関して、年代別で見ると、「寺や城下町に関する地名が残っている」で、10・20代は23.6%であるが、年齢が上がるにつれて多くなっており、70代以上で43.8%となっている。(図 45)。

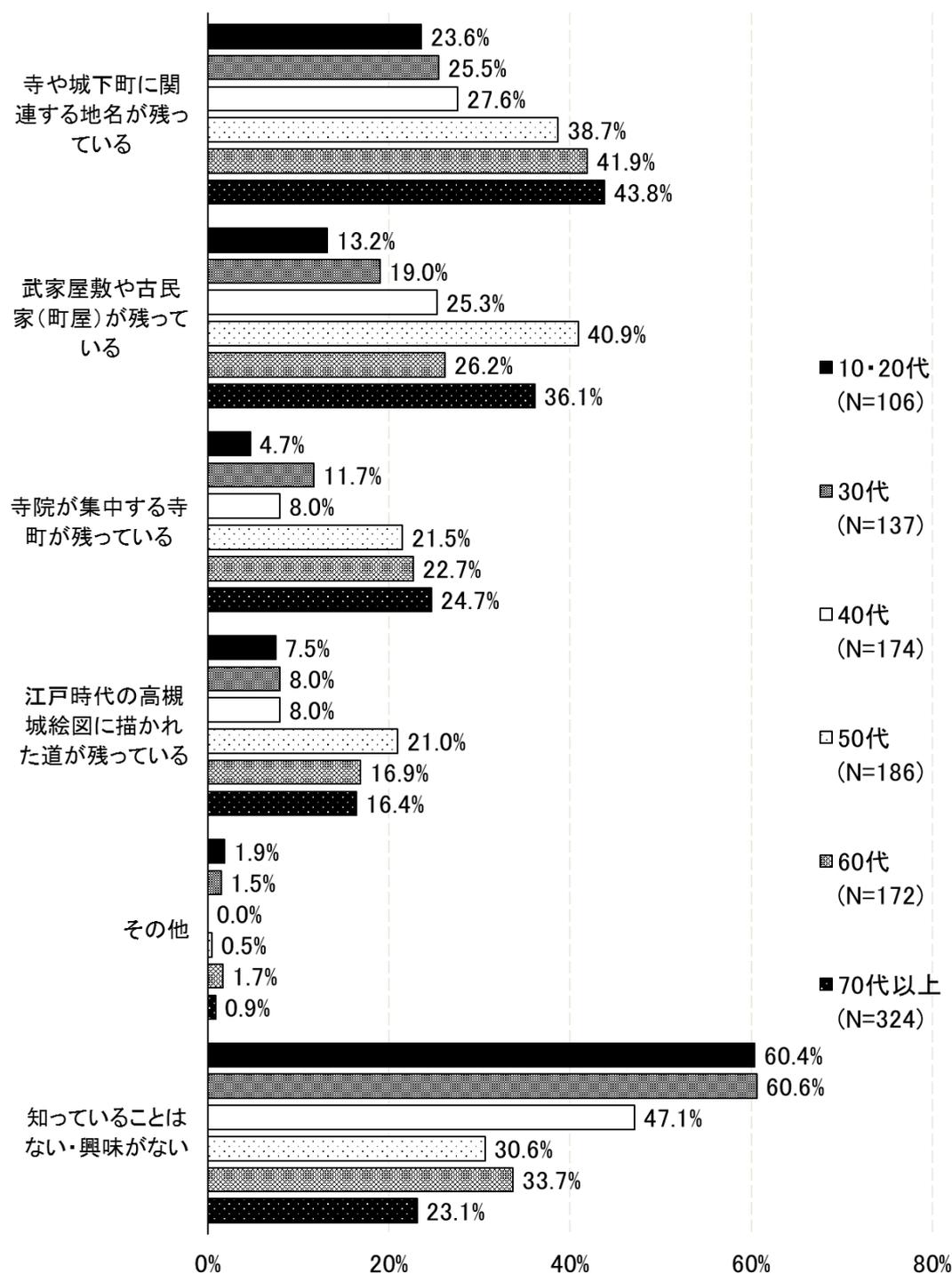


図 45 Q13 高槻城の城下町だったエリアに関する認知 (複数回答・年代別)

Q14 の高槻城と城下町があったエリアで取り組んだ方がよいことに関して、「古民家（町家）の再利用」が 38.8%と最も高く、「歴史的な街並みの再現」が 34.3%と続く（図 46）。

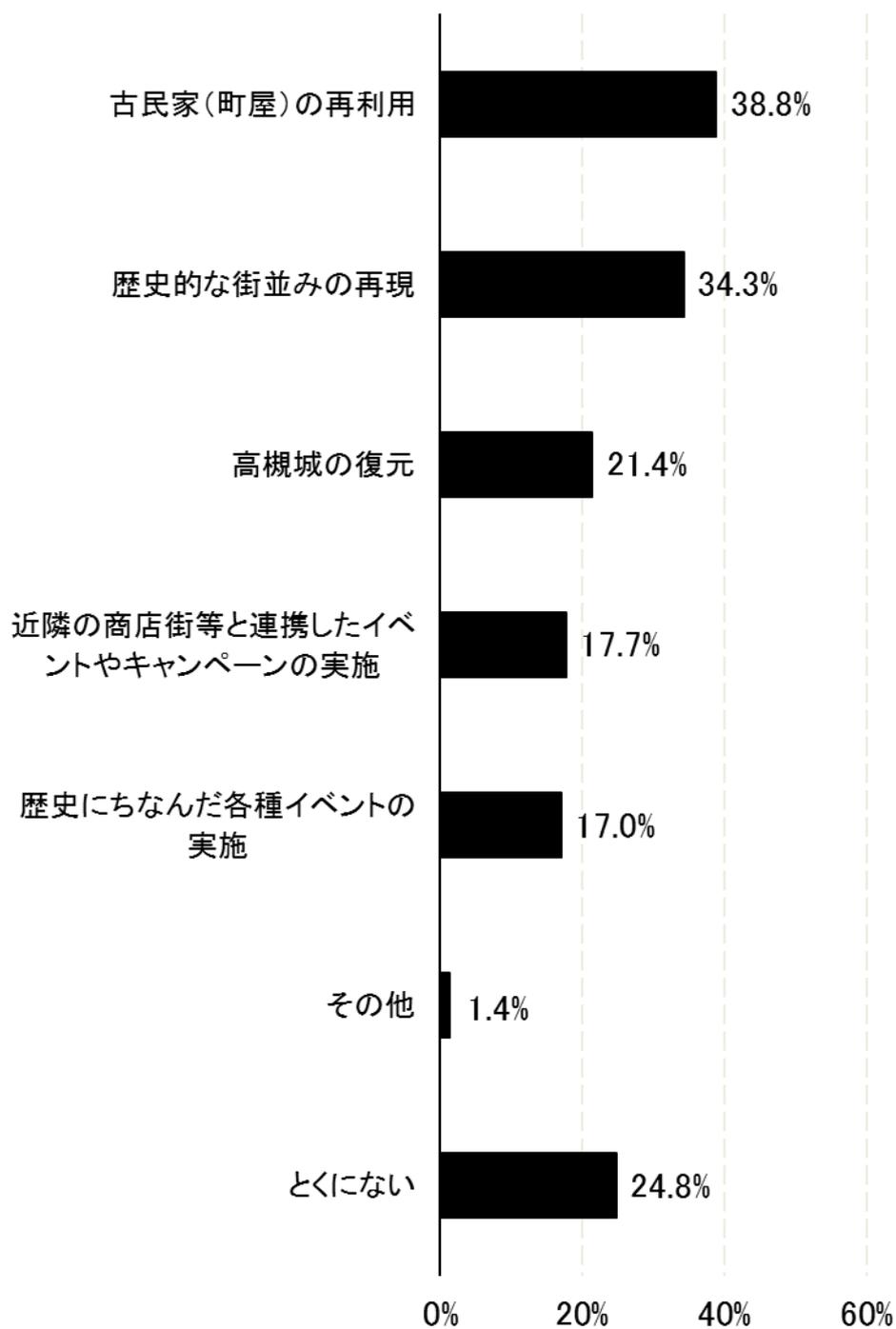


図 46 Q14 高槻城と城下町があったエリアで取り組んだ方がよいこと
(複数回答・全体 N=1227)

Q14 の高槻城と城下町があったエリアで取り組んだ方がよいことに関して、男女別で見ると、「古民家（町家）の再利用」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 12 ポイント高い（図 47）。

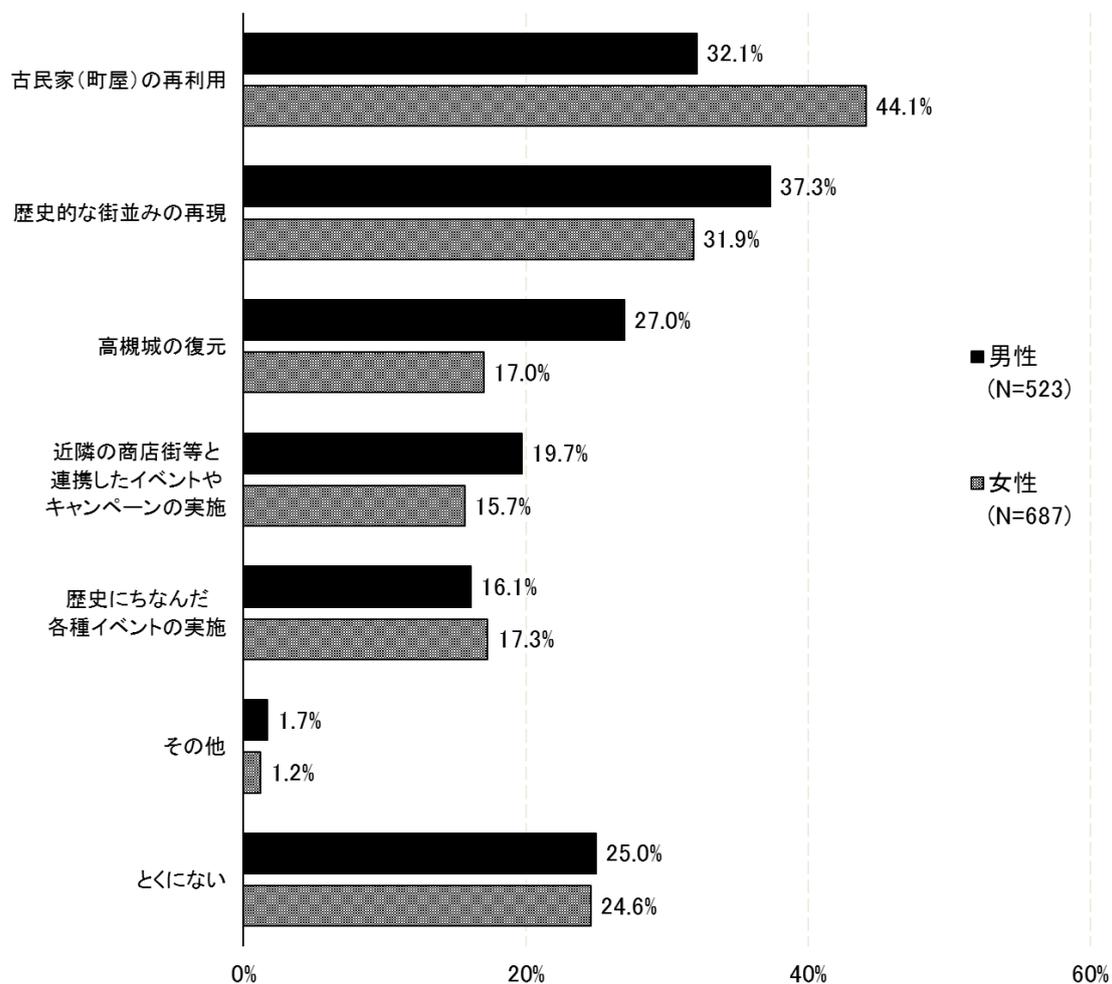


図 47 Q14 高槻城と城下町があったエリアで取り組んだ方がよいこと
(複数回答・男女別)

Q14 の高槻城と城下町があったエリアで取り組んだ方がよいことに関して、年代別で見ると、「古民家（町屋）の再利用」は50代が52.7%と最も高い。反対に70代以上は29.9%と最も低い（図48）。

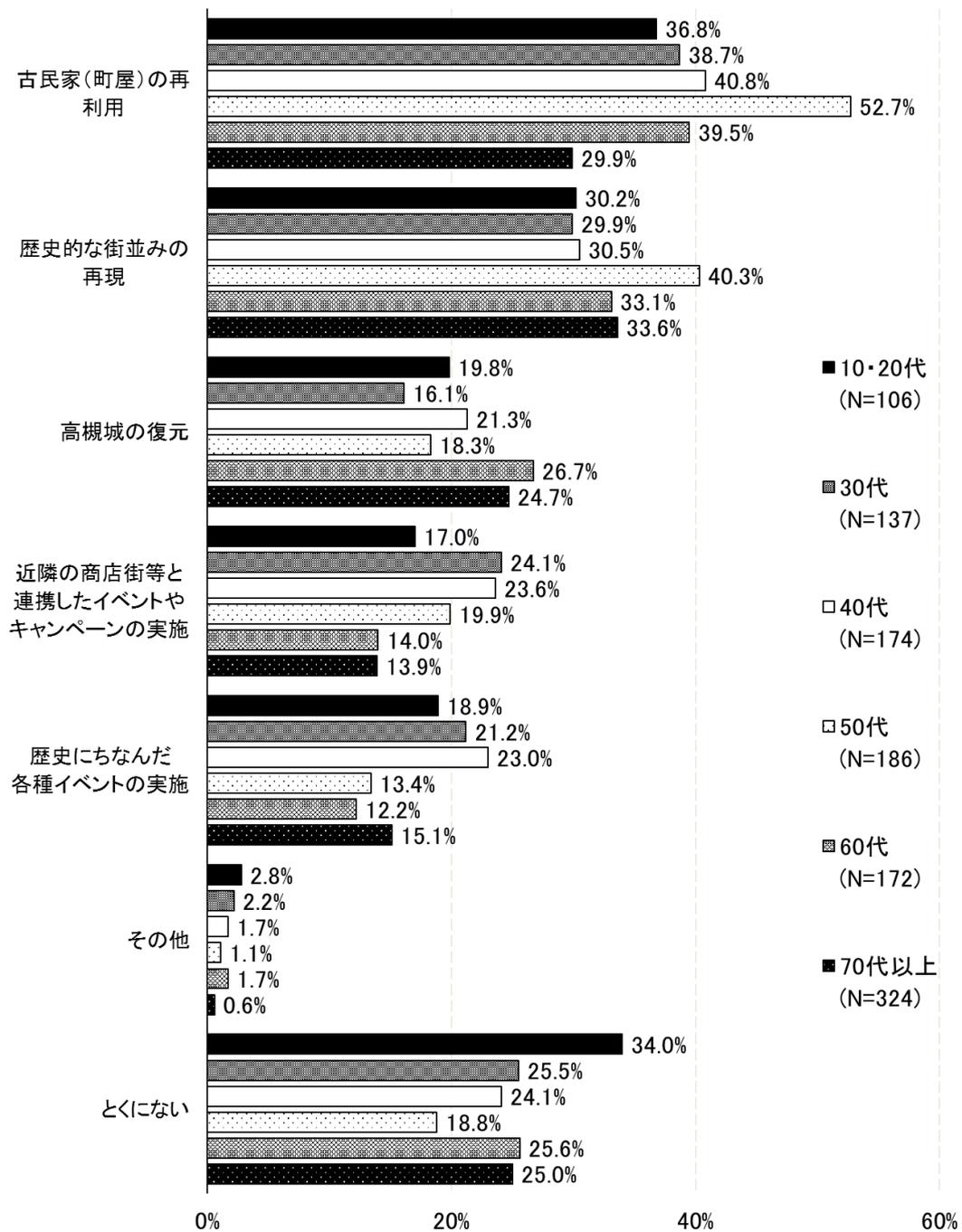


図48 Q14 高槻城と城下町があったエリアで取り組んだ方がよいこと
(複数回答・年代別)

Q15 の文化財に親しみを持つためによいと思うものに関して、「文化財をもっと PR する」が 49.6%と最も高く、「文化財についての体験学習や歴史講座を増やす」が 27.3%と続く（図 49）。

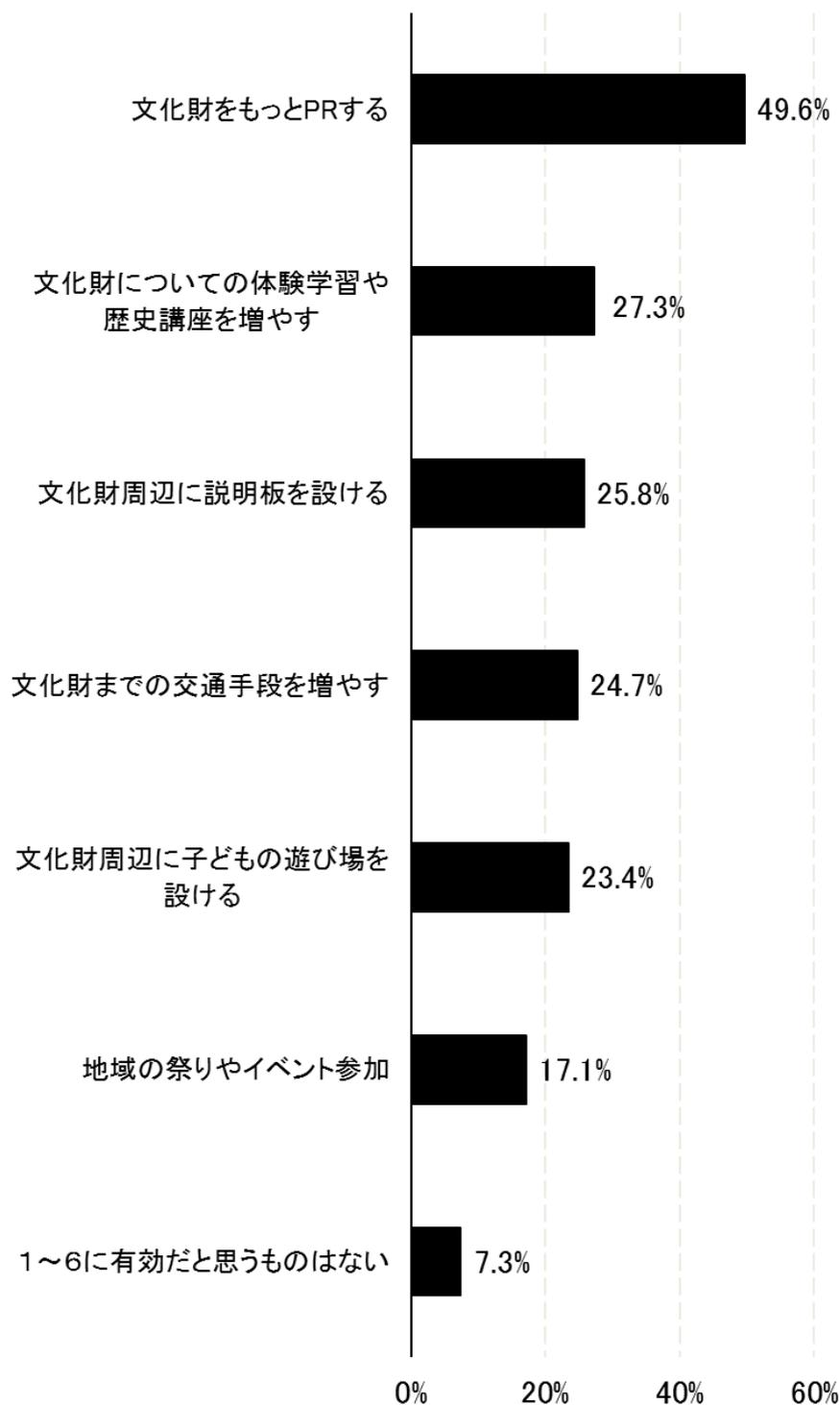


図 49 Q15 文化財に親しみを持つためによいと思うもの（複数回答・全体 N=1227）

Q15 の文化財に親しむためによいと思うものに関して、男女別で見ると、「文化財までの交通手段を増やす」は男女で差があり、男性は 19.9%であるのに対して、女性は 28.5%である（図 50）。

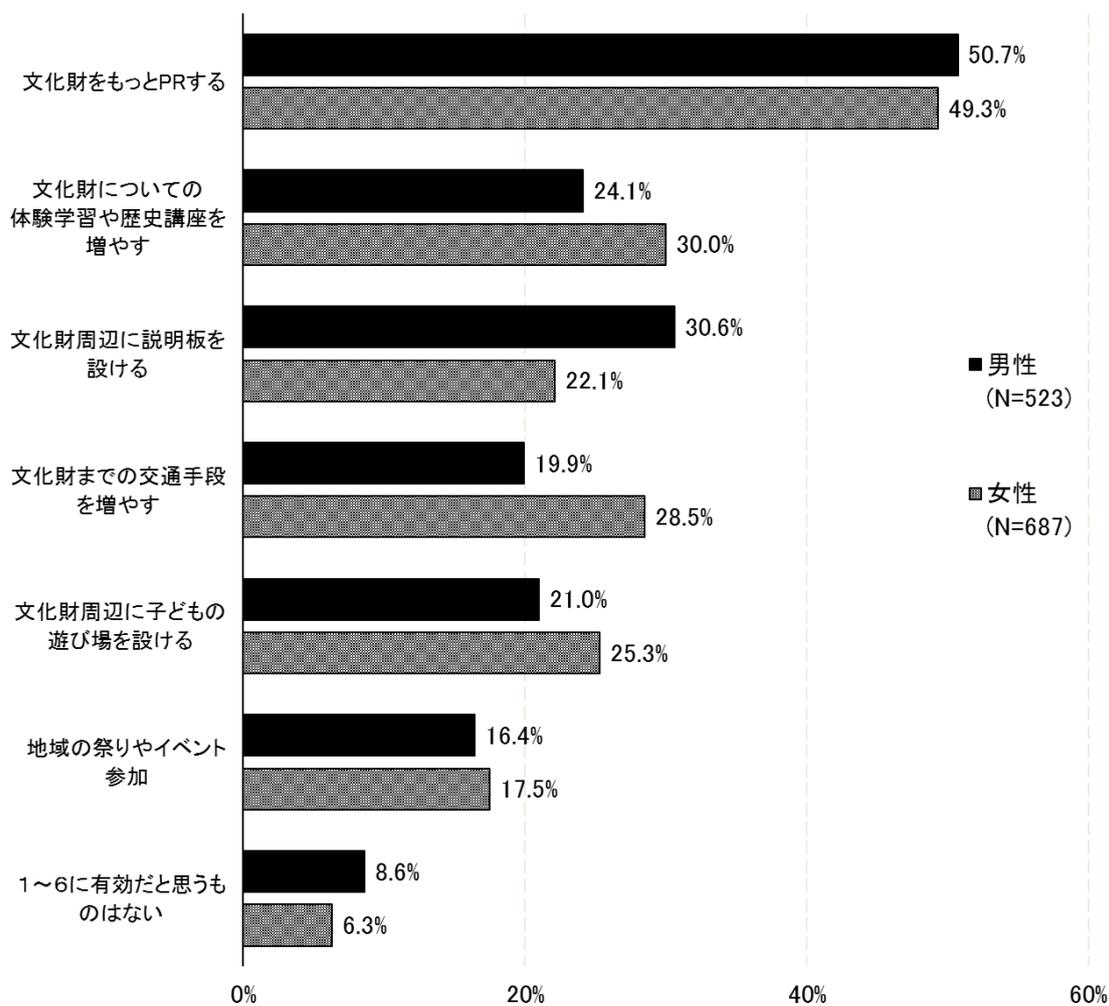


図 50 Q15 文化財に親しむためによいと思うもの（複数回答・男女別）

Q15 の文化財に親しみを持つためによいと思うものに関して、年代別で見ると、「文化財をもっとPRする」は60代が55.8%と最も高い。反対に30代は38.7%と最も低い(図 51)。

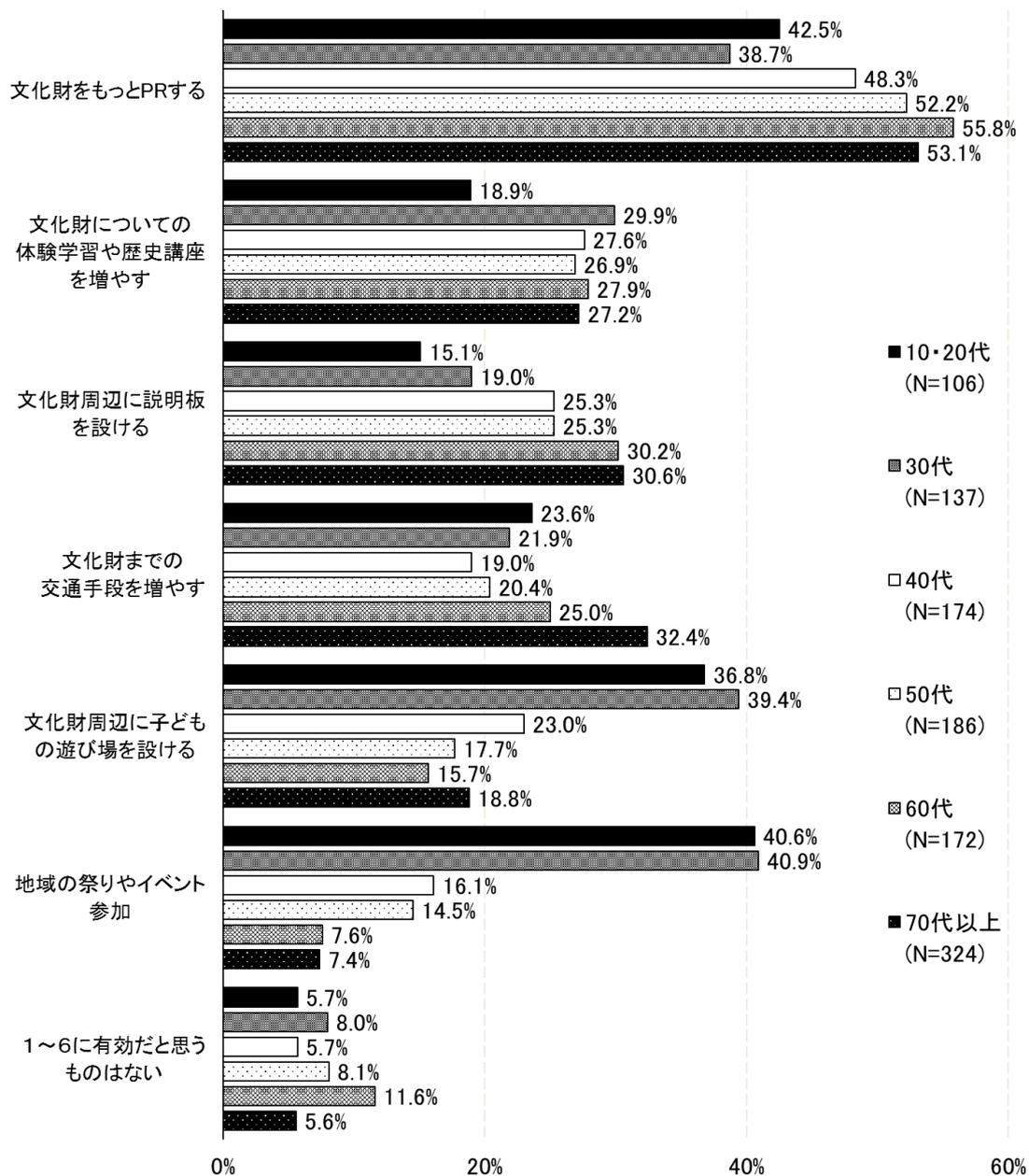


図 51 Q15 文化財に親しみを持つためによいと思うもの (複数回答・年代別)

Q16 の歴史講座・現地説明会・体験学習会の参加経験に関して、「よく参加している」「たまに参加する」または「参加したことがある」と回答した人の割合の合計は、年齢が上がるにつれて多くなる傾向があり、30代・40代ではおおよそ1割程度であるのに対し、70代以上は3割以上にのぼる（図 52）。

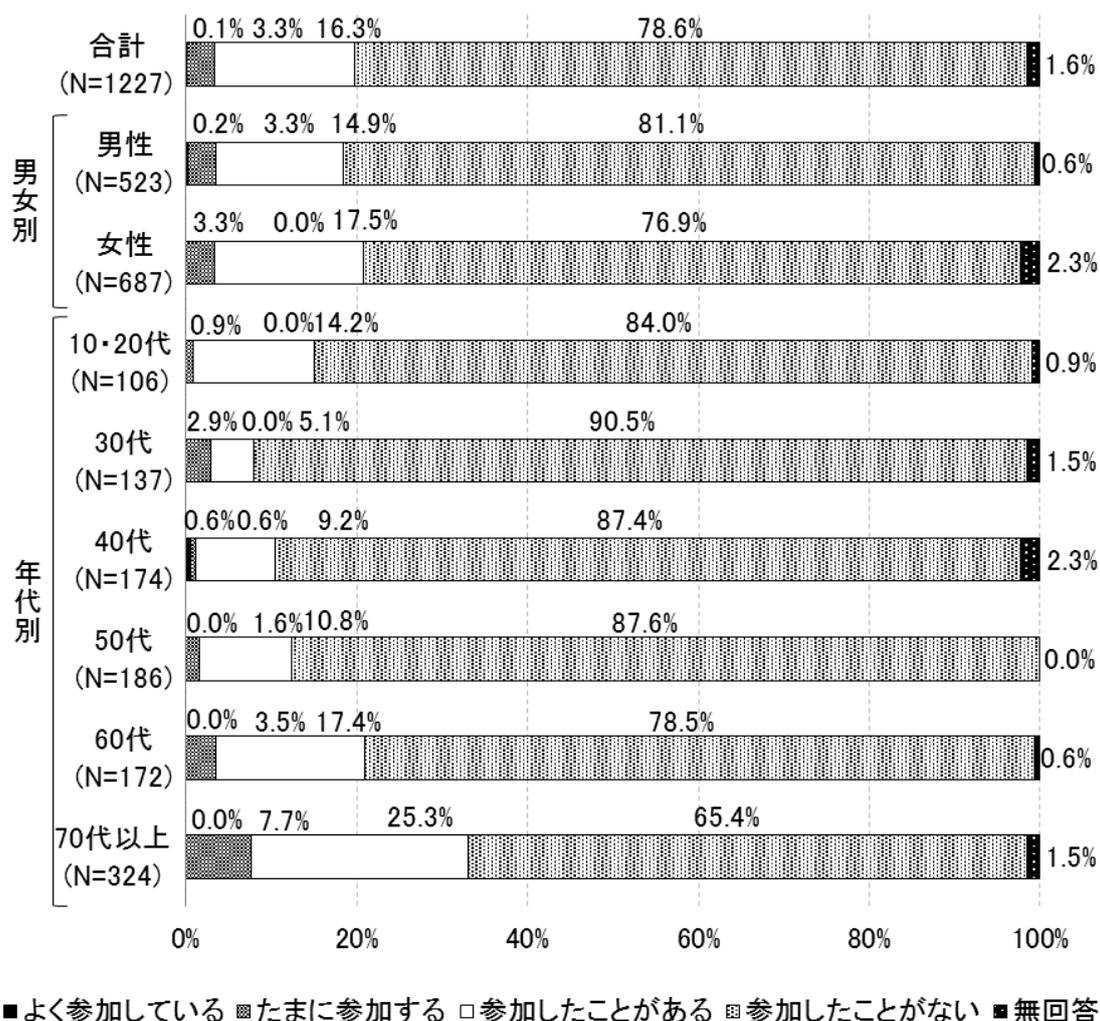


図 52 Q16 歴史講座・現地説明会・体験学習会の参加経験

Q17の文化財についての情報源に関して、「市の広報誌」と回答した人の割合は、年齢が上がるにつれて多くなる傾向があり、10・20代が18.9%であるのに対し、70代以上が68.5%にのぼる（図53）。

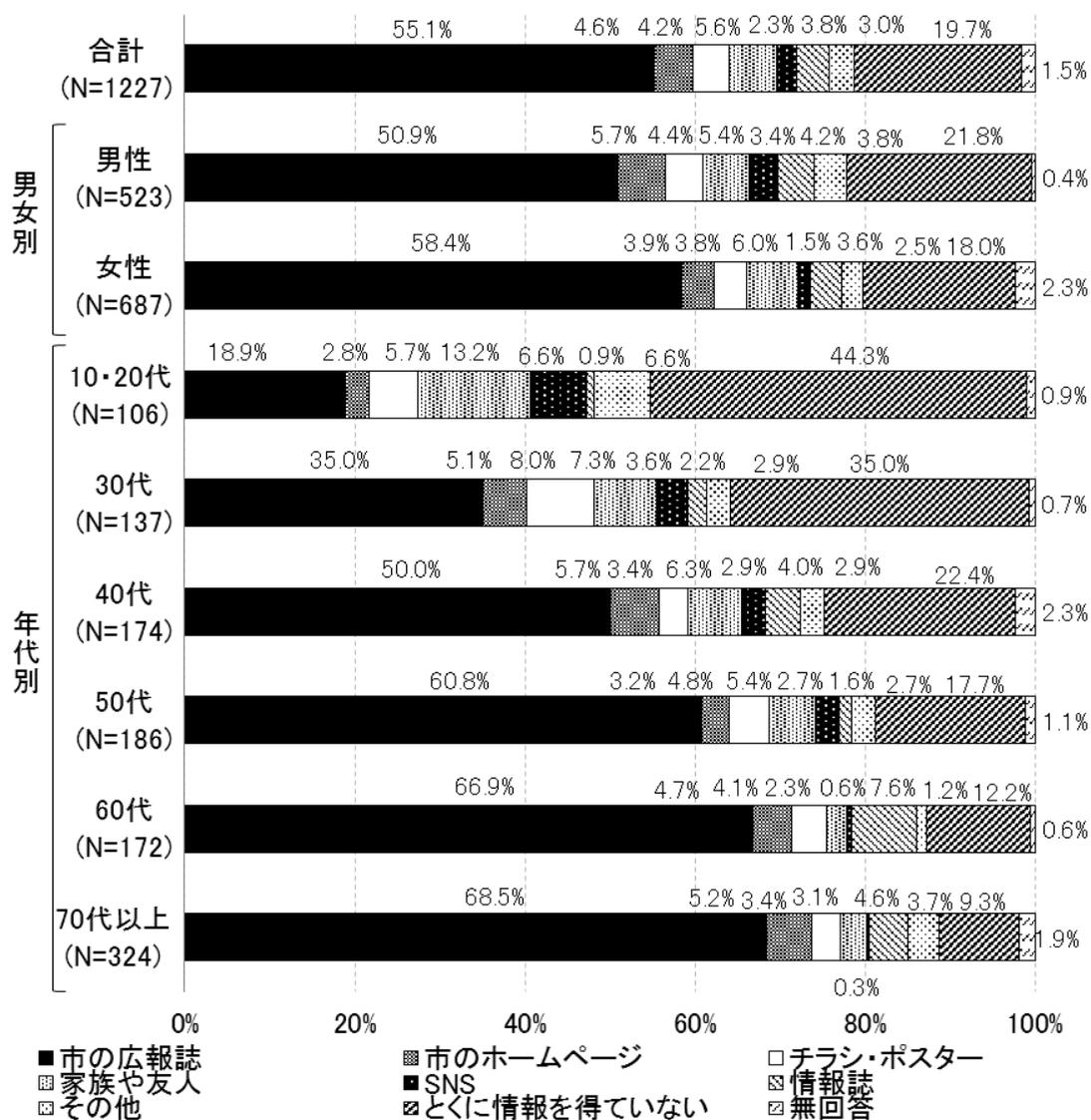


図 53 Q17 文化財についての情報源

Q18A の情報源への信頼：テレビに関して、「かなり信頼している」「ある程度は信頼している」と回答した人の割合は、男女別で見ると、女性の方が男性よりも 6.8 ポイント高い。年代別で見ると、10・20代で 71.7%と最も低い。反対に 70代以上が 85.8%と最も高い（図 54）。

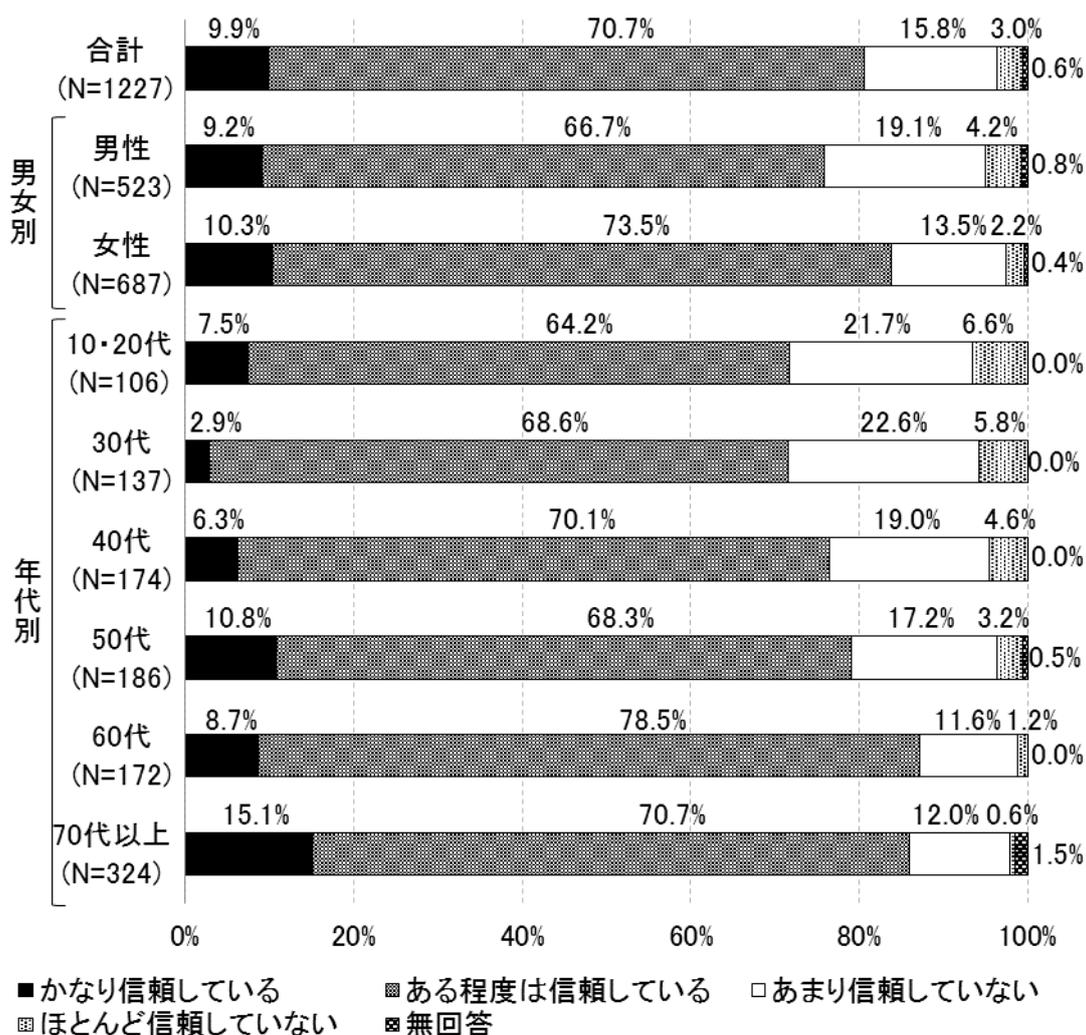


図 54 Q18A 情報源への信頼：テレビ

Q18Bの情報源への信頼：新聞に関して、年代別で見ると、「かなり信頼している」「ある程度は信頼している」と回答した人の割合は、年齢が上がるにつれて多くなっており、10・20代が82.0%であるが、70代以上が91.0%となっている（図55）。

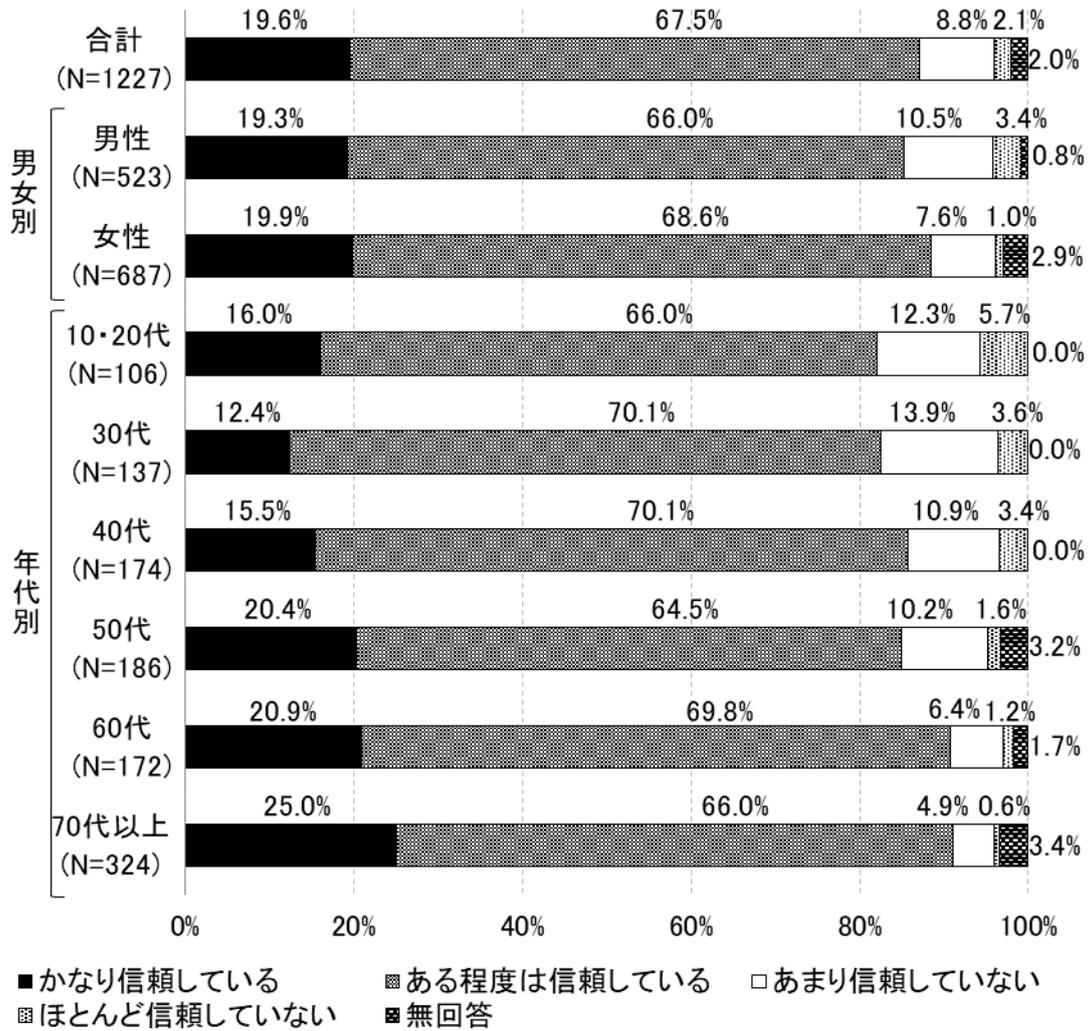


図 55 Q18B 情報源への信頼：新聞

Q18Cの情報源への信頼：SNS（Twitter・Instagramなど）に関して、「かなり信頼している」「ある程度信頼している」と回答した人の割合は、男女別で見ると、女性の方が男性よりも6.2ポイント高い。年代別で見ると、10・20代が49.1%であるが、年齢が上がるにつれて少なくなっており、70代以上が14.8%となっている（図56）。

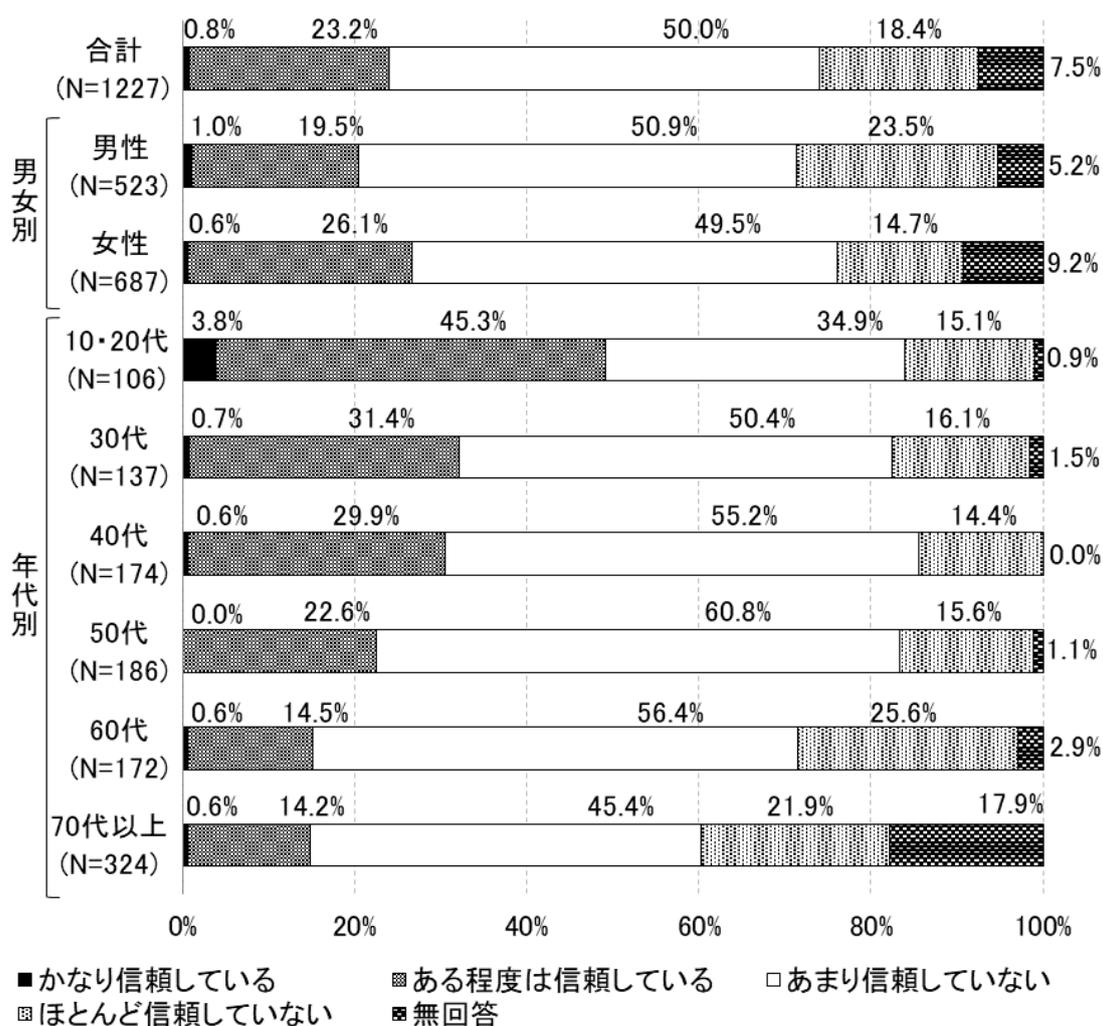


図56 Q18C 情報源への信頼：SNS（Twitter・Instagramなど）

Q18Dの情報源への信頼：ネットニュース（Yahoo ニュース・LINE ニュースなど）に関して、「かなり信頼している」「ある程度は信頼している」と回答した人の割合は、年代別で見ると、70代以上を除くすべての年代でおおよそ6割程度であり、70代以上が39.5%と最も低くなっている（図57）。

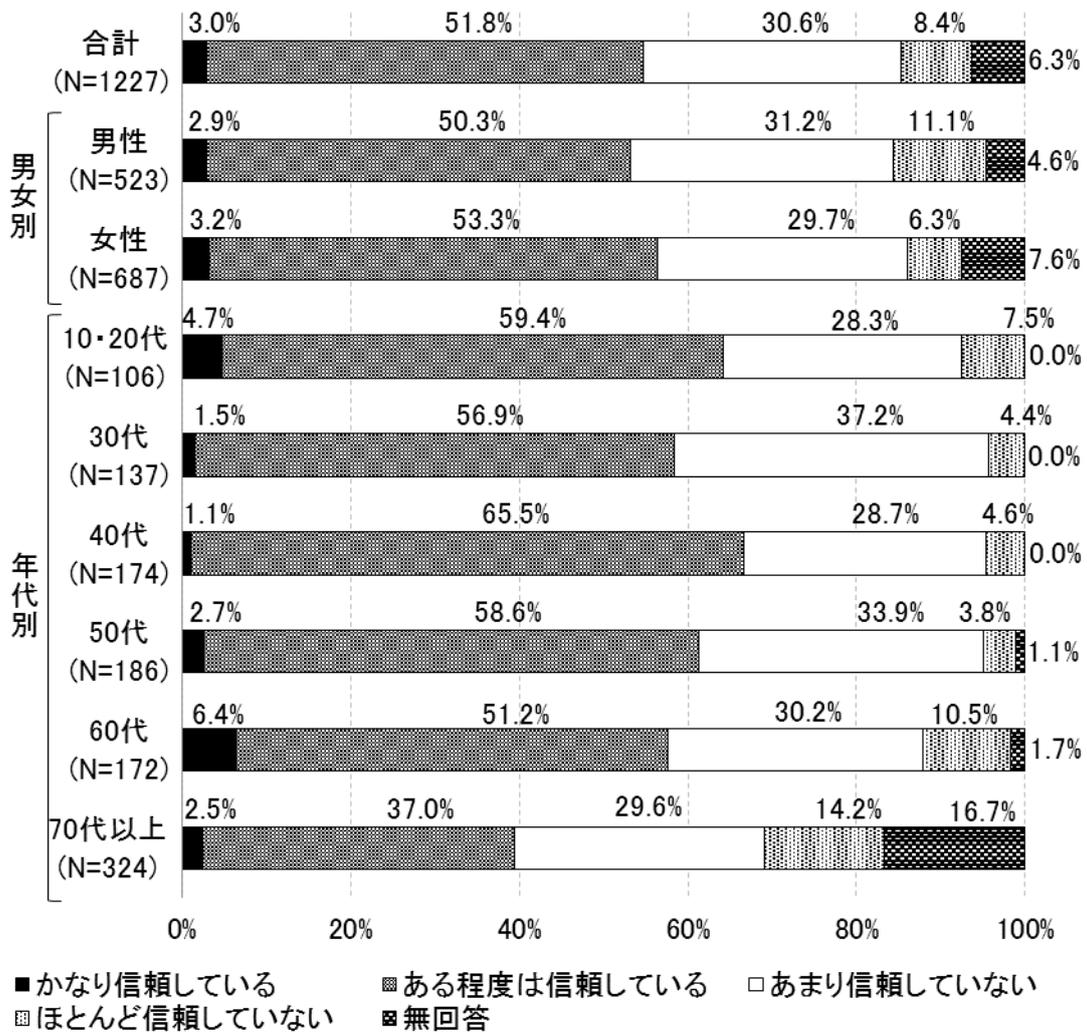


図 57 Q18D 情報源への信頼：ネットニュース（Yahoo ニュース・LINE ニュースなど）

Q18E の情報源への信頼：友人・知人の情報に関して、「かなり信頼している」「ある程度は信頼している」と回答した人の割合は、年代別で見ると、40代が79.3%と最も高く、70代以上が68.9%と最も低い（図58）。

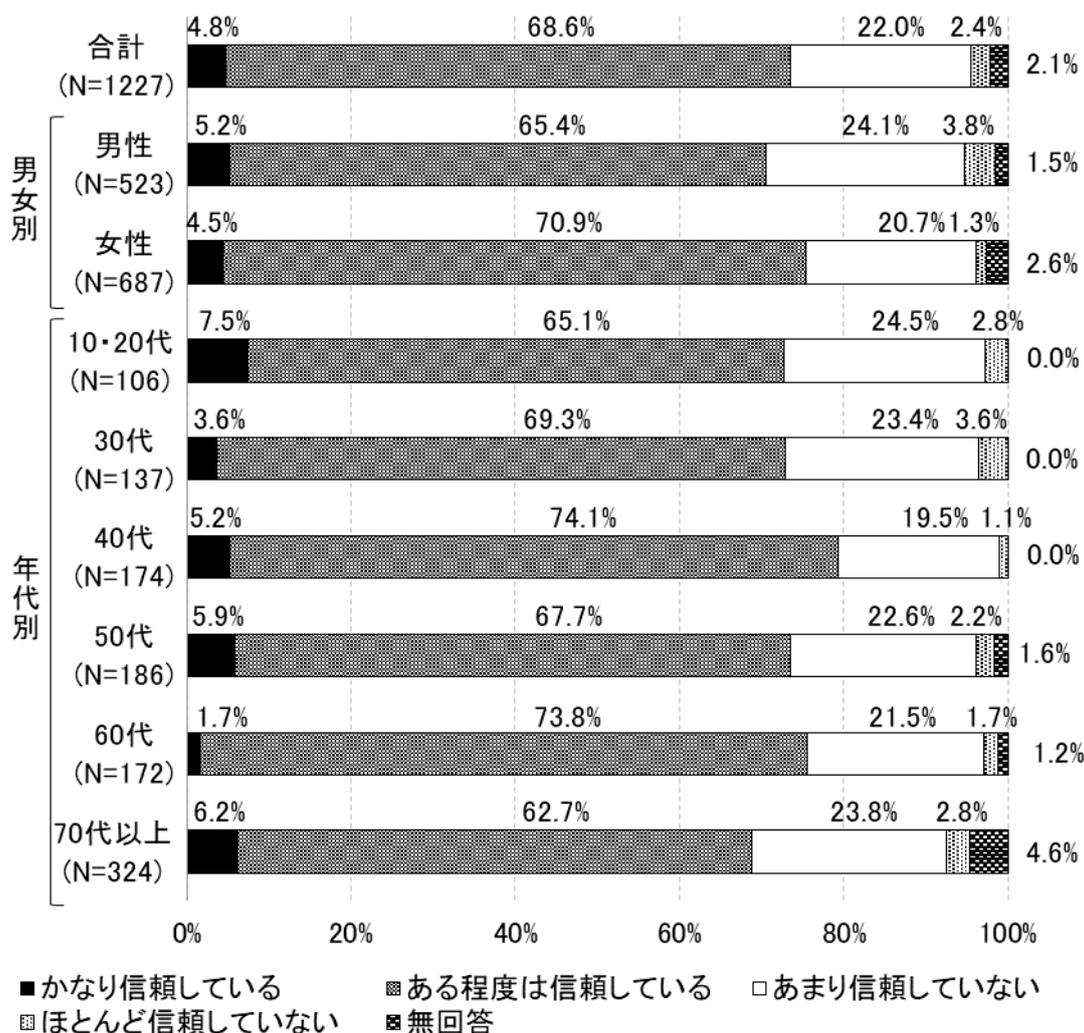


図58 Q18E 情報源への信頼：友人・知人の情報

Q19A の情報源への接触時間：テレビに関して、「全く利用しない」「20分未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、10・20代で21.7%と最も高く、60代で4.6%と最も低い（図59）。

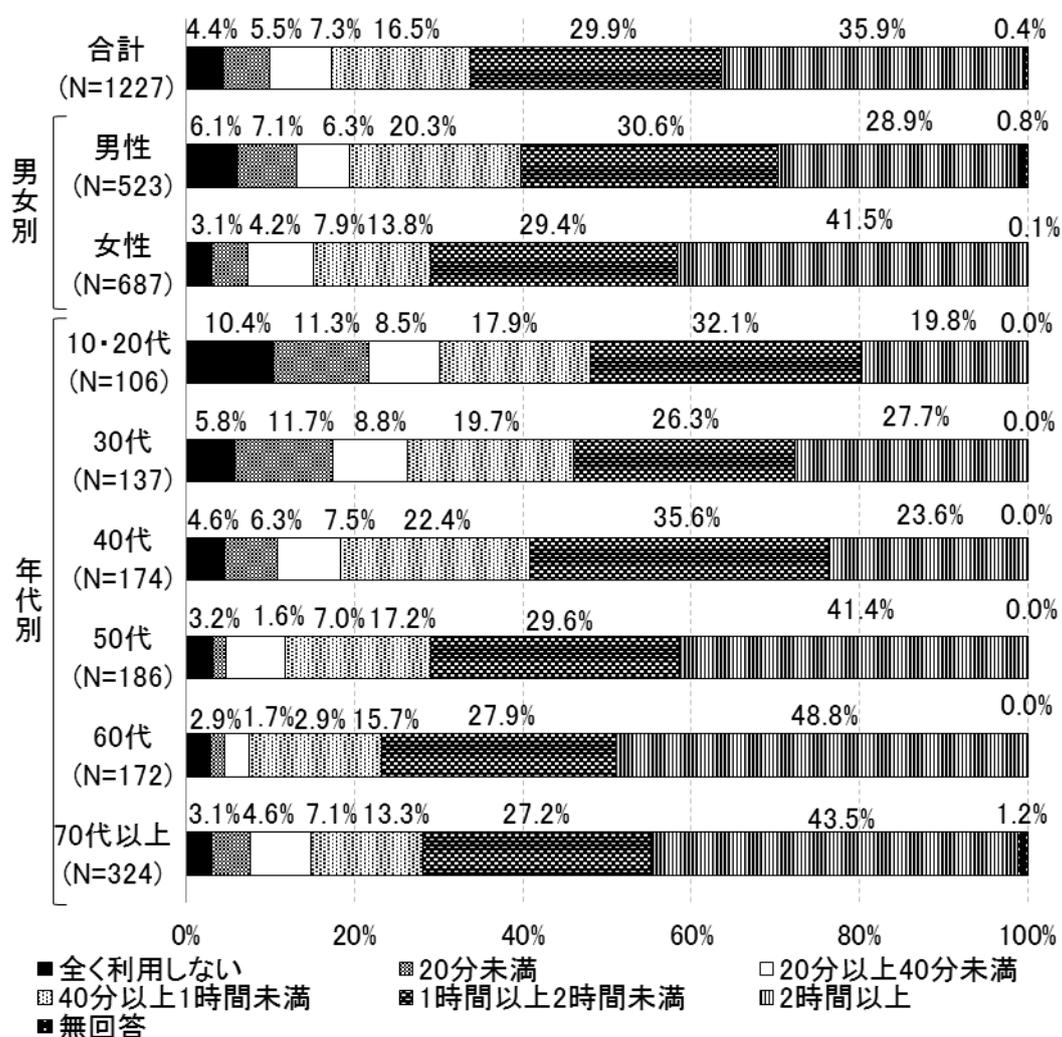


図 59 Q19A 情報源への接触時間：テレビ

Q19B の情報源への接触時間：新聞に関して、「全く利用しない」「20分未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、10・20代で96.3%と最も高く、70代以上で35.5%と最も低い（図60）。

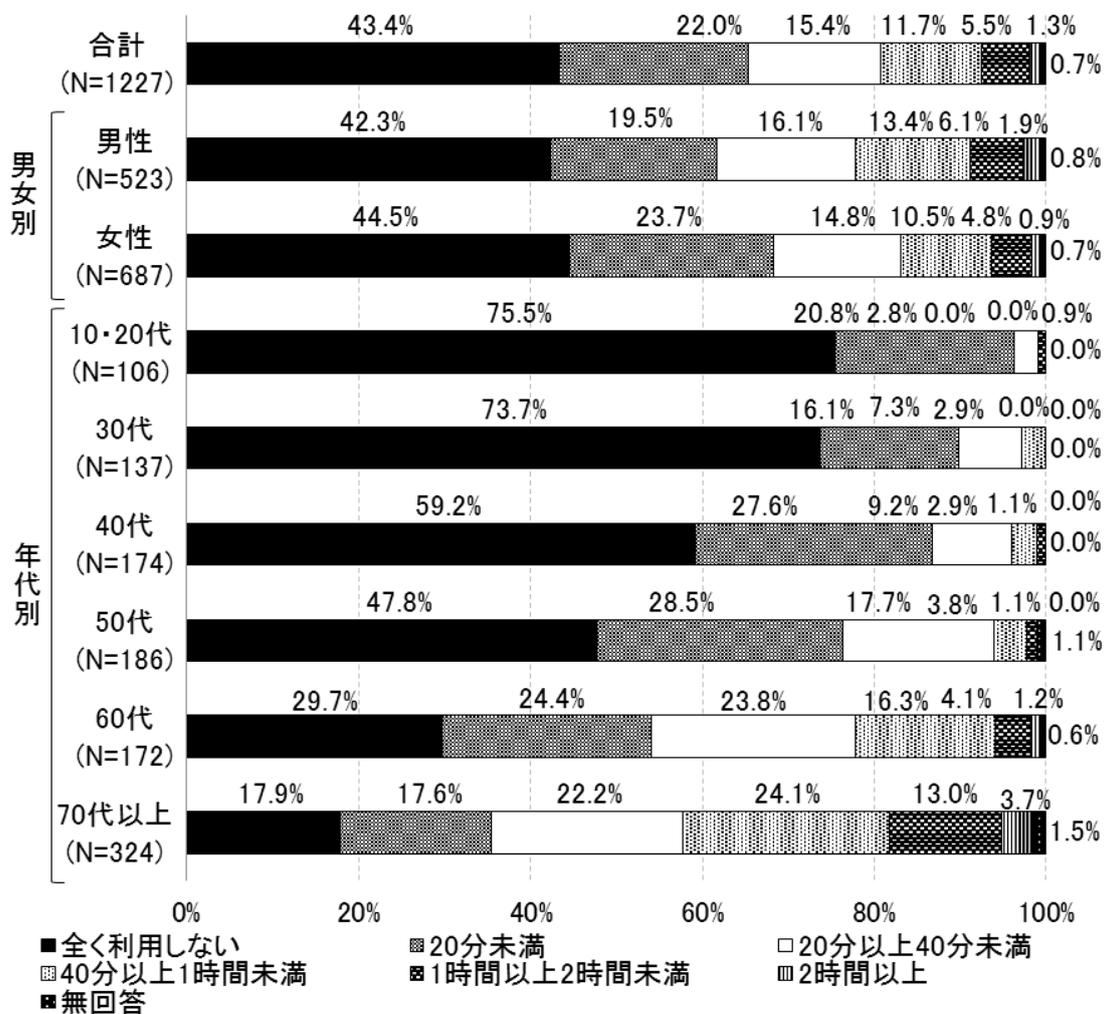


図 60 Q19B 情報源への接触時間：新聞

Q19Cの情報源への接触時間：SNS（Twitter・Instagramなど）に関して、「全く利用しない」「20分未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、10・20代で19.8%と最も低く、70代以上で86.4%と最も高い（図61）。

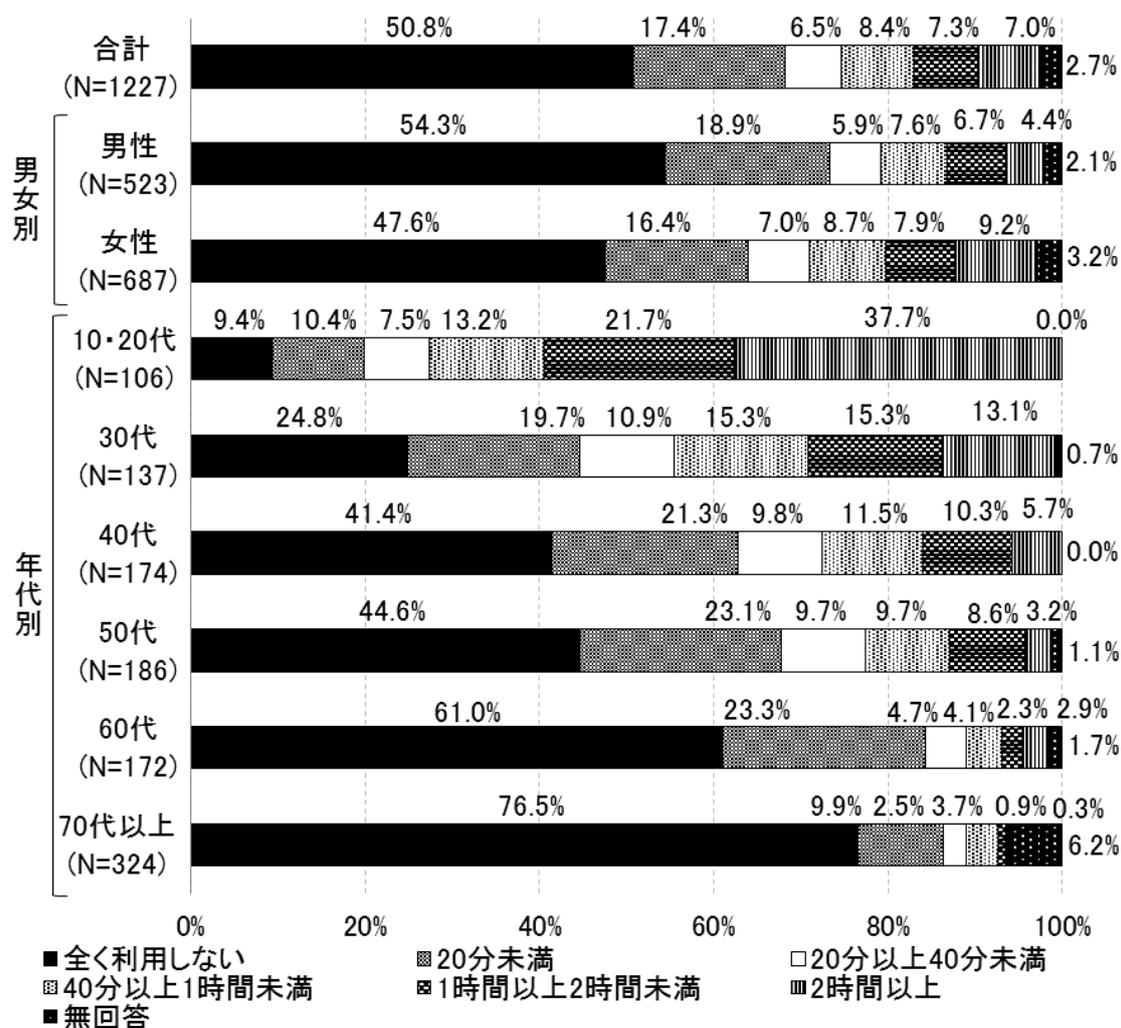


図 61 Q19C 情報源への接触時間：SNS

Q19D の情報源への接触時間：ネットニュース（Yahoo ニュース・LINE ニュースなど）に関して、「全く利用しない」「20分未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、30代で41.6%と最も低く、70代以上で72.5%と最も高い（図 62）。

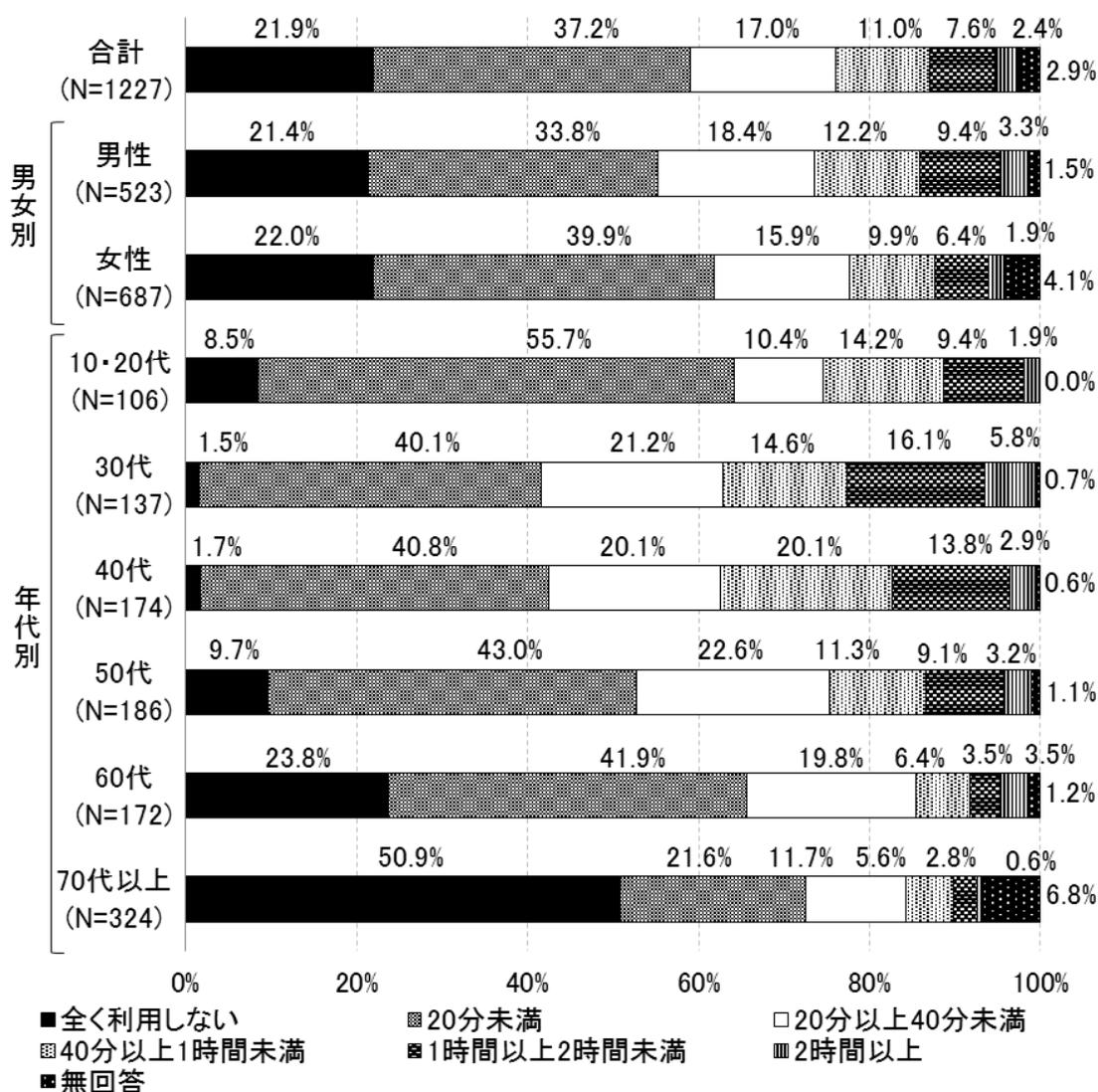


図 62 Q19D 情報源への接触時間：ネットニュース

Q19E の情報源への接触時間：友人・知人の情報に関して、「全く利用しない」「20分未満」と回答した人の割合は、年代別で見ると、10・20代で58.5%と最も低く、60代で76.7%と最も高い（図 63）。

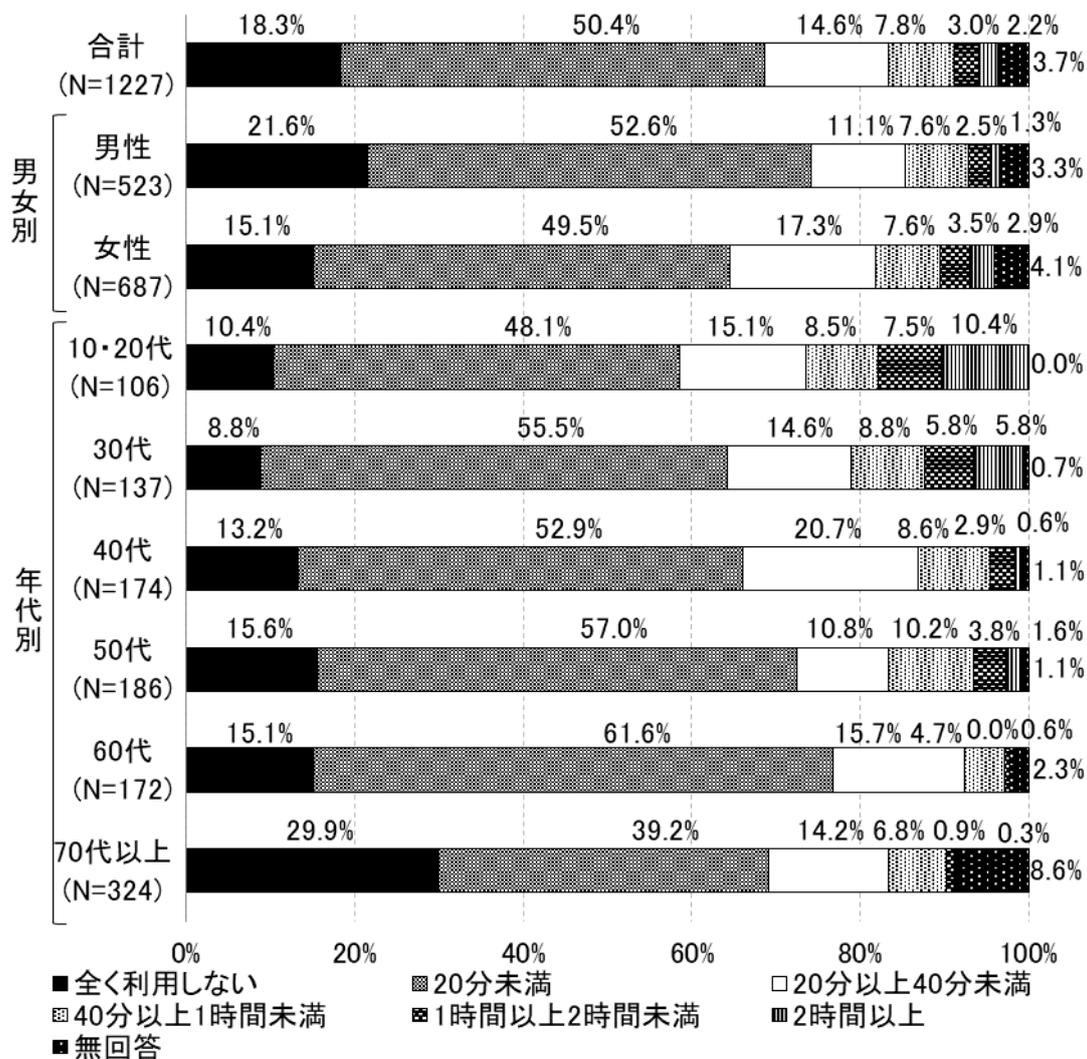
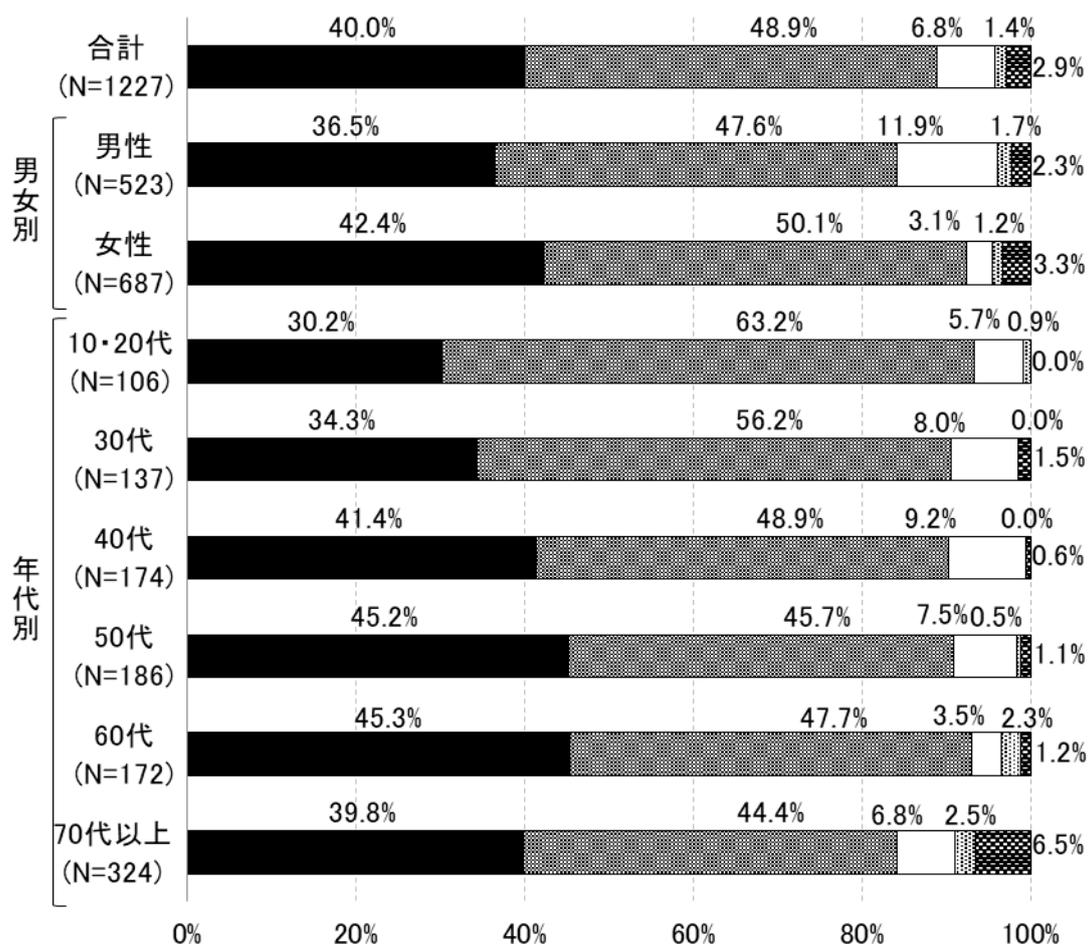


図 63 Q19E 情報源への接触時間：友人・知人の情報

Q20 のインターネットの普及による情報の機密性不安に関して、男女別・年代別のすべての層で「とても不安である」または「ある程度不安である」と回答した人の割合が 8 割以上である。年代別で見ると、「とても不安である」または「ある程度不安である」と回答した人の割合は、70 代以上で 84.2%と最も低い。反対に、10・20 代以上で 93.4%と最も高い（図 64）。



■とても不安である ■ある程度不安である □あまり不安でない ■全く不安でない ■無回答

図 64 Q20 インターネットの普及による情報の機密性不安

Q21 のインターネットの利用時間に関して、年代別で見ると、「全く利用しない」または「30分未満」と回答した人の割合は70代以上で64.6%と最も高い。反対に10・20代が7.6%と最も低い（図65）。

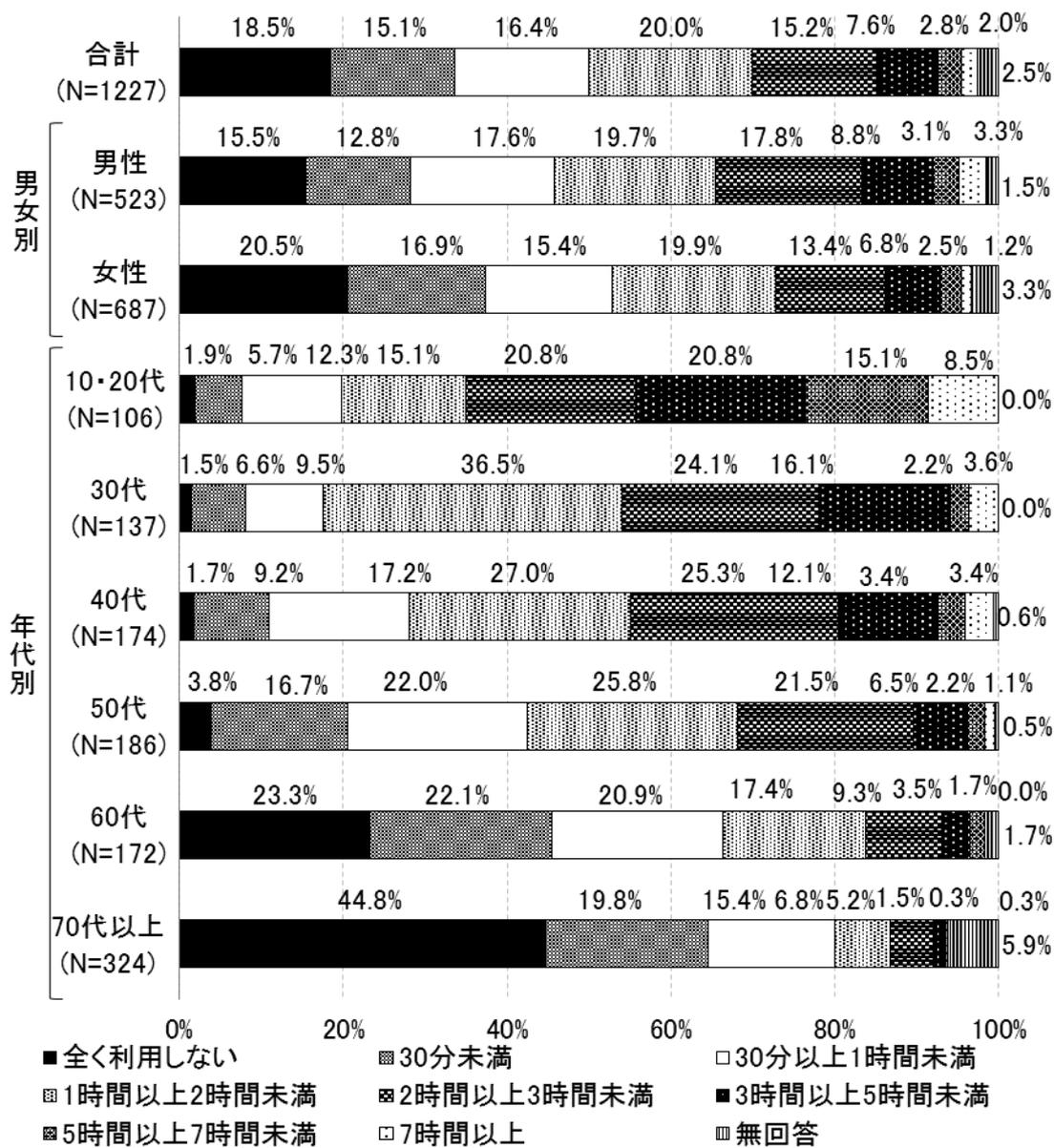


図 65 Q21 インターネットの利用時間

Q22 の精神的健康に関して、年代別で見ると「良い」または「まあまあ良い」と回答した人の割合は 60 代が 84.9%と最も高い。反対に 10・20 代が 77.3%と最も低い（図 66）。

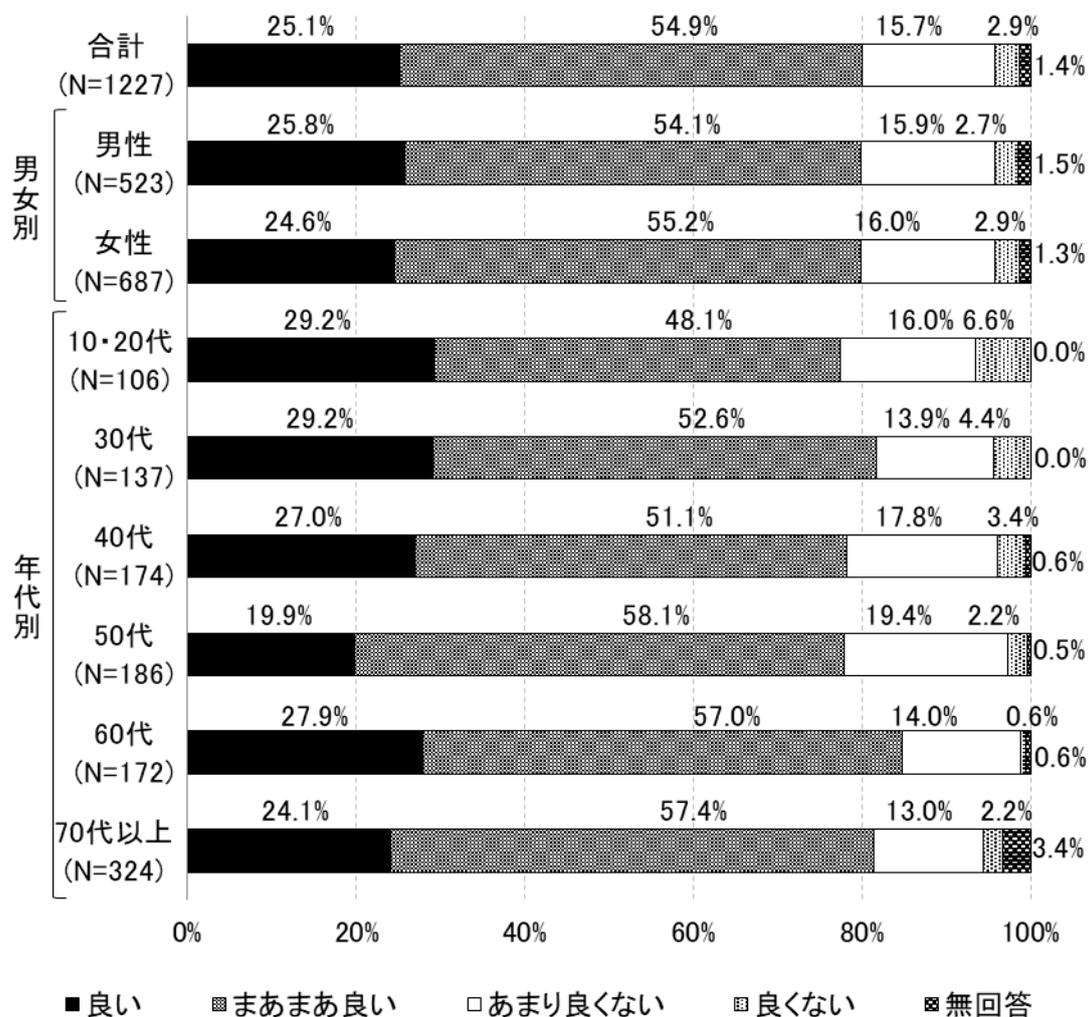


図 66 Q22 精神的健康

Q23 の身体的健康に関して、年代別で見ると「良い」または「まあまあ良い」と回答した人の割合は 70 代以上が 72.6%と最も低い。反対に 30 代が 85.4%と最も高い (図 67)。

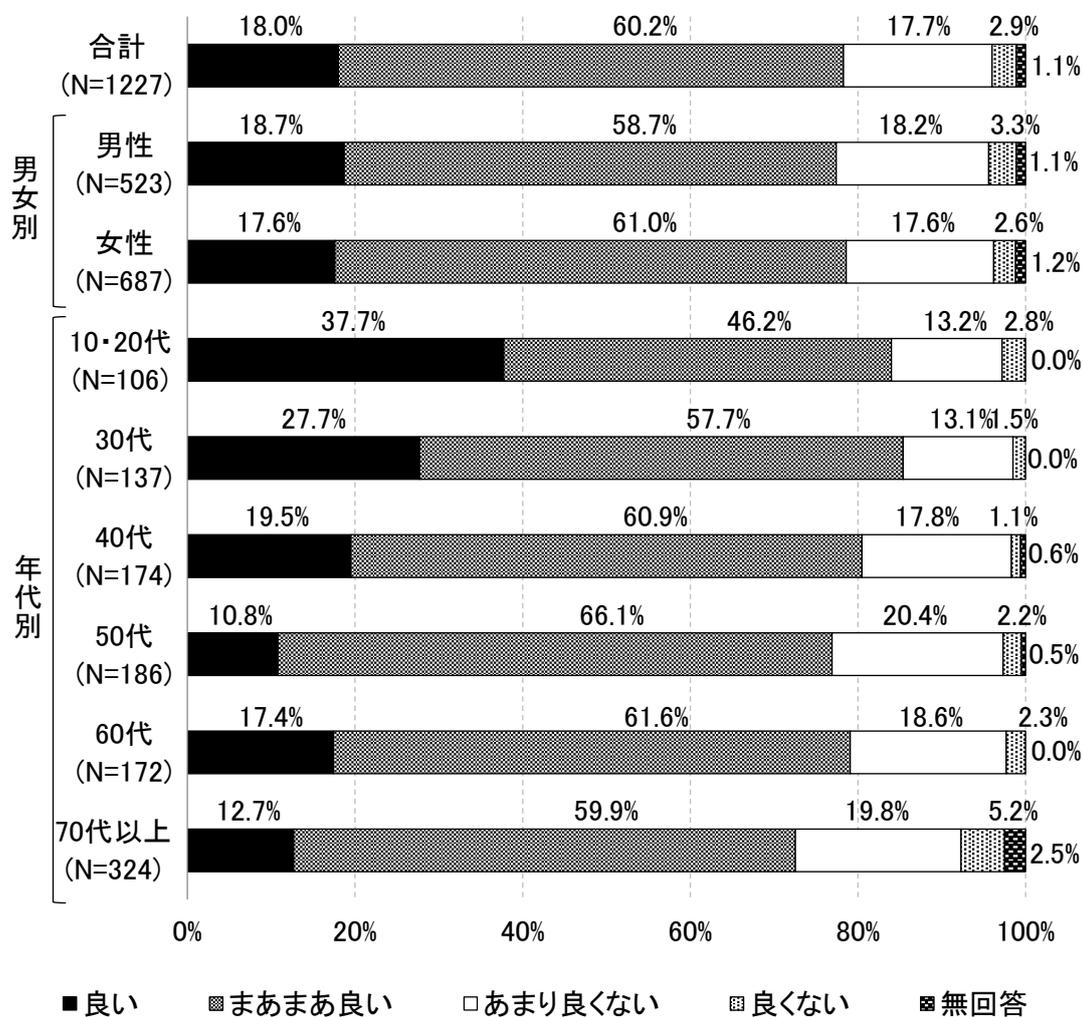


図 67 Q23 身体的健康

Q24 の自覚症状に関して、「目の疲れ」が 48.0%と最も高く、「首・肩のこり」が 47.3%と続く（図 68）。

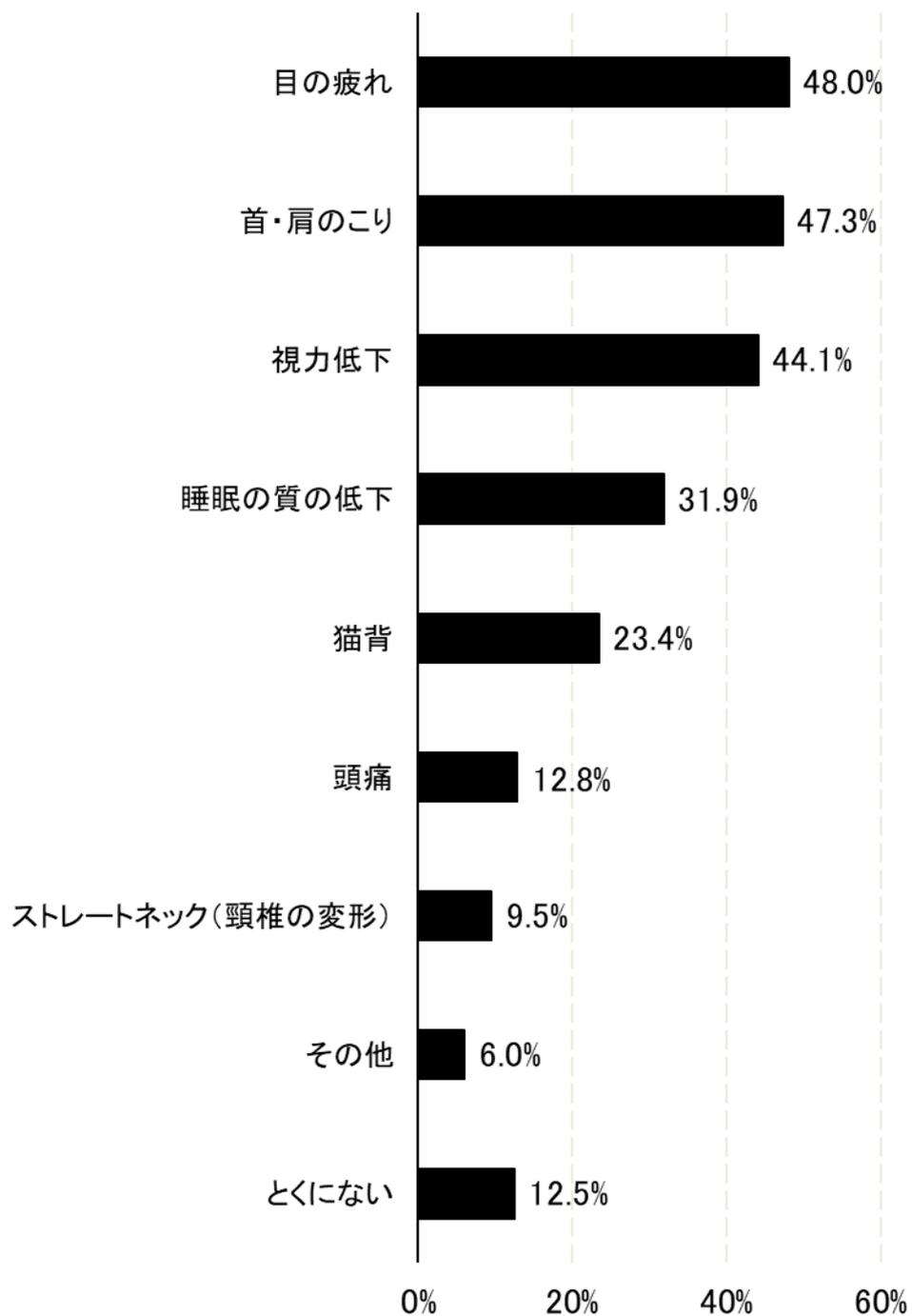


図 68 Q24 自覚症状（複数回答・全体 N=1227）

Q24の自覚症状に関して、男女別で見ると、「首・肩のこり」は男女で差があり、男性よりも女性の方が14.1ポイント高い（図69）。

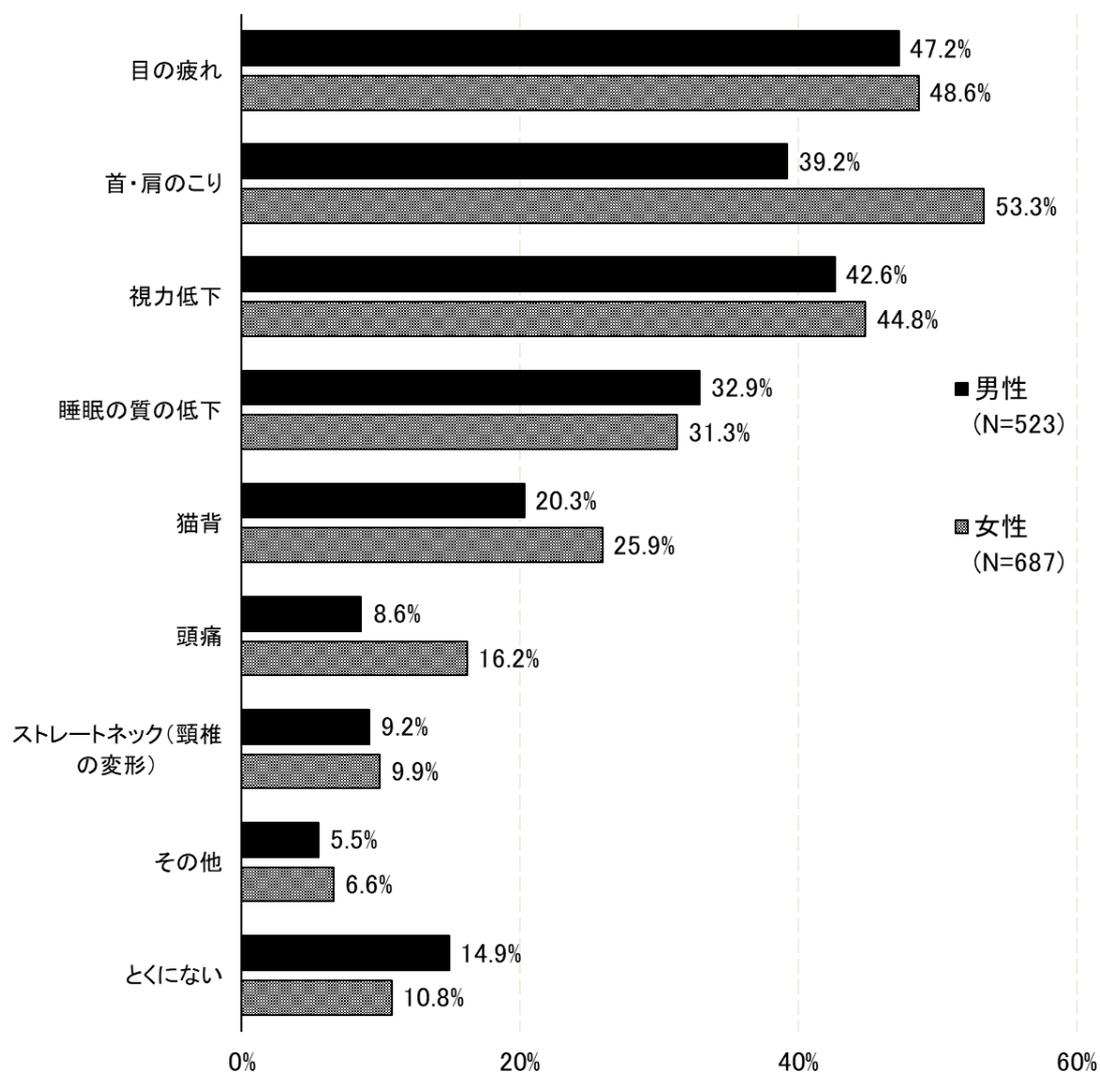


図 69 Q24 自覚症状（複数回答・男女別）

Q24の自覚症状に関して、年代別で見ると、「目の疲れ」への回答の割合は、10・20代で52.8%と最も高い。一方で、「首・肩のこり」に関して、30代で67.2%と最も高い(図70)。

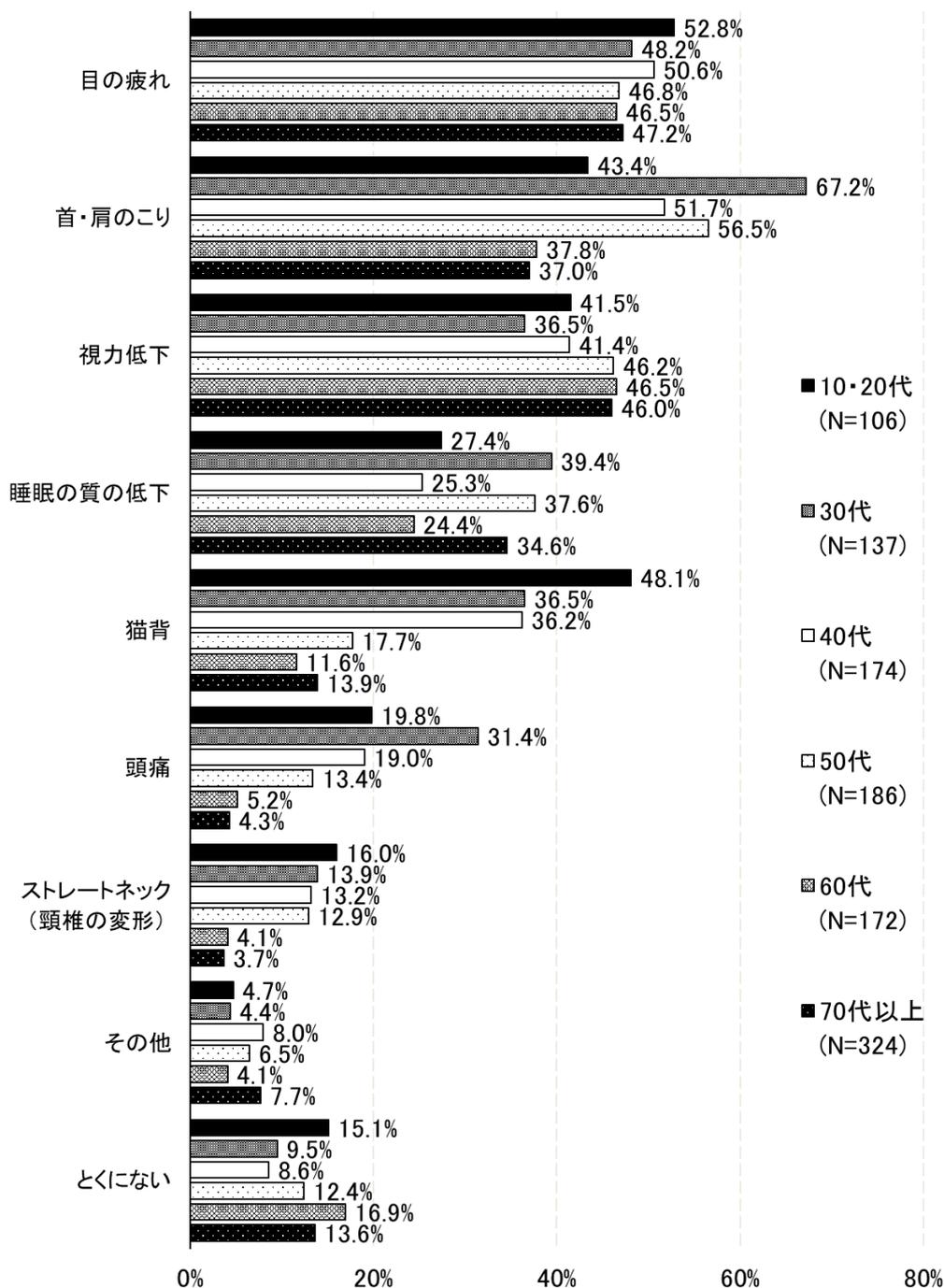


図70 Q24 自覚症状(複数回答・年代別)

Q25A～Fの質問項目は、心理的ストレスを含む精神的な健康の程度を表すK6と呼ばれる指標を用いている。

Q25Aの精神的健康（K6）：神経過敏に感じたに関して、男女別・年代別のすべての層で「全くない」と回答した人の割合が4割以上である。年代別で見ると「全くない」と回答した人の割合は50代が44.1%と最も低い。反対に、10・20代が62.3%と最も高い（図71）。

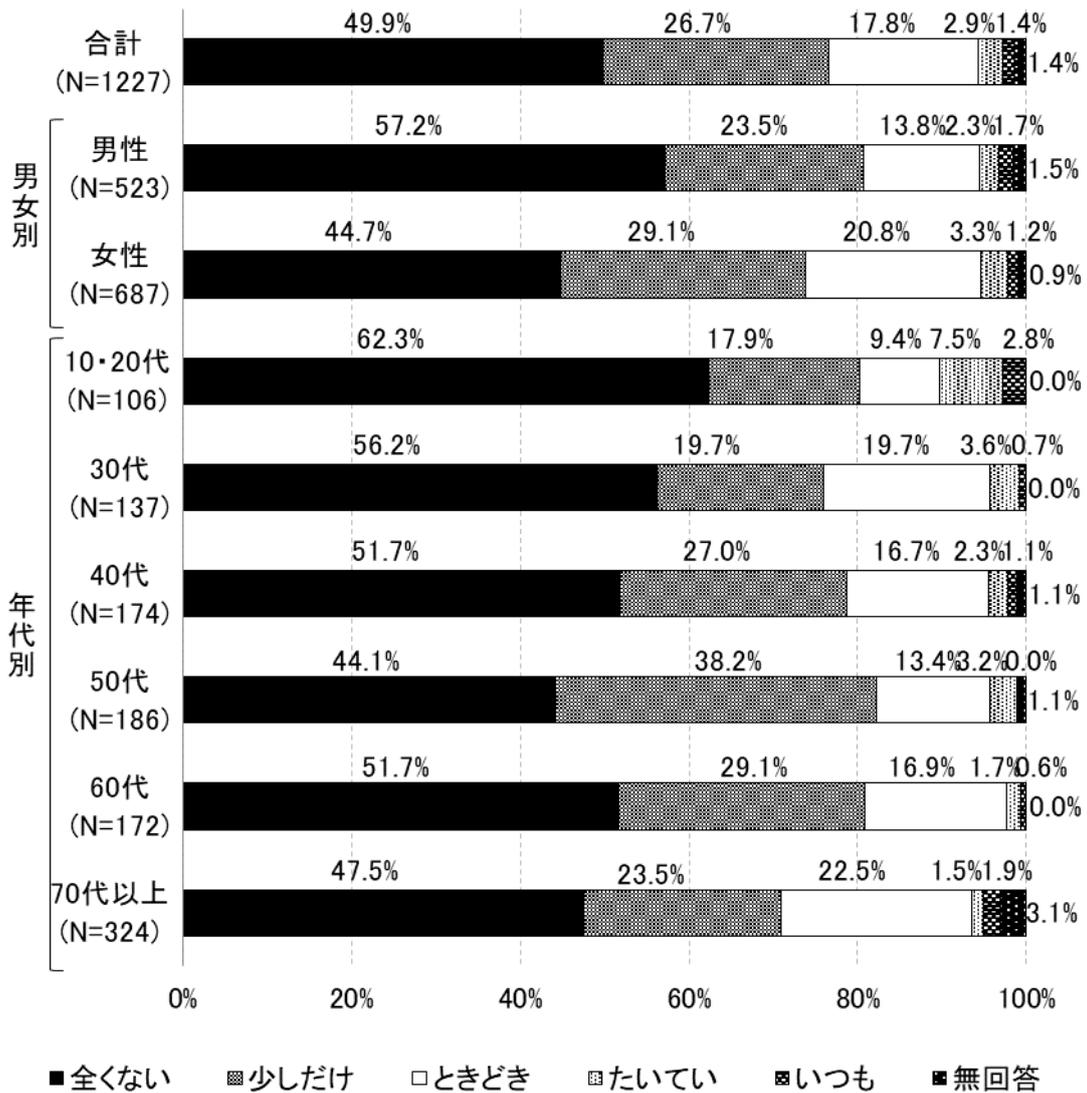


図71 Q25A 精神的健康（K6）：神経過敏に感じた

Q25Bの精神的健康（K6）：絶望的だと感じたに関して、男女別・年代別のすべての層で「全くない」と回答した人の割合が5割以上である。年代別で見ると「全くない」と回答した人の割合は10・20代が54.7%と最も低い。反対に、60代が78.5%と最も高い（図72）。

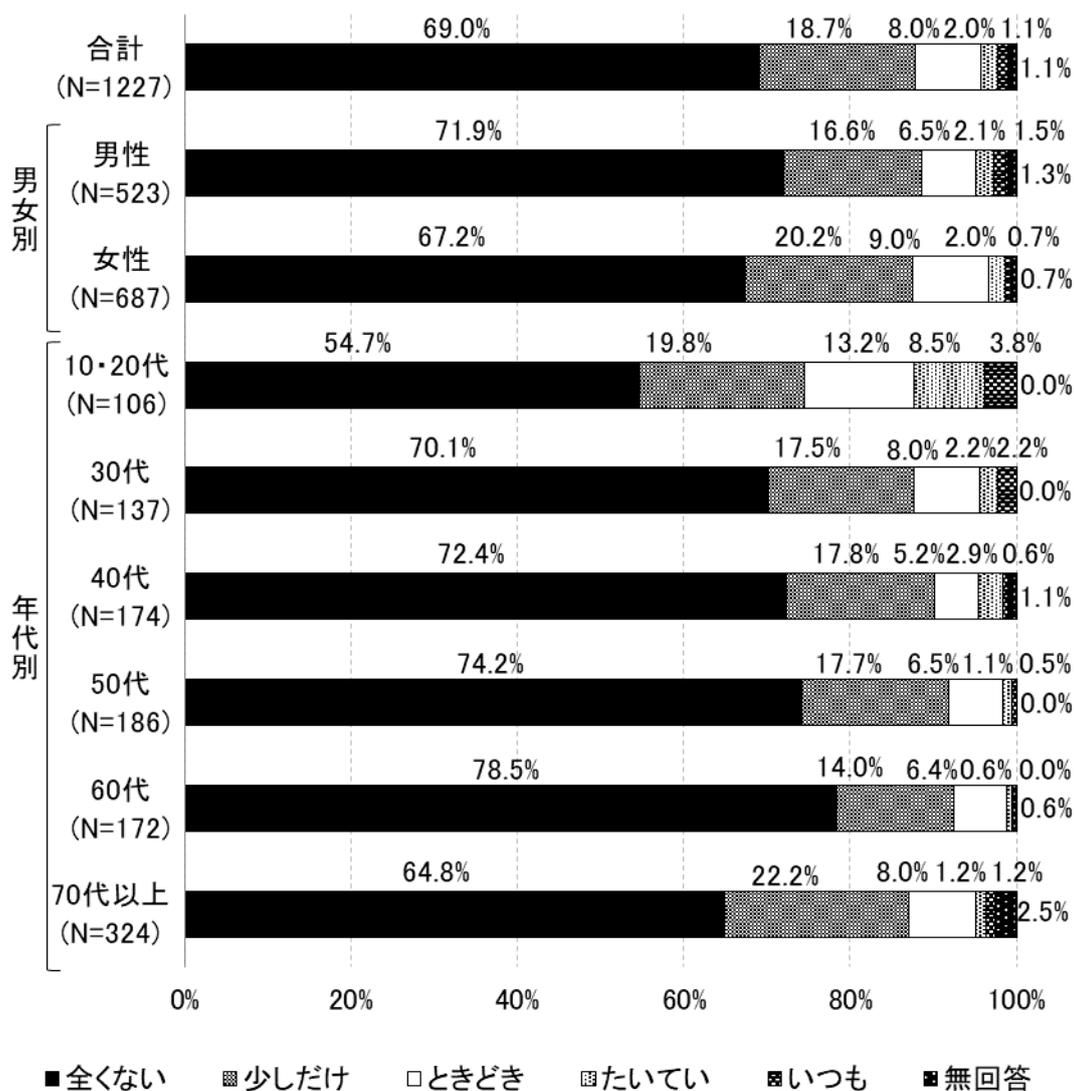


図72 Q25B 精神的健康（K6）：絶望的だと感じた

Q25C の精神的健康 (K6) : そわそわ、落ち着かなく感じたに関して、男女別・年代別のすべての層で「全くない」と回答した人の割合が 5 割以上である。年代別で見ると「全くない」と回答した人の割合は 30 代が 51.1%と最も低い。反対に、60 代が 64.0%と最も高い (図 73)。

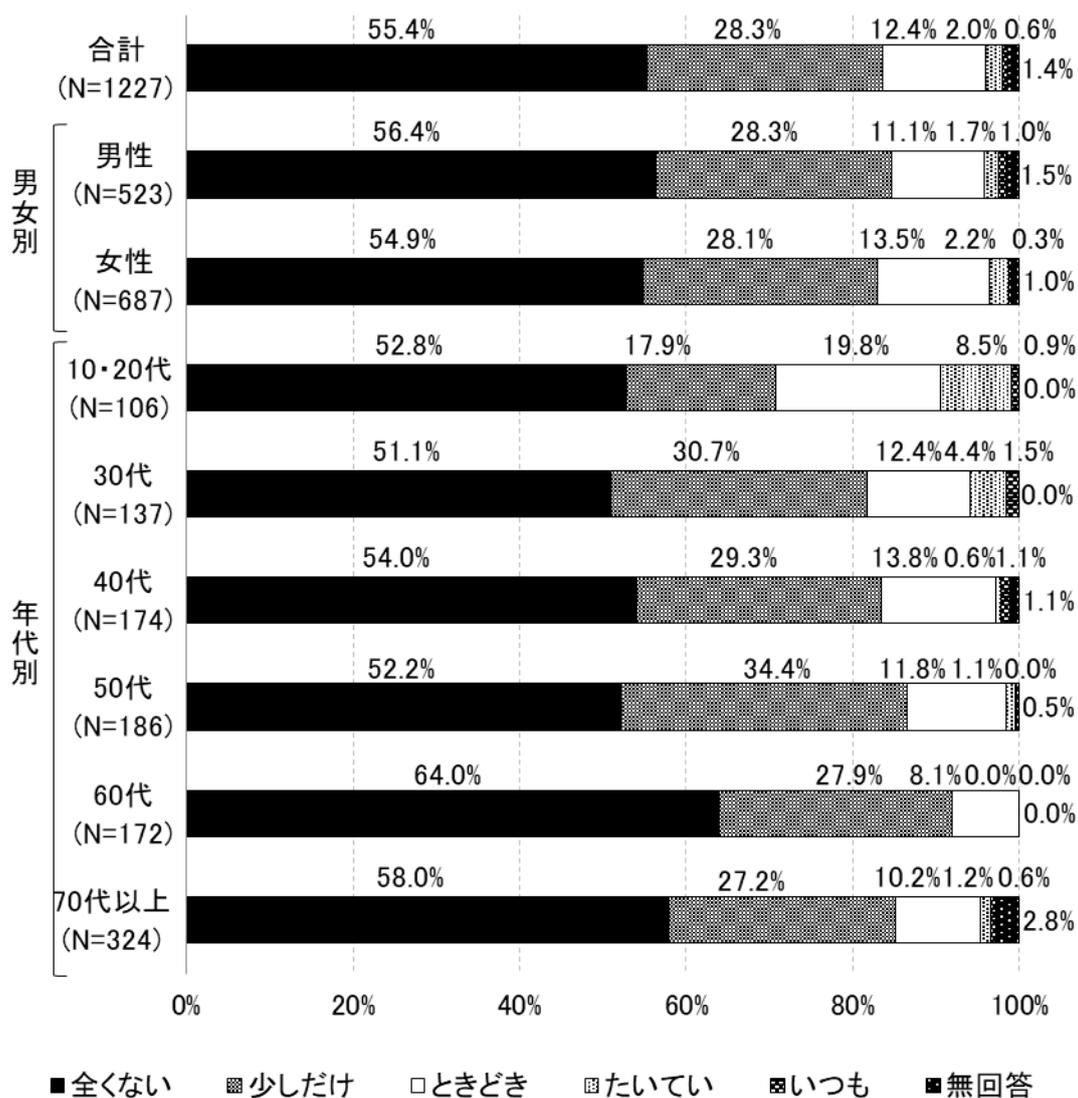


図 73 Q25C 精神的健康 (K6) : そわそわ、落ち着かなく感じた

Q25Dの精神的健康(K6)：気分が沈みこんで、何が起こっても気が晴れないように感じたに関して、男女別・年代別のすべての層で「全くない」と回答した人の割合が4割以上である。年代別で見ると「全くない」と回答した人の割合は10・20代と30代で45.3%と最も低い。反対に、60代が60.5%と最も高い(図74)。

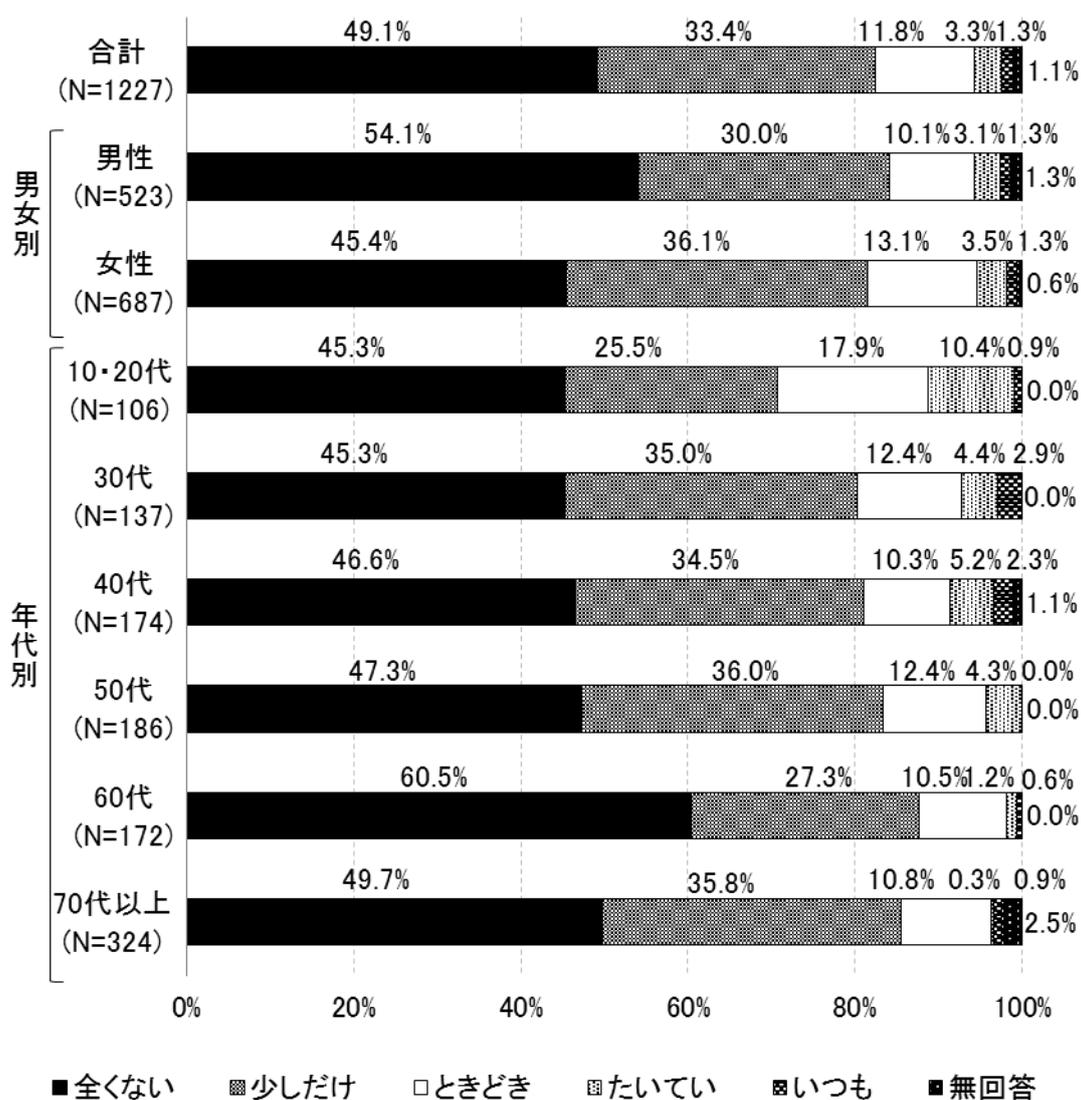


図 74 Q25D 精神的健康 (K6)：気分が沈みこんで、何が起こっても気が晴れないように感じた

Q25E の精神的健康 (K6) : 何をするのも骨折りだと感じたに関して、年代別で見ると「全くない」と回答した人の割合は 50 代が 39.2%と最も低い。反対に、10・20 代が 53.8%と最も高い (図 75)。

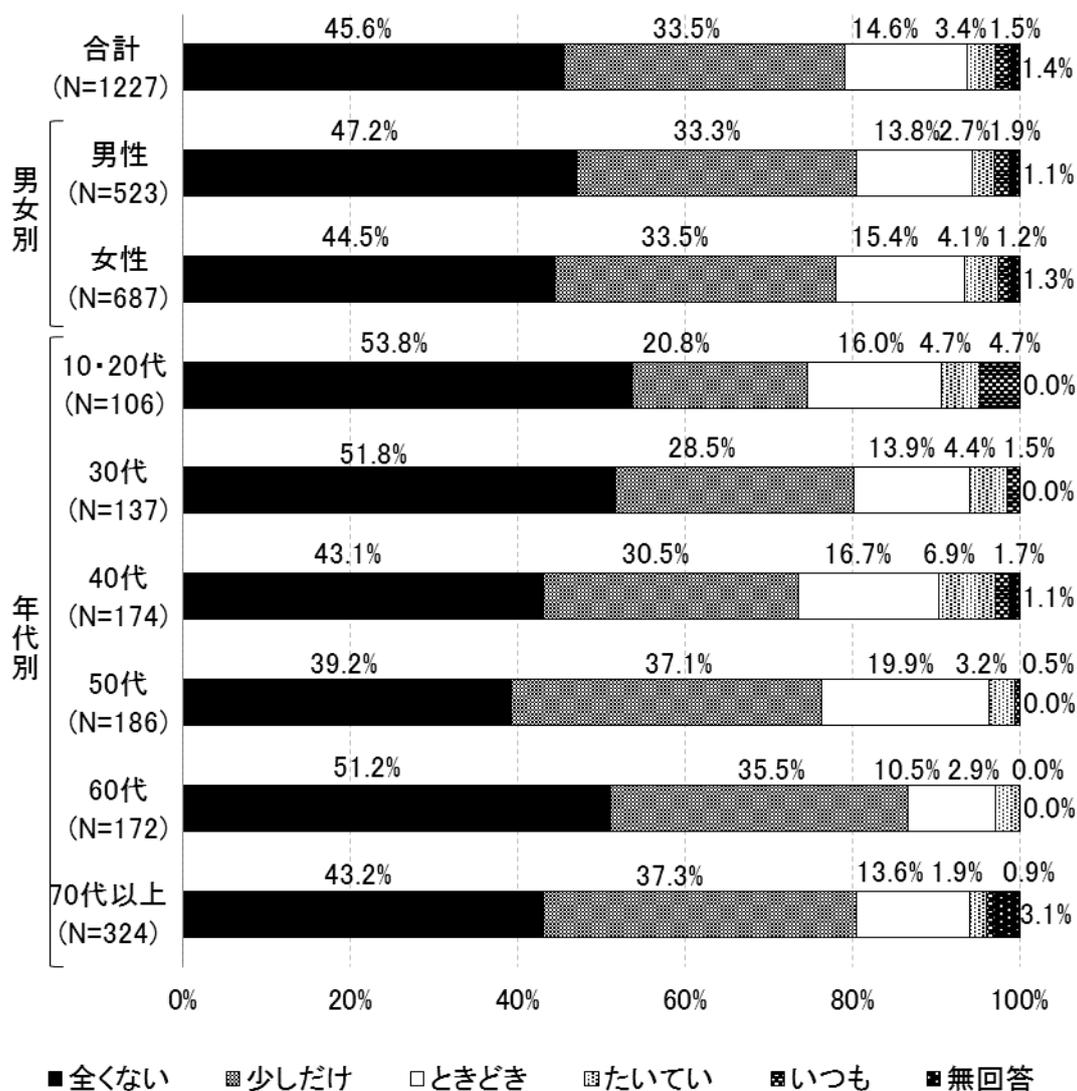


図 75 Q25E 精神的健康 (K6) : 何をするのも骨折りだと感じた

Q25Fの精神的健康（K6）：自分は価値のない人間だと感じたに関して、男女別・年代別のすべての層で「全くない」と回答した人の割合が6割以上である。年代別で見ると「全くない」と回答した人の割合は10・20代と50代が61.3%と最も低い。反対に、60代が70.9%と最も高い（図76）。

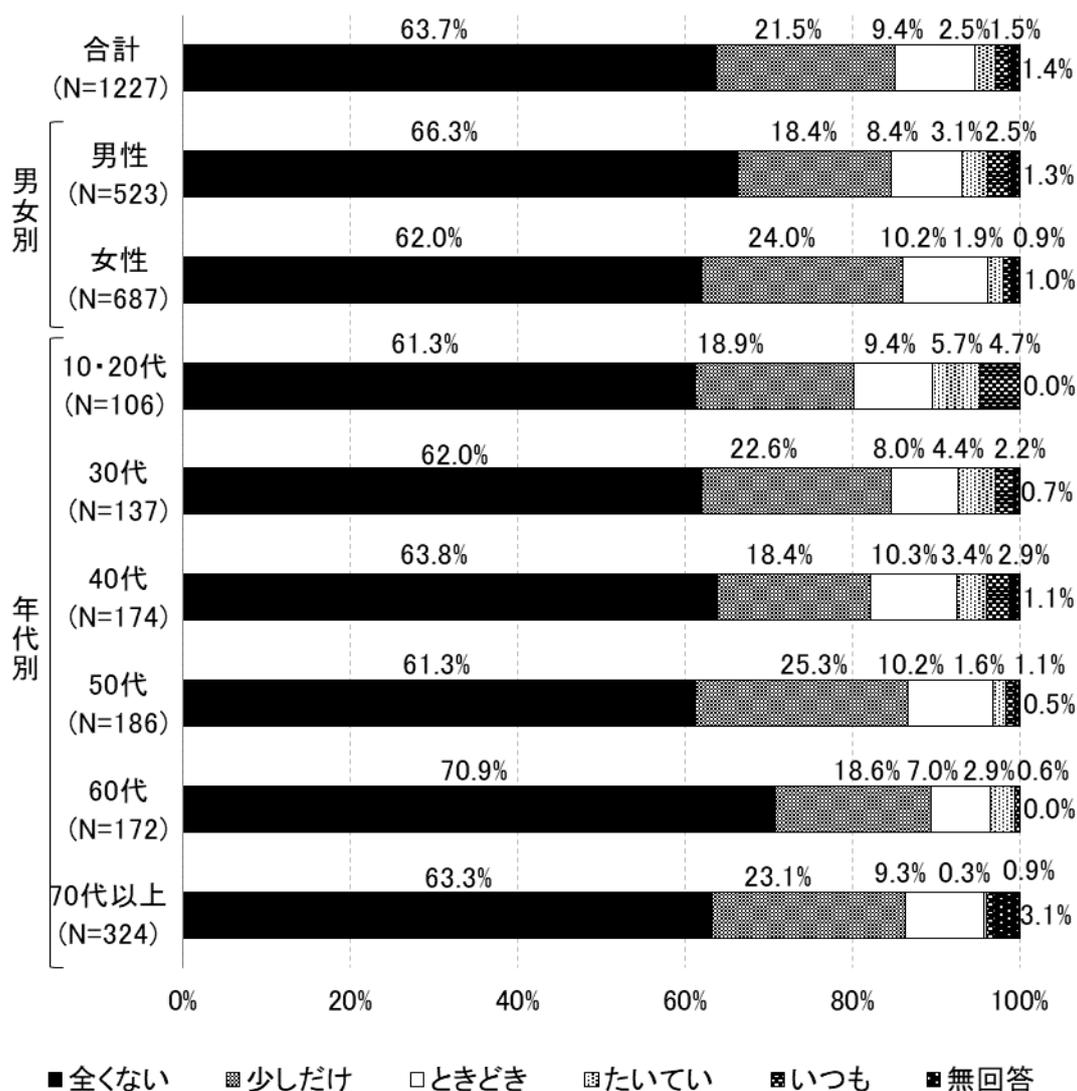


図76 Q25F 精神的健康（K6）：自分は価値のない人間だと感じた

Q26の年間の自殺者数の認知度に関して、男女別・年代別のすべての層で「知っている」と回答した人の割合が5割以上である。年代別で見ると「知っている」と回答した人の割合は10・20代が58.5%と最も低い。反対に、60代が76.7%と最も高い（図77）。

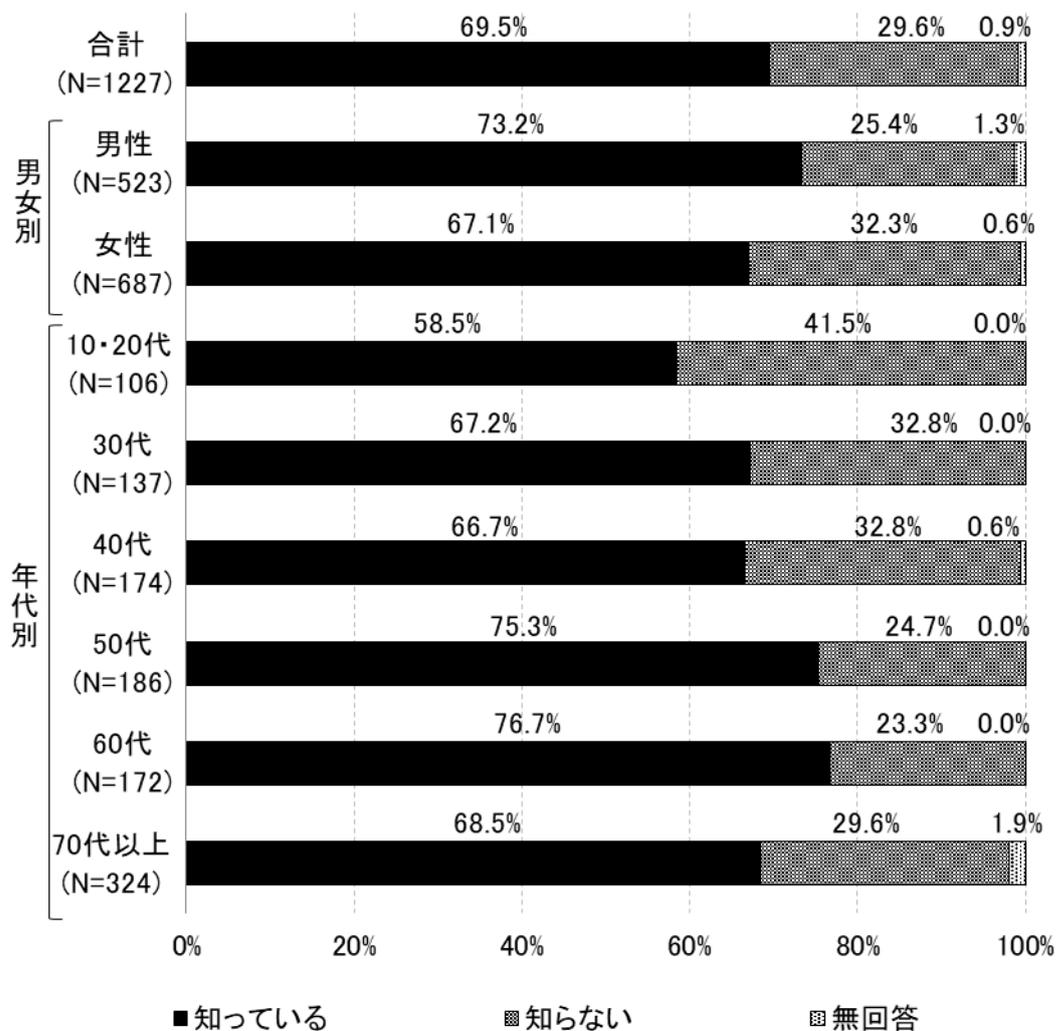


図 77 Q26 年間の自殺者数の認知度

Q27 の自殺について相談できる機関を知っていたかに関して、男女別・年代別のすべての層で「知っている」と回答した人の割合が 5 割以上である。年代別で見ると「知っている」と回答した人の割合は 10・20 代が 82.1%と最も高い。反対に、70 代以上が 57.4%と最も低い（図 78）。

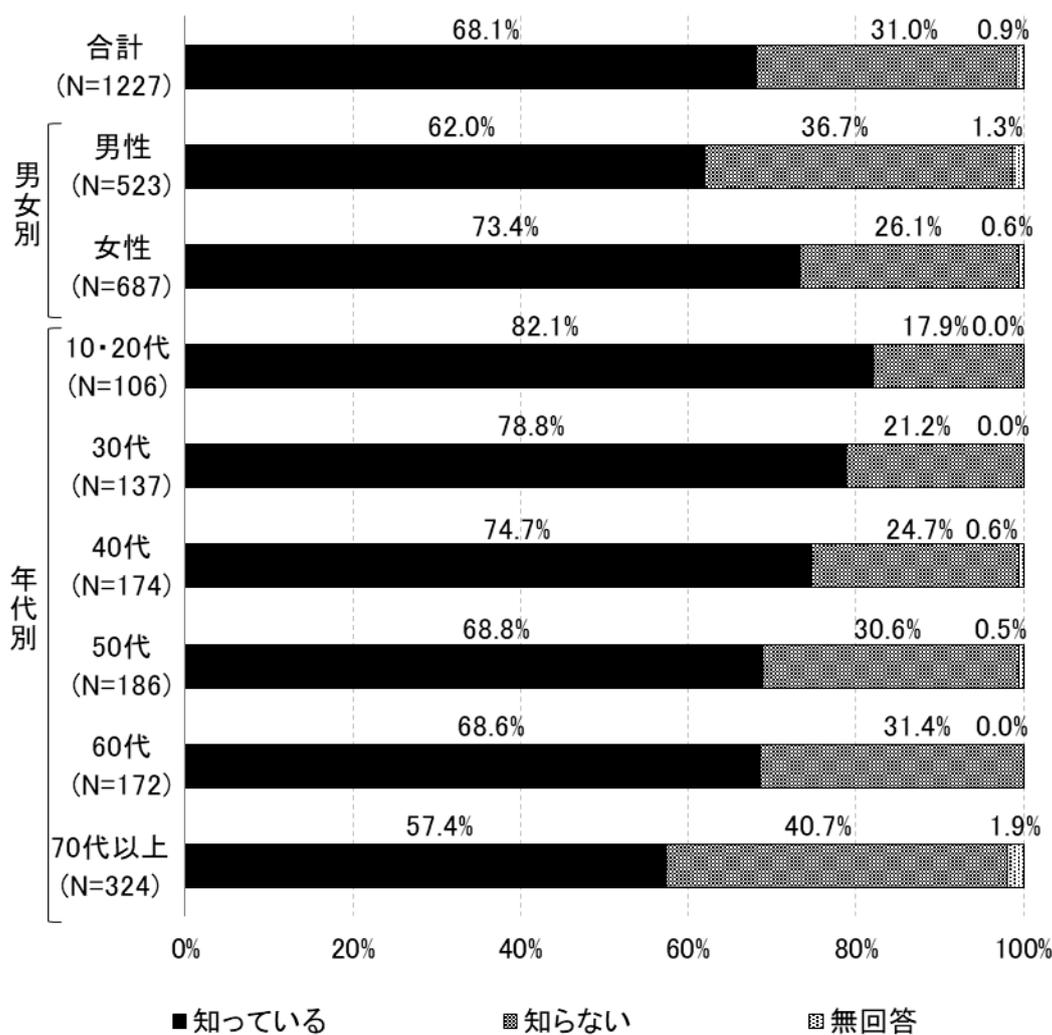


図 78 Q27 自殺について相談できる機関を知っていたか

Q28 の自殺したいと思ったことがあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「ない」と回答した人の割合は7割以上である。年代別で見ると「ある」と回答した人の割合は10・20代が21.7%と最も高い。反対に70代以上が9.6%と最も低い（図79）。

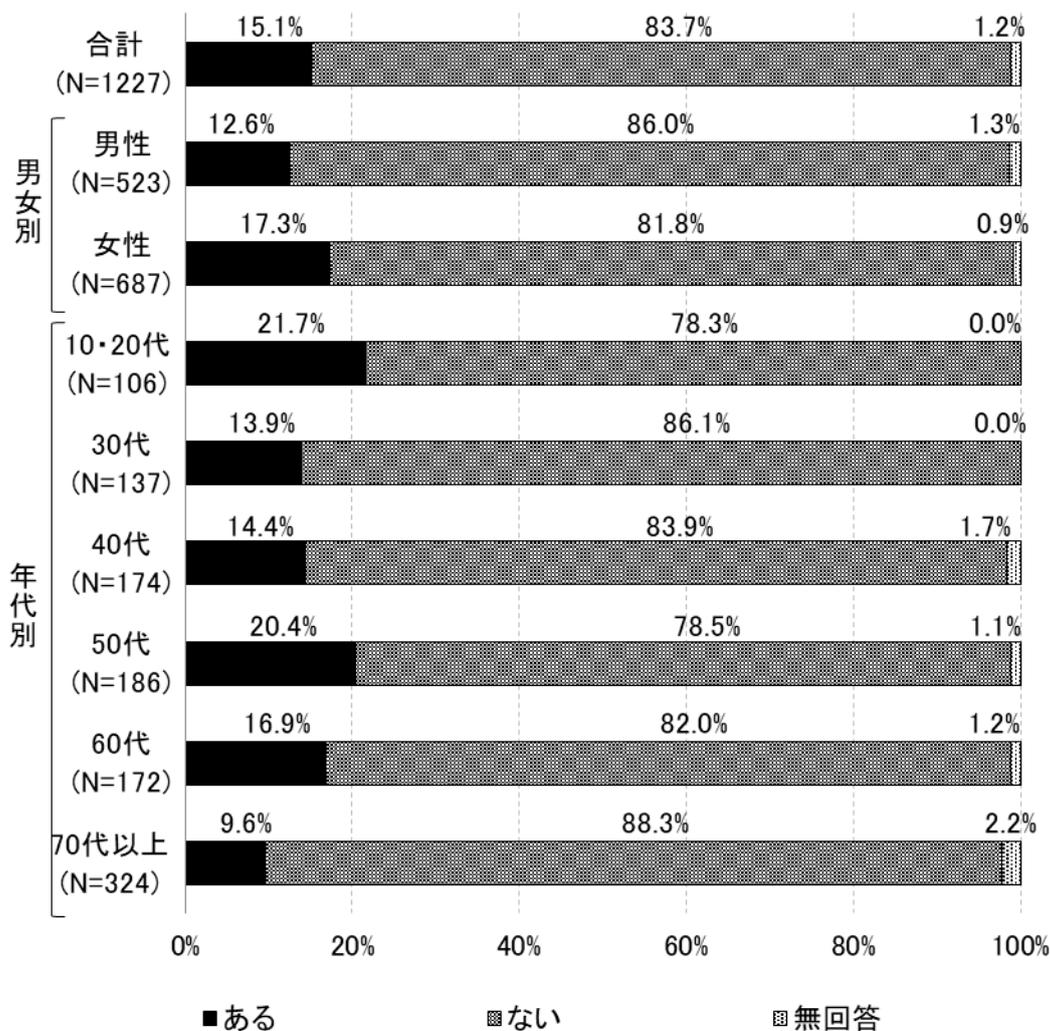


図 79 Q28 自殺したいと思ったことがあるか

Q29 打ち明けられた時の対応に関して、「耳を傾けて聞く」と回答した人の割合が 58.4%と最も高く、「共感を示す」と回答した人の割合が 41.4%と続く（図 80）。

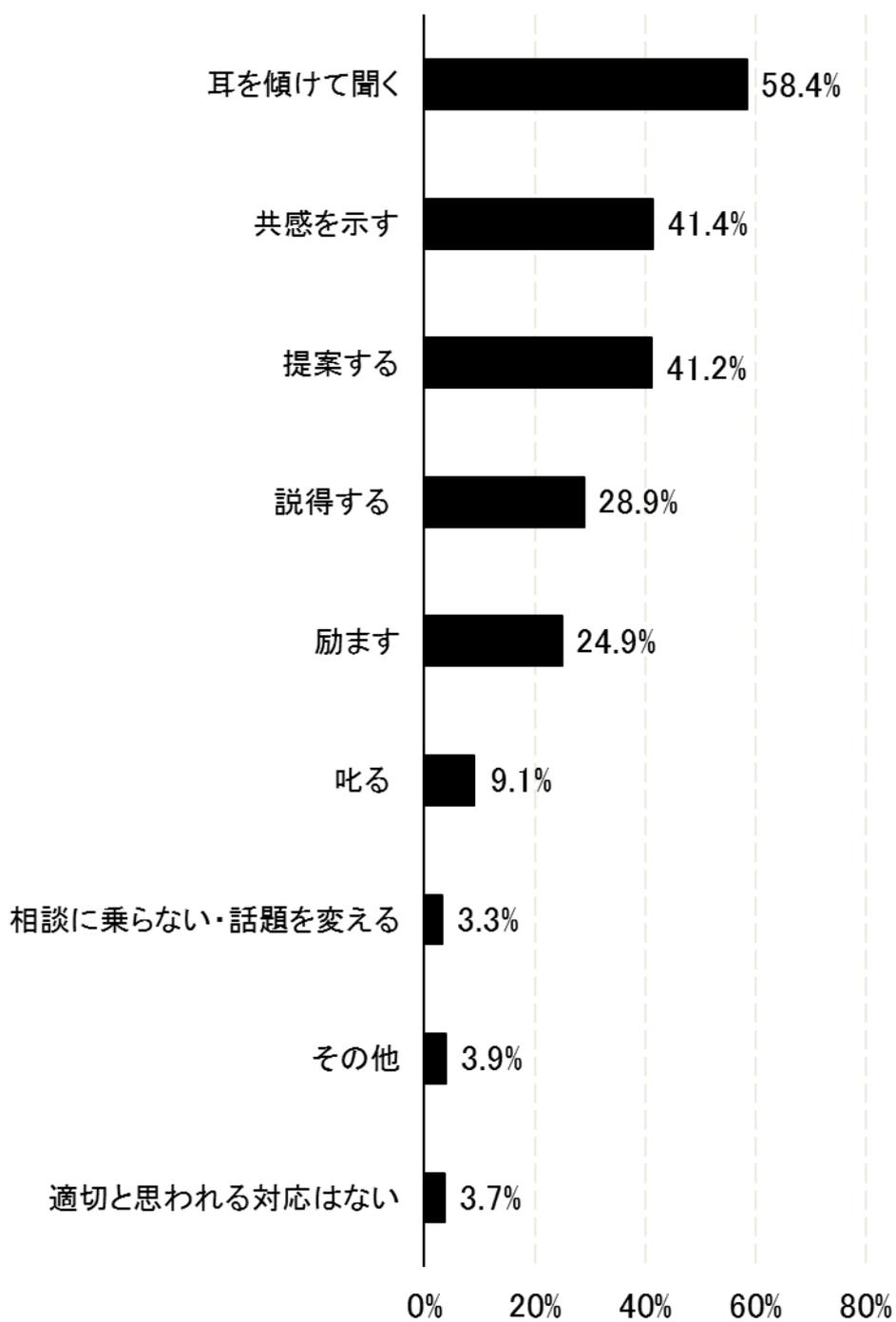


図 80 Q29 打ち明けられた時の対応（複数回答・全体 N=1227）

Q29の打ち明けられた時の対応に関して、男女別で見ると、「耳を傾けて聞く」は男女で差があり、男性よりも女性の方が17.1ポイント高い（図81）。

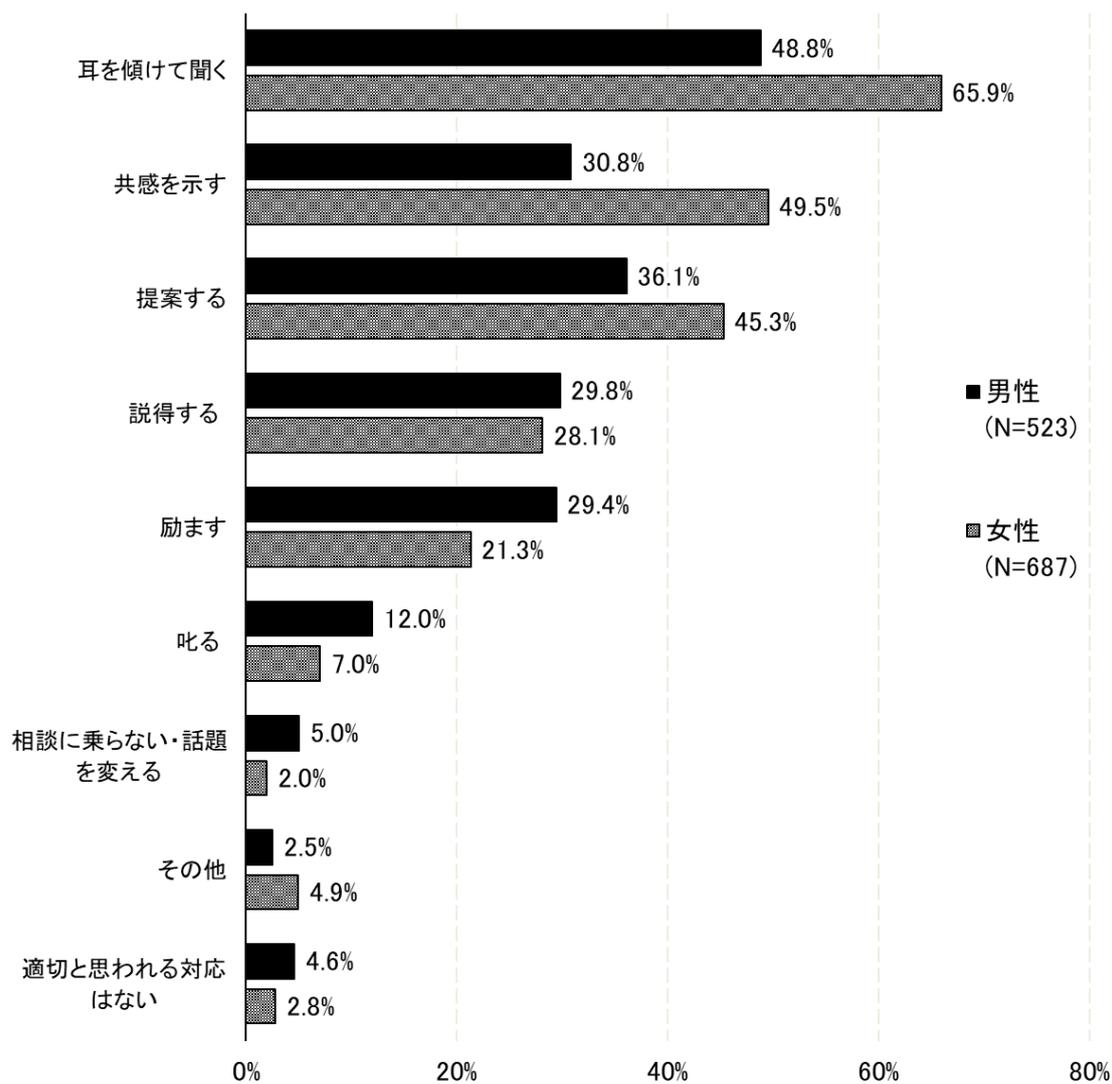


図 81 Q29 打ち明けられた時の対応（複数回答・男女別）

Q29 の打ち明けられた時の対応に関して、年代別で見ると、「耳を傾けて聞く」に関しては、30代が75.9%と最も高い。反対に、70代以上が43.5%と最も低い（図82）。

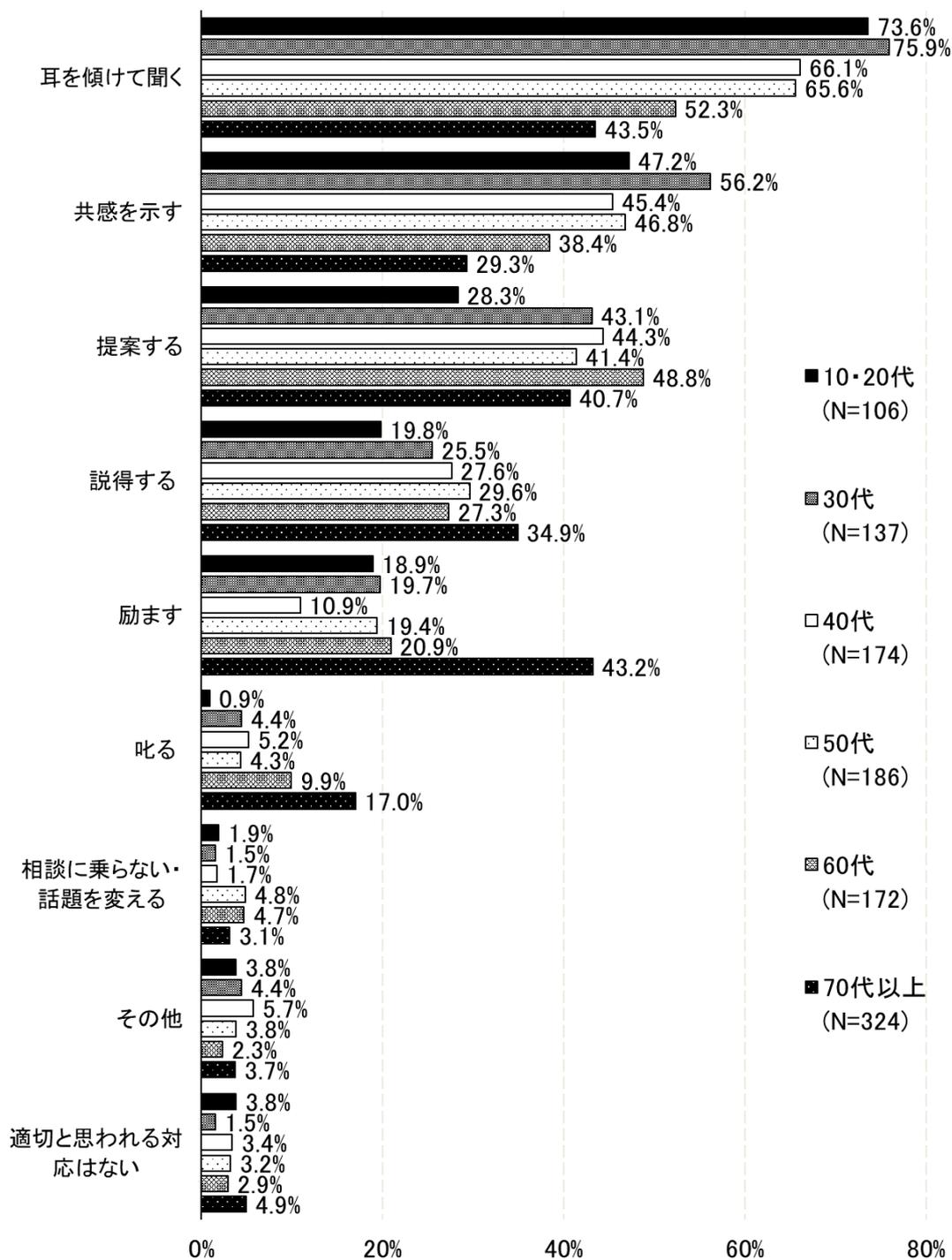


図82 Q29 打ち明けられた時の対応（複数回答・年代別）

Q30 今後求められる自殺対策に関して、「様々な悩みに対応した相談窓口の設置」と回答した人の割合が 46.2%と最も高く、「職場におけるメンタルヘルス対策の推進」が 42.0%と続く（図 83）。

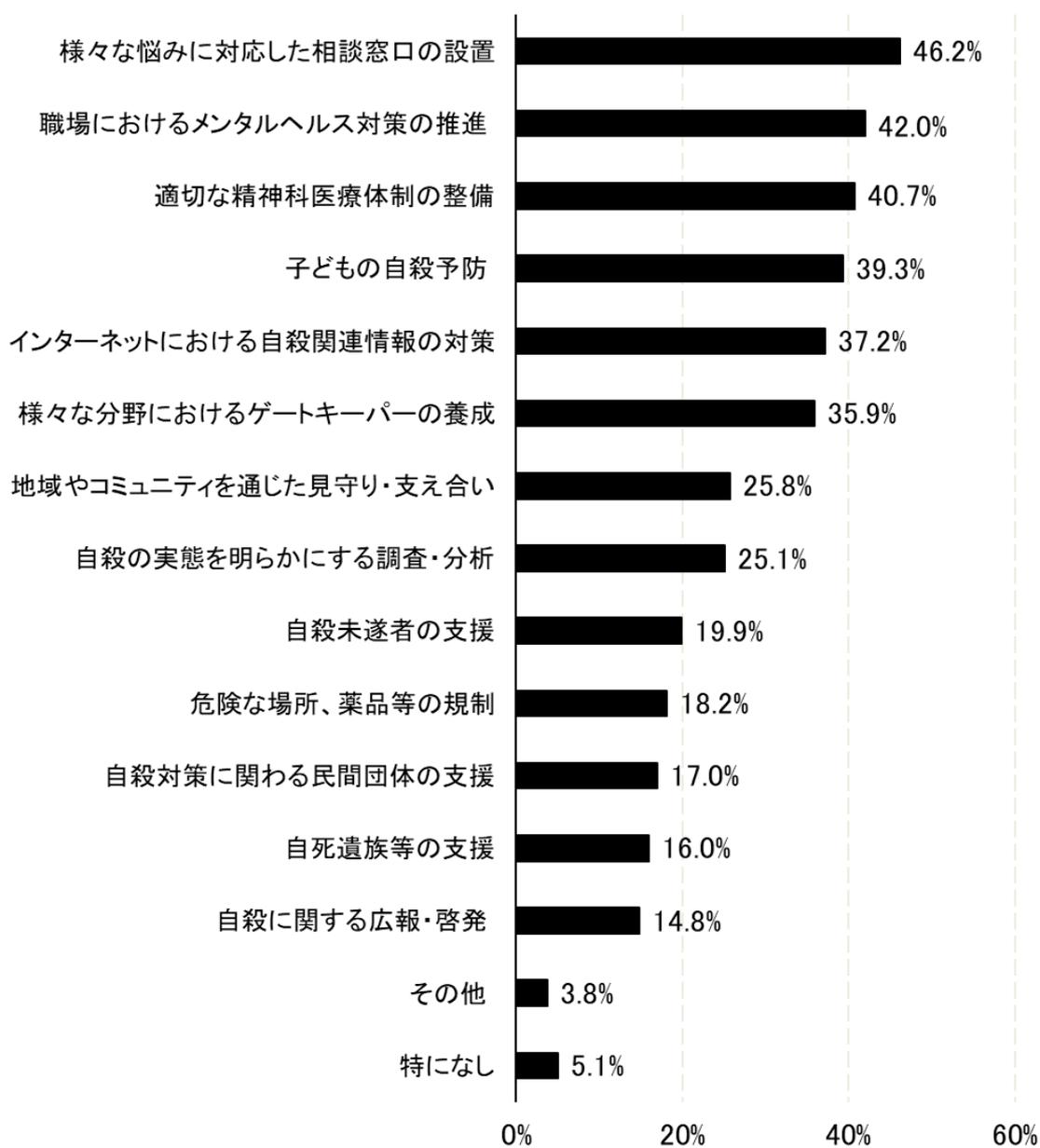


図 83 Q30 今後求められる自殺対策（複数回答・全体 N=1227）

Q30 の今後求められる自殺対策に関して、男女別で見ると、「様々な悩みに対応した相談窓口の設置」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 13.1 ポイント高い（図 84）。

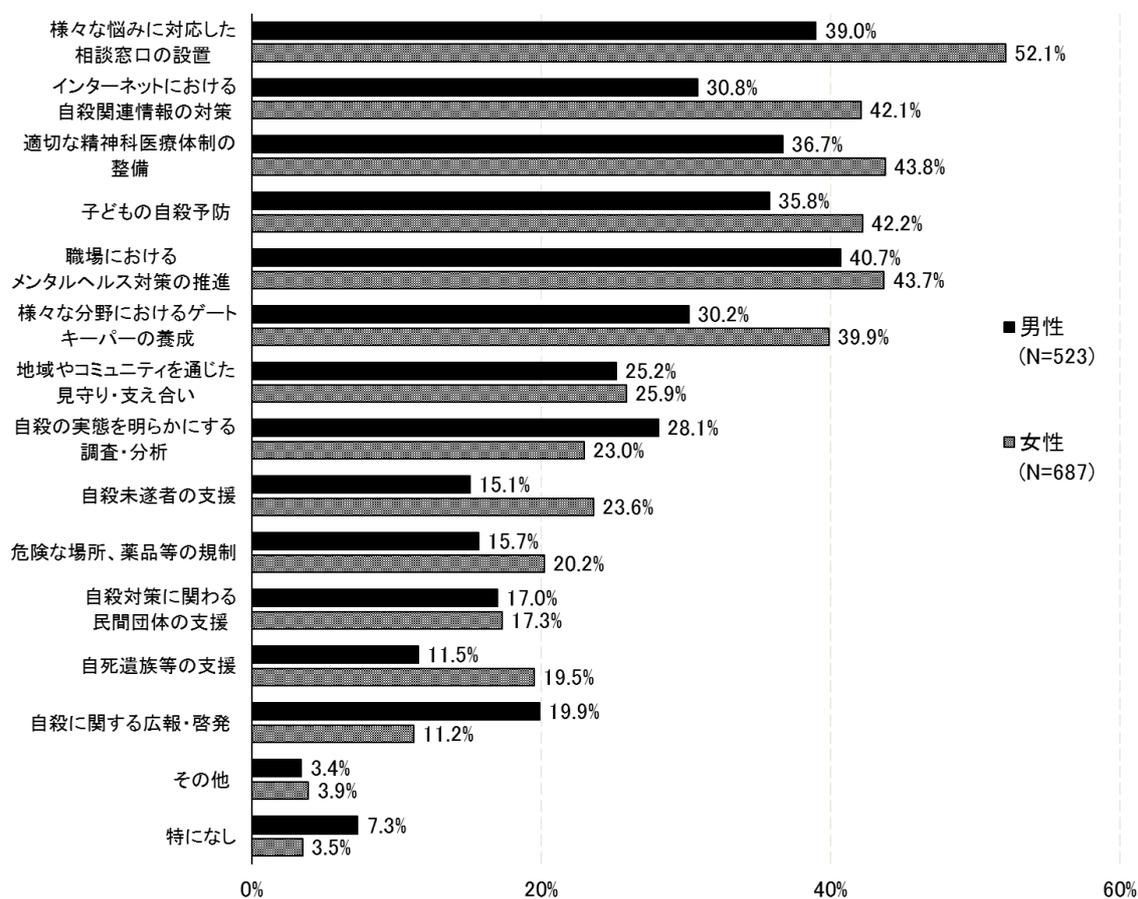


図 84 Q30 今後求められる自殺対策（複数回答・男女別）

Q30 の今後求められる自殺対策に関して、年代別で見ると、「様々な悩みに対応した相談窓口の設置」に関しては、10・20代が37.7%と最も低い。反対に、70代以上が52.8%と最も高い（図85）。

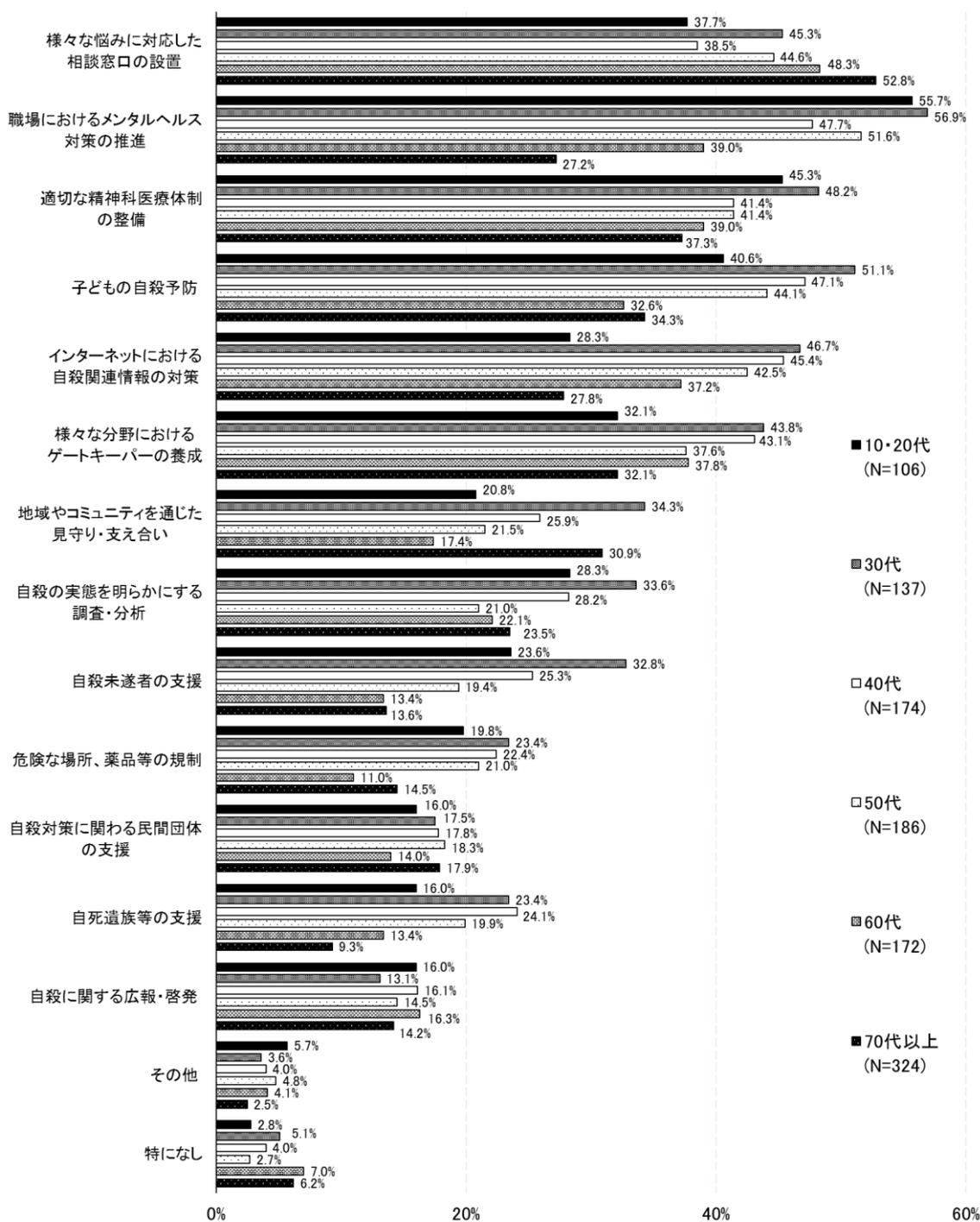


図 85 Q30 今後求められる自殺対策（複数回答・年代別）

Q31 自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、「身近な人に悩みを聞いてもらう」と回答した人の割合が 61.9%と最も高く、「心の健康の専門家に相談する」が 57.0%と続く（図 86）。

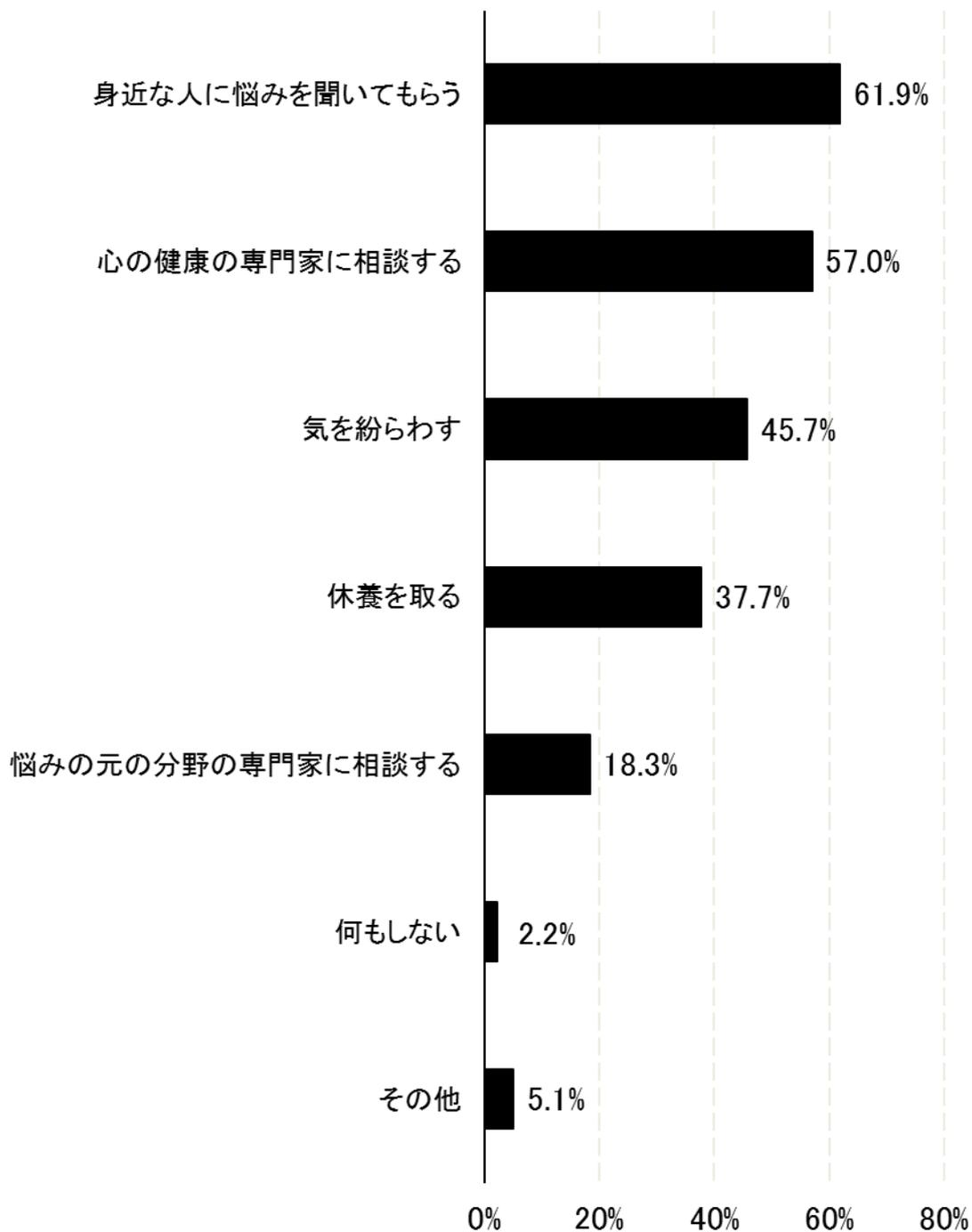


図 86 Q31 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・全体 N=1227）

Q31の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、男女別で見ると、「身近な人に悩みを聞いてもらう」が男女で差があり、男性よりも女性の方が8.1ポイント高い（図87）。

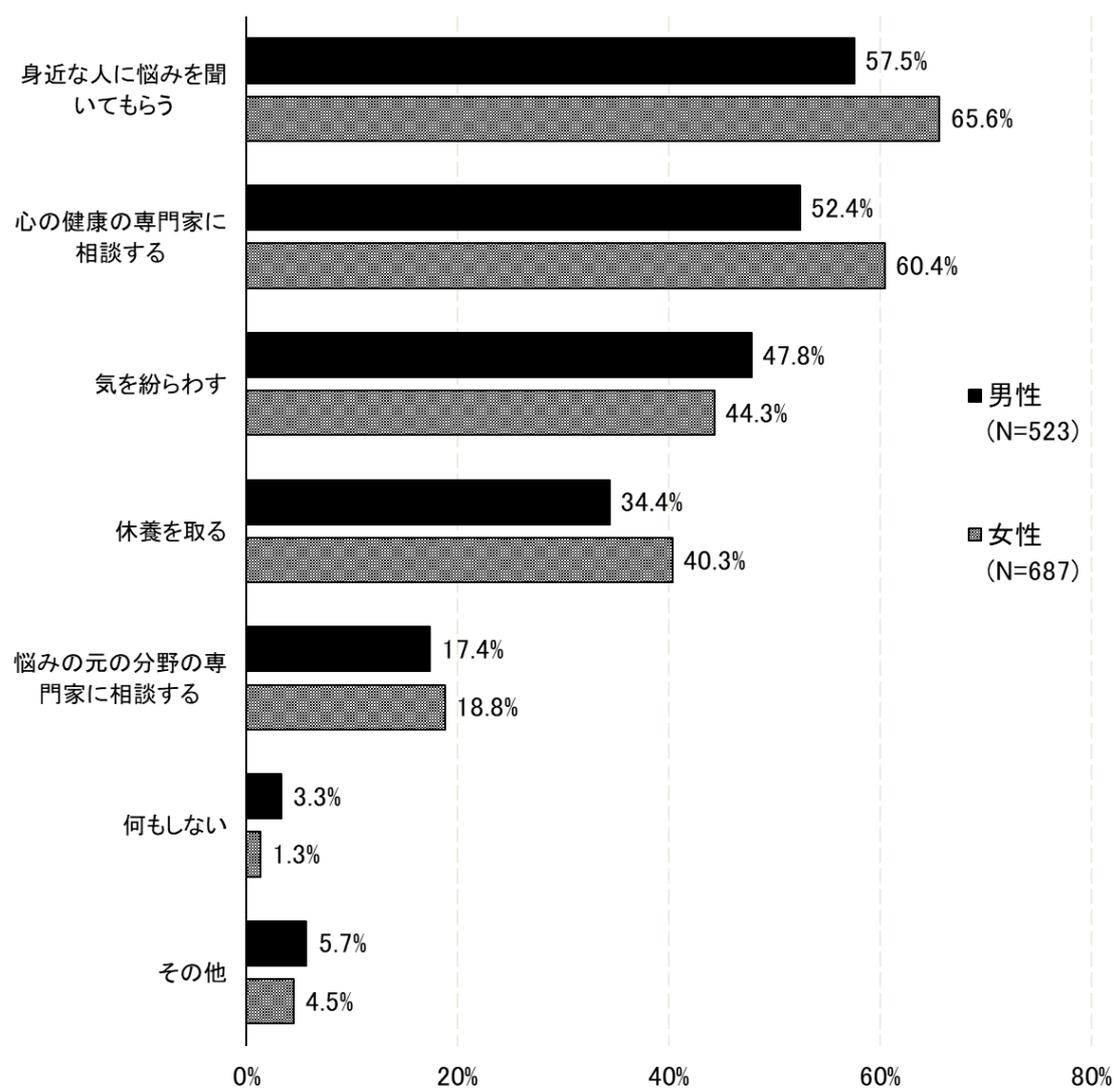


図 87 Q31 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・男女別）

Q31の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、年代別で見ると、「身近な人に悩みを聞いてもらう」に関しては、10・20代が68.9%と最も高い。反対に、40代が58.0%と最も低い。(図88)。

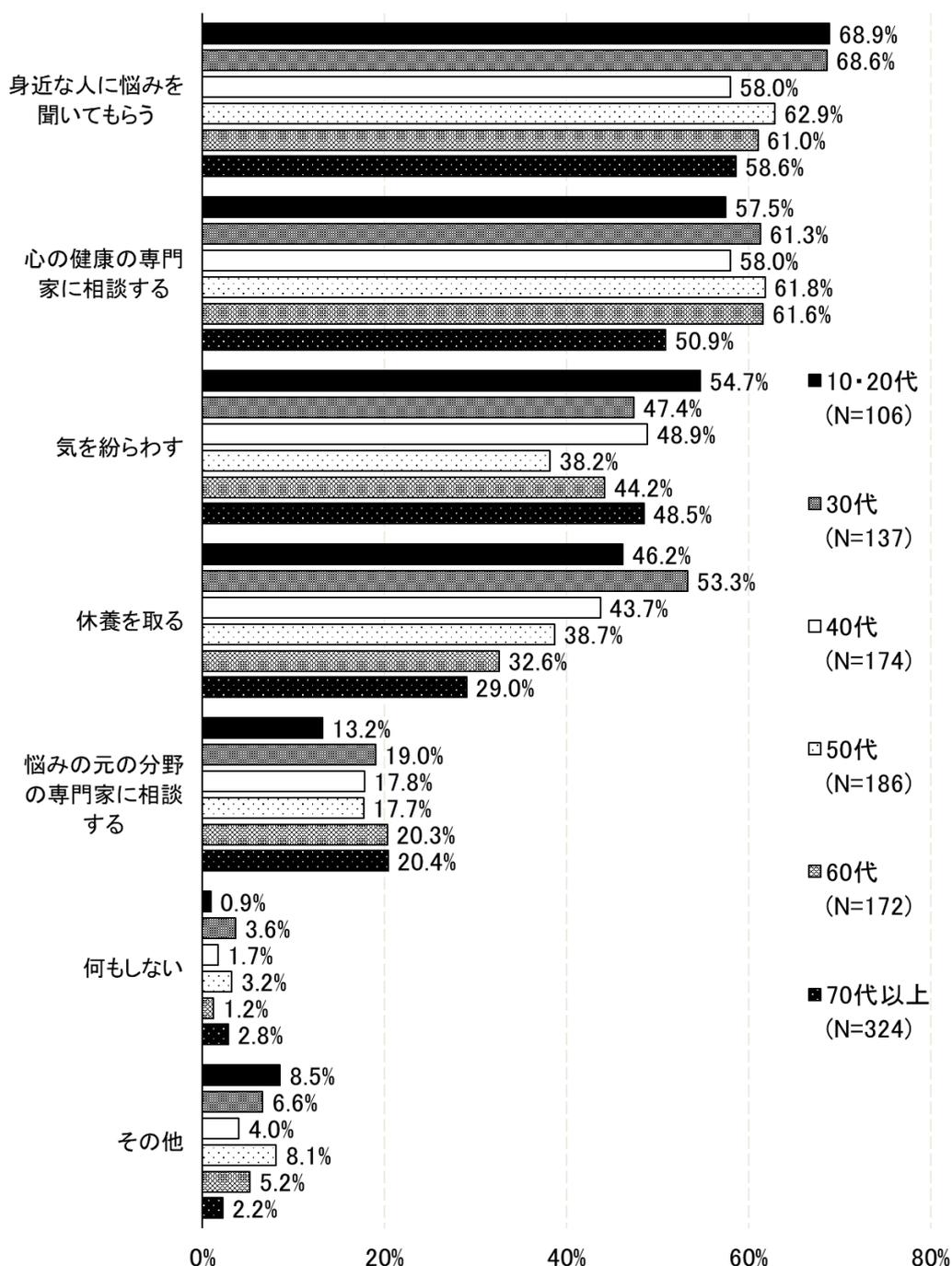


図 88 Q31 自殺したい気持ちを乗り越える方法 (複数回答・年代別)

Q32の「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知に関して、年代別で見ると、「知らない」と回答した人の割合は30代が97.1%と最も高い。反対に、70代以上が76.5%と最も低い（図89）。

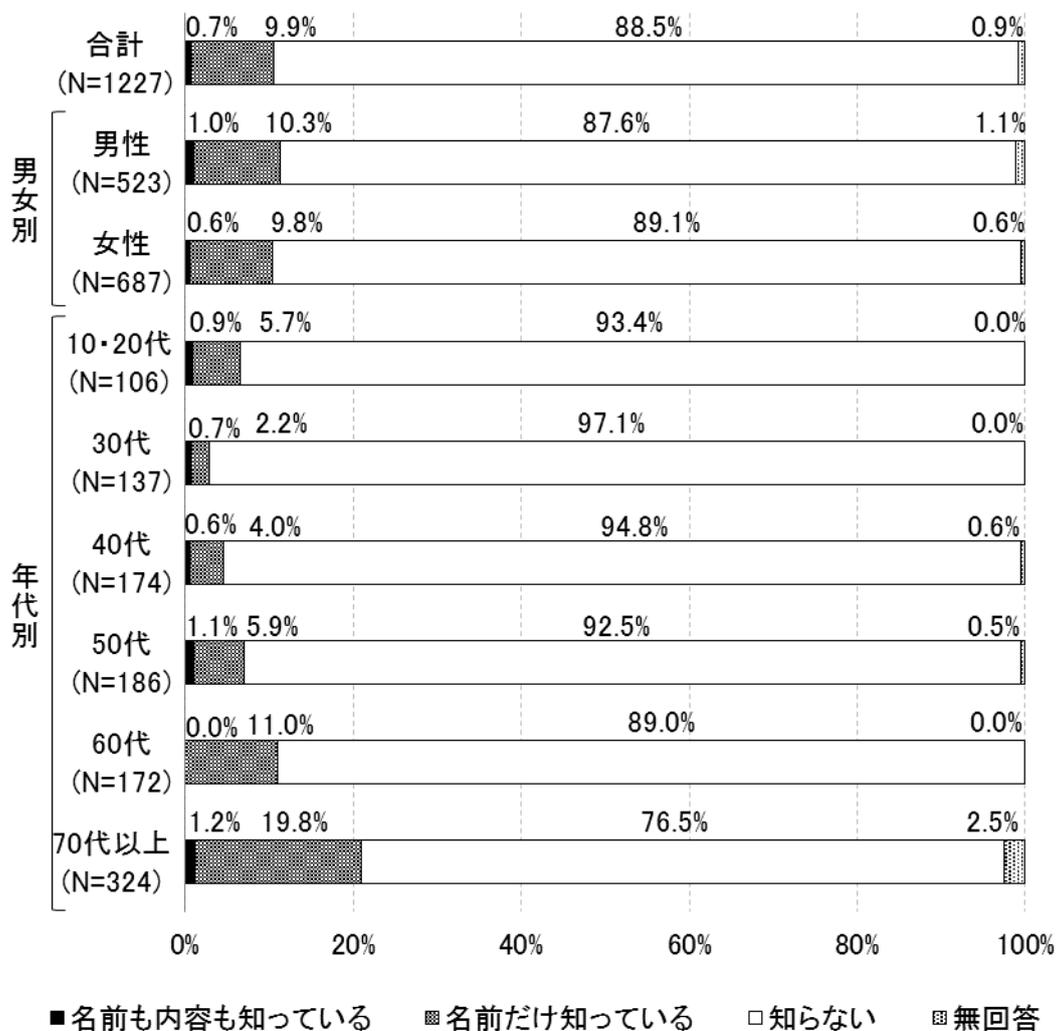


図89 Q32 「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知

Q33 の高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行政改革に取り組むべきかに関して、男女別・年代別のすべての層で、7 割以上の人々が「感じる」または「やや感じる」と回答している。年代別で見ると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 30 代が 84.7% と最も高い。反対に、70 代以上が 77.2% と最も低い（図 90）。

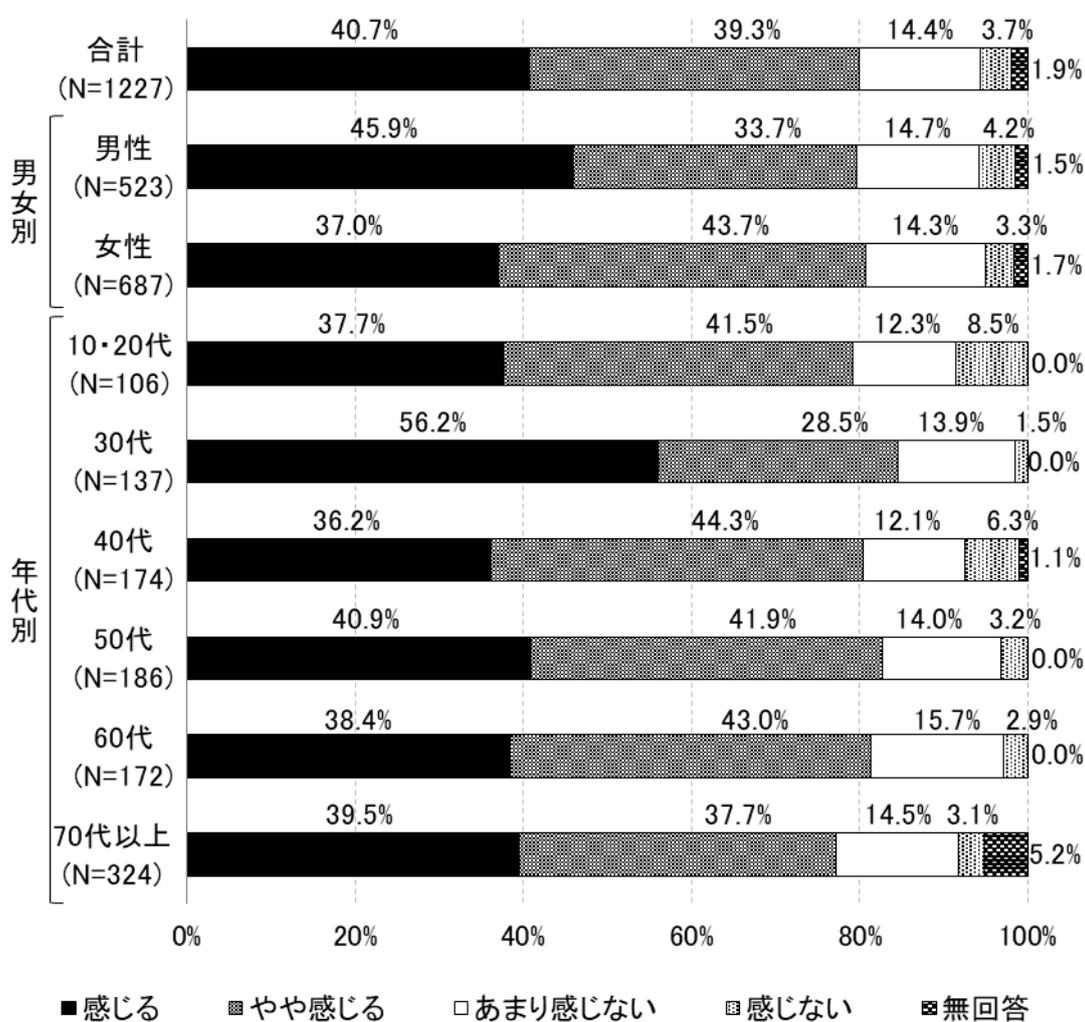


図 90 Q33 高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行政改革に取り組むべきか

Q34①の市の仕事のうち最近良くなってきたものに関して、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」が31.4%と最も高く、「公園の整備や自然・緑の保全」が25.4%と続く（図91）。

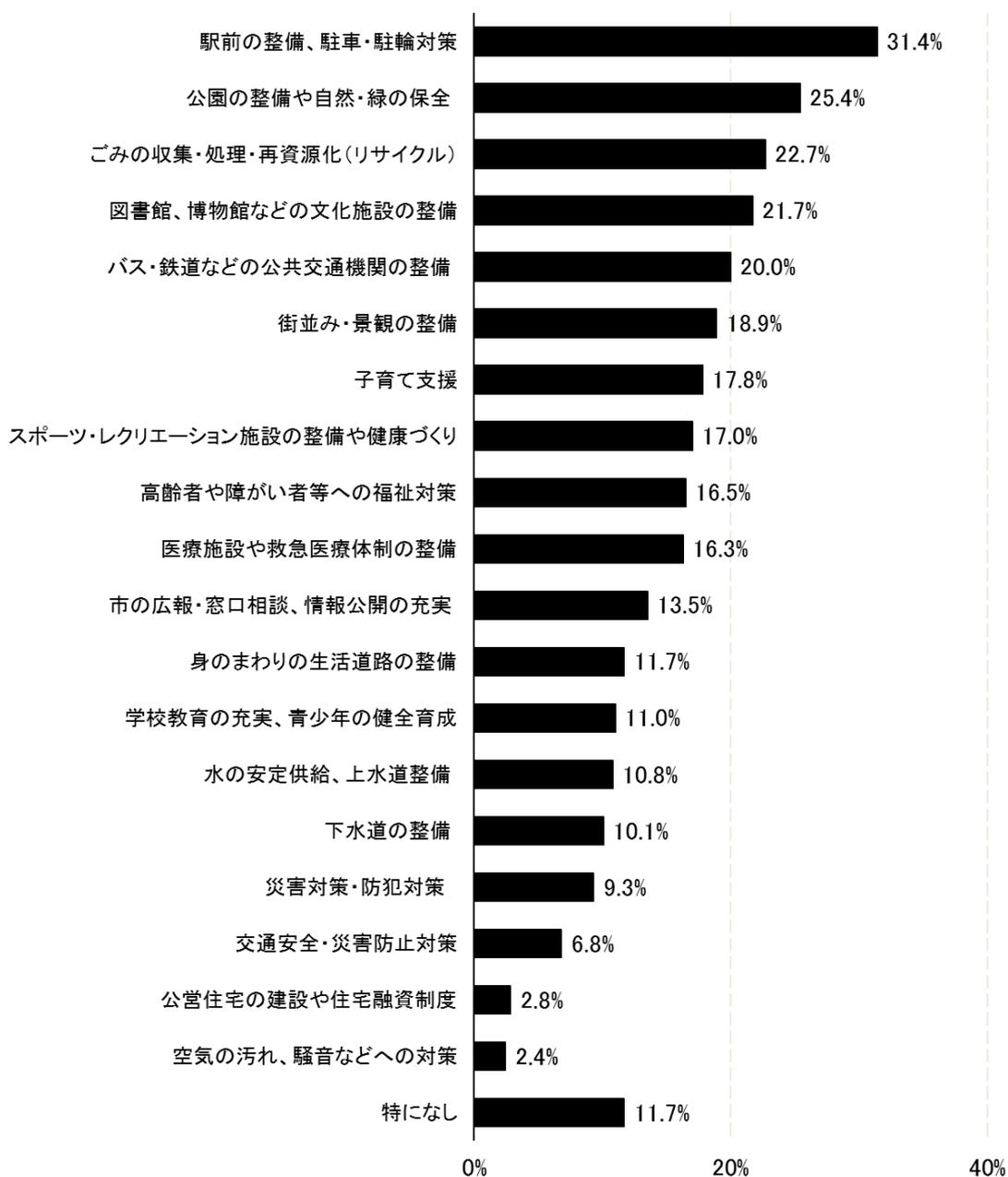


図91 Q34① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・全体 N=1227）

Q34①の市の仕事のうち最近良くなってきたものに関して、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」は男女で同程度の割合である。また「子育て支援」で男女差が最も大きく、女性よりも男性の方が6.3ポイント低い（図 92）。

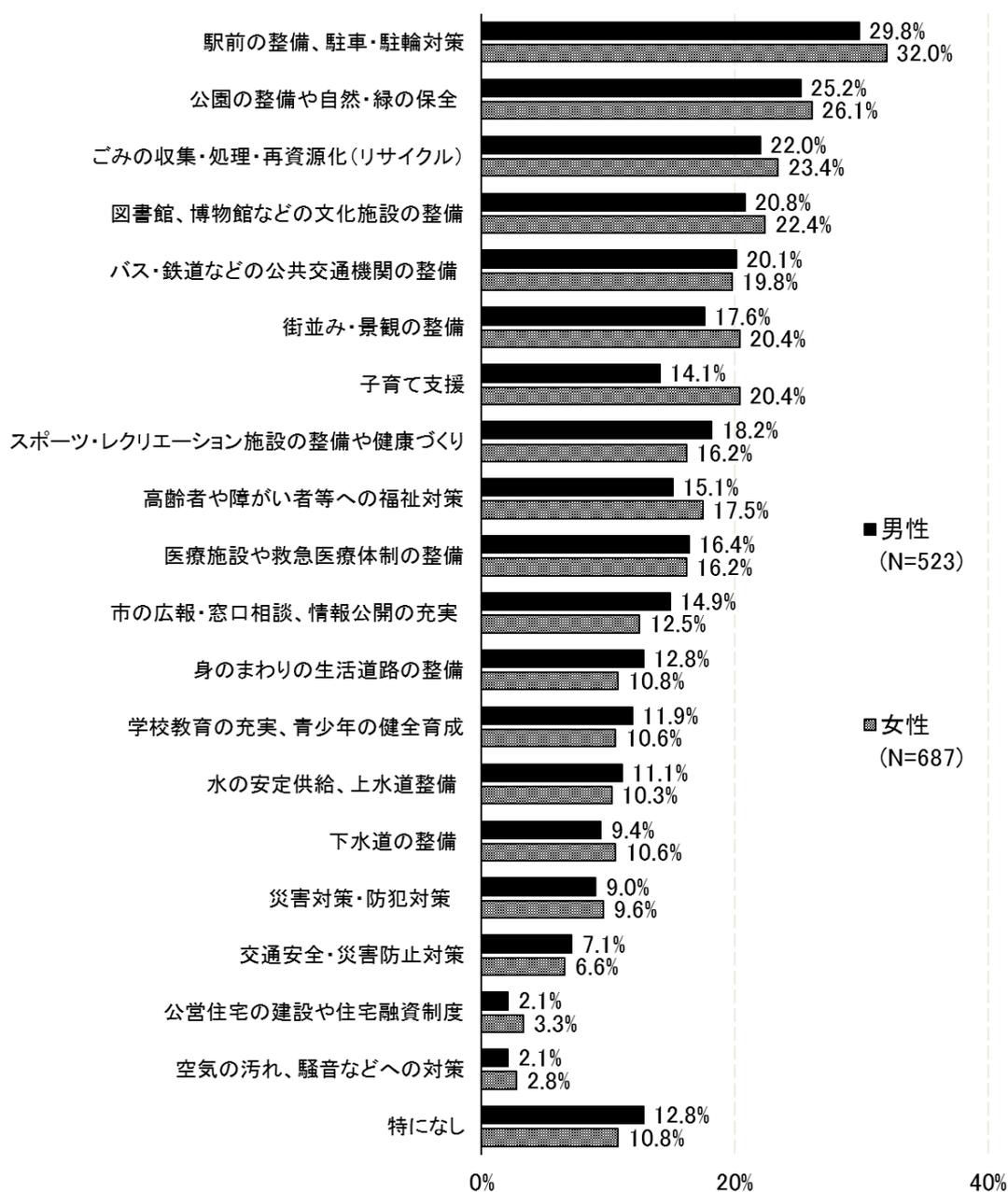


図 92 Q34① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・男女別）

Q34①の市の仕事のうち最近良くなってきたものを年代別で見ると、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」は、60代で34.9%と最も高い。反対に10・20代では25.5%と最も低い（表5、図93）。

表5 Q34① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・年代別）

	(%)						
	駅前の整備、駐 車・駐輪対策	公園の整備や 自然・緑の保全	ごみの収集・処 理・再資源化 (リサイクル)	図書館、博物館 などの文化施 設の整備	バス・鉄道など の公共交通機 関の整備	街並み・景観の 整備	子育て支援
10・20代 (N=106)	25.5	25.5	13.2	20.8	25.5	24.5	9.4
30代 (N=137)	27.0	28.5	7.3	14.6	12.4	21.2	21.2
40代 (N=174)	32.8	30.5	13.8	20.7	19.5	21.3	25.9
50代 (N=186)	29.0	25.8	18.3	23.1	21.0	21.0	19.9
60代 (N=172)	34.9	25.0	31.4	24.4	17.4	19.8	17.4
70代以上 (N=324)	34.6	23.1	37.0	24.7	24.4	13.6	14.8

	(%)						
	スポーツ・レクリ エーション施設 の整備や健康 づくり	高齢者や障が い者等への福 祉対策	医療施設や救 急医療体制の 整備	市の広報・窓口 相談、情報公開 の充実	身のまわりの生 活道路の整備	学校教育の充 実、青少年の健 全育成	水の安定供給、 上水道整備
10・20代 (N=106)	13.2	10.4	8.5	5.7	15.1	8.5	5.7
30代 (N=137)	12.4	4.4	11.7	13.9	10.9	10.2	5.1
40代 (N=174)	11.5	7.5	10.9	9.8	13.8	14.9	5.2
50代 (N=186)	14.5	12.9	17.2	11.3	14.5	10.8	8.6
60代 (N=172)	19.8	14.0	18.6	14.5	7.0	6.4	9.9
70代以上 (N=324)	22.2	31.2	23.8	20.1	13.0	14.2	19.4

	(%)						
	下水道の整備	災害対策・防犯 対策	交通安全・災害 防止対策	公営住宅の建 設や住宅融資 制度	空気の汚れ、騒 音などへの 対策	特になし	
10・20代 (N=106)	5.7	3.8	5.7	0.9	3.8	25.5	
30代 (N=137)	2.9	2.9	3.6	1.5	2.2	20.4	
40代 (N=174)	5.2	6.3	5.2	2.3	1.1	13.2	
50代 (N=186)	8.1	11.3	9.1	4.3	2.7	14.0	
60代 (N=172)	12.2	9.9	5.2	0.6	1.7	9.3	
70代以上 (N=324)	17.3	13.9	9.0	4.0	3.1	4.9	

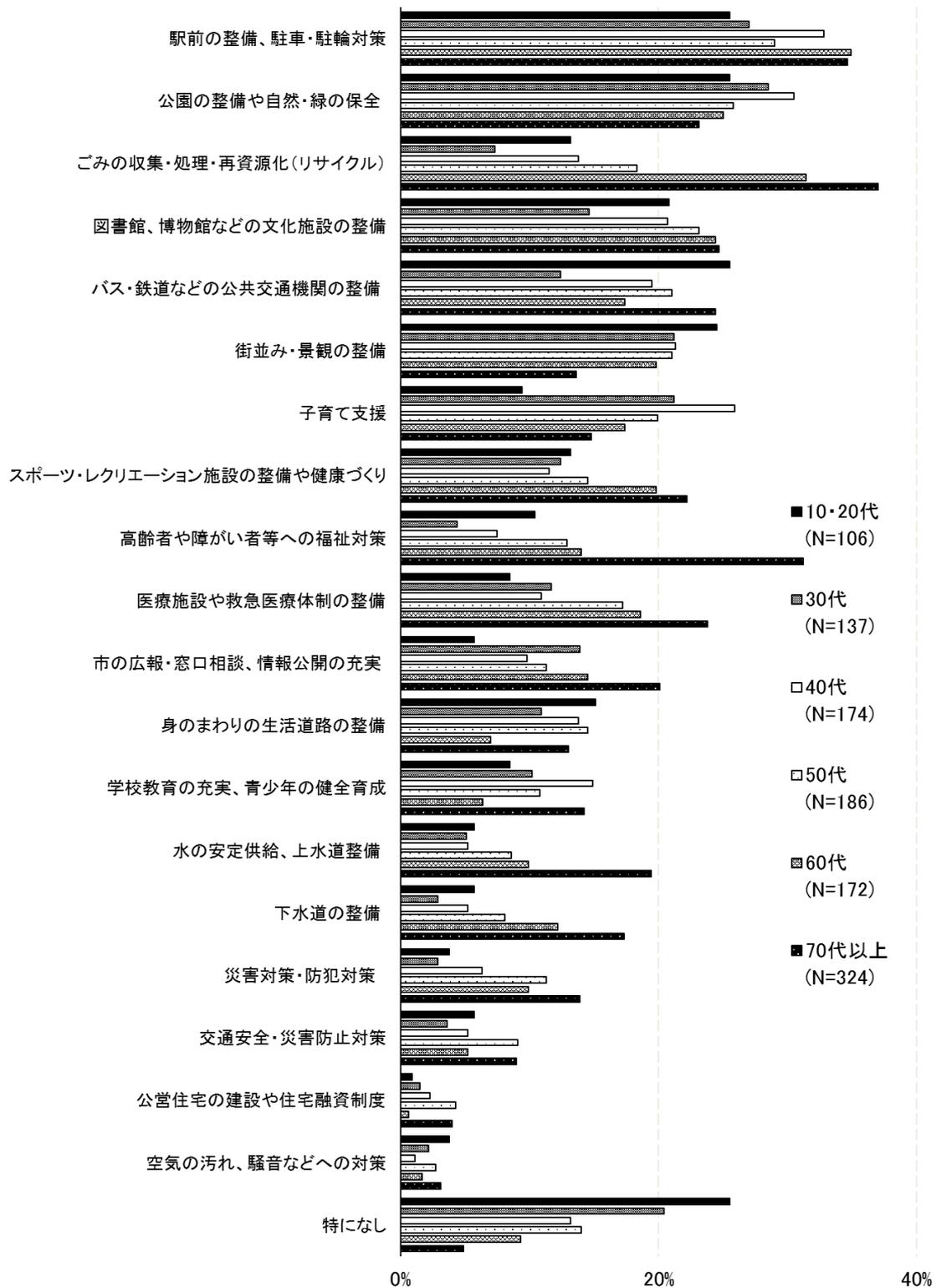


図 93 Q34① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・年代別）

Q34①の市の仕事のうち最近良くなってきたものを居住地域別で見ると、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」について、高槻南地区では、35.0%と最も高くなっており、五領地区では、16.7%と最も低くなっている（表 6、図 94）。

表 6 Q34① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

	(%)						
	駅前の整備、駐車・駐輪対策	公園の整備や自然・緑の保全	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	図書館、博物館などの文化施設の整備	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	街並み・景観の整備	子育て支援
高槻北地区 (N=356)	32.0	30.9	20.2	29.8	20.5	21.6	19.7
高槻南地区 (N=314)	35.0	27.7	26.4	17.5	19.7	20.4	20.1
五領地区 (N=48)	16.7	27.1	14.6	10.4	18.8	18.8	12.5
高槻西地区 (N=196)	32.1	24.0	26.0	23.5	21.9	20.4	18.9
如是・富田地区 (N=234)	29.9	18.4	21.8	19.2	20.5	15.0	13.7
三箇牧地区 (N=31)	19.4	19.4	22.6	9.7	16.1	12.9	12.9

	(%)						
	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	高齢者や障がい者等への福祉対策	医療施設や救急医療体制の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	身のまわりの生活道路の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	水の安定供給、上水道整備
高槻北地区 (N=356)	18.0	14.6	17.4	14.3	12.6	10.1	10.1
高槻南地区 (N=314)	18.5	17.2	18.2	15.6	8.9	12.1	13.1
五領地区 (N=48)	12.5	14.6	6.3	8.3	6.3	8.3	8.3
高槻西地区 (N=196)	16.3	19.4	12.2	12.8	15.8	11.2	13.3
如是・富田地区 (N=234)	15.8	15.0	17.1	12.8	12.0	12.4	9.4
三箇牧地区 (N=31)	19.4	25.8	22.6	16.1	6.5	9.7	3.2

	(%)						
	下水道の整備	災害対策・防犯対策	交通安全・災害防止対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	特になし	
高槻北地区 (N=356)	10.7	7.9	5.9	1.7	2.0	10.7	
高槻南地区 (N=314)	10.5	12.1	7.6	4.5	2.9	11.8	
五領地区 (N=48)	10.4	4.2	2.1	0.0	2.1	22.9	
高槻西地区 (N=196)	11.7	9.7	8.7	3.1	1.0	9.2	
如是・富田地区 (N=234)	8.1	10.3	7.7	3.0	2.6	12.4	
三箇牧地区 (N=31)	16.1	6.5	6.5	3.2	12.9	9.7	

注) 樫田地区の回答者は1人と少数であるため、精度上の理由で調査結果に表示していない。

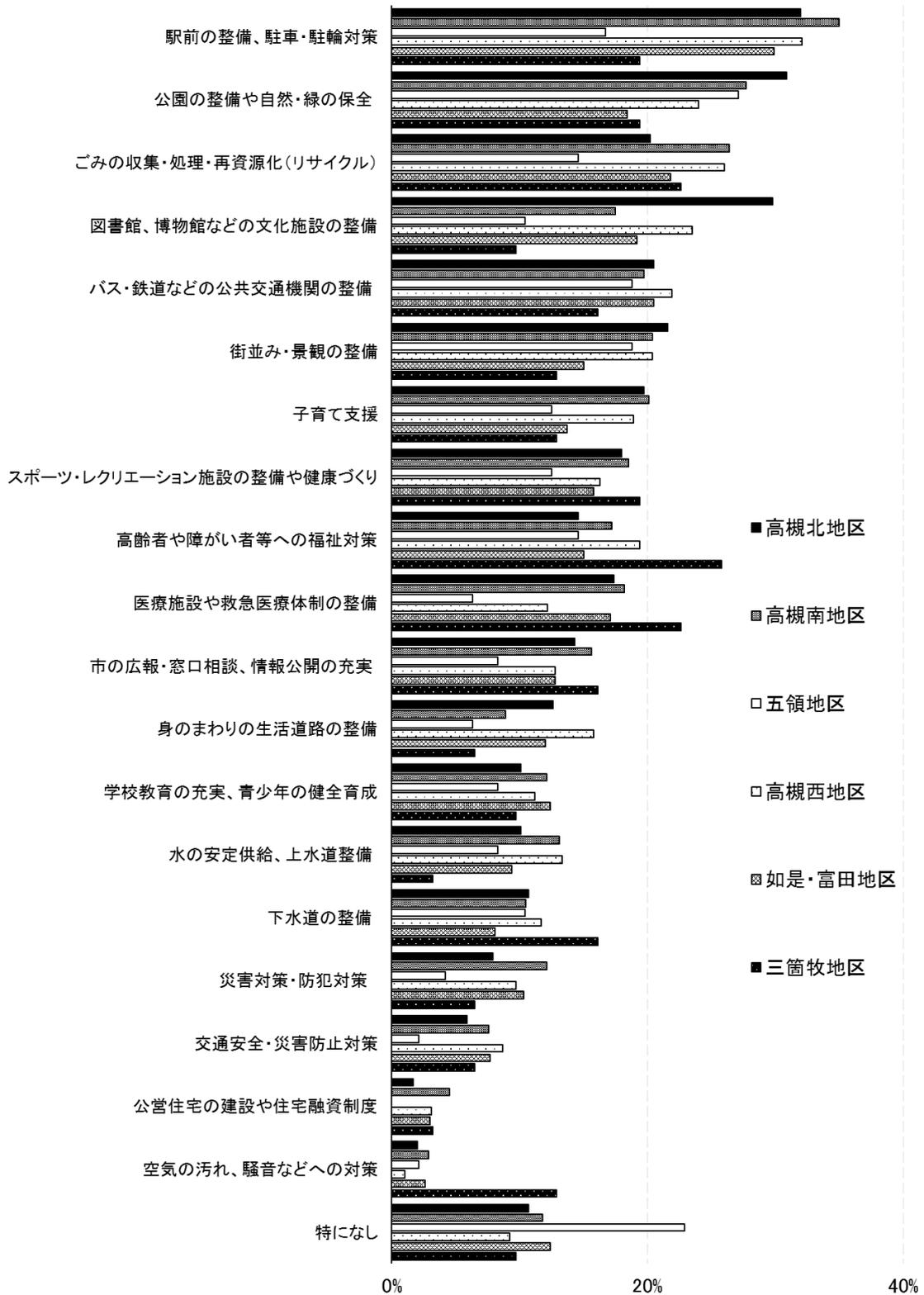


図 94 Q34① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住地域別）

Q34①の市の仕事のうち最近良くなってきたものを居住年数別で見ると、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」は、居住年数5年以上でおおよそ3割以上である（表7、図95）。

表7 Q34①市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住年数別）

	(%)						
	駅前の整備、 駐車・駐輪 対策	公園の整備 や自然・緑の 保全	ごみの収集・ 処理・ 再資源化 (リサイクル)	図書館、博物 館などの文化 施設の整備	バス・鉄道な どの公共交 通機関 の整備	街並み・景観 の整備	子育て支援
1年未満(N=22)	9.1	9.1	4.5	0.0	13.6	4.5	18.2
1年以上3年未満(N=48)	10.4	31.3	14.6	8.3	8.3	18.8	16.7
3年以上5年未満(N=44)	13.6	22.7	4.5	9.1	9.1	15.9	18.2
5年以上10年未満(N=67)	28.4	35.8	14.9	16.4	17.9	16.4	20.9
10年以上20年未満(N=188)	34.0	28.2	16.5	16.0	19.7	22.3	23.4
20年以上30年未満(N=189)	29.1	26.5	15.9	25.4	22.2	24.9	13.2
30年以上40年未満(N=213)	38.0	23.0	23.9	24.4	23.9	16.0	17.8
40年以上50年未満(N=256)	33.2	23.8	28.9	22.7	18.8	16.8	16.8
50年以上(N=191)	34.0	25.1	37.7	30.4	22.5	19.4	17.8

	(%)						
	スポーツ・レ クリエーション 施設の整備 や健康づくり	高齢者や障 がい者等へ の福祉対策	医療施設や 救急医療体 制の整備	市の広報・窓 口相談、情報 公開の充実	身のまわりの 生活道路の 整備	学校教育の 充実、青少年 の健全育成	水の安定供 給、上水道 整備
1年未満(N=22)	0.0	9.1	0.0	0.0	4.5	13.6	4.5
1年以上3年未満(N=48)	4.2	8.3	8.3	4.2	6.3	8.3	6.3
3年以上5年未満(N=44)	6.8	4.5	2.3	18.2	15.9	6.8	6.8
5年以上10年未満(N=67)	11.9	6.0	16.4	6.0	11.9	9.0	4.5
10年以上20年未満(N=188)	14.9	14.4	13.3	9.0	11.7	16.0	5.3
20年以上30年未満(N=189)	15.3	12.2	12.2	8.5	12.2	10.6	7.4
30年以上40年未満(N=213)	20.7	15.5	15.5	15.5	10.3	7.5	13.1
40年以上50年未満(N=256)	19.9	19.5	22.7	16.8	10.9	8.2	11.3
50年以上(N=191)	22.0	28.8	23.0	22.5	14.1	16.8	21.5

	(%)						
	下水道の 整備	災害対策・防 犯対策	交通安全・災 害防止対策	公営住宅の 建設や住宅 融資制度	空気の汚れ、 騒音などへの 対策	特になし	
1年未満(N=22)	4.5	0.0	0.0	4.5	0.0	59.1	
1年以上3年未満(N=48)	4.2	0.0	2.1	2.1	0.0	27.1	
3年以上5年未満(N=44)	4.5	0.0	0.0	2.3	6.8	22.7	
5年以上10年未満(N=67)	4.5	7.5	3.0	1.5	1.5	11.9	
10年以上20年未満(N=188)	3.7	10.6	9.0	3.7	1.6	13.8	
20年以上30年未満(N=189)	3.7	5.8	4.8	1.6	1.1	14.8	
30年以上40年未満(N=213)	12.2	8.0	4.2	1.9	2.3	7.5	
40年以上50年未満(N=256)	12.9	12.1	9.4	2.7	3.5	8.2	
50年以上(N=191)	22.5	15.7	11.5	4.7	3.7	4.7	

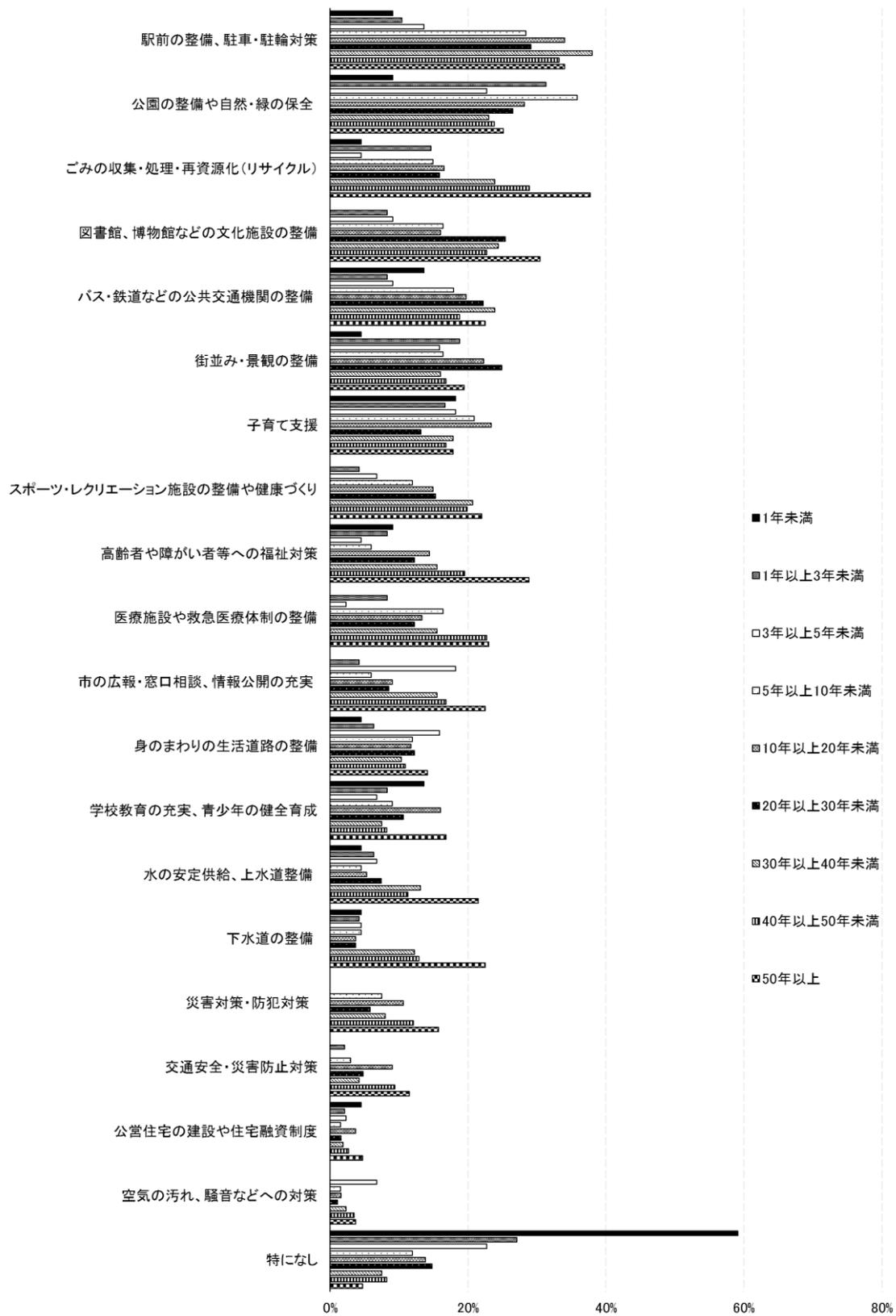


図 95 Q34① 市の仕事のうち最近良くなってきたもの（複数回答・居住年数別）

Q34②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、「医療施設や救急医療体制の整備」が24.1%と最も高く、「災害対策・防犯対策」が21.2%と続く（図96）。

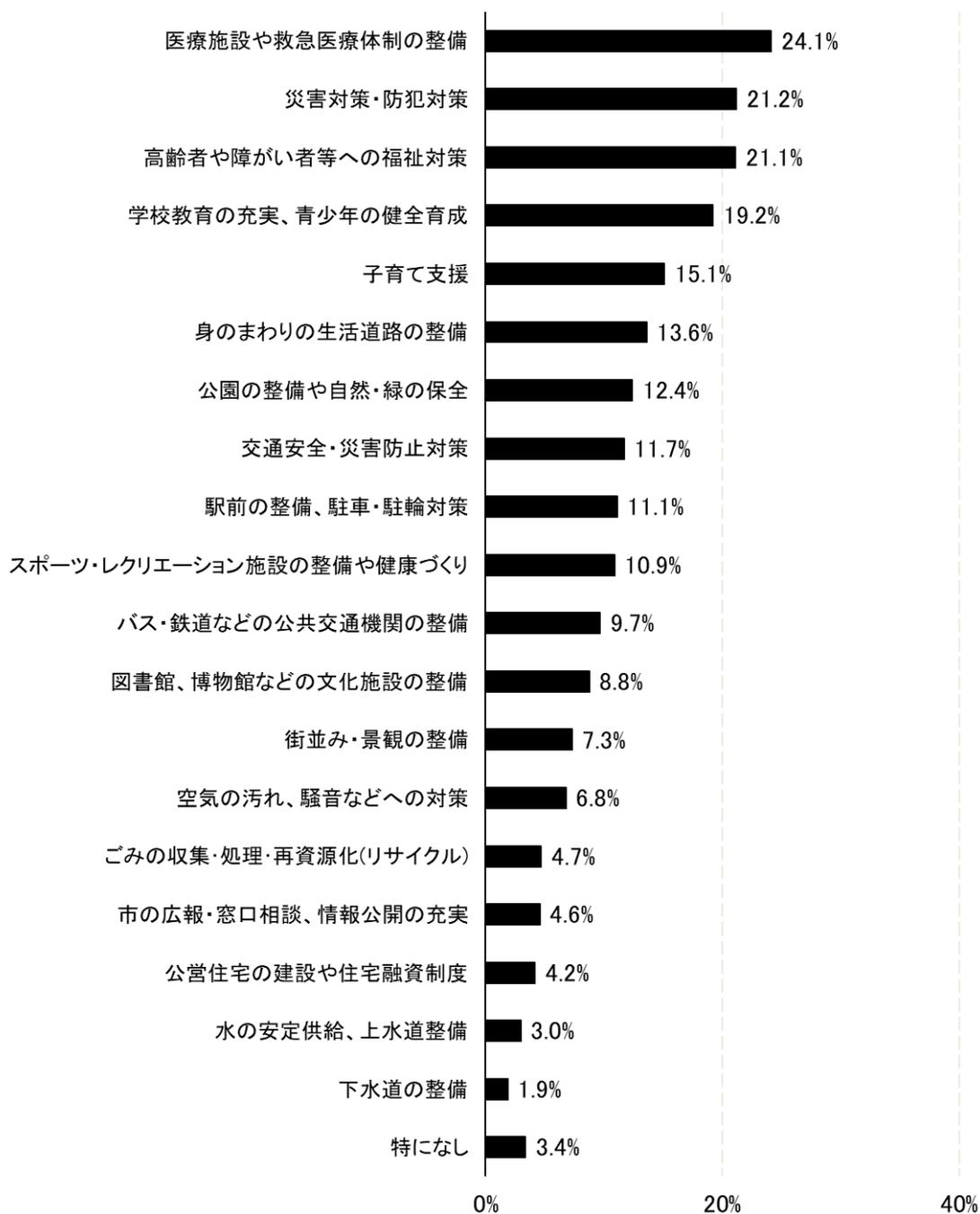


図96 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・全体 N=1227）

Q34②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを男女別で見ると、「医療施設や救急医療制度の整備」について、男女に差があり、男性よりも女性の方が 3.8 ポイント高くなっている。「公園の整備や自然・緑の保全」と「スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり」についても、男女に差があり、女性よりも男性の方が 5 ポイント程度高い（図 97）。

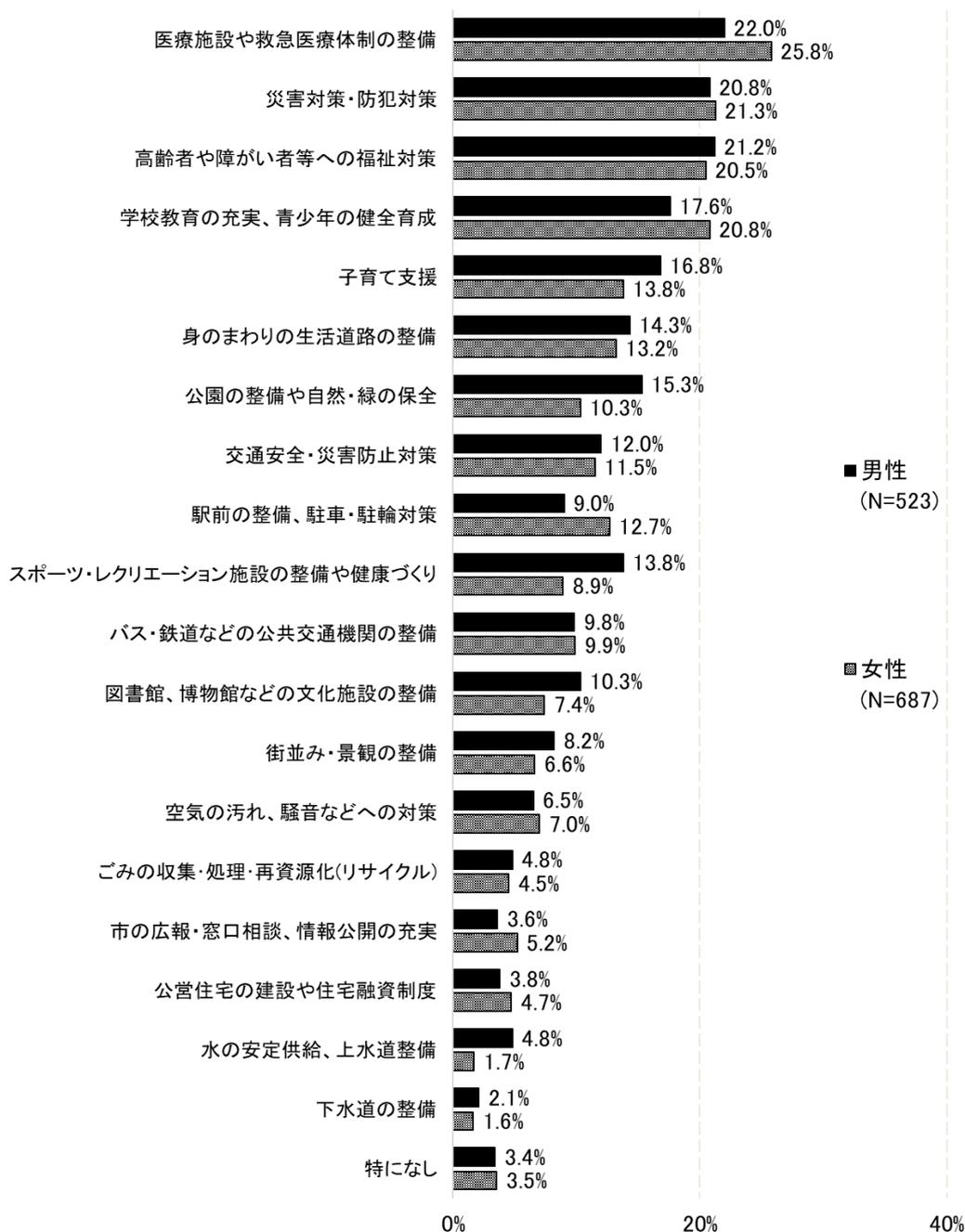


図 97 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・男女別）

Q34②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを年代別で見ると、60代では「医療施設や救急医療体制の整備」が29.7%と最も高く、30代では「子育て支援」が45.3%と最も高い（表8、図98）。

表8 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

	医療施設や救急医療体制の整備	災害対策・防犯対策	高齢者や障がい者等への福祉対策	学校教育の充実、青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	公園の整備や自然・緑の保全
10・20代 (N=106)	15.1	17.0	8.5	15.1	25.5	11.3	12.3
30代 (N=137)	14.6	18.2	8.0	35.0	45.3	16.8	15.3
40代 (N=174)	20.7	24.1	16.7	25.9	16.7	15.5	9.8
50代 (N=186)	26.9	28.5	19.4	18.3	9.1	11.3	14.0
60代 (N=172)	29.7	25.0	26.2	11.0	11.0	18.0	19.8
70代以上 (N=324)	28.4	17.3	30.9	15.7	5.9	13.6	8.3

	交通安全・災害防止対策	駅前の整備、駐車・駐輪対策	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策
10・20代 (N=106)	14.2	16.0	18.9	9.4	10.4	8.5	10.4
30代 (N=137)	16.1	13.1	13.1	8.8	10.9	5.1	5.8
40代 (N=174)	18.4	6.9	14.9	7.5	9.8	7.5	6.9
50代 (N=186)	11.3	13.4	8.6	11.3	9.7	9.1	8.1
60代 (N=172)	9.9	13.4	9.9	9.9	7.6	6.4	4.1
70代以上 (N=324)	6.5	9.0	7.1	9.6	7.7	7.7	7.1

	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上下水道整備	下水道の整備	特になし
10・20代 (N=106)	1.9	4.7	1.9	0.9	0.9	9.4
30代 (N=137)	2.2	0.7	5.1	1.5	0.7	1.5
40代 (N=174)	8.0	1.1	3.4	6.3	0.6	4.0
50代 (N=186)	4.8	4.3	4.8	3.2	2.2	4.8
60代 (N=172)	5.2	5.8	4.1	0.0	3.5	3.5
70代以上 (N=324)	4.3	7.7	5.2	4.6	2.5	2.2

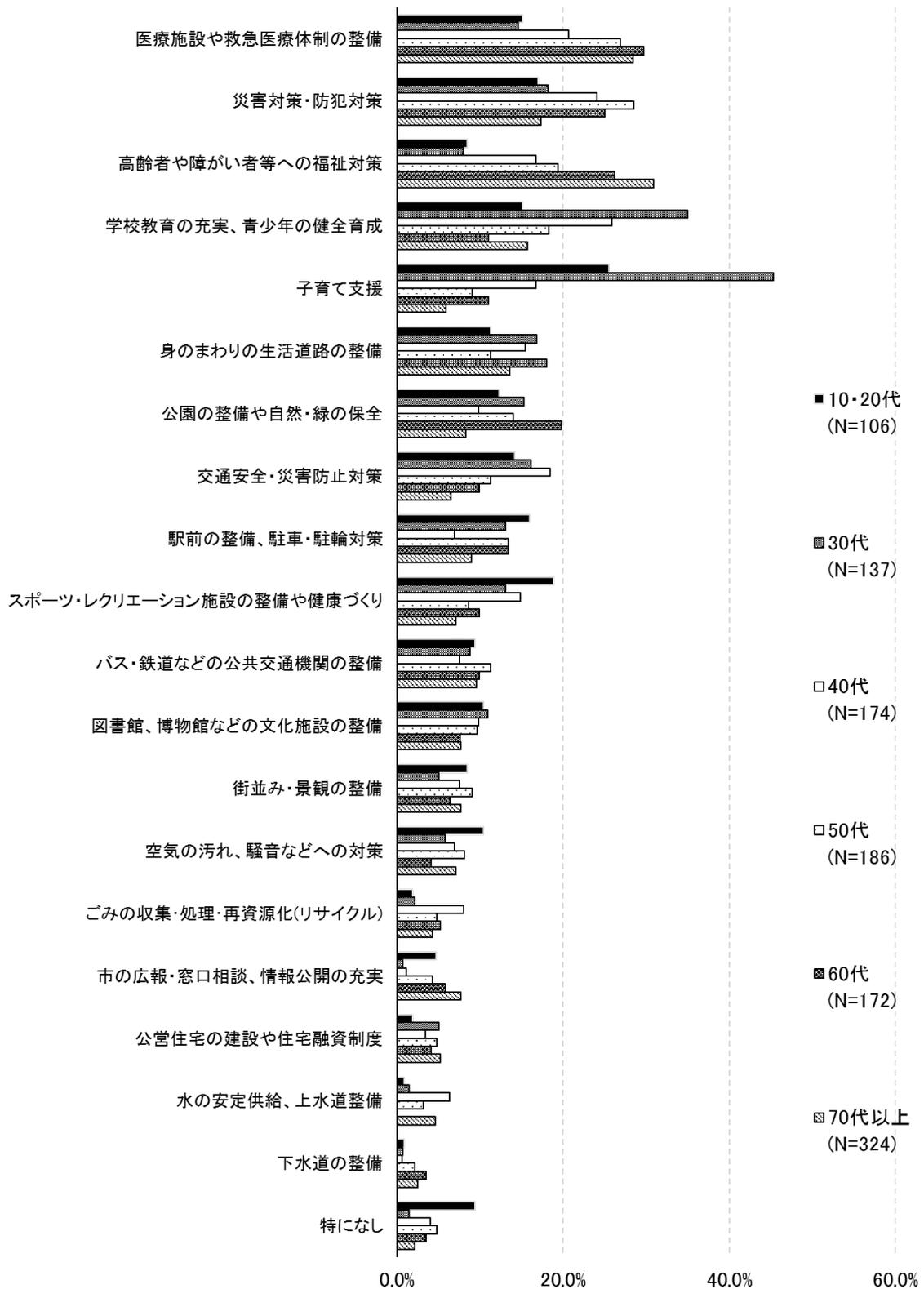


図 98 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

Q34②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを居住地域別で見ると、「医療施設や救急医療体制の整備」について、如是・富田地区では 29.1%と最も高く、高槻南地区では 21.0%と最も低い（表 9、図 99）。

表 9 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

	（%）						
	医療施設や救急医療体制の整備	災害対策・防犯対策	高齢者や障がい者等への福祉対策	学校教育の充実、青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	公園の整備や自然・緑の保全
高槻北地区 (N=356)	21.6	21.3	20.2	21.6	16.9	16.3	12.6
高槻南地区 (N=314)	21.0	22.0	23.2	18.5	13.1	13.4	13.1
五領地区 (N=48)	27.1	18.8	12.5	22.9	22.9	4.2	12.5
高槻西地区 (N=196)	27.6	24.0	23.5	18.9	16.3	12.2	11.7
如是・富田地区 (N=234)	29.1	20.5	19.2	18.4	13.7	13.2	12.4
三箇牧地区 (N=31)	29.0	6.5	35.5	9.7	9.7	9.7	12.9

	（%）						
	交通安全・災害防止対策	駅前の整備、駐車・駐輪対策	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備	空気の汚れ、騒音などへの対策
高槻北地区 (N=356)	11.0	10.1	11.8	10.7	10.7	7.9	5.1
高槻南地区 (N=314)	11.5	13.1	12.1	6.7	8.0	7.3	8.6
五領地区 (N=48)	20.8	10.4	14.6	12.5	22.9	8.3	14.6
高槻西地区 (N=196)	14.3	11.2	13.8	13.8	6.6	9.2	4.6
如是・富田地区 (N=234)	10.3	10.7	6.0	8.5	6.0	5.6	7.3
三箇牧地区 (N=31)	6.5	12.9	12.9	16.1	6.5	6.5	6.5

	（%）						
	ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	公営住宅の建設や住宅融資制度	水の安定供給、上下水道整備	下水道の整備	特になし	
高槻北地区 (N=356)	5.9	3.1	3.9	4.2	1.4	2.5	
高槻南地区 (N=314)	4.8	5.4	5.1	2.9	1.9	4.1	
五領地区 (N=48)	6.3	6.3	2.1	0.0	0.0	4.2	
高槻西地区 (N=196)	3.1	4.6	3.1	2.6	2.6	2.6	
如是・富田地区 (N=234)	3.0	4.7	5.1	3.0	2.6	3.8	
三箇牧地区 (N=31)	16.1	6.5	9.7	0.0	0.0	0.0	

注) 三箇牧地区の回答者は1人と少数であるため、精度上の理由で調査結果に表示していない。

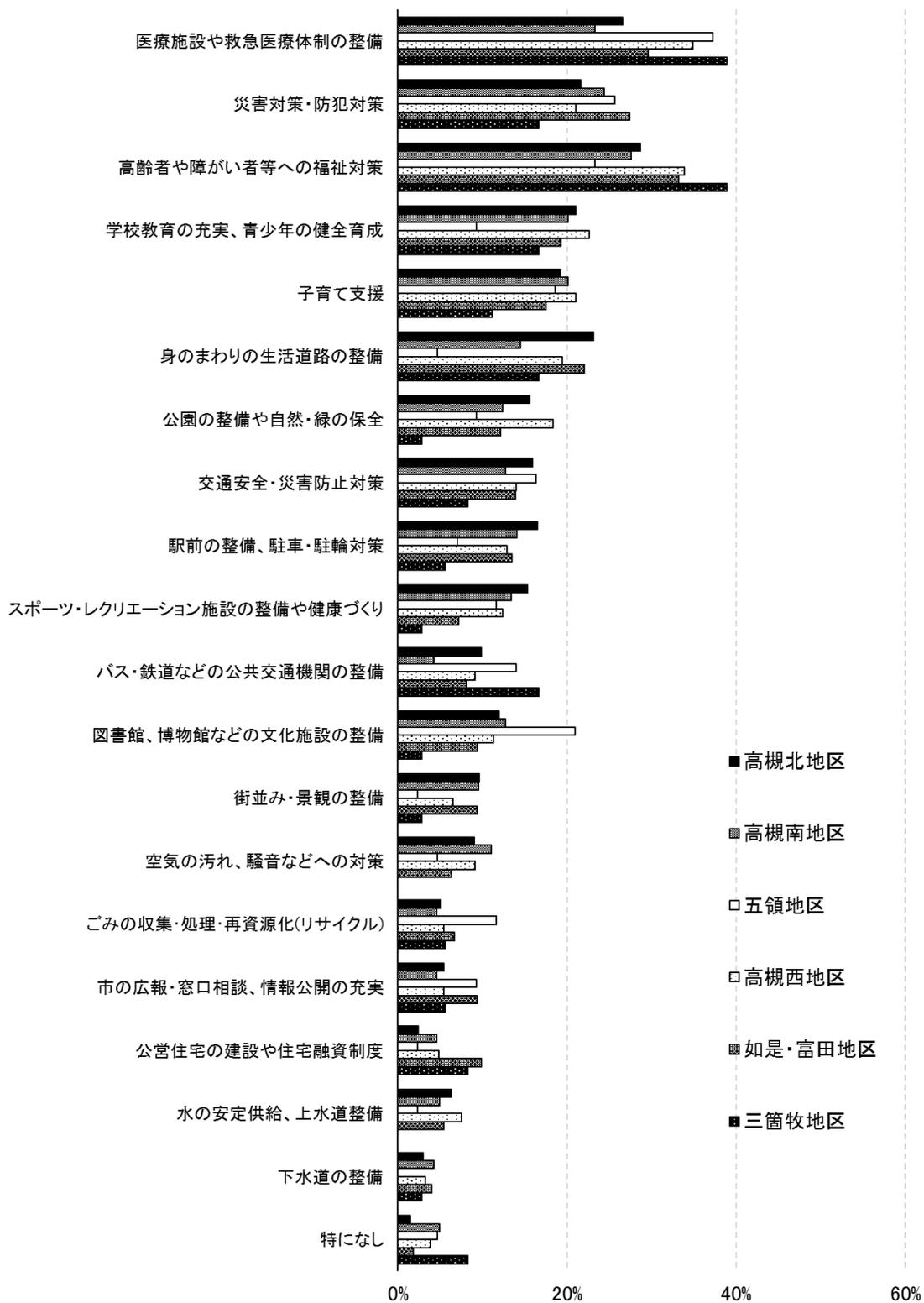


図 99 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

Q34②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものを居住年数別で見ると、「医療体制や救急医療制度の整備」について居住年数 50 年以上で 31.9%と最も高く、居住年数 1 年未満では 9.1%と最も低い（表 10, 図 100）。

表 10 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

	(%)						
	医療施設や 救急医療体 制の整備	災害対策・防 犯対策	高齢者や障 がい者等へ の福祉対策	学校教育の 充実、青少年 の健全育成	子育て支援	身のまわりの 生活道路の 整備	公園の整備 や自然・緑の 保全
1年未満(N=22)	9.1	13.6	9.1	13.6	27.3	9.1	4.5
1年以上3年未満(N=48)	14.6	22.9	8.3	18.8	33.3	12.5	6.3
3年以上5年未満(N=44)	20.5	13.6	11.4	18.2	38.6	11.4	15.9
5年以上10年未満(N=67)	14.9	14.9	19.4	40.3	35.8	19.4	14.9
10年以上20年未満(N=188)	20.2	24.5	13.3	20.7	18.6	14.4	13.8
20年以上30年未満(N=189)	22.2	21.7	14.8	15.3	11.1	11.6	15.9
30年以上40年未満(N=213)	23.5	21.6	26.8	19.2	12.2	13.6	12.2
40年以上50年未満(N=256)	29.7	20.7	27.7	18.4	12.1	18.0	11.7
50年以上(N=191)	31.9	22.0	27.7	16.8	4.7	8.4	9.9

	(%)						
	交通安全・災 害防止対策	駅前の整備、 駐車・駐輪 対策	スポーツ・レ クリエーション 施設の整備 や健康づくり	バス・鉄道な どの公共 交通機関 の整備	図書館、博物 館などの文化 施設の整備	街並み・景観 の整備	空気の汚れ、 騒音などへの 対策
1年未満(N=22)	9.1	9.1	0.0	0.0	13.6	9.1	9.1
1年以上3年未満(N=48)	14.6	22.9	10.4	14.6	4.2	2.1	4.2
3年以上5年未満(N=44)	11.4	18.2	11.4	6.8	9.1	6.8	11.4
5年以上10年未満(N=67)	10.4	4.5	19.4	9.0	16.4	7.5	7.5
10年以上20年未満(N=188)	13.3	10.1	16.0	8.5	12.8	6.9	4.8
20年以上30年未満(N=189)	13.8	13.8	16.4	12.7	7.9	8.5	10.6
30年以上40年未満(N=213)	9.9	8.9	10.3	9.9	7.5	8.9	8.0
40年以上50年未満(N=256)	11.7	10.2	8.6	9.4	7.8	5.9	5.1
50年以上(N=191)	10.5	11.0	3.1	9.4	6.3	7.3	4.7

	(%)					
	ごみの収集・ 処理・ 再資源化 (リサイクル)	市の広報・窓 口相談、情報 公開の充実	公営住宅の 建設や住宅 融資制度	水の安定供 給、上水道 整備	下水道の 整備	特になし
1年未満(N=22)	13.6	9.1	9.1	4.5	4.5	22.7
1年以上3年未満(N=48)	6.3	2.1	8.3	2.1	0.0	4.2
3年以上5年未満(N=44)	6.8	4.5	2.3	0.0	0.0	4.5
5年以上10年未満(N=67)	0.0	0.0	6.0	1.5	0.0	1.5
10年以上20年未満(N=188)	6.4	5.3	3.7	3.2	0.0	4.8
20年以上30年未満(N=189)	3.7	1.6	5.3	3.7	2.6	4.8
30年以上40年未満(N=213)	3.8	8.0	2.3	4.2	3.3	1.9
40年以上50年未満(N=256)	4.3	3.1	5.5	2.7	2.7	2.0
50年以上(N=191)	5.8	6.8	2.6	2.6	1.6	2.6

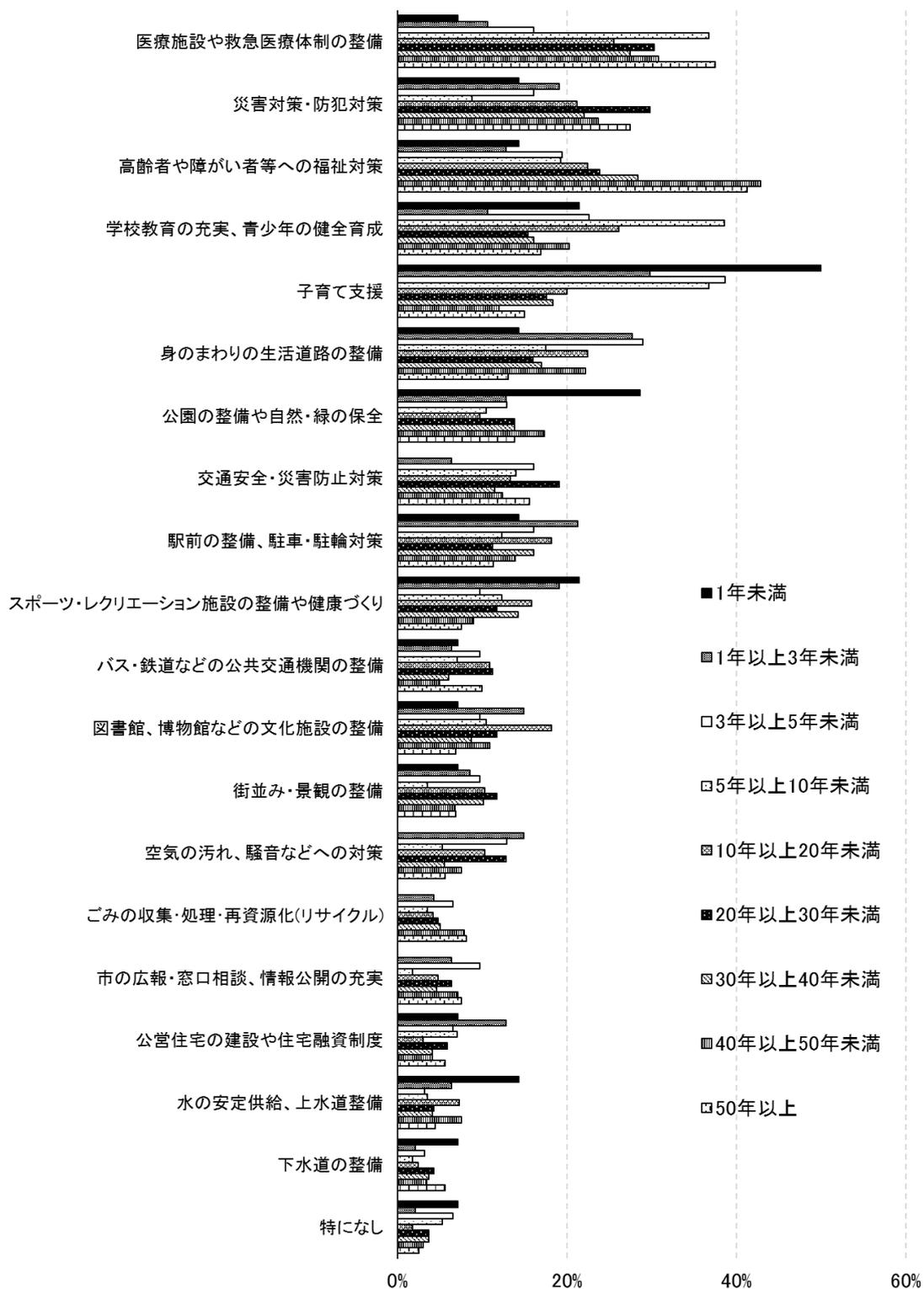


図 100 Q34② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

Q35 のマスクの備蓄意図に関して、男女別で見ると、「とても感じた」と回答した割合は男女に差があり、男性よりも女性の方が 16.1 ポイント高い。年代別で見ると、「とても感じた」と回答した人の割合は 30 代が 59.1%と最も高く、70 代以上で 36.1%と最も低い（図 101）。

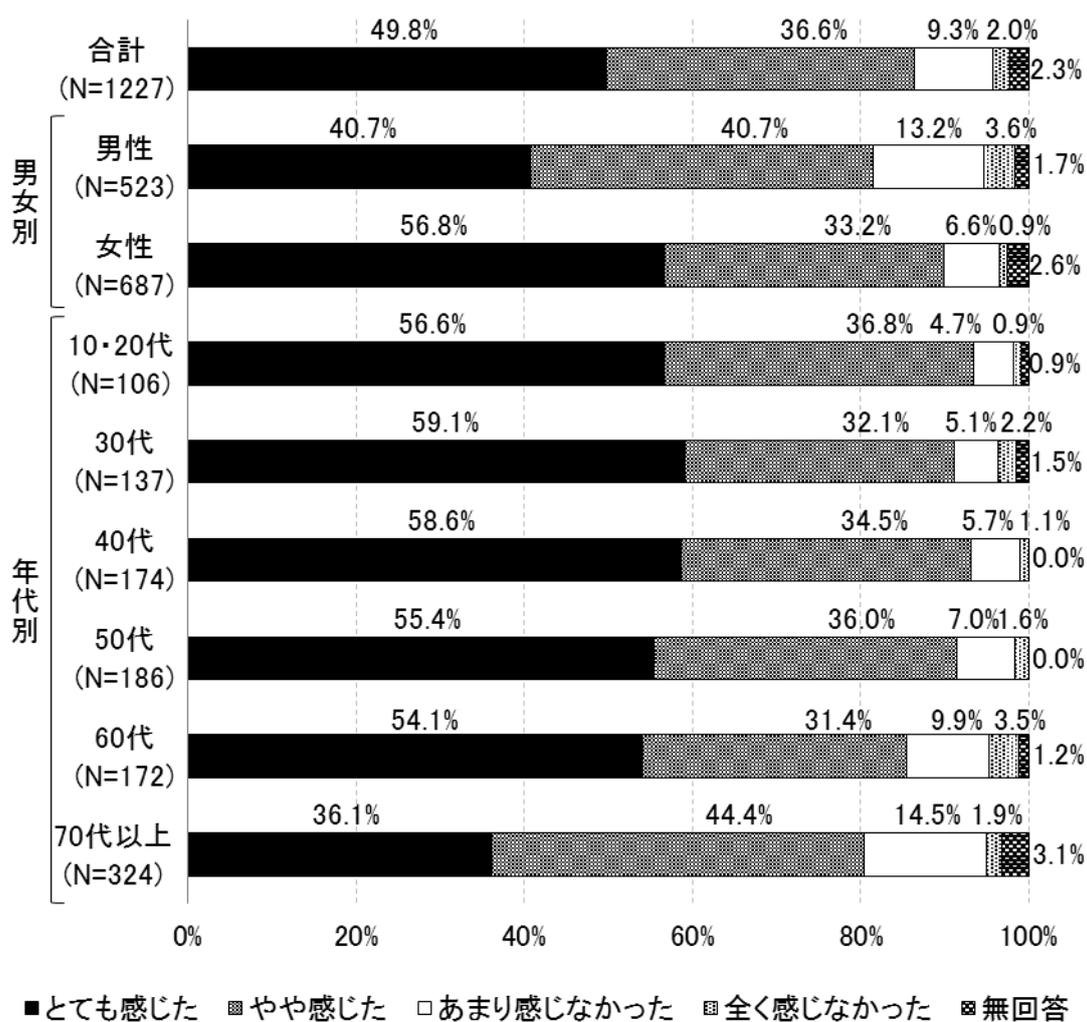


図 101 Q35 マスクの備蓄意図

Q36 のトイレトペーパーの備蓄意図に関して、年代別で見ると、「とても感じた」または「やや感じた」と回答した人の割合は 40 代で 61.5%と最も高い。反対に、60 代が 45.9%と最も低い（図 102）。

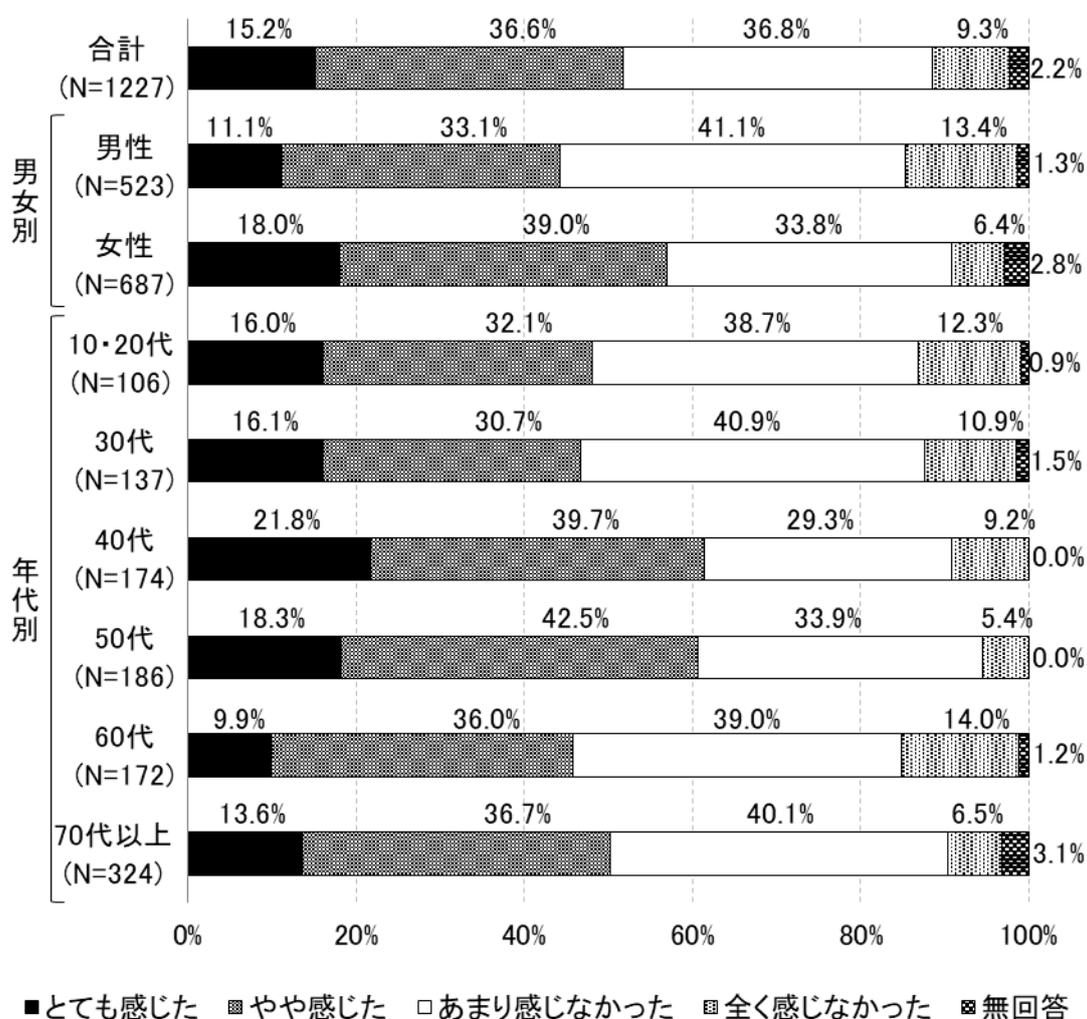


図 102 Q36 トイレトペーパーの備蓄意図

Q37の週あたりの勤務日数に関して、「0日」と回答した人の割合は、男女別に見ると、男性は28.1%に対して、女性は37.8%と9.7ポイント高い。年代別で見ると、70代以上で64.2%と最も高い。反対に、40代が12.1%と最も低い（図103）。

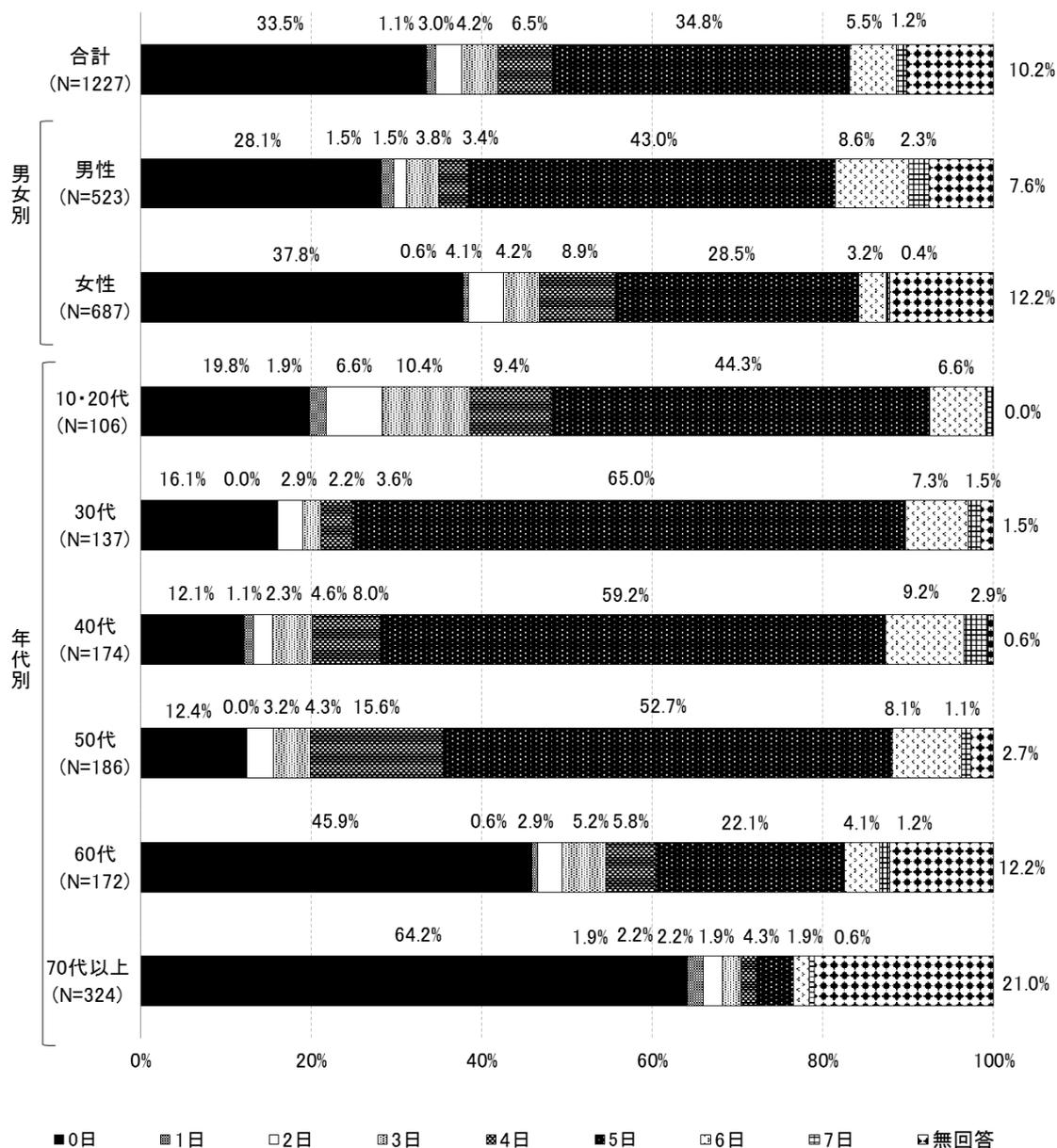


図 103 Q37 週あたりの勤務日数

Q38 のテレワークの頻度（Q37 で週 1 日以上とした人のみが回答）に関して、男女別・年代別のすべての層で、「行っていない」と回答した人の割合は 6 割以上である。年代別で見ると「週 5 回」「週 3~4 回」「週 1~2 回」「2 週に 1 回」「1 か月に 1 回」と回答した人の割合は、30 代で 22.2%と最も高い。反対に 70 代以上が 14.7%と最も低い（図 104）。

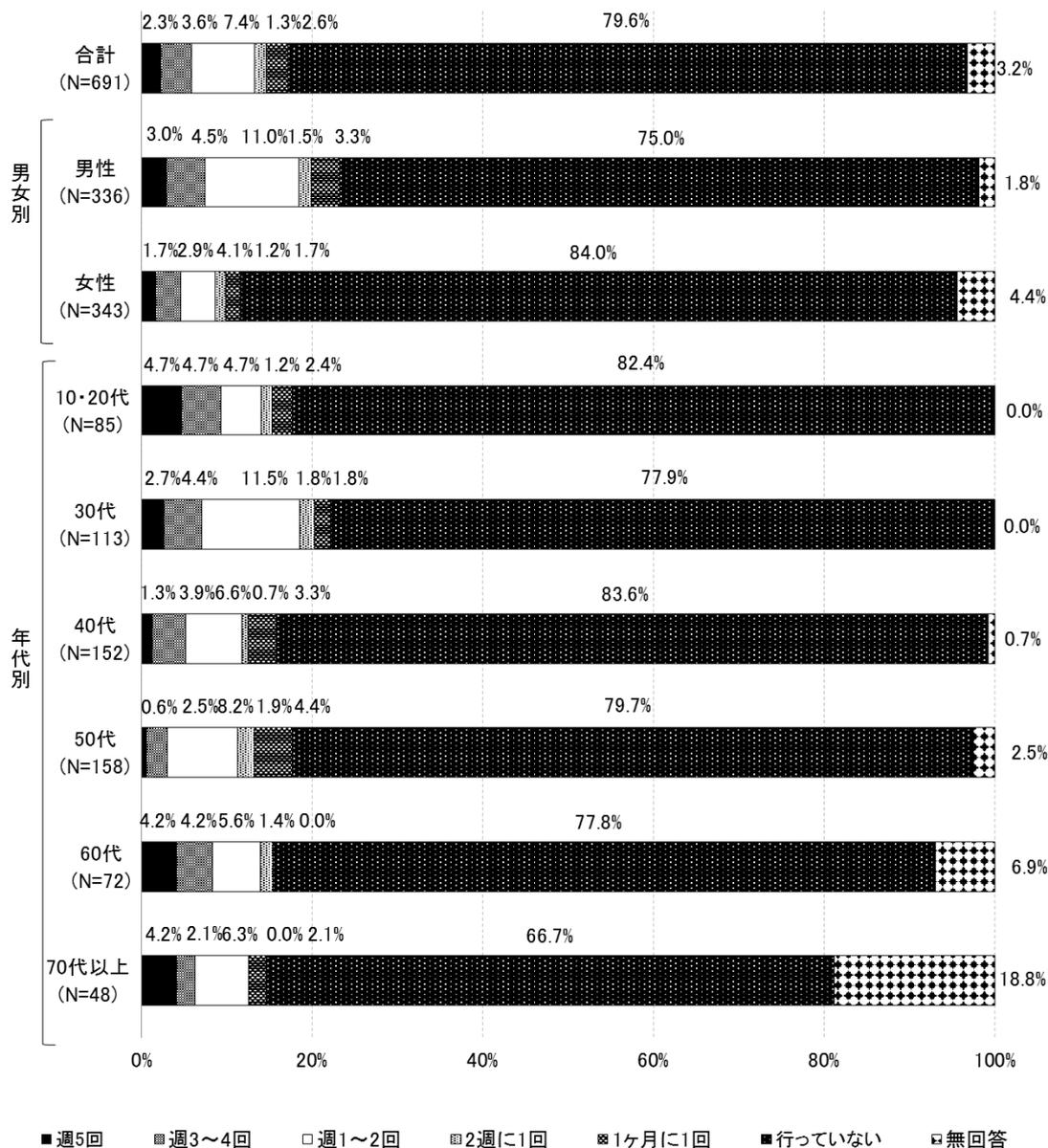


図 104 Q38 テレワークの頻度

Q39 のテレワークの期間に関して (Q37 で週 1 日以上とした人のみが回答)、男女別・年代別のすべての層で、「行っていない」と回答した人の割合は 6 割以上である。年代別で見ると「2 ヶ月以上」と回答した人の割合は、30 代が 18.6%と最も高い。反対に 70 代以上が 6.3%と最も低い (図 105)。

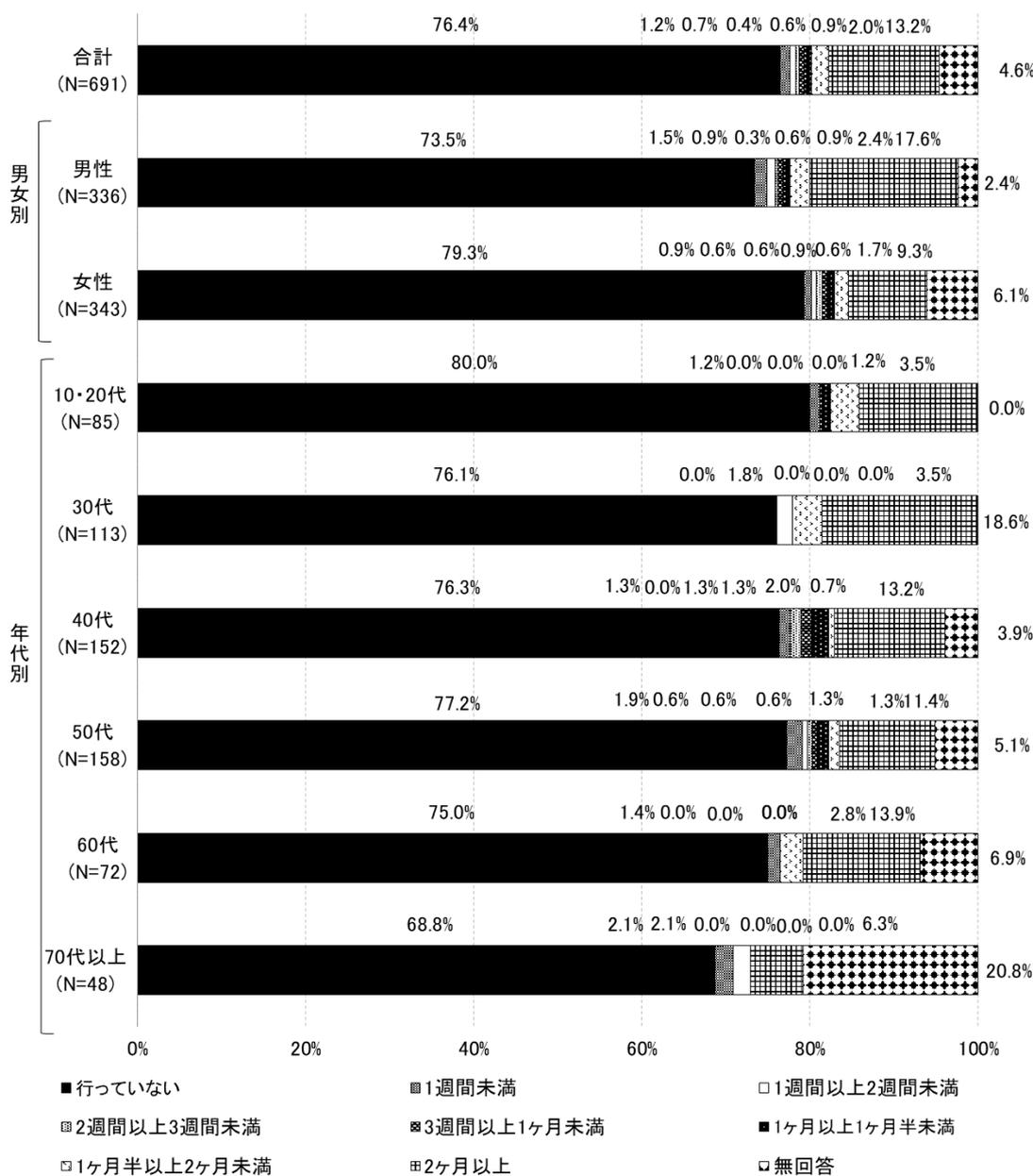


図 105 Q39 テレワークの期間

Q40 の自宅での余暇時間に関して、年代別で見ると、「30分未満」または「30分以上2時間未満」と回答した人の割合は30代が34.3%と最も高い。2時間以上と回答した人の割合は70代以上が85.2%と最も高い（図106）。

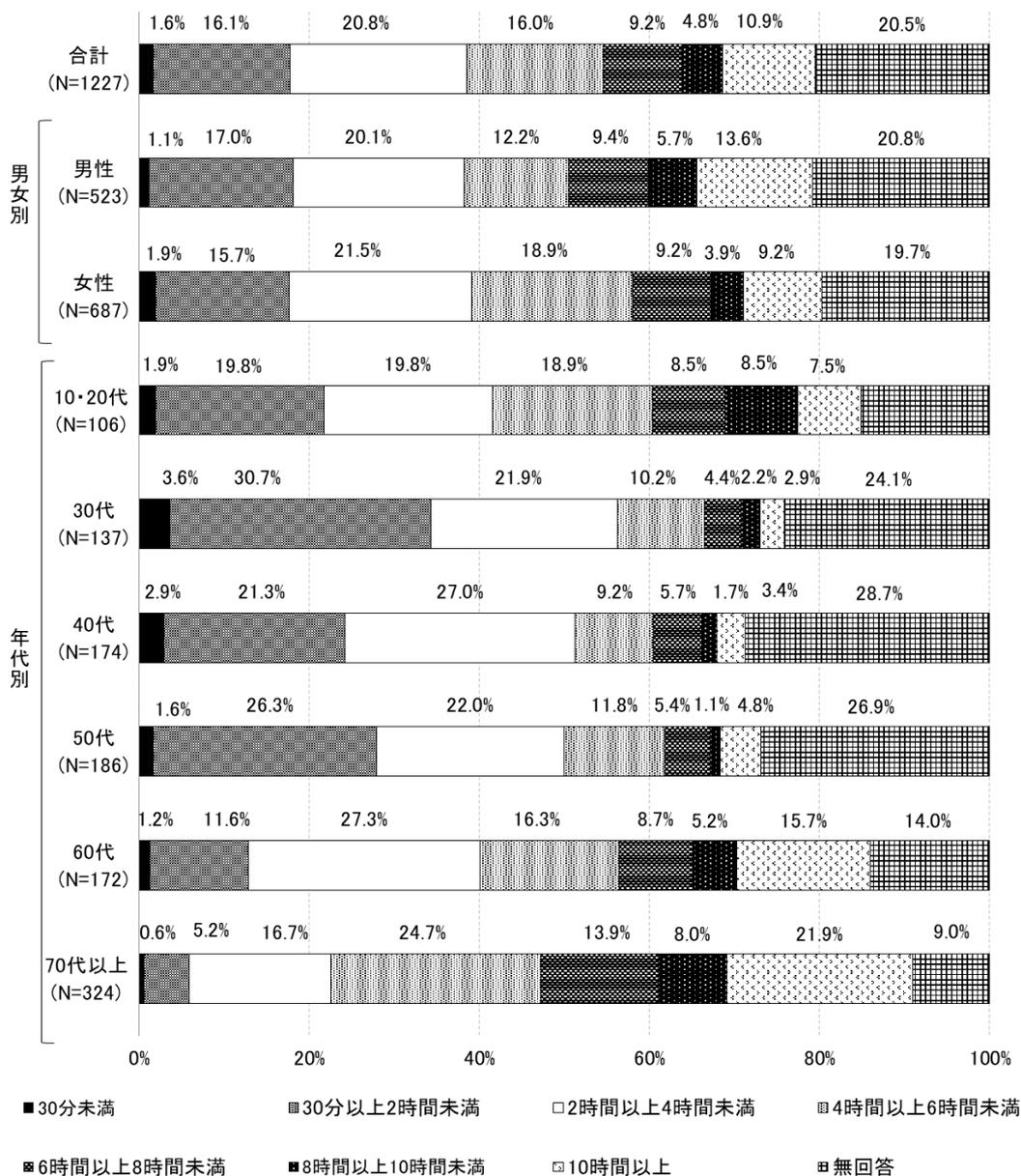


図 106 Q40 自宅での余暇時間

Q41の普段の運動頻度に関して、年代別で見ると「全くしていない」と回答した人の割合は、50代が44.6%と最も高い。週に1日以上運動していると回答した人の割合は、70代以上が70.1%と最も高い（図107）。

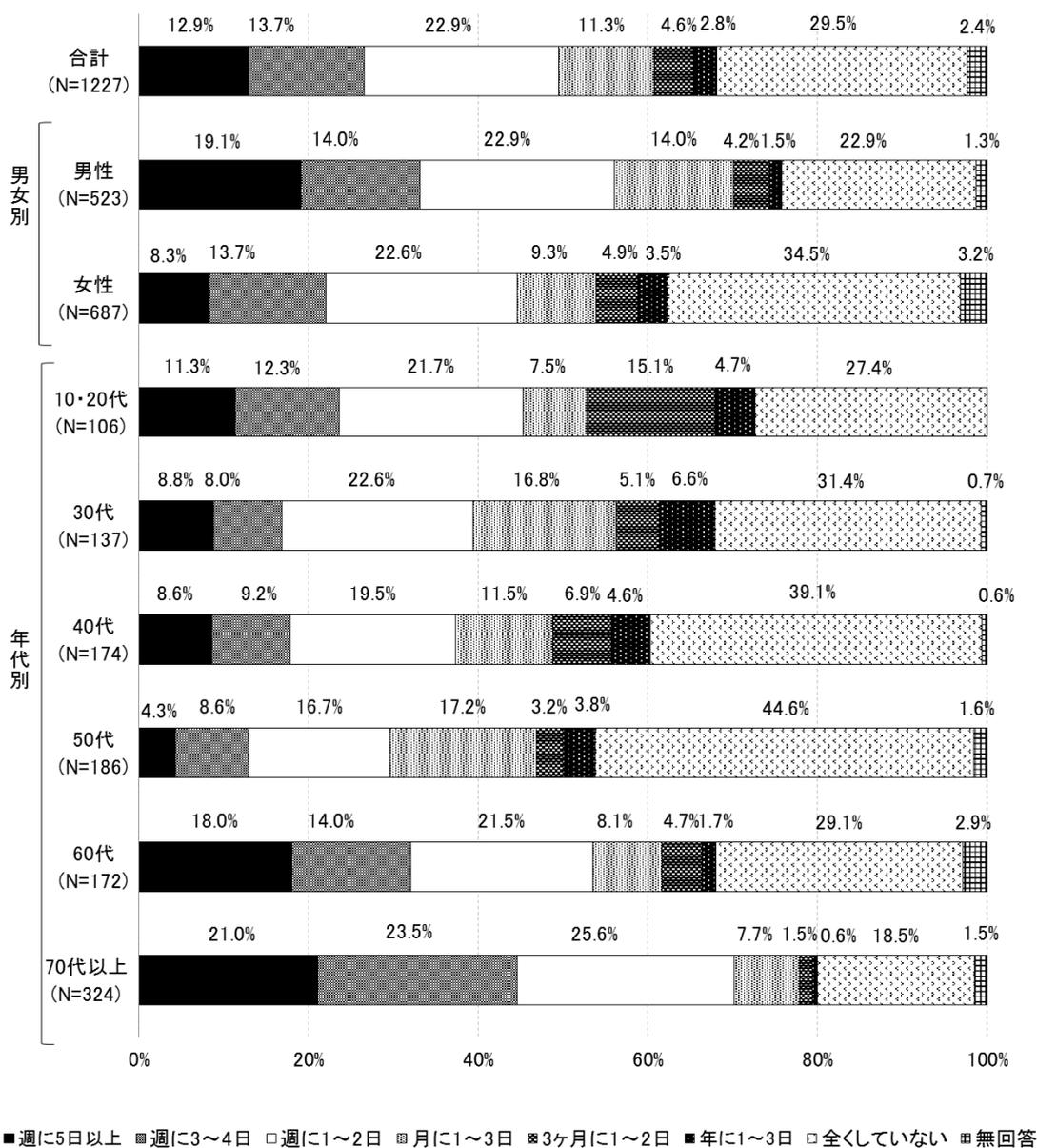


図 107 Q41 普段の運動頻度

Q42 の普通自動車運転免許の取得方法に関して、男女別・年代別のすべての層において「通学免許」と回答した人の割合が最も高い。年代別で見ると、40代が82.2%と最も高い。「合宿免許」と回答した人の割合は、10・20代で11.3%と最も高い（図 108）。

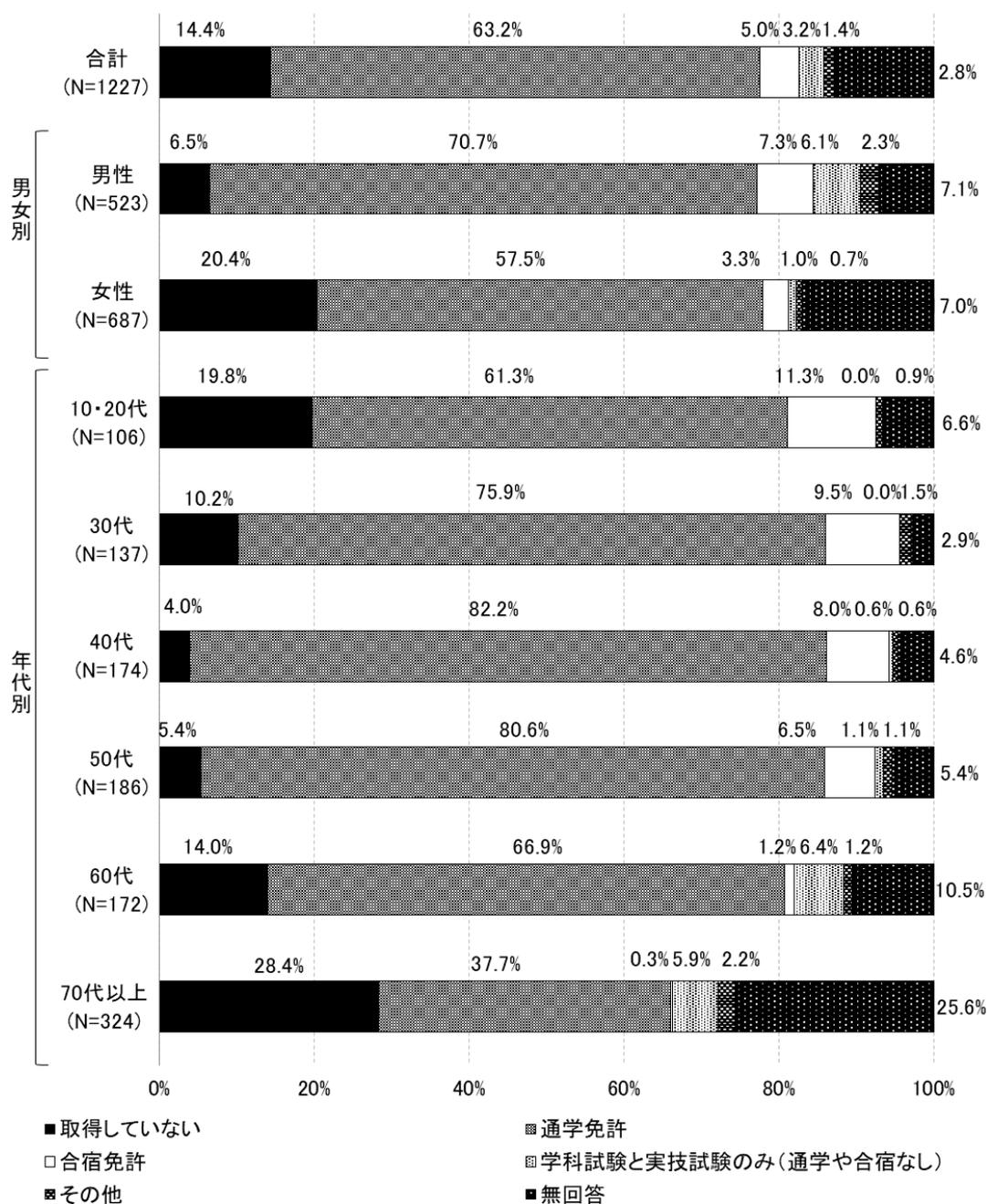


図 108 Q42 普通自動車運転免許の取得方法

Q43の自動車の運転頻度に関して、男女別・年代別のすべての層において「週2～3回以上」と回答した人の割合が最も高い。年代別で見ると、60代が49.2%と最も高いのに対して、10・20代は26.9%と最も高い（図109）。

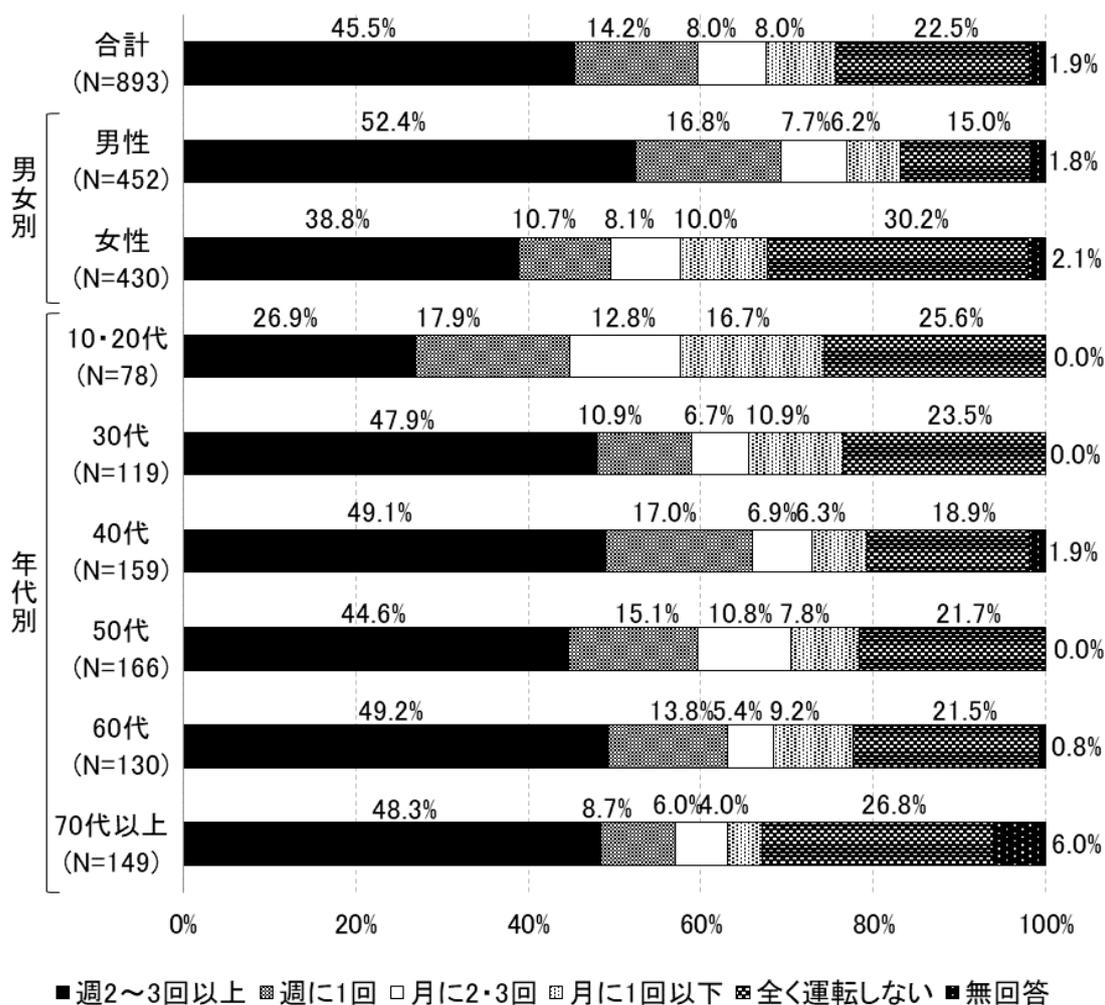


図 109 Q43 自動車の運転頻度

Q44 の交通違反は仕方がないと思うかに関して、年代別で見ると「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 40 代が 20.8%と最も高い。反対に 70 代以上で 6.7%と最も低い（図 110）。

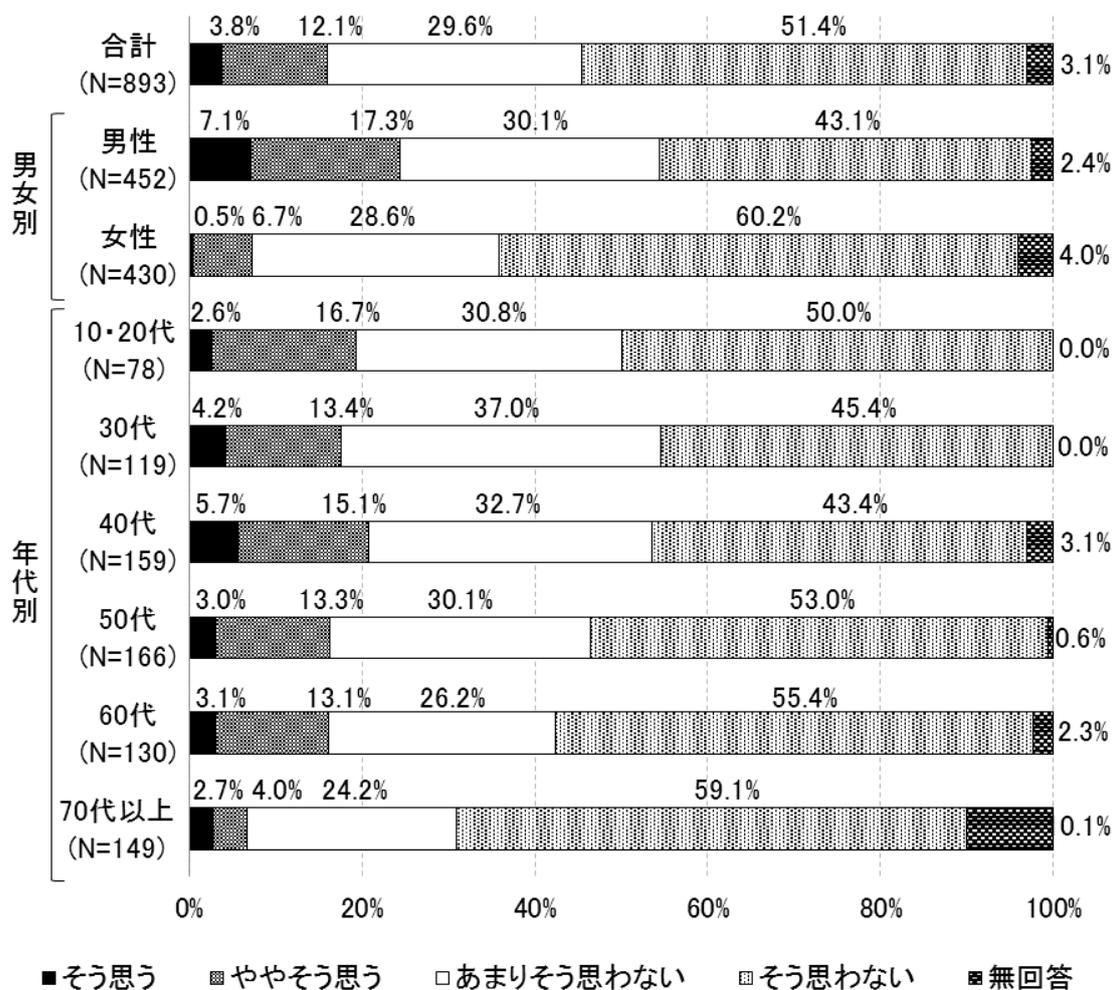


図 110 Q44 交通違反は仕方がないと思うか

Q45 の交通違反で取り締まりを受けた経験に関して、年代別で見ると、10・20代を除く年代別のすべての層で「ある」と回答した人の割合は5割以上である。「ある」と回答した人の割合は50代が64.5%と最も高い。反対に10・20代が28.2%と最も低い（図 111）。

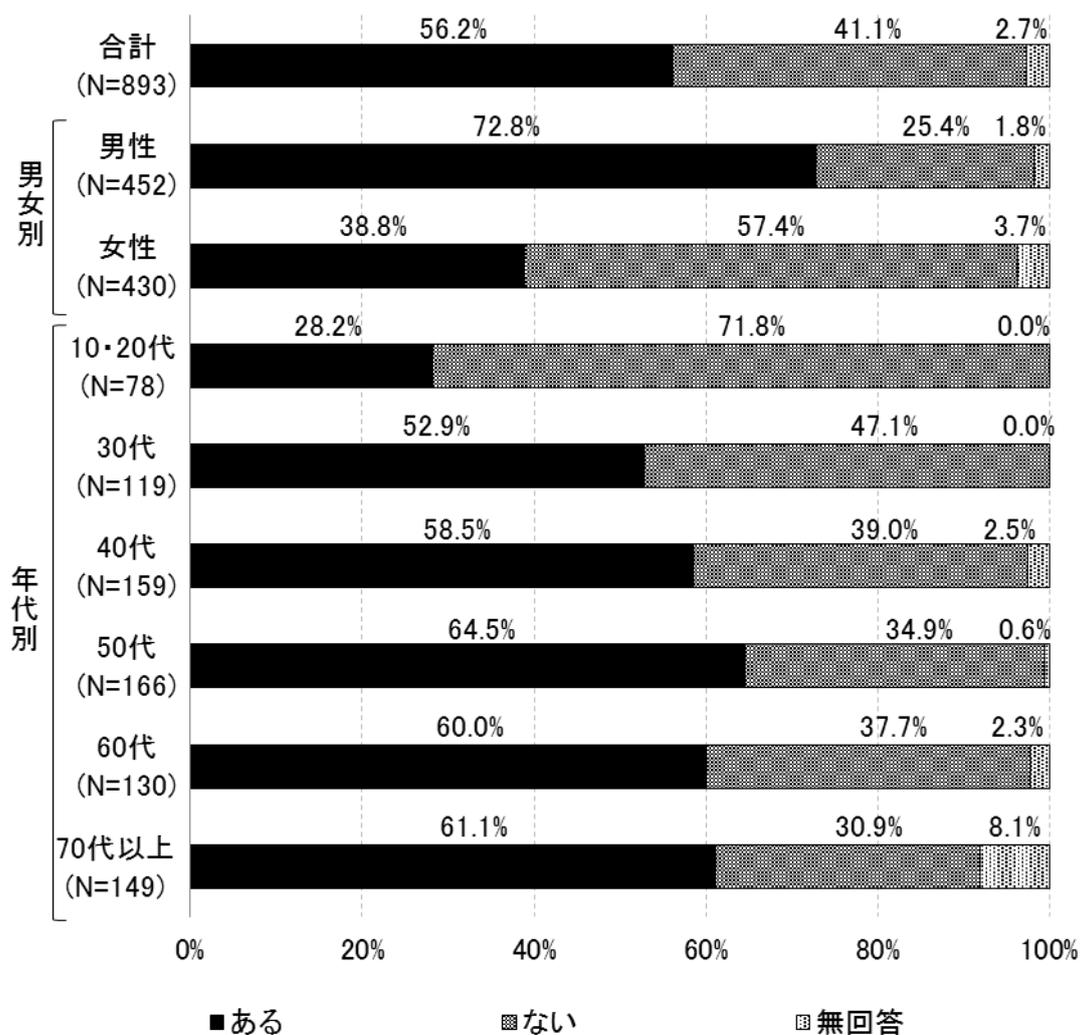


図 111 Q45 交通違反で取り締まりを受けた経験

Q46の自動車事故を起こした・巻き込まれた経験に関して、男女別・年代別のすべての層で「どちらもない」と回答した人の割合は3割以上である。年代別で見ると「どちらもない」と回答した人50代で38.6%と最も低い。反対に10・20代が70.5%と最も高い(図112)。

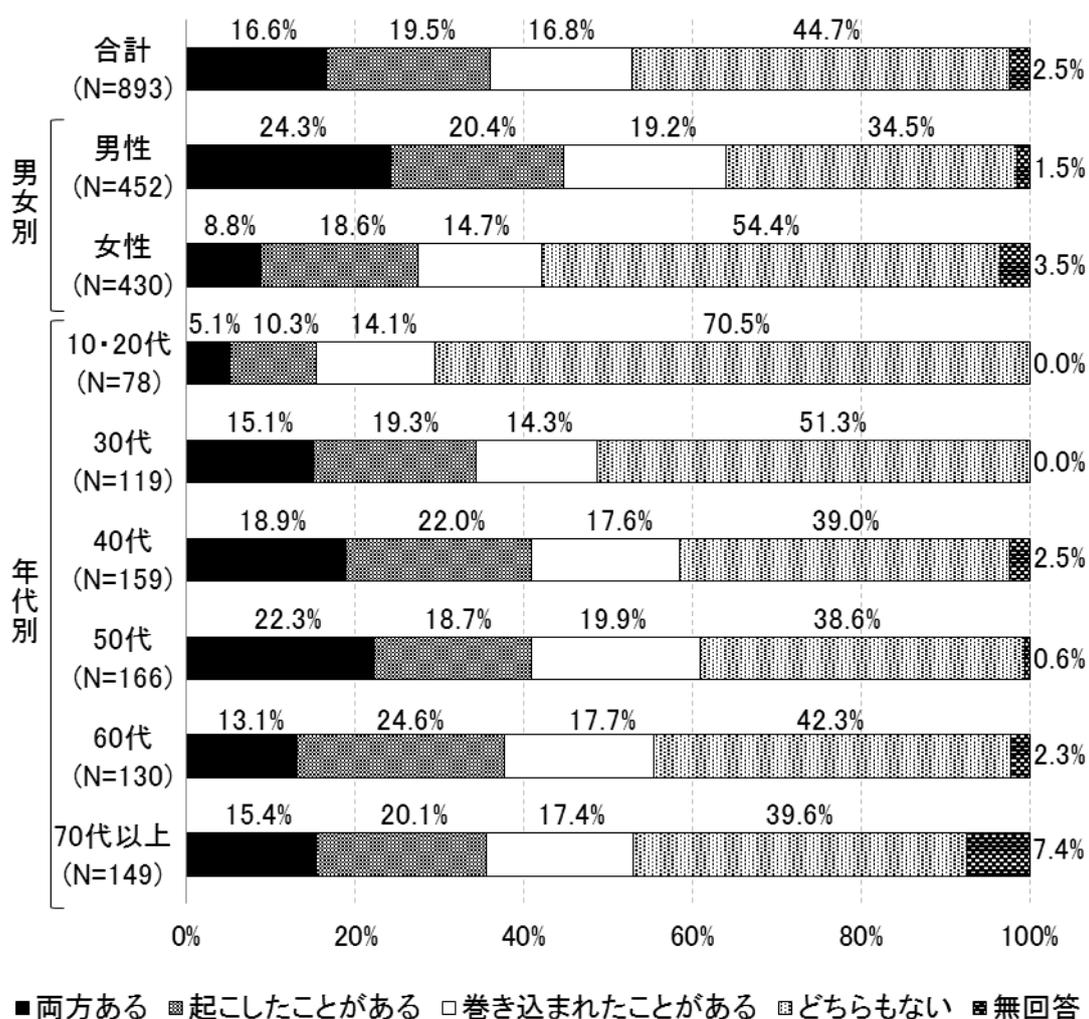


図 112 Q46 自動車事故を起こした・巻き込まれた経験

Q48 の一日の喫煙量に関して、「全く吸ったことがない」と回答した人の割合は、全体で 55.3%である。「全く吸ったことがない」と回答した人の割合は男女で差があり、女性が 72.4%であるのに対して、男性は 33.0%である。年代別で見ると、70 代以上が 49.1%と最も低い。反対に、20 代は 84.6%と最も高い (図 113)。

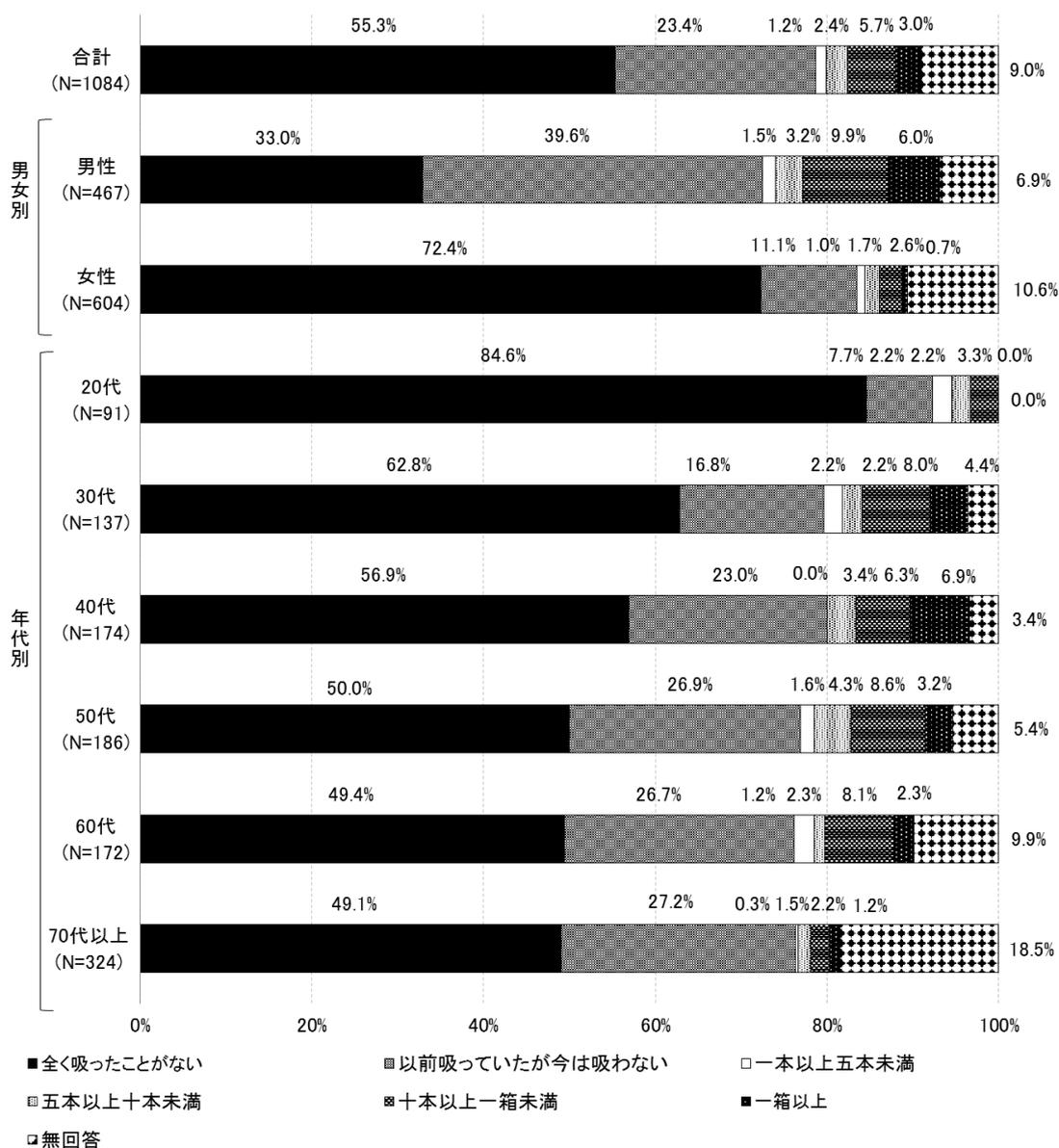


図 113 Q48 一日の喫煙量

Q50の配偶者との会話時間に関して、年代別で見ると「15分未満」または「15分以上30分未満」と回答した人の割合は40代が42.8%と最も高い。反対に、10・20代で6.3%と最も低い（図114）。

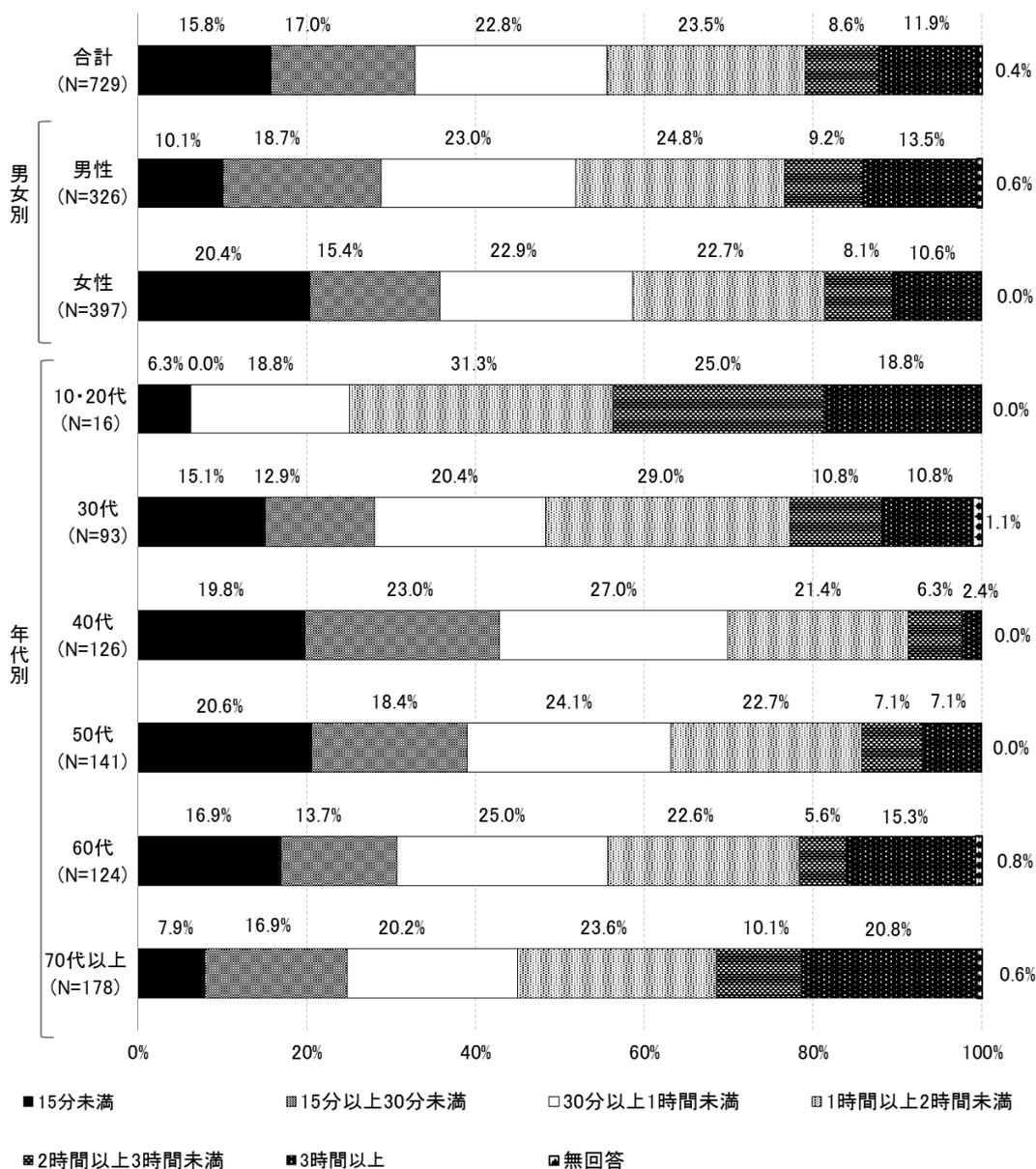


図 114 Q50 配偶者との会話時間

Q51 の家事分担への満足度に関して、男女別で見ると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は男女で差があり、男性よりも女性の方が 30.8 ポイント低い。年代別で見ると「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 40 代が 51.6%と最も低い。反対に、10・20 代が 75.0%と最も高い（図 115）。

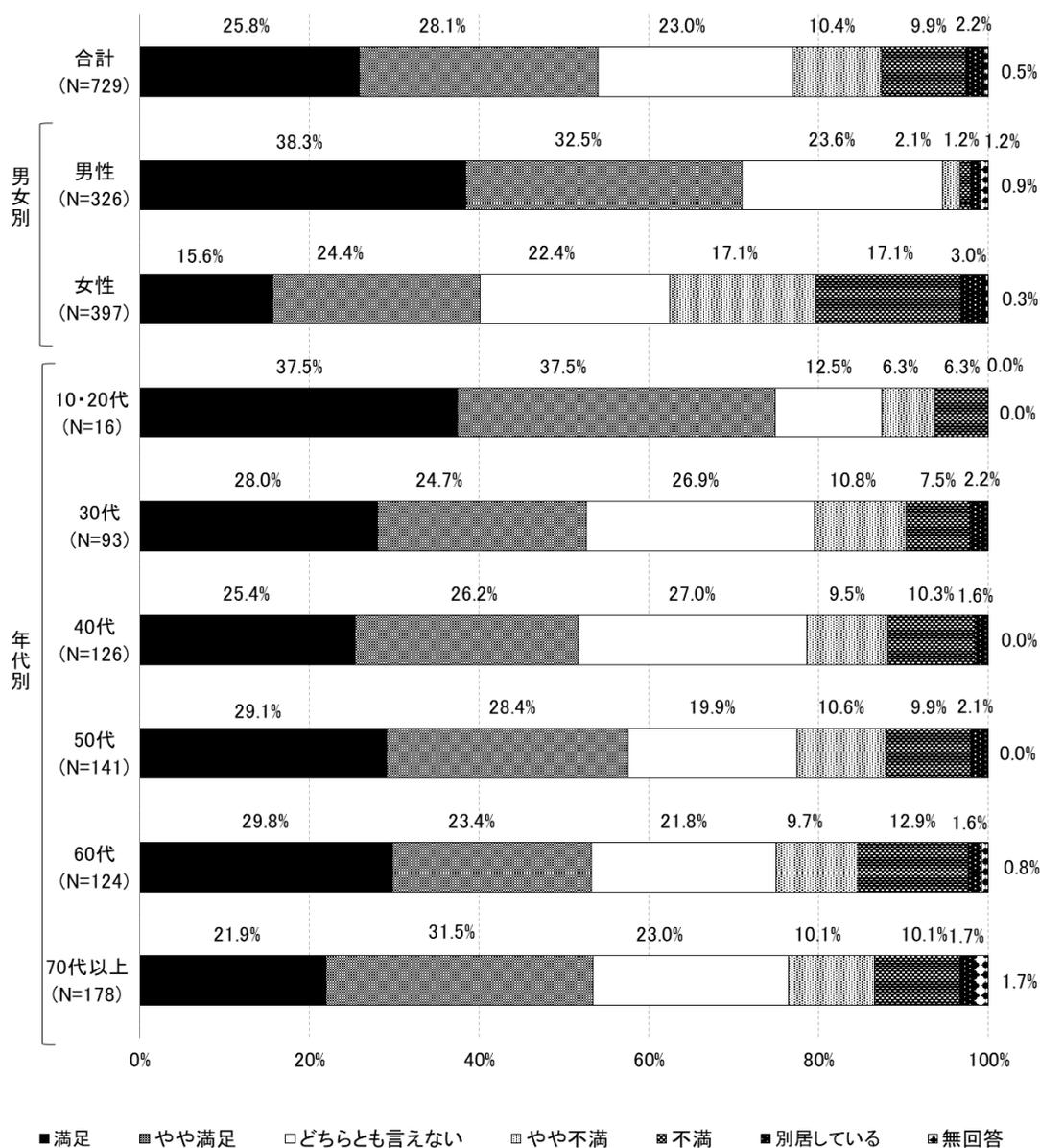


図 115 Q51 家事分担への満足度

Q52 の共働きかどうかに関して、合計で見ると、「はい」と回答した人の割合は 4 割程度である。年代別で見ると「はい」と回答した人の割合は 10・20 代が 81.3%と最も高い。反対に、70 代以上で 7.3%と最も低い（図 115）。

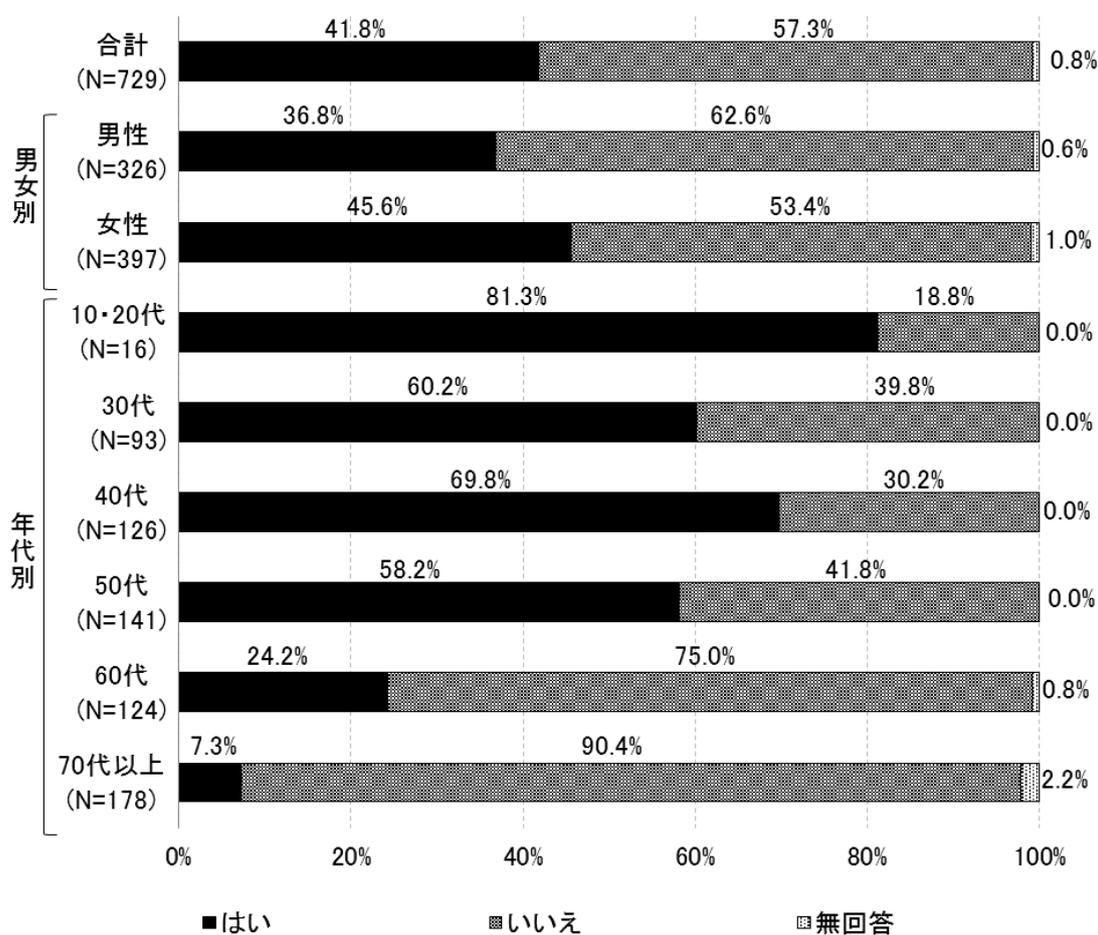


図 116 Q52 共働きかどうか

Q62 の家族との会話時間に関して、合計で見ると、「30分未満」または「30分以上1時間未満」と回答した人の割合は4割程度である。年代別で見ると「30分未満」または「30分以上1時間未満」と回答した人の割合は50代が50.6%と最も高い。反対に、10・20代で31.9%と最も低い（図117）。

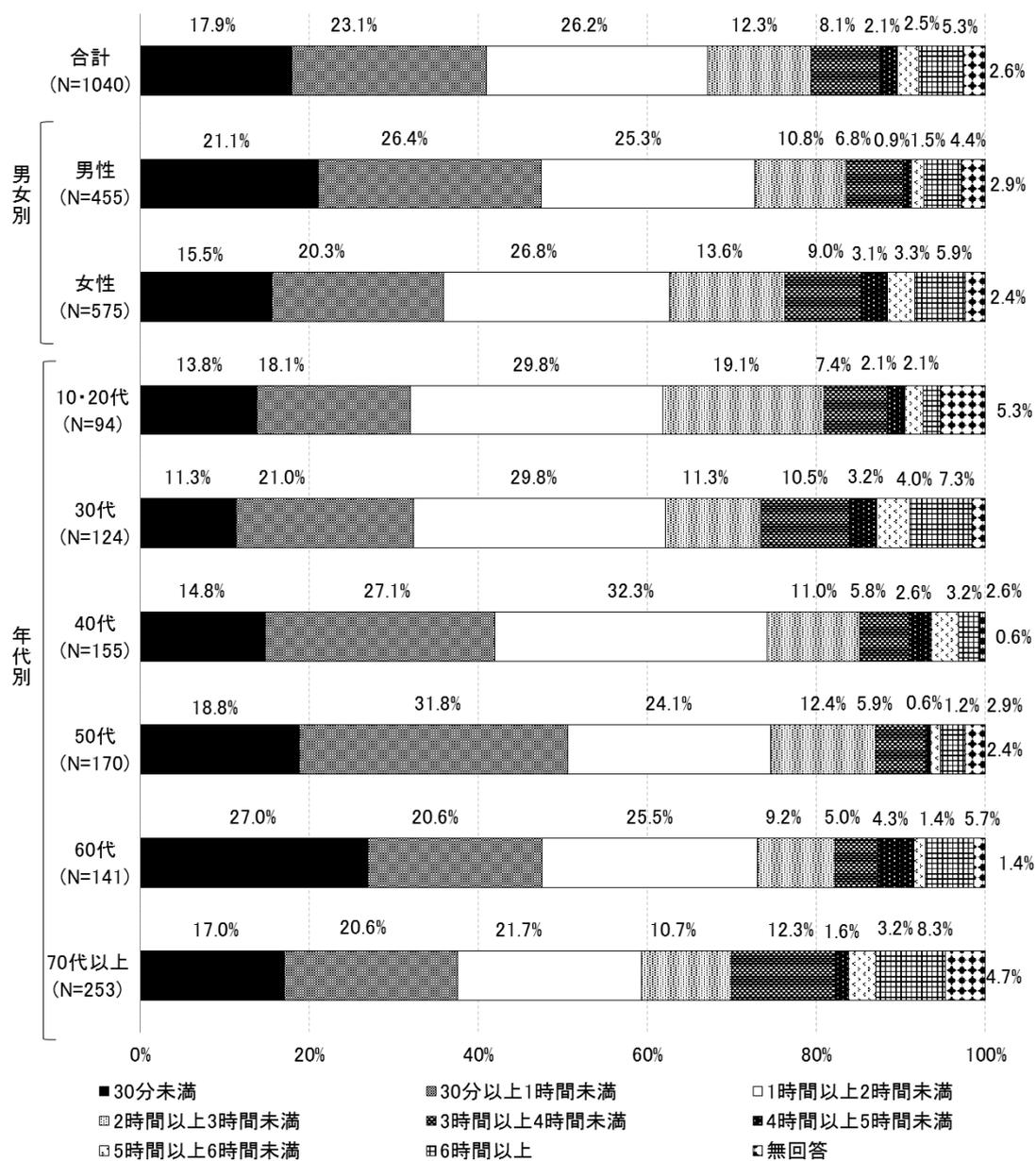


図 117 Q62 家族との会話時間

最後に、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧を以下に示す。

No.	質問項目	高槻市	関西大学	R01	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q1	生活満足度		○	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1		
Q2	幸福度		○	Q33	Q33								
Q3	居住地域は暮らしやすいか		○	Q4	Q2		*Q2	*Q2	*Q3	*Q2	*Q2		JGSS2002 留置票 Q41
Q4	地域に住み続けたいか		○	Q5				*Q3	*Q4	*Q3	*Q3		
Q5	高槻市に地域ブランドがあると思うか	○		Q9				Q23					
Q6	中心市街地に行く頻度が3年前と比べて増加したか	○		Q10				Q16					
Q7A	中心市街地の向上: 防災面での安全性や快適性	○		Q11A	Q10A			Q17A					
Q7B	中心市街地の向上: 防犯面での安全性や快適性	○		Q11B	Q10B			Q17B					
Q7C	中心市街地の向上: 居住環境	○		Q11C	Q10C			Q17C					
Q7D	中心市街地の向上: 公共交通機関の利便性	○		Q11D	Q10D			Q17D					
Q7E	中心市街地の向上: 歩行者にとっての歩きやすさ	○		Q11E	Q10E			Q17E					
Q7F	中心市街地の向上: 風紀や治安	○		Q11F	Q10F			Q17F					
Q8A	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 文化活動	○		Q12A				Q18A					
Q8B	中心市街地で3年前と比べて増加したか: コミュニティ活動	○		Q12B				Q18B					
Q8C	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 商店街の賑わい	○		Q12C				Q18C					
Q8D	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 百貨店などの大型店の賑わい	○		Q12D				Q18D					
Q8E	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 買い物やイベントでの賑わい	○		Q12E				Q18E					
Q8F	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 賑わいの飲食店	○		Q12F				Q18F					
Q8G	中心市街地で3年前と比べて増加したか: オフィスなど業務施設	○		Q12G				Q18G					
Q8H	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 病院などの医療機関	○		Q12H				Q18H					
Q8I	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 道路の渋滞	○		Q12I				Q18I					
Q8J	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 駐輪場	○		Q12J				Q18J					
Q8K	中心市街地で3年前と比べて増加したか: 街なかの緑や潤い	○		Q12K				Q18K					
Q9	中心市街地を住みやすい街にするための取り組み	○		Q13				Q19					

No.	質問項目	高槻市	関西大学	R01	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q10	知っている高槻市の歴史遺産	○									Q16		
Q11	城跡公園へ行ったことがあるか	○											
Q12	城跡公園で再整備した方がよいもの	○											
Q13	高槻城の城下町だったエリアに関する認知	○											
Q14	高槻城と城下町があったエリアで知り組む方がよいこと	○											
Q15	文化財に親しみを持ったためよいと思うもの	○									Q21		
Q16	歴史講座・現地説明会・体験学習会	○									Q19		
Q17	文化財についての情報源	○									Q22		
Q18A	情報媒体への信頼：テレビ	○			Q20A								
Q18B	情報媒体への信頼：新聞	○			Q20C								
Q18C	情報媒体への信頼：SNS (Twitter・Instagramなど)	○											
Q18D	情報媒体への信頼：ネットニュース	○											
Q18E	(Yahooニュース・LINEニュースなど)	○											
Q19A	情報媒体への信頼：友人・知人の情報	○			Q25A			Q44B				Q26	
Q19B	情報媒体への信頼：テレビ	○			Q25C			Q44A					
Q19C	情報媒体への信頼：SNS (Twitter・Instagramなど)	○											
Q19D	情報媒体への信頼：ネットニュース (Yahooニュース・LINEニュースなど)	○											
Q19E	情報媒体への信頼：友人・知人の情報	○											
Q20	インターネットの普及による情報の機密性不安	○											
Q21	インターネットの利用時間	○											
Q22	精神的健康	○											
Q23	身体的健康	○											
Q24	自覚症状	○											
Q25A	精神的健康 (K6)：神経過敏に感じた	○											
Q25B	精神的健康 (K6)：絶望的だと感じた	○											
Q25C	精神的健康 (K6)：そわそわ、落ち着かなく感じた	○											
Q25D	精神的健康 (K6)：気分が沈みこんで、何が起ころうとも気が晴れないように感じた	○											
Q25E	精神的健康 (K6)：何をしても骨折りと感じた	○											
Q25F	精神的健康 (K6)：自分は価値のない人間だと感じた	○											
Q26	年間の自殺者数の認知度	○				Q47							
Q27	自殺に関する相談機関の認知度	○				Q49							
Q28	本気で自殺を考えたことがあるか	○				Q52							
Q29	身近な人から自殺願望を聞いたときの対応方法	○				Q53							
Q30	今後求められる自殺対策	○											
Q31	自殺願望の気持ちの乗り越え方	○				Q51							
Q32	「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知	○			Q30								
Q33	高槻市の20年後・30年後を身振って行政改革に取り組むべきか	○			Q37								

No.	質問項目	高槻市	関西大学	R01	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	備考
Q34①	最近良くなってきたと思うもの	○		Q38①	Q32①			Q40①	**Q49①	**Q36①	H24		
Q34②	今後力を入れてほしいもの	○		Q38②	Q32②			Q40②	**Q49②	**Q36②	**Q28②		
Q35	マスクの備蓄意図		○										
Q36	トイレレットペーパーの備蓄意図		○										
Q37	週あたりの労働日数		○				Q61		Q75	Q68	*Q64		
Q38	テレワークの頻度		○										
Q39	テレワークの期間		○										
Q40	自宅での余暇時間		○										
Q41	普段の運動頻度		○										
Q42	普通自動車運転免許の取得方法		○										
Q43	自動車の運転頻度		○										
Q44	交通違反は仕方ないと思うか		○										
Q45	交通違反で取り締まりを受けた経験		○										
Q46	自動車事故を起こした経験		○										
Q47	年齢	○	○	Q56	Q50	Q65	Q59	Q54	Q73	Q65	Q62	Q65	
Q48	喫煙状況		○			Q62							
Q49	婚姻状況		○	Q63	Q61	Q72	Q51	Q51	Q67	Q53	Q52	Q59	
Q50	夫婦での1日平均会話時間		○						Q68	Q56			
Q51	家事分担への満足度		○										
Q52	共働きかどうか		○										
Q53	子どもの有無		○	Q64	Q62	Q73	Q54	Q52	Q71	Q58	Q56	Q73	
Q54	性別	○	○	Q55	Q53	Q64	Q58	Q53	Q72	Q64	Q61	**Q64	
Q55	職業	○	○	Q57	Q55	Q66	Q60	Q55	Q74	Q66	Q63	Q66	
Q56	最終学歴		○	Q58	Q56	Q67	Q62	Q57	Q76	Q69	Q65	Q67	
Q57	居住地域	○	○	Q59	Q57	Q68	Q63	Q58	Q77	Q70	Q66	Q69	
Q58	市内居住年数	○	○	Q60	Q58	Q69	Q64	Q59	Q78	Q71	Q67	Q68	
Q59	居住形態		○	Q62	Q60	Q71	Q66	Q61	Q80	Q73	Q69	Q71	
Q60	住居		○	Q61	Q59	Q70	Q65	Q60	Q79	Q72	Q68	Q70	
Q61	世帯人数		○	Q65	Q63	Q74	Q67	Q62	Q81	Q63	Q70	Q72	
Q62	家族との1日平均会話時間		○						Q84	Q47	Q47	**Q58	
Q63	世帯年収		○	Q66	Q64	Q75	Q68	Q63	Q82	Q74	Q71	Q74	

注) *印は、質問文の表現・形式が異なるため、比較する際に注意が必要である。変更の程度は、*の数に応じて、下記の通りである。

* : 分析にそのまま使用できる（「てにをは」、濁点の位置、末尾などの変更）

** : 分析には注意が必要である（選択肢の数が異なるなどの変更）

*** : 同一の変数として分析に使用するの難しい（概念範囲が異なる）

第3章 緊急事態下でのメディアと購買行動

谷 蓮音

1. はじめに

本章では緊急事態時における情報源としてのメディアとの関わり方と購買行動について分析を行う。2020年は、新型コロナウイルス（COVID-19）の情報に強い関心が寄せられてきた。この新型コロナウイルスは、2019年末、中国で発生し、2020年1月には日本国内初の感染者が報告された。その後、感染が拡大し2020年4月7日には大型都市を中心とした7都府県に対し緊急事態宣言が政府より発出され、同月16日には対象範囲が全国にまで広げられた（首相官邸 2020）。この期間に、話題になった問題行動のひとつとして物品の買い溜めが挙げられる。特にマスクや手指用除菌アルコールなどの衛生商品は各地で買い溜めが発生し、品薄状態となった（NHK 2020）。また、これらの商品とは別に、実際には品薄でなかったトイレットペーパーや生理用品などの紙製品も同様の状態となった。紙製品がこのような状況になった原因として、SNSを中心としたネット上での「紙製品が購入できなくなる」という誤った情報の拡散が挙げられている（朝日新聞デジタル 2020）。実際、他メディアでも紙製品が品薄である状態が誤情報と伝えながらも各地の様子が報道されていた。以上のように、新型コロナウイルスの影響は、メディアによる情報伝達を介し、購買行動にまで及んでいる。

そこで、本調査では、複数のメディアへの信頼度に焦点を当て、緊急事態下における買い溜め意図に与える影響について分析を行う。

2. 仮説

2.1. 先行研究

大友・広瀬（2014）によると、緊急時では通常時とは違い、時間をかけて判断する合理的な決定がされにくいことが指摘されている。これが、買い溜めへの意思決定がされる要因の一つとして考えられている。緊急事態時における買い溜め行動を検討した広瀬（1985）では、友人や知人から噂話程度の信ぴょう性の紙製品の品薄情報を得た消費者が買い溜めに走るという指摘がなされている。しかし、これはオイルショック時における言説であり、当時と現代では情報発信の技術が様変わりしている。具体的には、従来のテレビやラジオ新聞紙など受動的なものから、インターネットを使用したホームページやブログ SNS など個人が情報を発信できるようになった。このうち、SNSの情報の拡散スピードは速く、穂積・矢吹・佐久田（2008）によると、一部例外はあるもののSNSのコミュニティ内に人が多いほど、拡散の速度は速くなるとされている。しかし、先行研究では買い溜め行動におけるSNSの影響を検討したものは確認されていない。そのため、本調査では広瀬（1985）で、

買い溜め行動に影響を与える要因とされていた友人・知人からの情報、テレビやラジオ等の従来の情報源に加えて、SNS等の新たなメディアの影響も併せて検討する。

その際、実際に品不足が生じていたマスクと、実際は品不足でないのにデマと呼ばれる誤情報が発生したトイレットペーパーに対しての買い溜め意図をそれぞれ分析対象とし、影響するメディアの違いがあるかも、探索的に検討する。

2.2. 仮説

本章では緊急事態時における情報源であるメディアとの関わり方と購買行動について分析を行う。まず、広瀬（1985）の先行研究と同様に、2020年現在でも、友人・知人からの情報への信頼度が高い人は、緊急事態時に買い溜め意図を強めやすいと予測する。また、他のメディアの情報への信頼度が高い人も、買い溜め意図を強めやすいという予測を立てる。

仮説 1 友人・知人からの情報への信頼度が高いほど、物品の買い溜め意図が強くなる。

仮説 2 他のメディアも同様に、そのメディアへの信頼度が高いほど、物品の買い溜め意図が強くなる。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和2年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女で、計画標本は2,000、有効回答数は1,227、回収率は61.35%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q18：あなたは、以下の情報源から得た情報の正確さをどのくらい信頼していますか。（情報源への信頼（反転））

A. テレビ

1. かなり信頼している
2. ある程度信頼している
3. あまり信頼していない
4. ほとんど信頼していない

B. 新聞

1. かなり信頼している
2. ある程度信頼している
3. あまり信頼していない
4. ほとんど信頼していない

C. SNS (Twitter・Instagram など)

1. かなり信頼している
2. ある程度信頼している
3. あまり信頼していない
4. ほとんど信頼していない

D. ネットニュース (Yahoo ニュース・LINE ニュースなど)

1. かなり信頼している
2. ある程度信頼している
3. あまり信頼していない
4. ほとんど信頼していない

E. 友人・知人の情報

1. かなり信頼している
2. ある程度信頼している
3. あまり信頼していない
4. ほとんど信頼していない

上記の選択肢に対し、数値が大きくなるほど信頼度が高くなるように、尺度の反転を行った。その結果、選択肢は、1. ほとんど信頼していない 2. あまり信頼していない 3. ある程度信頼している 4. かなり信頼している とした。

Q19：あなたは普段、一日どのくらいの時間、以下の情報源に触れていますか。(情報源への接触時間)

A. テレビ

1. 全く利用しない
2. 20分未満
3. 20分以上 40分未満
4. 40分以上 1時間未満
5. 1時間以上 2時間未満
6. 2時間以上

B. 新聞

1. 全く利用しない
2. 20分未満
3. 20分以上 40分未満
4. 40分以上 1時間未満
5. 1時間以上 2時間未満
6. 2時間以上

C. SNS (Twitter・Instagram など)

1. 全く利用しない
2. 20分未満
3. 20分以上 40分未満
4. 40分以上 1時間未満
5. 1時間以上 2時間未満
6. 2時間以上

D. ネットニュース (Yahoo ニュース・LINE ニュースなど)

1. 全く利用しない
2. 20分未満
3. 20分以上 40分未満
4. 40分以上 1時間未満
5. 1時間以上 2時間未満
6. 2時間以上

E. 友人・知人の情報

1. 全く利用しない
2. 20分未満
3. 20分以上 40分未満
4. 40分以上 1時間未満
5. 1時間以上 2時間未満
6. 2時間以上

Q35：今年、あなたはマスクの備蓄をしたいとどのくらい感じましたか。（マスクの備蓄意図（反転））

1. とても感じた 2. やや感じた 3. あまり感じなかった 4. 全く感じなかった

この選択肢を反転させ、数字が大きい選択肢ほど備蓄の意図が高くなるように、1. 全く感じなかった 2. あまり感じなかった 3. やや感じた 4. とても感じた とした。

Q36：今年、あなたはトイレットペーパーの備蓄をしたいとどのくらい感じましたか。（トイレットペーパーの備蓄意図（反転））

1. とても感じた 2. やや感じた 3. あまり感じなかった 4. 全く感じなかった

この選択肢を反転させ、数字が大きい選択肢ほど備蓄の意図が高くなるように、1. 全く感じなかった 2. あまり感じなかった 3. やや感じた 4. とても感じた とした。

4. 分析

表1は、マスクの備蓄意図と友人・知人の情報への信頼度（反転）の2変数について、クロス集計表を作成したものである。「マスクの備蓄意図」を感じたかという設問について、友人・知人の情報の信頼度が高い（ある程度は信頼している・かなり信頼している）人は74.95%であった。カイ二乗検定を実施した結果、有意ではあったが（ $\chi^2(9) = 19.892$, $p < .05$ ）、Cramerの連関係数は0.075と低かった。以上のことから、マスクの買い溜め意欲と友人・知人の情報への信頼度の関連は、有意ではあるものの弱い関連だと考えられる。

表1 Q35 マスクの備蓄意図と Q18_E 情報源への信頼：友人・知人の情報のクロス表

		Q18_E 情報源への信頼：友人・知人の情報				合計
		ほとんど 信頼して いない	あまり 信頼して いない	ある程度は 信頼して いる	かなり 信頼して いる	
Q35 マスクの 備蓄意図	全く感じなかった	<i>N</i> 2 % 8.0%	8 32.0%	14 56.0%	1 4.0%	25 100.0%
	あまり 感じなかった	<i>N</i> 6 % 5.5%	28 25.5%	68 61.8%	8 7.3%	110 100.0%
	やや感じた	<i>N</i> 9 % 2.1%	114 26.0%	294 67.1%	21 4.8%	438 100.0%
	とても感じた	<i>N</i> 11 % 1.8%	117 19.4%	446 74.0%	29 4.8%	603 100.0%
合計		<i>N</i> 28 % 2.4%	267 22.7%	822 69.9%	59 5.0%	1176 100.0%

$\chi^2(9) = 19.892^*$, Cramer $V = .075^*$

* $p < .05$

先行研究である広瀬（1985）でも友人・知人からの情報が買い溜めに影響を与える要因とされていた。しかし、2. 1. で言及した通り、その当時の年代と比較して、現在では、メディアの種類が多様化している。そのため、複数のメディアが買い溜めに与える影響を同時に検討した。具体的には、マスクの備蓄意図（反転）を従属変数、情報源への信頼度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析を実施した（表 2）。情報源への信頼度の内訳は、テレビ、新聞、SNS、ネットニュース、友人・知人の情報の 5 つであった。その結果、調整済み R^2 値は 0.029 であり、投入した独立変数によって従属変数であるマスクの備蓄意図の分散の 2.9% が説明されていた。

マスクの備蓄意図に対し、いずれの情報源への信頼度も正の影響を与えていた。その中でも、ネットニュース ($\beta = 0.120, p < .001$) と友人・知人 ($\beta = 0.063, p < .05$) の情報は有意な影響であった。この結果から、ネットニュース、友人・知人からの情報に信頼度が高い人ほど、マスクの買い溜めの意図が強いことが明らかになった。したがって、上記の結果は、仮説 1 を支持するものであり、かつ仮説 2 を部分的に支持するものであったと言える。

また、今回は同様にトイレットペーパーの備蓄意図（反転）を従属変数、情報源への信頼度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析も実施した（表 3）。その結果、調整済み R^2 値は 0.012 であり、投入した独立変数によって従属変数であるトイレットペーパーの備蓄意図の分散の 1.2% が説明されていた。トイレットペーパーの備蓄意図に対し、いずれの情報源への信頼度も正の影響を与えていた。その中でもテレビ ($\beta = 0.069, p < .10$) の情報は有意傾向の影響を与えていた。これは、マスクの備蓄意図を従属変数とした重回帰分析の結果とは異なる。この結果は、仮説 1 が不支持であることを示しており、かつ、仮説 2 の

表 2 Q35 マスクの備蓄意図（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.609	0.15		***
Q18_A 情報源への信頼：テレビ	0.038	0.05	0.031	
Q18_B 情報源への信頼：新聞	0.023	0.048	0.019	
Q18_C 情報源への信頼：SNS (Twitter・Instagramなど)	0.026	0.039	0.024	
Q18_D 情報源への信頼：ネットニュース (Yahooニュース・LINEニュースなど)	0.126	0.039	0.12	***
Q18_E 情報源への信頼：友人・知人の情報	0.082	0.041	0.063	*
調整済み R^2	0.029			
N	1094			

*** $p < .001$, * $p < .05$

表 3 Q36 トイレットペーパーの備蓄意図（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	1.912	0.176		***
Q18_A 情報源への信頼：テレビ	0.099	0.059	0.069	†
Q18_B 情報源への信頼：新聞	0.053	0.056	0.037	
Q18_C 情報源への信頼：SNS (Twitter・Instagramなど)	0.071	0.045	0.057	
Q18_D 情報源への信頼：ネットニュース (Yahooニュース・LINEニュースなど)	0.007	0.045	0.006	
Q18_E 情報源への信頼：友人・知人の情報	0.026	0.049	0.017	
調整済み R^2	0.012			
N	1095			

*** $p < .001$, † $p < .10$

部分的な支持を示唆するものであった。同時に、物品の種類によって、備蓄意図に影響を与えるメディアが異なる可能性が示唆された。

さらに、ここでは追加分析を行った。他に備蓄意図への影響が考えられる変数として、情報源としての各メディアへの接触時間が備蓄意図に与える影響を分析した。

まず、マスクの備蓄意図（反転）を従属変数、情報源への接触時間（反転）を独立変数として投入した重回帰分析を実施した。情報源への接触時間の内訳は、テレビ、新聞、SNS、ネットニュース、友人・知人の情報の5つであった。その結果、調整済み R^2 値は 0.029 であり、投入した独立変数によって従属変数であるマスクの備蓄意図の分散の 2.9% が説明されていた。そして、マスクの備蓄意図に対し、テレビ ($\beta = 0.083, p < .01$) が有意、SNS ($\beta = 0.062, p < .10$)、ネットニュース ($\beta = 0.061, p < .10$) が有意傾向の正の影響を与えていた。また、新聞 ($\beta = -0.087, p < .01$) は有意な負の影響を与えており、友人・知人の情報 ($\beta = 0.045$) の影響は有意ではなかった。つまり、テレビ、SNS、ネットニュースへの接触時間が長い人ほど、マスクの備蓄意図が高いことが示唆された。新聞への接触時間が長い人ほど、マスクの備蓄意図が低いことが示された。

次に、トイレットペーパーの備蓄意図（反転）を従属変数、情報源への接触時間（反転）を独立変数として投入した重回帰分析を実施した。情報源への接触時間の内訳は、テレビ、新聞、SNS、ネットニュース、友人・知人の情報の5つである。その結果、調整済み R^2 値は 0.004 であり、投入した独立変数によって従属変数であるマスクの備蓄意図の分散の 0.4% が説明されていた。トイレットペーパーの備蓄意図に対し、テレビ ($\beta = 0.039$)、SNS ($\beta = 0.039$)、ネットニュース ($\beta = 0.050$)、友人・知人の情報 ($\beta = 0.011$)、新聞 ($\beta = -0.021$) が与える影響は有意ではなかった。つまり、いずれの情報源への接触時間も、トイレットペーパーの備蓄意図に影響していなかった。

パターンは異なるものの、各メディアへの信頼度を独立変数とした場合の分析結果と同様に、従属変数をマスクの備蓄意図、トイレットペーパーの備蓄意図にした場合では結果が異なった。これは物品によって備蓄意図に影響を与える情報源の種類が異なることを示している。

5. 考察

本研究では、緊急事態時における情報源への信頼度が物品の買い溜め意図に与える影響をクロス表、重回帰分析を用いて検討した。

その結果、マスクを対象とした分析においてのみ、「友人・知人の情報への信頼度が高い人ほど、物品の買い溜め意図が強くなる」という仮説 1 を支持する結果が得られた。また、マスクの備蓄意図に影響を与えたのはネットニュース、友人・知人の情報への信頼度であることが示唆され、トイレットペーパーの備蓄意図に影響を与えたのはテレビからの情報への信頼度であることが示唆された。よって、仮説 2 は部分的な支持を示唆する結果であり、対象となる物品の種類によって、備蓄意図に影響を与える情報源の種類が異なることが示

された。これは穂積・矢吹・佐久田（2008）においても指摘されている通り、メディアによって情報伝達の速さが異なる点が影響している可能性が考えられる。たとえば、マスク等の実際に品不足となっている物品の備蓄意図に関しては、身近な人間の発言や、相対的に更新が早く、発信元が確認可能なネットニュースへの信頼度によって強められている。しかし、テレビへの信頼度がトイレットペーパーの備蓄意図を強めうるという結果は、情報の新しさが相対的に古いメディアの情報を信じる傾向にあると、デマに影響されやすいという解釈も可能である。

また、追加分析では、メディアの接触時間が買い溜め行動にどれだけ影響するのかを検討した。その結果、マスクへの備蓄意図にはテレビ、SNS、ネットニュースへの接触時間が長いほど備蓄意図が強まる可能性が示唆された。一方で、いずれの情報源への接触時間も、トイレットペーパーの備蓄意図に影響を与えていなかった。信頼度を独立変数とする分析とは結果のパターンそのものは異なるが、同様に、物品の種類によって、備蓄意図に対して影響を与える情報源の種類が変化していた。この違いは、購買意図に影響する情報行動において、少なくとも、情報源への接触時間の長さ、情報源への信頼度の強さは、必ずしも同じ意味をもたないことを示していると考えられる。

最後に、本研究の限界に言及する。まず、広瀬（1985）では、買い溜め行動の時期は3つに分けて説明されており、時期ごとに買い溜め行動に影響する要因が変化しうることが指摘されている。本調査でも、複数の物品の買い溜め意図を時期ごとに区別して把握できていれば、例えば紙製品の買い溜めのような誤情報へのメディアの影響の変遷も、より詳細に検証可能であったかもしれない。また、本研究の結果は、情報源への信頼度、接触時間を従属変数とした各分析において、物品によって備蓄意図に影響を与える情報源が異なるという結果であった。マスクのように実際に不足している物品と、トイレットペーパーのようにデマによって不足している物品の間で、買い溜め意図に影響する情報源の種類が異なる原因に関しては、本研究では十分に検討できていない。そのため、今後はこれらのパターンの違いが生じる要因を詳細に検討することで、緊急事態における人の情報行動に関する知見の精緻化が今後待たれる。

6. 文献

- [1]…首相官邸（2020）『新型コロナウイルス感染症対策本部（第29回）』https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/16corona.html（2020年12月23日閲覧）
- [2]…NHK（2020）『マスク 品薄状態が続くのはなぜか』
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200210/k10012280171000.html>（2020年12月23日閲覧）
- [3]…朝日新聞デジタル（2020）『トイレ紙デマ「投稿の1人は職員」 米子医療生協が謝罪』
<https://www.asahi.com/articles/ASN343F1RN34PUUB001.html>（2021年1月24日閲覧）

- [4]…広瀬幸雄（1985）「買溜めパニックにおける消費者の意思決定モデル」『社会心理学研究』1(1): pp.45-53.
- [5]…大友章司・広瀬幸雄（2014）「震災後の買溜め、買い控え行動の消費者の心理プロセスの検討」『心理学研究』84(6): pp.557-565.
- [6]…穂積惇一・矢吹太郎・佐久田博司（2008）「SNS における情報伝達の種類とその拡散性」『全国大会講演論文集第 70 回』: pp.643-644.

第4章 夫婦の会話時間と家事分担への満足度の関係性

高谷 莉奈

1. はじめに

令和元年12月に発表された人口動態統計の年間推計によると、離婚件数が前年よりも2000組多く21万0000組であり、日本の離婚率は増加傾向にある（厚生労働省2019）。その一因として、家庭内役割の負担増加による関係性の悪化が考えられる。平成30年度6月に発表された男女共同参画白書によると、雇用者の共働き世帯は増加し、性別役割分業意識の変化が現れた（内閣府2019）。つまり、古くからの「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業から、「夫は仕事、妻は家庭と仕事」という真・性別役割分業に変化している（松田2001）。この形態では、妻の役割には仕事と家事の二重負担が求められ、従来よりも負担が増加することになる。このような状況では、夫婦間で納得のいく家事分担ができていくかどうか、お互いによく話ができる円滑な関係を維持する上で重要になると考えられる。そこで、本研究では、このような家事分担への満足度と夫婦の会話時間の関係を検討する。

2. 仮説

2.1. 先行研究

赤澤（2005）では、家事分担において、夫婦ともに自分が主担当者として遂行している役割に対し、配偶者に認められることが、夫婦関係満足度を高める要因であることが示されている。つまり、家事分担に対する相互理解は良い関係性の構築に役立つものと考えられる。そして、乾（2011）では、妻の悩みを聞き、妻を高く評価し、妻に助言アドバイスをする夫は、家事も多く行う傾向があると記述されている。また、柳田（1990）では、夫婦の会話を発展させる条件は、夫の家事と育児への参加、労働時間の削減であることが明らかにされている。これらの研究結果からも、適切な家事分担は夫婦間の円滑な会話コミュニケーションと関連があると考えられる。ただし、柳田（1990）では、共働き夫婦は家事・育児で協力し合わなければ、会話時間を作り出すことが困難であること、40代前半で会話が非常に少なくなり、その後また増加していく、あるいは、会話減少の危機を乗り越えられずそのまま会話があまりない夫婦になるなど、会話時間の長さが特定の年齢層になると増減する点にも言及されている。このことから、家事分担が会話に与える影響を検討する際には、共働きか否か、子どもの存在、年齢等、その他の変数の影響を考慮する必要性も考えられる。

2.2. 仮説

本研究では、夫婦の会話時間を減少させる要因として、家事分担に対する満足度の影響を中心に検討する。その際、他に会話時間に影響しうる要因として、年齢、共働き、子どもの

有無の影響も同時に検討する。

上述の先行研究にもとづき、まず、家事分担の満足度が高い人ほど夫婦の会話時間が長くなることが予測される（仮説 1）。次に、先行研究で会話減少の危機に陥るとされている 40代で会話時間が減少することが予測されるが、定年後であれば時間に余裕ができるため、60代以降で会話の機会が増加して、会話時間が長くなると考えられる（仮説 2）。共働きであれば時間が合わなくなるケースも増加し、時間の捻出も難しくなることから、会話時間が短くなると考えられる（仮説 3）。最後に、子どもが夫婦の仲立ちになり、会話の機会が増えるため、子どもがいると会話時間も長くなると考えられる（仮説 4）。

仮説 1 家事分担への満足度が高いほど、会話時間が長くなる。

仮説 2 40代・50代の年齢層であれば会話時間が短くなり、
60代以上の年齢層であれば会話時間が長くなる。

仮説 3 共働きであれば、会話時間が短くなる。

仮説 4 子どもがいると、会話時間が長くなる。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和 2 年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,227、回収率は 61.35%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q47：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1. 18 歳、19 歳 2. 20 代 3. 30 代 4. 40 代 5. 50 代 6. 60 代 7. 70 代以上

Q50：あなたが配偶者と話らしい話をする時間は、平日だと 1 日あたりどのくらいですか。
（配偶者との会話時間）

1. 15 分未満 2. 15～30 分未満 3. 30 分～1 時間未満 4. 1 時間～2 時間未満
5. 2 時間～3 時間未満 6. 3 時間以上

上記の選択肢を、1. 15 分未満 2. 15～30 分未満 3. 30 分～1 時間未満

4. 1 時間～2 時間未満 5. 2 時間～3 時間未満 6. 3 時間以上、の 6 カテゴリに合併した。

Q51：あなたは、配偶者と家事の分担について、どのくらい満足していますか。（家事分担への満足度（反転））

1. 満足 2. やや満足 3. どちらとも言えない 4. やや不満 5. 不満
6. 別居している

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った上で、6. 別居しているは欠損値として処理している。

Q52：あなたたちは、共働き夫婦ですか。（共働きの有無）

1. はい 2. いいえ

上記の選択に対して、2. いいえを0、1. はいを1とするダミー変数を作成した。

Q53：現在、お子様がおられますか。（子どもの有無）

1. いる（同居している） 2. いる（同居していない） 3. いない

上記の選択に対して、3. いないを0、1. いる（同居している）と2. いる（同居していない）を1とするダミー変数を作成した。

4. 分析

はじめに、家事分担への満足度と配偶者との会話時間について、クロス集計を行った（表1）。家事分担への満足度で「満足」と回答した人では、配偶者との会話時間について「3時間以上」と回答した人が20%、「2時間以上3時間未満」が6%、「1時間以上2時間未満」が27%、「30分未満1時間以上」が23%、「15分未満1時間以上」が17%、「15分未満」が7%であった。また、「やや満足」と回答した人では、会話時間について「3時間以上」と回答した人が10%、「2時間以上3時間未満」が11%、「1時間以上2時間未満」が30%、「30分未満1時間以上」が24%、「15分未満1時間以上」が17%、「15分未満」が8%となっており、相対的に家事分担に満足している人の回答は、15分から2時間の範囲内の会話時間が多くの割合を占めていた。一方で、家事分担への満足度について「やや不満」、「不満」と、否定的な回答をした人では、会話時間について、「3時間以上」がそれぞれ10%、3%、「2時間以上3時間未満」が14%、5%と、満足と回答した人に比べて相対的に回答の割合がやや減少していた。このことから、家事分担への満足度が高い人ほど、配偶者との会話時間が長いことが示唆された。

次に、家事分担への満足度と会話時間についてカイ二乗検定を行った結果、有意であった（ $\chi^2(25) = 133.161, p < .001$ ）。また、Cramerの連関係数を求めたところ0.190であり、これらの変数間に一定の強さの関連が認められた。これらの結果は、仮説1を支持するものと考えられる。

ただし、家事分担への満足度と会話時間は、年齢、共働きの有無、子どもの有無など、回答者の社会的属性によって異なる可能性があるため、これらの他の変数の影響を考慮した上で家事分担の満足度が会話時間に与える影響を確認する必要があると考えられた。そこで、以降はこれらの変数の影響を考慮した重回帰分析を複数実施した。

表 1 Q51 家事分担への満足度 と Q50 配偶者との会話時間 のクロス表

		Q50 配偶者との会話時間						合計	
		3時間以上	2時間以上 3時間未満	1時間以上 2時間未満	30分以上 1時間未満	15分以上 30分未満	15分未満		
Q51 家事分担 への 満足度	満足	N	38	12	52	43	32	14	191
		%	20%	6%	27%	23%	17%	7%	100%
	やや満足	N	21	23	61	49	36	17	207
		%	10%	11%	30%	24%	17%	8%	100%
	どちらとも いえない	N	19	14	33	45	30	31	172
		%	11%	8%	19%	26%	17%	18%	100%
	やや不満	N	8	11	12	16	11	20	78
		%	10%	14%	15%	21%	14%	26%	100%
	不満	N	2	4	19	14	17	18	74
		%	3%	5%	26%	19%	23%	24%	100%
	別居している	N	0	0	0	1	0	15	16
		%	0%	0%	0%	6%	0%	94%	100%
合計	N	88	64	177	168	126	115	738	
	%	12%	9%	24%	23%	17%	16%	100%	

$\chi^2(25) = 133.909^{***}$, Cramer $V = .191^{***}$

*** $p < .001$

まず、配偶者との会話時間を従属変数、家事分担への満足度（反転）、年齢を独立変数として投入した重回帰分析を実施した（表 2、表 3、表 4）。分析の際、先述の通り、年齢によって単純に会話量が増減するというよりも、ここでは、年齢層ごとにライフイベントが異なるため、異なるパターンの結果が得られる可能性を想定している。そのため、ここでは年齢の数値ではなく、「20代・30代」、「40代・50代」、「60代・70代以上」の年齢層の影響を検討するための重回帰分析をそれぞれ実施した。具体的には、上述のうち、影響を検討する年齢層を 1、それ以外の年齢層を 0 とするダミー変数を投入し、その年齢層であることが会話時間を増加させているかどうかをそれぞれ検討した。

その結果、家事分担への満足度と 20代・30代の年齢層が、会話時間に与える影響を検討した分析では、回帰式の調整済み R^2 値は 0.032 であり、投入した独立変数によって従属変数である会話時間の分散の 3.2% が説明されていた（表 2）。会話時間に対して、家事分担への満足度が有意な正の影響を与えていたが（ $\beta = 0.174, p < .001$ ）、20代・30代の年齢層による影響は有意ではなかった（ $\beta = 0.063$ ）。

次に、家事分担への満足度と 40代・50代の年齢層が、会話時間に与える影響を検討した分析では、回帰式の調整済み R^2 値は 0.075 であり、投入した独立変数によって従属変数である会話時間の分散の 7.5% が説明された（表 3）。会話時間に対し、家事分担への満足度による有意な正の影響（ $\beta = 0.177, p < .001$ ）、40代・50代の年齢層による有意な負の影響がみられた（ $\beta = -0.217, p < .001$ ）。

次に、家事分担への満足度と 60代・70代以上の年齢層が、会話時間に与える影響を検討した分析では、回帰式の調整済み R^2 値は 0.056 であり、投入した独立変数によって従属変数である会話時間の分散の 5.6% が説明された（表 4）。会話時間に対し、家事分担への満足度（ $\beta = 0.182, p < .001$ ）、年齢（ $\beta = 0.168, p < .001$ ）が有意な正の影響を与えていた。

表 2 Q50 配偶者との会話時間の重回帰分析 (20代・30代)

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	2.563	0.172		***
Q51 家事分担への満足度(反転)	0.207	0.046	0.174	***
Q47 年齢(20代・30代)	0.261	0.159	0.063	
調整済み R^2	0.032			
<i>N</i>	106			

*** $p < .001$

表 3 Q50 配偶者との会話時間の重回帰分析 (40代・50代)

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	2.858	0.173		***
Q51 家事分担への満足度(反転)	0.211	0.045	0.177	***
Q47 年齢(40代・50代)	-0.675	0.116	-0.217	***
調整済み R^2	0.075			
<i>N</i>	165			

*** $p < .001$

表 4 Q50 配偶者との会話時間の重回帰分析 (60代・70代以上)

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	2.344	0.178		***
Q51 家事分担への満足度(反転)	0.217	0.045	0.182	***
Q47 年齢(60代・70代以上)	0.514	0.116	0.168	***
調整済み R^2	0.056			
<i>N</i>	292			

*** $p < .001$

つまり、いずれの年齢層でも家事分担への満足度は会話時間を増加させているが、それと同時に、40代・50代の年齢層であれば会話時間が減少しており、60代・70代以上の年齢層になると会話時間が増加していることが示された。

次に、配偶者との会話時間を従属変数、家事分担への満足度(反転)、共働きの有無を独立変数として投入した重回帰分析を実施した(表5)。その結果、回帰式の調整済み R^2 値は0.045であり、投入した独立変数によって従属変数である会話時間の分散の4.5%が説明さ

表 5 Q50 配偶者との会話時間の重回帰分析（共働きの有無）

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	0.237	0.175		***
Q51 家事分担への満足度(反転)	0.217	0.044	0.181	***
Q52 共働きの有無	-0.352	0.114	-0.114	**
調整済み R^2	0.045			
<i>N</i>	407			

*** $p < .001$, ** $p < .01$

表 6 Q50 配偶者との会話時間の重回帰分析（子どもの有無）

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	2.422	0.518		***
Q51 家事分担への満足度(反転)	0.273	0.094	0.219	**
Q47 子どもの有無	0.447	0.423	0.080	***
調整済み R^2	0.043			
<i>N</i>	613			

*** $p < .001$, ** $p < .01$

れた。会話時間に対し、家事分担への満足度（ $\beta = 0.181, p < .001$ ）、共働きの有無（ $\beta = -0.114, p < .01$ ）が有意な負の影響を与えていた。つまり、家事分担への満足度が高い人、共働きでない人は、会話時間が長いことが示された。

最後に、配偶者との会話時間を従属変数、家事分担への満足度（反転）、子どもの有無を独立変数として投入した重回帰分析を実施した（表 6）。その結果は、回帰式の調整済み R^2 値は 0.045 であり、投入した独立変数によって従属変数である会話時間の分散の 4.5% が説明されていた。会話時間に対し、家事分担への満足度（ $\beta = 0.219, p < .01$ ）、子どもの有無（ $\beta = 0.080, p < .001$ ）が有意な正の影響を与えていた。つまり、家事分担への満足度が高い人、子どもがいる人は、会話時間が長いことが示された。

5. 考察

本調査は、家事分担への満足度と配偶者との会話時間の関係を検討することを目的として実施された。具体的には、家事分担への満足度が高い人ほど、会話時間が長いという仮説を立て、分析を行った。

クロス集計表、および重回帰分析の結果から、家事分担への満足度が高い人ほど、会話時間が長いことが明らかになった。よって、仮説 1 を支持する結果であった。また、重回帰分

析の結果から、40代・50代の年齢層であれば会話時間が短くなること、60代・70代以上の年齢層であれば会話時間が長くなることが明らかになった。そして、夫婦が共働きであれば会話時間が短くなること、子どもがいると会話時間が長くなることが示された。よって、本研究で主眼としていた仮説1に加え、その他の変数の影響を扱った仮説2、仮説3、仮説4も支持された。

これらの結果により、夫婦間で会話の多い円滑な家庭を築くためには、夫婦間での納得のいく家事分担が重要であることが示唆された。また、年齢層や共働きの影響を考慮すると、時間を捻出可能な状況や、忙しくても会話する時間を積極的に作ろうとする意識が必要になると考えられる。

今後の展望として、家事分担への満足度が会話時間を増加させ、家庭内の円滑な関係を築くことにつながるのであれば、現在の家事分担に不満のない夫婦、不満が生じている夫婦から、家事分担の決め方や、現状で不満を覚える点に関して詳細なデータを収集し、家事分担を決定する際の満足度を上げるための方策を検討することも、社会的重要性が高く、取り組みが必要とされる課題である。

6. 文献

- [1]…厚生労働省（2019）『令和元年（2019）人口動態統計の年間推計』
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai19/index.html>（2021年1月21日閲覧）
- [2]…内閣府（2019）『平成29年版男女共同参画白書 概要版』
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/gaiyou/pdf/h29_gaiyou.pdf
（2021年1月21日閲覧）
- [3]…松田茂樹（2001）「性別役割分業と新・性別役割分業—仕事と家事の二重負担—」『三田哲學會』106: pp.31-57.
- [4]…赤澤淳子（2005）「夫婦の関係満足度および生活充実感における規定因の検討」『社会心理学研究』21(2): pp.147-159.
- [5]…乾順子（2011）「正規就業と性別役割分業意識が家事分担に与える影響」『年報人間科学』32: pp.21-38.
- [6]…柳田泰典（1990）「共働き夫婦の会話に関する実証的研究」『長崎教育学部』39: pp.9-26.

第5章 インターネットの利用時間が 家庭内の会話時間と健康状態に与える影響

木原 実佑

1. はじめに

本章では、インターネットの利用時間が、日常における家族の会話時間や健康状態に与える影響について分析する。近年、科学技術の発展により情報化社会が進み、モバイル端末所持率が高まっていると考えられる。総務省（2019）の「通信利用動向調査」によると2019年のモバイル端末所持率は96.1%となっている。また、若者のインターネットに触れる時間は長くなっており、スマホ依存という言葉が問題視されている。インターネットからは素早く情報を手に入れることが出来るという利点がある反面、長く時間を費やすことによって、日常生活における家族の会話時間や健康状態などに大きく悪影響を及ぼしている可能性が考えられる。そこで、本研究ではインターネットの利用時間が、家族の会話時間や健康状態に与える影響について検討し、家庭内の良好なコミュニケーションや、健康状態の向上を図るための考察を行う。

2. 仮説

2.1. 先行研究

現代では、情報化社会が進展しインターネットが広く普及している。その社会的背景から、これまでの先行研究では、インターネットの利用が人の日常的な認知や行動等に与える影響について、多様な観点から議論されている。その一つが、インターネットの利用時間である。

たとえば、スマートフォンやパソコンの画面からは強いブルーライトが出ており、長時間凝視することによって眼精疲労や痛み、視力低下などが生じる。また、目の疲れは目の周りの筋肉を緊張させ、それが全身の筋肉に伝わり、首や肩などへも負担をかける可能性がある。そのため、インターネットの利用時間が長くなると、これらの自覚症状が生じやすくなると考えられる。実際、伊藤（2016）によると、学生のスマートフォン所持率は98.5%と高い数値を示しており、男子と比べて女子のほうがスマートフォンの使用時間が長く、睡眠時間や勉強時間の減少の割合が高いこと、主観的な健康感についても、女子の方が低いことが明らかとなっている。日常生活における健康上の自覚症状についても18項目中7項目において女子が、1項目において男子が有意に高率を示している。このことから、スマートフォンの過剰使用は規則正しい睡眠習慣の継続、および健康状態に悪影響を与えていることが推察されている。また、小川（2017）では、以前は家族の団欒、夫婦や親子の対話などの豊かな

対人関係が大切にされていたが、PCやスマートフォンを含む電子機器の普及につれて他者と向き合う時間が少なくなったことが指摘されている。

本調査では、先行研究よりも広い年齢層を対象とし、インターネットの利用時間が家族の会話時間と健康状態に与える影響を検討する。

2.2. 仮説

小川（2017）で指摘された通り、インターネットの利用時間が長くなると、他のことに使える時間が減少し、対面でのコミュニケーションによる会話が行われなくなることが予測される。また、伊藤（2016）でも示されている、頭痛や睡眠の質の低下等、インターネットの利用によって生じる自覚症状は、インターネットの利用時間が長いほど生じやすくなると考えられる。

よって、本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1 インターネットの利用時間が長いほど、同居家族との会話時間が短い。

仮説 2 インターネットの利用時間が長いほど、自覚症状の数が多い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和 2 年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,227、回収率は 61.35%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q21：あなたのインターネットを利用時間は、一日あたりどのくらいですか。（インターネット利用時間）

0. 全く利用しない
1. 30 分未満
2. 30 分以上～1 時間未満
3. 1 時間以上～2 時間未満
4. 2 時間以上～3 時間未満
5. 3 時間以上～5 時間未満
6. 5 時間以上～7 時間未満
7. 7 時間以上

Q24：現在、次のような自覚症状はありますか。あてはまるものにマルをつけてください。（マルはいくつでも）（自覚症状）

1. ストレートネック（頸椎の変形）
2. 猫背
3. 視力低下
4. 首・肩のこり
5. 目の疲れ
6. 頭痛
7. 睡眠の質の低下
8. その他（ ）
9. とくにない

Q47：あなたの年齢をお答えください。(年齢)

1. 18歳、19歳 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60代 7. 70代以上

Q62：Q61で2人以上を回答された方への質問です。あなたが同居している家族と、話したい話をする時間は、平日だと一日あたりどのくらいですか。(同居家族との会話時間)

1. 30分未満 2. 30分以上1時間未満 3. 1時間以上2時間未満
4. 2時間以上3時間未満 5. 3時間以上4時間未満 6. 4時間以上5時間未満
7. 5時間以上6時間未満 8. 6時間以上

4. 分析

まず、インターネット利用時間と同居している家族との会話時間についてクロス集計を行った(表1)。インターネットを「全く利用しない」人は、同居家族との会話時間について「30分未満」と回答した人が24.7%、「30分以上1時間未満」と回答した人が16.5%、「1時間以上2時間未満」と回答した人が18.4%、「2時間以上3時間未満」と回答した人が13.9%、「3時間以上」と回答した人が26.6%と「30分未満」と「3時間以上」と回答した割合が多いという結果となった。インターネット利用時間が「30分未満」の人は、同居家族との会話時間について「30分未満」と回答した人が21.6%、「30分以上1時間未満」と回答した人が26.4%、「1時間以上2時間未満」と回答した人が26.4%、「2時間以上3

表1 Q21 インターネット利用時間と Q62 同居家族との会話時間のクロス集計表

		Q62 同居家族との会話時間					
		30分未満	30分以上 1時間未満	1時間以上 2時間未満	2時間以上 3時間未満	3時間以上	合計
Q21 インター ネット 利用時間	全く利用 しない	<i>N</i> 39	26	29	22	42	158
		% 24.7%	16.5%	18.4%	13.9%	26.6%	100.0%
	30分未満	<i>N</i> 32	39	39	11	27	148
		% 21.6%	26.4%	26.4%	7.4%	18.2%	100.0%
	30分以上 1時間未満	<i>N</i> 34	49	44	16	29	172
		% 19.8%	28.5%	25.6%	9.3%	16.9%	100.0%
	1時間以上 2時間未満	<i>N</i> 32	57	70	29	31	219
		% 14.6%	26.0%	32.0%	13.2%	14.2%	100.0%
	2時間以上 3時間未満	<i>N</i> 30	29	50	24	30	163
		% 18.4%	17.8%	30.7%	14.7%	18.4%	100.0%
	3時間以上	<i>N</i> 16	33	36	24	25	134
		% 11.9%	24.6%	26.9%	17.9%	18.7%	100.0%
	合計	<i>N</i> 183	233	268	126	184	994
		% 18.4%	23.4%	27.0%	12.7%	18.5%	100.0%

$\chi^2(16) = 41.615^{**}$, Cramer $V = .102^{**}$

$^{**}p < .01$

時間未満」と回答した人が 7.4%、「3 時間以上」と回答した人が 18.2%であり、全体と比べて「30 分未満」「30 分以上 1 時間未満」が多かった。一方、インターネット利用時間が「3 時間以上」の人は、同居家族との会話時間について「30 分未満」と回答した人が 11.9%、「30 分以上 1 時間未満」と回答した人が 24.6%、「1 時間以上 2 時間未満」と回答した人が、26.9%、「2 時間以上 3 時間未満」と回答した人が 17.9%、「3 時間以上」と回答した人が 18.7%であり、全体と比べて「2 時間以上 3 時間未満」「3 時間以上」と回答している割合が多いという結果になった。インターネットを全く利用しない人を除くと、インターネット利用時間が長い人ほど同居家族との会話時間も長い傾向がみられた。

次に、インターネット利用時間と同居している家族との会話時間についてカイ二乗検定を行った結果、有意であった ($\chi^2(16) = 41.615, p < .01$)。また、Cramer の連関係数を求めたところ 0.102 であり、これらの変数間に一定の強さの関連が認められた。

ただし、インターネット利用時間や家族との会話時間は、回答者の社会的属性によって異なる可能性があるため、年齢の影響を考慮した上で、インターネット利用時間が家族との会話時間に与える影響を確認する必要が考えられた。そのため、同居家族との会話時間を従属変数、インターネット利用時間、年齢を独立変数として投入した重回帰分析を実施した (表 2)。その結果、回帰式の調整済み R^2 値は-0.02 であり、投入した独立変数によって従属変数である同居家族との会話時間は説明されなかった。同居家族との会話時間に対し、インターネット利用時間 ($\beta = -0.010$)、年齢 ($\beta = 0.005$) は有意な影響を与えていなかった。

次に、インターネット利用時間と自覚症状の数についてクロス集計を行った (表 3)。インターネット利用時間について「全く利用しない」と回答した人では、自覚症状が何もないと回答した人が 17.6%、自覚症状を 1 つ回答した人が 21.6%、2 つ回答した人が 28.2%、3 つ回答した人が 19.4%、4 つ以上回答した人が 13.2%と概ね少ない人が多かった。一方、インターネット利用時間について「3 時間以上」と回答した人では、自覚症状が何もないと回答した人が 11.8%、1 つ回答した人が 18.4%、2 つ回答した人が 18.4%、3 つ回答した人が 19.1%、4 つ以上回答した人が 32.2%と多かった。すなわち、インターネット利用時間が長い人ほど、自覚症状の数が多いことが明らかになった。

次にインターネット利用時間と自覚症状の数についてカイ二乗検定を行った結果、有意

表 2 Q62 同居家族との会話時間の重回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	3.156	0.109		***
Q21 インターネット利用時間	-0.011	0.033	-0.010	
Q47 年齢	0.000	0.002	0.005	
調整済み R^2	-0.02			
<i>N</i>	895			

*** $p < .001$

表 3 Q21 インターネット利用時間と Q24 自覚症状の数のクロス集計表

		Q24 自覚症状の数					合計	
		なし	1つ	2つ	3つ	4つ以上		
Q21 インター ネット 利用時間	全く 利用しない	<i>N</i>	40	49	64	44	30	227
		%	17.6%	21.6%	28.2%	19.4%	13.2%	100.0%
	30分未満	<i>N</i>	30	44	45	36	28	183
		%	16.4%	24.0%	24.6%	19.7%	15.3%	100.0%
	30分以上	<i>N</i>	27	55	37	54	27	200
	1時間未満	%	13.5%	27.5%	18.5%	27.0%	13.5%	100.0%
	1時間以上	<i>N</i>	27	55	66	46	51	245
	2時間未満	%	11.0%	22.4%	26.9%	18.8%	20.8%	100.0%
	2時間以上	<i>N</i>	24	39	34	41	47	185
	3時間未満	%	13.0%	21.1%	18.4%	22.2%	25.4%	100.0%
	3時間以上	<i>N</i>	18	28	28	29	49	152
		%	11.8%	18.4%	18.4%	19.1%	32.2%	100.0%
合計	<i>N</i>	166	270	274	250	232	1192	
	%	13.9%	22.7%	23.0%	21.0%	19.5%	100.0%	

$\chi^2(16) = 49.269^{***}$, Cramer $V = .102^{***}$

*** $p < .001$

表 4 Q24 自覚症状の数の重回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	1.859	0.079		***
Q21 インターネット利用時間	0.143	0.025	0.167	***
Q47 年齢	0.000	0.002	-0.003	
調整済み R^2	0.026			
<i>N</i>	1071			

*** $p < .001$

であった ($\chi^2(16) = 49.269, p < .001$)。また、Cramer の連関係数を求めたところ 0.102 であり、これらの変数間に一定の強さの関連が認められた。これらの結果は、仮説 2 を支持するものと考えられる。

ただし、インターネット利用時間や自覚症状の数は、回答者の社会的属性によって異なる可能性があるため、年齢の影響を考慮した上で、インターネット利用時間が自覚症状の数に与える影響を確認する必要があると考えられた。

そのため、自覚症状の数を従属変数、インターネット利用時間、年齢を独立変数として投入した重回帰分析を実施した (表 4)。その結果、回帰式の調整済み R^2 値は 0.036 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 3.6% が説明されていた。

自覚症状の数に対し、インターネット利用時間 ($\beta = 0.167, p < .001$) は有意な正の影響

を与えていた。年齢 ($\beta = -0.083$) は有意ではなかった。つまりインターネット利用時間が長いほど自覚症状の数が多いことが認められた。上記の結果は、仮説 2 を支持するものであった。

次に、ストレートネック（頸椎の変形）、猫背、視力低下、首・肩のこり、目の疲れ、頭痛、睡眠の質の低下の 7 つの自覚症状のうち、インターネット利用時間が長い人がどの自覚症状を感じているか調べるために、説明変数をインターネット利用時間、それぞれの自覚症状を被説明変数とした二項ロジスティック回帰分析を行った（表 5～表 11）。

その結果、ストレートネック（頸椎の変形）はオッズ比が 1.370 であり、有意な正の影響がみられた ($p < .001$ 表 5)。加えて、猫背はオッズ比が 1.222 であり、有意な正の影響がみられた ($p < .001$ 表 6)。視力低下への影響は有意ではなかった（表 7）。首・肩のこりのオッズ比は 1.084 であり、有意傾向の正の影響がみられた ($p < .10$ 表 8)。目の疲れのオッズ比は 1.138 であり、有意な正の影響がみられた ($p < .01$ 表 9)。頭痛のオッズ比は 1.270 であり、有意な正の影響がみられた ($p < .01$ 表 10)。睡眠の質の低下への影響は有意ではなかった（表 11）。

以上の二項ロジスティック回帰分析の結果は、インターネット利用時間の長い人はストレートネック（頸椎の変形）、猫背、目の疲れ、頭痛を感じていることを示しており、首や肩のこりを感じる可能性を示唆している。

表 5 Q24 ストレートネック（頸椎の変形）の二項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	EXP (<i>B</i>)	
(定数)	-3.124	0.292	0.044	***
Q21 インターネット利用時間	0.315	0.081	1.370	***
-2対数尤度	635.639			
Cox-Snell R^2	0.016			
Nagelkerke R^2	0.033			

*** $p < .001$

表 6 Q24 猫背の二項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	EXP (<i>B</i>)	
(定数)	-1.637	0.187	0.195	***
Q21 インターネット利用時間	0.201	0.056	1.222	***
-2対数尤度	1097.153			
Cox-Snell R^2	0.014			
Nagelkerke R^2	0.02			

*** $p < .001$

表 7 Q24 視力低下の二項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	EXP (<i>B</i>)	
(定数)	-0.360	0.157	0.697	*
Q21 インターネット利用時間	0.037	0.049	1.038	
-2対数尤度	1321.981			
Cox-Snell R^2	0.001			
Negelkereke R^2	0.001			

* $p < .05$

表 8 Q24 首・肩のこりの二項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	EXP (<i>B</i>)	
(定数)	-0.226	0.155	0.798	*
Q21 インターネット利用時間	0.081	0.048	1.084	†
-2対数尤度	1334.944			
Cox-Snell R^2	0.003			
Negelkereke R^2	0.004			

* $p < .05$, † $p < .10$

表 9 Q24 目の疲れの二項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	EXP (<i>B</i>)	
(定数)	-0.435	0.156	0.647	**
Q21 インターネット利用時間	0.130	0.049	1.138	**
-2対数尤度	1329.849			
Cox-Snell R^2	0.007			
Negelkereke R^2	0.010			

** $p < .01$

表 10 Q24 頭痛の二項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	EXP (<i>B</i>)	
(定数)	-2.484	0.240	0.083	***
Q21 インターネット利用時間	0.239	0.069	1.270	**
-2対数尤度	797.504			
Cox-Snell R^2	0.013			
Negelkereke R^2	0.022			

*** $p < .001$, ** $p < .01$

表 11 Q24 睡眠の質の低下の二項ロジスティック回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	EXP (<i>B</i>)	
(定数)	-0.888	0.167	0.412	***
Q21 インターネット利用時間	0.059	0.051	1.061	
-2対数尤度	1220.59			
Cox-Snell R^2	0.001			
Nagelkerke R^2	0.002			

*** $p < .001$

5. 考察

本調査では、インターネット利用時間と同居家族との会話時間、インターネット利用時間と健康状態のそれぞれの関連を検討するために実施された。「インターネット利用時間が長い人ほど、同居家族との会話時間が短い」「インターネット利用時間が長い人ほど、自覚症状の数が多い」という2つの仮説を立て、年齢の質問項目を加えて重回帰分析を行った。

その結果、インターネット利用時間の長さから同居家族との会話時間への有意な影響はみられなかった。よって仮説1は支持されなかった。家族との会話時間が短い原因は、家族との関係性や共働きの増加、食事を一緒にしないなど様々な要因がある。そのため、インターネット利用時間が同居家族との会話時間に直接的な影響を及ぼす結果にならなかった可能性が考えられる。また今年度は、新型コロナウイルスによる自粛の影響で自宅での滞在時間が長くなったため、インターネット利用時間の長さが家族会話の時間の減少につながらなかったと考えられる。

次に、インターネット利用時間が長い人ほど自覚症状の数が多いことが明らかになった。よって仮説2は支持された。さらに、それぞれの自覚症状を被説明変数とした二項ロジスティック回帰分析の結果から、インターネット利用時間の長い人はストレートネック（頸椎の変形）、猫背、目の疲れ、頭痛の自覚症状を感じていることが明らかになった。今後は、インターネット利用時間が各症状に与える影響の程度が異なる原因を特定するために、利用時の姿勢や画面との距離などの他の変数を加え、より詳細な検討が必要と考えられる。

6. 文献

[1]…総務省（2019）『通信利用動向調査』

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05a.html>

[2]…伊藤克己（2016）「学生のスマートフォン使用状況と健康に関する調査研究」『北海学園大学経営論集』13(4): pp.29-42.

[3]…小川憲治（2017）「IT関係の人間関係とメンタルヘルス（その2）—急速なスマホの普及の功罪：さまざまな便利さの享受に伴う、友人や家族との豊かな会話や孤独な時間を享受する機会の現象—」『長野大学紀要』39(2): pp.25-31(59-65).

第6章 運動頻度と生活満足度の関連性

西田 尚紀

1. はじめに

本章では、運動頻度が生活満足度に与える影響について分析を行う。現在、世界では新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るい、日本国内でも日々の生活に影響がでている。感染予防対策として多くの企業が自宅待機やテレワークを導入したことや緊急事態宣言による外出自粛によって室内で過ごすことが多くなった。「2020年スポーツマーケティング基礎調査」（2020）によれば、運動不足感が昨年より「増加した人」が全体の37.5%を占めることが明らかにされている。新型コロナウイルスの影響で自宅にいる時間が長くなったことで身体活動量が減ってしまい、運動不足におちいっている人も少なくない。渡邊（2015）は、食生活の変化や運動不足によるエネルギーの増加が生活習慣病をもたらしていると述べている。運動不足は体力や持久力の低下だけでなく、高血圧や肥満などの生活習慣病の発症リスクも増大させる。厚生労働省の平成26年人工動態統計によると、日本では喫煙、高血圧に次いで運動不足が原因で5万人が死亡している。よって、本章では、コロナ禍の期間を対象に、健康の観点から、運動の頻度が生活満足度に与える影響を明らかにする。

2. 仮説

2.1. 先行研究

運動を実施することで得られる効果として、山本（2011）は、低強度の身体運動はストレスや感染に対する抵抗力の増大、生活習慣の改善、健康増進、うつ病など精神疾患の予防の観点から重要な意義をもつものと述べている。身体運動の実施頻度と病歴について、河野・吉田・房野・三木・山崎（2016）では、運動頻度と病歴の関係をみると、運動頻度が高い場合には病歴が少ないことが明らかにされている。つまり、運動の実施は病気の発症を抑制している効果があると考えられる。また、石澤（2010）では、より活動的な男性の方が女性に比べ、現在健康と考えている者が多いと示している。

このことから、運動やスポーツ活動などの身体活動を実施することで身体的にも、精神的にも良好な状態にできると考えられる。

2.2. 仮説

本章では、運動の実施頻度という観点から日々の生活に対する満足度への影響を明らかにする。運動実施による免疫力の向上で風邪の予防や肥満が原因で発生する生活習慣病などの病気の発症を予防できるため、健康な状態で日常生活を過ごすことができ、生活満足度が向上すると考えられる。また、運動などの身体活動により体を動かすことでエネルギー

やストレスなどを発散することができるため、気晴らしの効果により身体面や精神面の健康に好影響をもたらす生活満足度が高くなると考えられる。

仮説1 運動を実施している人ほど、生活満足度が高い。

仮説2 身体的な健康状態が良い人ほど、生活満足度が高い。

仮説3 精神的な健康状態が良い人ほど、生活満足度が高い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和2年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する18歳以上85歳未満の男女で、計画標本は2,000、有効回答数は1,227、回収率は61.35%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q1：あなたは、現在の生活全体にどの程度満足していますか。（生活満足度（反転））

1. 満足 2. やや満足 3. どちらともいえない 4. やや不満 5. 不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q22：全体的に見て、あなたの現在の精神的な健康状態はいかがですか。（精神的健康（反転））

1. 良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. 良くない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、健康状態が良くなるように、尺度の反転を行った。

Q23：全体的に見て、あなたの現在の身体的な健康状態はいかがですか。（身体的健康（反転））

1. 良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. 良くない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、健康状態が良くなるように、尺度の反転を行った。

Q41：あなたは、普段どのくらいの頻度で運動をしていますか。（運動頻度（反転））

1. 週に5日以上 2. 週に3日～4日 3. 週に1～2日 4. 月に1日～3日
5. 3ヶ月に1～2日 6. していない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、運動実施頻度が多くなるように、尺度の反転を行った。また、上記の選択肢を反転後、1. していない、2. 3か月に1~2日、3. 月に1~3日、4. 週に1日以上の4カテゴリに合併して処理した。

Q47：あなたの年齢をお答えください。(年齢)

1. 18歳、19歳
2. 20代
3. 30代
4. 40代
5. 50代
6. 60代
7. 70代以上

Q54：あなたの性別はどちらですか。(性別)

1. 男性
2. 女性

上記の選択に対して、男性を1、女性を0とするダミー変数を作成した。

Q63：過去一年間のあなたの世帯年収はどれぐらいですか。(世帯年収)

1. 100万円未満
2. 100万円~200万円未満
3. 200万円~400万円未満
4. 400万円~600万円未満
5. 600万円~800万円未満
6. 800万円~1000万円未満
7. 1000万円~1500万円未満
8. 1500万円以上
9. わからない

4. 分析

表1は、普段の運動頻度(反転)と生活満足度(反転)の2変数についてクロス集計表を作成したものである。まず「あなたは、普段どのくらいの頻度で運動をしていますか」との設問に「週に1日以上」と回答した人では、生活満足度について「満足」と回答した人が25%、「やや満足」と回答した人が43%で肯定的な評価が多数を占めていた。運動頻度が「月に1~3日」、「3か月に1~2日」と回答した人では、生活満足度について「満足」と回答した人が19%、27%であり、「やや満足」と回答した人が51%、53%で半数以上が肯定的な評価であった。また、運動頻度について「していない」と回答した人では、生活満足度について「やや不満」と回答した人が15%、「不満」と回答した人が3%で運動実施者と比べると生活満足度に対して否定的な評価が高かった。

次に、運動頻度と生活満足度についてカイ二乗検定を行った結果、有意傾向であった($\chi^2(12) = 10.110, p < .10$)。また、Cramerの連関係数を求めたところ0.064であり、これらの2変数間には弱い関連がみとめられた。

表2は、精神的健康(反転)と生活満足度(反転)の2変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「全体的に見て、あなたの現在の精神的な健康状態はいかがですか」との設問に「良い」、「まあまあ良い」と回答した人では、生活満足度について「満足」と回答した人が44%、18%、「やや満足」と回答した人が40%、52%で肯定的な評価が多数を占めていた。また、精神的健康について「あまり良くない」、「良くない」と回答した人では、生活満足度について「やや不満」と回答した人が23%、14%、「不満」と回答した人が8%、29%で生活満足度に対して否定的な評価が高かった。次に、精神的健康

表 1 Q41 運動頻度と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
Q41 運動頻度	週に1日以上	N	153	260	124	56	11	604
		%	25%	43%	21%	9%	2%	100%
	月に1~3日	N	26	71	29	11	2	139
		%	19%	51%	21%	8%	1%	100%
	3ヶ月に 1~2日	N	15	29	7	3	1	55
		%	27%	53%	13%	5%	2%	100%
	していない	N	5	16	7	5	1	34
		%	15%	47%	21%	15%	3%	100%
	合計	N	199	376	167	75	15	832
		%	24%	45%	20%	9%	2%	100%

$\chi^2(12) = 10.110^\dagger$, Cramer $V = .064^\dagger$

$^\dagger p < .10$

表 2 Q22 精神的健康と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
Q22 精神的健康	良い	N	137	122	30	15	4	308
		%	44%	40%	10%	5%	1%	100%
	まあまあ 良い	N	121	346	142	57	4	670
		%	18%	52%	21%	9%	1%	100%
	あまり 良くない	N	13	52	65	44	16	190
		%	7%	27%	34%	23%	8%	100%
	良くない	N	0	8	12	5	10	35
		%	0%	23%	34%	14%	29%	100%
	合計	N	271	528	249	121	34	1203
		%	23%	44%	21%	10%	3%	100%

$\chi^2(12) = 324.428^{***}$, Cramer $V = .300^{***}$

$^{***}p < .001$

と生活満足度についてカイ二乗検定を行った結果、有意であった ($\chi^2(12) = 324.428$, $p < .001$)。また、Cramer の連関係数を求めたところ 0.300 であり、これらの 2 変数間には関連があるといえる。これらの結果は、仮説 2 を支持するものであった。

表 3 は、身体的健康 (反転) と生活満足度 (反転) の 2 変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「全体的に見て、あなたの現在の身体的な健康状態はいかがですか」との設問に「良い」、「まあまあ良い」と回答した人では、生活満足度について「満足」と回答した人が 43%、21%、「やや満足」と回答した人が 41%、47% で肯定的な評価が多数を占めていた。また、身体的健康について「あまり良くない」、「良くない」と回答した人では、

表 3 Q23 身体的健康と Q1 生活満足度のクロス集計表

		Q1 生活満足度					合計	
		満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満		
Q23 身体的健康	良い	N	95	90	22	11	3	221
		%	43%	41%	10%	5%	1%	100%
	まあまあ 良い	N	151	348	145	77	14	735
		%	21%	47%	20%	10%	2%	100%
	あまり 良くない	N	20	84	69	29	12	214
		%	9%	39%	32%	14%	6%	100%
	良くない	N	5	7	15	4	5	36
		%	14%	19%	42%	11%	14%	100%
	合計	N	271	529	251	121	34	1206
		%	22%	44%	21%	10%	3%	100%

$\chi^2(12) = 136.405^{***}$, Cramer $V = .194^{***}$
 $^{***}p < .001$

生活満足度について「やや不満」と回答した人が 14%、11%、「不満」と回答した人が 6%、14%で生活満足度に対して否定的な評価が高かった。

次に、身体的健康と生活満足度についてカイ二乗検定を行った結果、有意であった ($\chi^2(12) = 136.405$, $p < .001$)。また、Cramer の連関係数を求めたところ 0.194 であり、これらの 2 変数間には関連があるといえる。これらの結果は、仮説 3 を支持するものである。

次に、運動頻度が精神的健康、身体的健康に与える影響を調べるために単回帰分析を実施した。表 4 は、精神的健康を従属変数、運動頻度を独立変数として投入した単回帰分析の結果である。その結果、回帰式の調整済み R^2 値は 0.012 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 1.2%が説明されていた。精神的健康に対し、運動頻度 ($\beta = 0.041$) の影響は有意ではなかった。

表 5 は、身体的健康を従属変数、運動頻度を独立変数として投入した単回帰分析の結果である。その結果、回帰式の調整済み R^2 値は 0.019 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 1.9%が説明されていた。身体的健康に対し、運動頻度 ($\beta = 0.058$, $p < .10$) の影響は有意傾向であった。

最後に、表 6 は、他の変数による影響を統制するため、生活満足度を従属変数、運動頻度、精神的健康、身体的健康、年齢、性別、世帯年収を独立変数として投入した重回帰分析の結果である。その結果、回帰式の調整済み R^2 値は 0.178 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 17.8%が説明されていた。生活満足度に対し、精神的健康 ($\beta = 0.404$, $p < .001$)、世帯年収 ($\beta = 0.103$, $p < .01$) が有意な正の影響を与えていたが、運動頻度 ($\beta = 0.003$)、身体的健康 ($\beta = 0.013$)、年齢 ($\beta = -0.030$)、性別 ($\beta = -0.016$) の影響は有意ではなかった。つまり、精神的な健康状態が良いと感じている人ほど、世帯年収が高い人ほど生活満足度が高いことが示された。一方で、運動頻度、身

体的健康、年齢、性別の影響はみとめられなかった。標準化偏回帰係数の絶対値を比較すると、精神的健康が生活満足度に与える影響が最も強く、運動頻度や身体的健康と比べても、生活満足度を大きく規定する要因であると考えられる。

表 4 Q22 精神的健康（反転）の単回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	3.001	0.080		***
Q41 運動頻度（反転）	0.022	0.018	0.041	
調整済み R^2	0			
<i>N</i>	823			

*** $p < .001$

表 5 Q23 身体的健康（反転）の単回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	2.891	0.076		***
Q41 運動頻度（反転）	0.029	0.017	0.058	†
調整済み R^2	0.019			
<i>N</i>	825			

*** $p < .001$, † $p < .10$

表 6 Q1 生活満足度（反転）の重回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	
(定数)	1.979	0.216		***
Q41 運動頻度（反転）	-0.019	0.027	0.003	
Q22 精神的健康（反転）	0.494	0.061	0.404	***
Q23 身体的健康（反転）	0.070	0.065	0.013	
Q47 年齢	-0.001	0.001	-0.030	
Q54 性別	-0.002	0.004	-0.016	
Q63 世帯年収	0.046	0.017	0.103	**
調整済み R^2	0.178			
<i>N</i>	832			

*** $p < .001$, ** $p < .01$

5. 考察

本調査は、運動実施頻度、精神的健康、身体的健康と生活満足度の関係を検討するために実施された。仮説 1「運動を実施している人ほど、生活満足度が高い」、仮説 2「身体的な健康状態が良い人ほど、生活満足度が高い」、仮説 3「精神的な健康状態が良い人ほど、生活満足度が高い」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析結果から、精神的健康、身体的健康が高い人ほど生活満足度を「満足」「やや満足」と回答している割合が高く、仮説 2 と仮説 3 が支持された。重回帰分析の結果から精神的健康が生活満足度に最も強く影響していることが確認できた。一方で、運動頻度と生活満足度の間には関連性がなく、仮説 1 は支持されなかった。運動実施による健康度への影響を検証した単回帰分析では、精神的健康への影響は有意でなく、身体的健康への影響は有意傾向であった。運動実施頻度と健康度の関連性が微少で運動の実施が健康度には影響しないことがわかった。そのため、運動実施頻度が高くても生活満足度が低い場合や運動実施頻度が低くても生活満足度が高い場合があったと考えられる。例えば、運動が好きで趣味として実施しているならば運動することにストレスは感じにくいと考えられるが、運動は好まないが健康増進やダイエットなどの目的で実施している人は運動実施が苦痛となり生活満足度を下降させるというケースも考えられる。しかし、本研究では運動の実施頻度についてのみを取り扱っていたため、今後は運動を実施する目的や、運動が好きか嫌いかなどの変数を考慮した分析を行う必要があると考える。また、本調査はコロナ禍の期間が対象のため、その影響が精神的健康、身体的健康、生活満足度に大きく反映されており、運動の効果が相対的に低減した可能性も考えられるため、今後は時期による変化を扱う比較調査が望ましい。

6. 文献

- [1]…三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング・マクロミル (2020) 『2020 年スポーツマーケティング基礎調査』 <https://www.murc.jp/sportsmarketing/> (2021 年 1 月 5 日閲覧)
- [2]…渡邊憲二 (2015) 「中国における若年者の生活習慣と健康意識」『岡山商大論叢』 50(3): pp.1-10.
- [3]…厚生労働省 (2016) 『2020 年スポーツマーケティング基礎調査』 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai14/index.html> (2020 年 7 月 1 日閲覧)
- [4]…山本大誠 (2011) 「身体運動によるストレスへの対策」『バイオメカニズム学会誌』 35(1): pp.15-20.
- [5]…河野喬・吉田大樹・房野真也・三木由美子・山崎昌廣 (2016) 「高齢者の健康と運動習慣の関係」『社会情報学研究』 21: pp.43-49.
- [6]…石澤伸弘・上田知行・本多理紗 (2010) 「高齢者の運動実践が日常生活に及ぼす影響の分析－訓子府町末広地区調査の結果から－」『北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報』 1: pp.9-16.

第7章 喫煙と幸福度、精神的健康の関係について

西山 賢人

1. はじめに

本章では喫煙が幸福度や精神的健康に与える影響について分析を行う。2020年4月に施行された「改正健康増進法」により飲食店やパチンコ店では原則屋内禁煙、2020年10月にたばこ税の増税が予定されているなど、昨今の喫煙者にとっては厳しい状況が待っている。また、厚生労働省（2018）によると、成人男性の平均喫煙率は27.8%、成人女性の平均喫煙率は8.7%となっており、昭和41年のピーク時の男性の平均喫煙率83.7%、女性の平均喫煙率18%に比べて減少傾向にある。その理由として健康促進の考えの進行が挙げられる。実際に、タバコはパッケージに、「喫煙はあなたが肺気腫など慢性閉塞性肺疾患になり、呼吸困難となる危険性を高めます。」と書いてあるなど、健康に害を与える可能性が大きい事が周知の事実として知られている。しかしそういった背景の中でもタバコを吸う人間は一定数いる。そこで、本調査ではどのような人がタバコを吸う傾向にあるか、ここでは幸福度と精神的健康の観点から検討することで、今後の喫煙者減少を図るための知見を得る。

2. 仮説

2.1. 先行研究

先行研究では喫煙者と非喫煙者の違いを抑うつ、不安、自己効力感、精神的健康など多様な観点から関連付けて検討している。たとえば、菅谷・小林・西本（2018）では、喫煙者は非喫煙者と比べて精神的健康が低い傾向があることが示されている。加えて谷口・中西・米田・植岡・廣藤（2015）は、喫煙者は非喫煙者に比べて活気が低く、抑うつ、落ちこみ、疲労が高い傾向があることを明らかにしている。瀬在・宗像（2011）では「喫煙者には嗜癖特有の心理があるというのが定説であり、喫煙行動と自己否定感やストレス気質との相関、精神健康度の低さが指摘されている」と述べられている。

2.2. 仮説

菅谷・小林・西本（2018）によれば、GHQ等の精神的健康に関連する心理指標と喫煙経験との間には有意な相関関係が確認されている。このことから、喫煙習慣は、不安や抑うつ状態が引き金になっており、幸福度の低い状態を直すためにタバコを吸っていると考えることが出来る。また、喫煙している人は精神的健康のレベルが低くなり、禁煙することによって精神的健康の維持、向上をはかる可能性を同様に示唆している。また藤原・中角・中嶋（2019）によると喫煙群のストレスにおける「不機嫌・怒り」が高い事や、喫煙群はストレスの場面で自己の責任を軽視したり、適切な対処を行わず放置したり回避したりする傾向

があると述べている。これらの先行研究の結果を踏まえ、本研究では特に幸福度や精神的健康の心理指標と喫煙量の関連に焦点を当て、検証を行う。

仮説 幸福度が低い人ほど（精神的に不健康であるほど）、喫煙量が多い。

3. データと変数

3.1. データ

データは令和 2 年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,227、回収率は 61.35%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q2: あなたは、現在どのくらい幸せですか？（幸福度（反転））

1. 幸せ 2. やや幸せ 3. どちらともいえない 4. やや不幸せ 5. 不幸せ

上記の選択肢に対し、数値が大きくなると幸福度が高くなるように尺度の反転を行った。

Q25: 過去 1 ヶ月間に、以下のことがどのくらいの頻度で起こりましたか。（精神的不健康）

A. 神経過敏に感じた。

0. 全くない 1. 少しだけ 2. ときどき 3. たいてい 4. いつも

B. 絶望的だと感じた。

0. 全くない 1. 少しだけ 2. ときどき 3. たいてい 4. いつも

C. そわそわ落ち着かなく感じた。

0. 全くない 1. 少しだけ 2. ときどき 3. たいてい 4. いつも

D. 気分が沈みこんで何が起こっても気が晴れないように感じた。

0. 全くない 1. 少しだけ 2. ときどき 3. たいてい 4. いつも

E. 何をするのも骨折りだと感じた。

0. 全くない 1. 少しだけ 2. ときどき 3. たいてい 4. いつも

F. 自分は価値のない人間だと感じた。

0. 全くない 1. 少しだけ 2. ときどき 3. たいてい 4. いつも

Q48：あなたは、一日にタバコ(電子タバコも含む)をどのくらい吸いますか。(喫煙量)

1. 全く吸ったことがない
2. 以前吸っていたが今は吸わない
3. 一本以上五本未満
4. 五本以上十本未満
5. 十本以上一箱未満
6. 一箱以上

4. 分析

はじめに、幸福度と喫煙量の 2 変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討した (表 1)。カイ二乗検定を実施した結果、有意ではあったが ($\chi^2(20) = 33.261, p < .05$)、Cramer の連関係数は 0.092 であり低かった。以上のことから幸福度と喫煙量の関連は有意であるものの弱い関連だと考えられる。

次に、精神的不健康と喫煙量の 2 変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討した (表 2)。ここでの精神的不健康とは、Q25 の 6 問 (K6) の得点の合計値であり、得点が高いほど精神的健康が低いことを意味する。そして、この精神的不健康の得点が 0 点から 7 点までを低群、8 点から 15 点までを中群、16 点から 24 点までを高群として、調査対象者を 3 群に分割し、カイ二乗検定を実施した。その結果、有意な結果は得られなかった ($\chi^2(10) = 6.768, ns$)。Cramer の係数は 0.059 であり、弱い関連がみられた。

さらに、喫煙量を従属変数、幸福度 (反転) を独立変数として投入した単回帰分析を実施した (表 3)。その結果、調整済み R^2 値は 0.008 であり、投入した独立変数によって従属変数である喫煙量の分散の 0.8% が説明されていた。そして、喫煙量に対し、幸福度 (反転) が有意な負の影響を与えていた ($\beta = -0.096, p < .01$)。つまり、幸福度が低い人ほど、喫煙量が多くなることが示唆された。

表 1 Q2 幸福度 (反転) と Q48 1 日の喫煙量のクロス表

		Q48 1 日の喫煙量						合計
		まったく吸わない	以前吸っていたが今は吸わない	一本以上五本未満	五本以上十本未満	十本以上一箱未満	一箱以上	
不幸せ	N	4	4	1	1	3	2	15
	%	27%	27%	7%	7%	20%	13%	100%
やや不幸せ	N	29	10	1	0	1	3	44
	%	66%	23%	2%	0%	2%	7%	100%
Q2 幸福度 (反転) どちらとも いえない	N	97	57	3	7	19	5	188
	%	52%	30%	2%	4%	10%	3%	100%
やや幸せ	N	265	104	5	10	22	13	419
	%	63%	25%	1%	2%	5%	3%	100%
幸せ	N	200	78	3	8	17	9	315
	%	63%	25%	1%	3%	5%	3%	100%
合計	N	595	253	13	26	62	32	981
	%	61%	26%	1%	3%	6%	3%	100%

$\chi^2(20) = 33.261^*$, Cramer $V = 0.092^*$

* $p < .05$

表 2 Q25 精神的不健康と Q48 1 日の喫煙量のクロス表

		Q48 1 日の喫煙量						合計	
		まったく吸った ことがない	以前吸っていた が今は吸わない	一本以上 五本未満	五本以上 十本未満	十本以上 一箱未満	一箱以上		
Q25 精神的 不健康 (K6)	低群	N	166	67	3	6	11	11	264
		%	63%	25%	1%	2%	4%	4%	100%
	中群	N	183	69	4	6	21	6	289
		%	63%	24%	1%	2%	7%	2%	100%
	高群	N	241	111	6	12	29	14	413
		%	58%	27%	2%	3%	7%	3%	100%
合計	N	590	247	13	24	61	31	966	
	%	61%	26%	1%	3%	6%	3%	100%	

$\chi^2(10) = 6.768$, Cramer $V = 0.059$

表 3 Q48 1 日の喫煙量の単回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	4.111	0.048		***
Q2 幸福度 (反転)	-0.066	0.022	-0.096	**
調整済み R^2	0.008			
N	980			

*** $p < .001$, ** $p < .01$

表 4 Q48 1 日の喫煙量の単回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	3.415	0.219		***
Q25 精神的不健康 (K6)	0.507	0.029	0.461	*
調整済み R^2	0.004			
N	965			

*** $p < .001$, * $p < .05$

最後に、喫煙量を従属変数、精神的不健康を独立変数として投入した単回帰分析を実施した (表 4)。その結果、調整済み R^2 値は 0.004 であり、投入した独立変数によって従属変数である喫煙量の分散の 0.4% が説明されていた。そして、喫煙量に対し、精神的不健康が有意な正の影響を与えていた ($\beta = 0.461, p < .05$)。つまり、精神的に不健康な人ほど、喫煙量が多くなることが示唆された。

5. 考察

本調査は、喫煙と幸福度、精神的健康の関連性を検討するために実施された。幸福度が低い人ほど、あるいは精神的に不健康であるほどタバコを吸うという仮説を立て、精神的健康と幸福度の指標を独立変数とした 2 つの単回帰分析を行った。分析結果から、幸福度が低い人ほどタバコを吸うこと、精神的に不健康であるほどタバコを吸うことが明らかになった。よってこの結果は仮説を支持するものであった。

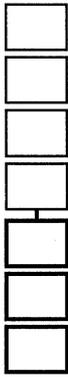
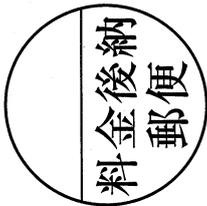
また、今後は以下の展望も考えられる。まず、Q48 と Q2 の回答者のうち、タバコを現在吸っていない割合は 8 割以上にも及ぶことが明らかになり、高槻市ではタバコの禁煙の動きがかなり進んでいると考えられる。また、同時に Q48 と Q2 に答えた人数の中で不幸せ、どちらといえば不幸せと答えた人は合計で 7%しかみられず、全体的に幸福度が高いことが示唆される結果であった。しかし、喫煙量のみが幸福度と関連しているわけではない。本研究では、喫煙量に限定して幸福度や精神的健康との関連を検討したが、たとえば長谷中・高橋（2014）では、年収や学歴、そしてソーシャル・キャピタルの 1 構成要素である、一般的他者への信頼によって、幸福度が変化することが明らかにされている。そのため、今後の展望として、現在の高槻市民の幸福度の高さを維持・上昇させるための方策を考案するためには、喫煙量以外の他の要因との関連についても複合的に検証していくことが求められる。

6. 文献

- [1]…厚生労働省（2018）『成人喫煙率（JT 全国喫煙者率調査）』<http://www.health-net.or.jp/tobacco/product/pd090000.html>（2021 年 1 月 20 日閲覧）
- [2]…菅谷洋子・小林智・西本典良（2018）「女子医療福祉系学生の喫煙と精神健康状態・ストレスコーピング・自己効力感の関連」『保健福祉学研究』16: pp.9-16.
- [3]…谷口奈央・仲西宏介・米田雅裕・埴岡隆・廣藤卓雄（2015）「歯学部学生の喫煙習慣と心理的健康感との関連」『口腔衛生学会雑誌』65(5): pp.422-425.
- [4]…瀬在泉・宗像恒次（2011）：「大学生の喫煙行動と自己否定感・ストレス気質及び精神健康度との関連」『日本禁煙学会雑誌』6(3): pp.24-33.
- [5]…藤原直子・中角祐治・中嶋貴子（2019）「大学の喫煙に対する認識とストレスコーピングの関連」『日本禁煙学会雑誌』14(4): pp.93-99.
- [6]…長谷中崇志・高橋慎二（2014）「地域福祉計画の指標開発—主観的健康感へのソーシャル・キャピタルと社会経済的地位の関連—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』36: pp.101-108.

資料：
予告はがき・調査票

郵便はがき



「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」 ご協力のお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活ともの見
方についての調査を共同で実施することになりまし
た。調査の対象は、無作為に選ばれた18歳以上の
市民の方です。

近日中に調査票の入った大きな茶封筒（ポールペ
ン入り）が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、
届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂き
ますようお願い申し上げます。

令和2年8月



市民生活環境部 市民生活相談課
〒569-0067 高槻市桃園町2-1
TEL 072-674-7130

関西大学 総合情報学部
〒569-1095 高槻市霊仙寺町2-1-1
TEL 072-690-2151

※あて所に尋ねあたらぬ場合は、高槻市へ返戻して下さい。

予告はがき

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

(調査実施) 高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行っています。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活ともの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、住民基本台帳から無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。**封筒宛名のご本人様ご自身の回答を**、この調査票にご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年12月頃に速報版を、翌年3月中旬に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

*ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください(返却の必要はありません)。

*ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を1つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。

*お忙しいところ誠に恐縮ですが、**9月11日(金)**までに、同封の封筒(切手貼付済み)でご返送いただきますようお願いいたします。

*この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。

(どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。)

<調査に関するお問い合わせ> 高槻市 市民生活環境部 市民生活相談課 tel: 072-674-7130
関西大学 総合情報学部 tel: 072-690-2151

Q1. あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Q2. あなたは、現在どのくらい幸せですか。

1	2	3	4	5
幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ

Q3. あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q4. あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

1	2	3	4	5
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Q5. あなたは、高槻市には地域ブランドと呼べるような特産品や観光地があると思いますか。

1	2	3	4	5
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Q6. あなたが買い物・食事・娯楽などで中心市街地(JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺)に行く頻度は、3年前と比べて増加しましたか。それとも減少しましたか。

1	2	3	4	5	6
増加した	少し増加した	変わらない	少し減少した	減少した	3年前をした知らない

Q7. あなたは、中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、3年前と比べて向上したと思いますか。それとも低下したと思いますか。

A. 防災面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

B. 防犯面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

C. 居住環境

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

D. 公共交通機関の利便性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

E. 歩行者にとっての歩きやすさ

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

F. 風紀や治安

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	3年前を知らない

Q8. あなたは、中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、3年前と比べて増加したと思いますか。それとも減少したと思いますか。

A. 文化活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

B. コミュニティ活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

C. 商店街の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

D. 百貨店などの大型店の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

E. 買い物やイベントでのにぎわい

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

F. 魅力的な飲食店

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

G. オフィスなど業務施設

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

H. 病院などの医療機関

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

I. 道路の渋滞

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

J. 駐輪場

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

K. 街なかの緑や潤い

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	3年前を知らない

Q9. 中心市街地（JR高槻駅・阪急高槻市駅周辺）を住み良い街にするために、あなたはどのような取り組みが必要だと思いますか。3つ以内にマルをつけてください。

1. 街路樹や植栽、公園の整備など、緑豊かな住居環境の向上を図る
2. 日常生活に困らないよう、スーパーマーケットや食料品店などの充実を図る
3. 休日や夜間の突然の病気やケガで困らないよう、病院など医療機能の充実を図る
4. 安心・安全に生活できるよう、治安・防犯の向上を図る
5. 高齢者等も安全・快適に生活できるよう、街のバリアフリー化を図る
6. 民間のマンションや公的住宅など、中心市街地での住宅の供給を促進する
7. その他（ ）
8. 今以上の取り組みは必要ない

- Q10. あなたは、高槻市の歴史遺産や施設についてご存知ですか。知っているものにマルをつけてください。
(マルはいくつでも)
- | | | |
|------------|---------------------------|-----------------|
| 1. 芥川山城跡 | 12. 古曽部窯跡 | 22. 能因塚・不老水・花の井 |
| 2. 阿武山古墳 | 13. 古曽部・芝谷遺跡 | 23. 野見神社・永井神社 |
| 3. 安満遺跡 | 14. 西国街道と芥川一里塚 | 24. 昼神車塚古墳 |
| 4. 安満宮山古墳 | 15. 嶋上郡衙跡・芥川廃寺 | 25. 普門寺 |
| 5. 安岡寺 | 16. 上宮天満宮 | 26. 本山寺 |
| 6. 伊勢寺 | 17. 新池埴輪製作遺跡
(ハニワ工場公園) | 27. 本照寺 |
| 7. 今城塚古墳 | 18. 高槻城跡(城跡公園) | 28. 三輪神社 |
| 8. 磐手杜神社 | 19. 高山右近高槻天主教会堂跡 | 29. 八阪神社 |
| 9. 神峯山寺 | 20. 鬮鶏山古墳 | 30. どれも知らない |
| 10. 郡家今城遺跡 | 21. 天神山遺跡 | |
| 11. 慶瑞寺 | | |

- Q11. あなたは、城跡公園へ行ったことがありますか。
1. はい 2. いいえ

- Q12. 今後、あなたが城跡公園で再整備した方がよいと思うものにマルをつけてください。(マルはいくつでも)

1. 高槻城の歴史を感じさせる景観
2. やすらぎを感じる緑
3. 散歩のできる園路
4. 子どもが遊べる遊具
5. 休憩できるベンチや東屋
6. 運動のできる広場
7. その他 ()
8. とくにない

- Q13. 高槻城の城下町だったエリアについて、あなたが知っていることにマルをつけてください。
(マルはいくつでも)

1. 江戸時代の高槻城絵図に描かれた道が残っている
2. 寺院が集中する寺町が残っている
3. 城や城下町に関連する地名が残っている
4. 武家屋敷や古民家(町家)が残っている
5. その他 ()
6. 知っていることはない・興味がない

- Q14. 高槻城と城下町があったエリアにおいて、取り組んだ方がよいと思うことにマルをつけてください。
(マルはいくつでも)

1. 歴史的な街並みの再現
2. 近隣の商店街等と連携したイベントやキャンペーンの実施
3. 古民家(町家)の再利用
4. 歴史にちなんだ各種イベントの実施
5. 高槻城の復元
6. その他 ()
7. とくにない

- Q15. 文化財に親しみをもてるようにするために、あなたが有効だと思うものにマルをつけてください。
(マルはいくつでも)

1. 文化財をもっとPRする
2. 文化財までの交通手段を増やす
3. 文化財周辺に説明板を設ける
4. 文化財周辺にベンチや子どもの遊び場を設ける
5. 地域の祭りやイベントに参加する
6. 文化財についての体験学習や歴史講座を充実させる
7. 1~6に有効だと思うものはない

- Q16. あなたは、高槻市の歴史講座や市内の文化財の現地説明会・体験学習会などに、どのくらい参加したことがありますか。

- | | | | |
|--------------|-------------|---------------|---------------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| よく参加
している | たまに
参加する | 参加した
ことがある | 参加した
ことがない |

- Q17. あなたは、高槻市の文化財や歴史遺産についての情報を何から得ていますか。主なもの1つにマルをつけてください。

1. 市の広報誌
2. 市のホームページ
3. チラシ・ポスター
4. 家族や知人
5. SNS
6. 情報誌
7. その他 ()
8. とくに情報を得ていない

Q18. あなたは、以下の情報源から得た情報の正確さをどのくらい信頼していますか。

A. テレビ

1	2	3	4
かなり信頼している	ある程度は信頼している	あまり信頼していない	ほとんど信頼していない

B. 新聞

1	2	3	4
かなり信頼している	ある程度は信頼している	あまり信頼していない	ほとんど信頼していない

C. SNS (Twitter・Instagram など)

1	2	3	4
かなり信頼している	ある程度は信頼している	あまり信頼していない	ほとんど信頼していない

D. ネットニュース (Yahoo ニュース・LINE ニュース など)

1	2	3	4
かなり信頼している	ある程度は信頼している	あまり信頼していない	ほとんど信頼していない

E. 友人・知人の情報

1	2	3	4
かなり信頼している	ある程度は信頼している	あまり信頼していない	ほとんど信頼していない

Q19. あなたは普段、一日どのくらいの時間、以下の情報源に触れていますか。

A. テレビ

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

B. 新聞

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

C. SNS (Twitter・Instagram など)

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

D. ネットニュース (Yahoo ニュース・LINE ニュース など)

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

E. 友人・知人の情報

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 全く利用しない | 4. 40分以上1時間未満 |
| 2. 20分未満 | 5. 1時間以上2時間未満 |
| 3. 20分以上40分未満 | 6. 2時間以上 |

Q20. あなたは、インターネットの普及によって、個人情報やプライバシー等の情報漏洩や、情報を悪用されることにどのくらい不安を感じていますか。

1	2	3	4
とても不安である	ある程度不安である	あまり不安でない	全く不安でない

Q21. あなたのインターネットの利用時間は、一日あたりどのくらいですか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 0. 全く利用しない | 4. 2時間以上3時間未満 |
| 1. 30分未満 | 5. 3時間以上5時間未満 |
| 2. 30分以上1時間未満 | 6. 5時間以上7時間未満 |
| 3. 1時間以上2時間未満 | 7. 7時間以上 |

Q22. あなたの現在の健康状態のうち、精神的な面についてはいかがですか。

1	2	3	4
良い	まあまあ良い	あまり良くない	良くない

Q23. あなたの現在の健康状態のうち、身体的な面についてはいかがですか。

1	2	3	4
良い	まあまあ良い	あまり良くない	良くない

Q24. 現在、次のような自覚症状はありますか。あてはまるものにマルをつけてください。(マルはいくつでも)

- | | |
|------------------------|------------|
| 1. ストレートネック
(頸椎の変形) | 5. 目の疲れ |
| 2. 猫背 | 6. 頭痛 |
| 3. 視力低下 | 7. 睡眠の質の低下 |
| 4. 首・肩のこり | 8. その他 () |
| | 9. とくにない |

Q25. 過去1ヶ月間に、以下のことがどのくらいの頻度で起こりましたか。

A. 神経過敏に感じた。

0 1 2 3 4
全くない 少しだけ ときどき たいてい いつも

B. 絶望的だと感じた。

0 1 2 3 4
全くない 少しだけ ときどき たいてい いつも

C. そわそわ、落ち着かなく感じた。

0 1 2 3 4
全くない 少しだけ ときどき たいてい いつも

D. 気分が沈みこんで、何が起っても気が晴れないように感じた。

0 1 2 3 4
全くない 少しだけ ときどき たいてい いつも

E. 何をするのも骨折りだと感じた。

0 1 2 3 4
全くない 少しだけ ときどき たいてい いつも

F. 自分は価値のない人間だと感じた。

0 1 2 3 4
全くない 少しだけ ときどき たいてい いつも

Q26. 自殺で亡くなる人の数は全国で年間約2万人となっています。あなたは毎年、このように多くの方が自殺で亡くなっていることをご存知ですか。

1. 知っている 2. 知らない

Q27. あなたは、自殺について相談できる機関があるのをご存知ですか。(例えば、保健所 ところの健康相談など)

1. 知っている 2. 知らない

Q28. あなたは、これまでの人生の中で本気で自殺したいと考えたことがありますか。

1. ある 2. ない

Q29. あなたは、もし身近な人から「死にたい」と打ち明けられたとき、どう対応するのが良いと思いますか。適切と思われるものをいくつかもお選びください。

1. 相談に乗らない、もしくは話題を変える
2. 「死んではいけない」と説得する
3. 「つまらないことを考えるな」と叱る
4. 「がんばって生きよう」と励ます
5. 「死にたいくらい辛いんだね」と共感を示す
6. 「医師など専門家に相談した方が良い」と提案する
7. ひたすら耳を傾けて聞く
8. その他 ()
9. 適切と思われる対応はない

Q30. 今後の自殺対策について、お伺いします。今後、どのような自殺対策が求められるとあなたは思いますか。いくつかもお選びください。

1. 自殺の実態を明らかにする調査・分析
2. 危険な場所、薬品等の規制
3. インターネットにおける自殺関連情報の対策
4. 自殺に関する広報・啓発
5. 適切な精神科医療体制の整備
6. 職場におけるメンタルヘルス対策の推進
7. 自殺対策に関わる民間団体の支援
8. 様々な分野におけるゲートキーパー※の養成
9. 様々な悩みに対応した相談窓口の設置
10. 地域やコミュニティを通じた見守り・支え合い
11. 子どもの自殺予防
12. 自殺未遂者の支援
13. 自死遺族等の支援
14. その他 ()
15. 特になし

※「ゲートキーパー」とは、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聴いて、必要な支援につなげ、見守る人のことです。

Q31. 自殺したいという気持ち乗り越えるには、どのような方法が適切と思われますか。適切と思われるものをいくつかもお選びください。

1. 家族や友人、職場の同僚など身近な人に悩みを聞いてもらう
2. 医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する
3. 弁護士や司法書士、公的機関の相談員など、悩みの元となる分野の専門家に相談する
4. できるだけ休養を取るようにする
5. 趣味や仕事など他のことで気を紛らわすよう努める
6. 特に何もしない
7. その他 ()
8. 適切と思われる方法はない

Q32. あなたは、『「高槻市みらいのための経営革新」に向けた改革方針』をご存知ですか。

1	2	3
名前も内容も知っている	名前だけ知っている	知らない

Q33. あなたは、高槻市が20年後、30年後を見据えて行財政改革に取り組む必要性を感じますか。

1	2	3	4
感じる	やや感じる	あまり感じる	感じない

Q34. 次のa~sは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。

以下から、①あなたが、最近良くなってきたと思うもの(マルはいくつでも)、また、②あなたが、今後力を入れてほしいもの(マルは3つまで)をそれぞれ選んでください。

②力を入れてほしいもの (3つまで)		
①良くなってきたもの (いくつでも)		↓
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	1	1
b. 図書館、博物館などの文化施設の整備	2	2
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	3	3
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	4	4
e. 医療施設や救急医療体制の整備	5	5
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	6	6
g. 公園の整備や自然・緑の保全	7	7
h. 街並み・景観の整備	8	8
i. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	9	9
j. ごみの収集・処理・再資源化(リサイクル)	10	10
k. 下水道の整備	11	11
l. 水の安定供給、上水道整備	12	12
m. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	13	13
n. 身のまわりの生活道路の整備	14	14
o. 交通安全・災害防止対策	15	15
p. 公営住宅の建設や住宅融資制度	16	16
q. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	17	17
r. 災害対策・防犯対策	18	18
s. 子育て支援	19	19
t. 特になし	20	20

Q35. 今年、あなたはマスクの備蓄をしたいとどのくらい感じましたか。

- | | | | |
|--------|-------|-----------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| とても感じた | やや感じた | あまり感じなかった | 全く感じなかった |

Q36. 今年、あなたはトイレットペーパーの備蓄がしたいとどのくらい感じましたか。

- | | | | |
|--------|-------|-----------|----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| とても感じた | やや感じた | あまり感じなかった | 全く感じなかった |

Q37. あなたは、平均すると週に何日間、収入を得られる仕事をしていますか。

0	1	2	3	4	5	6	7
0日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日
Q40へ				Q38へ			

1日以上と回答された方への質問です。

Q38. あなたは、どのくらいの頻度でテレワークを行っていますか。
(※テレワークとは、インターネットなどの情報通信技術を活用した場所や時間にとらわれない働き方のことです)

- | | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|--------|--------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 週5回 | 週3~4回 | 週1~2回 | 2週に1回 | 1ヶ月に1回 | 行っていない |

Q39. あなたは、テレワークをどのくらいの期間行っていますか。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 行っていない | 5. 3週間以上1ヶ月未満 |
| 2. 1週間未満 | 6. 1ヶ月以上1ヶ月半未満 |
| 3. 1週間以上2週間未満 | 7. 1ヶ月半以上2ヶ月未満 |
| 4. 2週間以上3週間未満 | 8. 2ヶ月以上 |

Q40. あなたの自宅での平均的な余暇の時間は、一日あたりどのくらいですか。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 30分未満 | 5. 6時間以上8時間未満 |
| 2. 30分以上2時間未満 | 6. 8時間以上10時間未満 |
| 3. 2時間以上4時間未満 | 7. 10時間以上 |
| 4. 4時間以上6時間未満 | |

Q41. あなたは、普段どのくらいの頻度で運動をしていますか。

- | | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|----------|--------|---------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 週に5日以上 | 週に3~4日 | 週に1~2日 | 月に1~3日 | 3ヶ月に1~2日 | 年に1~3日 | 全くしていない |

執筆者紹介

上原 依子	(うえはら よりこ)	編集・はじめに・第1章	(関西大学非常勤講師)
松本 渉	(まつもと わたる)	編集・第1章	(関西大学総合情報学部教授)
尾藤 央延	(びとう ひろのぶ)	第2章	(関西大学ティーチング・アシスタント)
谷 蓮音	(たに れおん)	第3章	(関西大学総合情報学部生)
高谷 莉奈	(たかや りな)	第4章	(関西大学総合情報学部生)
木原 実佑	(きはら みゆ)	第5章	(関西大学総合情報学部生)
西田 尚紀	(にしだ なおき)	第6章	(関西大学総合情報学部生)
西山 賢人	(にしやま けんと)	第7章	(関西大学総合情報学部生)

2020 年度社会調査実習報告書
—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

編集 関西大学総合情報学部、発行 関西大学総合情報学部、発行年月 2021 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書—令和 2 年度—』（関西大学総合情報学部[編集]，高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～7 章が省略されたものになります。